

近世防長儒学史関係年表

河 村 一 郎 編 著

近世防長儒学史関係年表

河村一郎編著

ま え が き

- 本書は、年表の形をとった近世防長儒学史である。前に出した『長州藩思想史覚書』及び『長州藩徂徠学』とともに三部作をなすものである。
- 対象とした期間は、右田毛利家による時観園開設の寛永5年（1628）から、義務教育制度が実施された明治5年（1872）までである。
- 記事は「防長」と「参考」とに区分し、儒学を中心に思想や学問・文芸の変遷を時代動向の中に辿った。特に幕末期は儒学的精神世界の解体過程として、洋学及び科学技術の受容状況に配慮した。また知的ネットワークの掘り起しを図り、通常の年表には見られないコメントを付けたりした。
- 年次の確定しにくいものは、重要と思われる事項でも割愛するところがあった。
- 利用の利便を図り、巻末に“索引”等を附した。
- 近世防長儒学史の実態は現在探査の途中にあり、今後の研究・資料発掘により総合的で綿密な体系がもたらされることを望むものである。
- 太陽暦採用までは太陰暦による月日である。
- 記事採用においては、独自に探査したものの外、先学諸氏の業績あるいは教示に依據させて頂いた。特に慶応義塾大学教授松村宏氏には特別に資料等の恵与を頂いた。ともに厚く感謝の意を表するものである。

目 次

年 表	1
索 引	163
長州藩徂徠学関係人名等探索備考	194

近世防長儒学史関係年表

寛永5（1628）～正保元（1644）

年	区分	記 事
寛永5・戊辰	防 長	○右田毛利元法、佐波郡右田村（現防府市）に郷校時観園を創設。 （安藤紀一『萩史料』）
	防 長	○9月8日、言如（天樹院及び萩・平安寺開山）歿、78才。
寛永14・丁丑	参 考	○10月、島原の乱起る。
	参 考	○林羅山『性理字義診解』成る。 ○『詩人玉屑』和刻刊。詩法書。
寛永16・己卯	参 考	○（明）盧允武『助語辞』和刻刊。
寛永18・辛巳	参 考	○（明）盧允武『助語辞』和刻刊。
正保元 （1644） 12/16 ・甲申	防 長	○2月14日、雲谷等益歿、54才。長男等与相続。知行高300石。
	参 考	○『文章一貫』和刻刊。 ○中江藤樹、この年をはじめ『陽明全書』を読む。

年	区分	記	事
正保4・丁亥	参 考	○山崎闇斎『關異』成る。 ○『唐才子伝』和刻刊。 ○(元)陳師凱『書蔡氏伝旁通』和刻刊。	
正保5(2/15)・戊子	慶安元	○1月3日、那波活所歿、54才。 ○8月25日、中江藤樹歿、41才。 ○(元)黄鎮成『尚書通考』和刻刊。	
慶安2・己丑	防 長	○宇都宮遯庵(17才)、岩国領主吉川広嘉の命により京都へ遊学、松永尺五へ入門。(桂芳樹『宇都宮遯庵』)	
	参 考	○6月15日、木下長嘯子歿、81才。 ○『焦氏筆乘』(明の焦竑が旧聞を考證したもの)和刻刊。	
慶安3・庚寅	参 考	○5月6日、幕府大老酒井忠勝は岡山藩主池田光政に対し、花鳥教場(岡山藩校)について“大勢あつまり候所もやう悪く候間御しめ可有候”と警告する。(『池田光政日記』) ○『伝習録』和刻刊。(『伝習録』は、後に正徳2年(1712)に三輪執斎の標注のものが刊行されて、広く読まれるようになった。) ○『列仙伝』和刻刊。	
慶安4・辛卯	防 長	○三吉規為編『毛利秀元記』6巻6冊成る。	
	参 考	○藤原惺高『惺高先生文集』成る。 ○林羅山「草賊前記」成る。 ○朱熹『楚辞集注』和刻刊。	

年	区分	記	事
慶安4	参考	○『鼈頭評註四書大全』刊。	
承応2・癸巳	参考	○近松門左衛門生。～享保9年(1724)歿。72才。 ○永田善斎『膾余雜録』刊。 ○『性理大全』70卷51冊和刻刊。 ○『王陽明先生文録』和刻刊。 ○『野客叢書』和刻刊。 ○『列女伝』和刻刊。	
承応3・甲午	防長	○2月、宇都宮遜庵、松永尺五門での業を卒えて岩国に帰る。帰途の旅行記『岩邑紀行』がある。 ○11月28日、三谷等宿歿、78才。	
	参考	○7月、隠元、門下の濁湛・独吼・大眉等を従えて来朝。	
明暦元 承応4 (4/13) ・乙未	防長	○11月2日、雲谷等与・等爾・等室、禁裏造営の襖絵製作に参加、仕事を終えこの日帰国の途に着く。	
明暦2・丙申	防長	○大照院(臨済宗南禅寺派)落成。	
	参考	○12月16日、金森宗和歿、73才。 ○松平直矩『大和守日記』、この年より起筆。 ○山鹿素行『武教本論』成る。また『武教全書序』成る。素行30才。 ○『円機活法』(漢詩語彙集)刊。(菅得庵門下菊池耕斎校刊か)。 ○『王注東坡先生詩』和刻刊。	

年	区分	記	事
明暦3・丁酉	防長	○宇都宮遯庵、岩国吉川家の儒官となる。 ○宇都宮遯庵『岩邑紀行』成る。	
	参考	○1月18日、明暦の大火。 ○1月23日、林羅山歿、75才。 ○2月、徳川光圀、史局を江戸駒込に開き、『大日本史』編纂事業始まる。史局を彰考館と名づけたのは寛文12年(1672)のことである。 ○2月10日、新井白石生。 ~享保10年(1725)。 ○熊沢蕃山『大学或問』、この年成るか。 ○『白氏長慶集』和刻刊。	
明万暦治4元			
万治2・己亥	参考	○朱舜水、来朝。 ○元政上人、身延(甲斐国)に旅行する。途次名古屋にて陳元賛に逢う。元賛は元政に袁中郎の詩を推賞する。 ○『五車韻瑞』和刻刊。 ○李廷機編『文章軌範百家評林註釈』和刻刊。	
万治3・庚子	防長	○9月、「万治制法」(長州藩基本法) 発布。	
	参考	○(明) 梁橋『水川詩式』(詩作法書) 和刻刊。 ○(明) 羅整庵『困知記』和刻刊。『困知記』は朱子の理の哲学を批判して気の哲学を主張したもの。文祿慶長の役で日本にもたらされた朝鮮星州翻刻本を林羅山が筆写したものによる刊行。羅山による写本は現在内閣文庫にあり、朝鮮将来本は熊本県人吉高校にある。(阿部吉雄「江戸初期の文芸復興と朝鮮」『文学』1967・4月号) ○鶴飼石斎『韓文』・『柳文』刊。(桂五十郎編『漢籍解題』による。) 寛文4年刊か。	

年	区分	記	事
万治4 寛文元 (4/25) ・辛丑	防長	○宇都宮遯庵『錦繡段抄』刊。	
	参考	○林靖(守勝・読耕斎。林羅山の四男)歿。38才。 ○元政上人『称心病課』成る。 ○『五雑俎』和刻刊。 ○黄檗山万福寺建立。 ○この年、伊勢参り流行。	
寛文2・壬寅	防長	○宇都宮遯庵「成君寺鐘銘」(成君寺は現玖珂郡本郷村にある)。 ○「春定并検見之事」公布。	
	参考	○2月、伊藤仁斎、古義堂開塾。 ○(宋)羅大経『鶴林玉露』和刻刊。	
寛文3・癸卯	防長	○雲谷等璠(29才)、兄等与の養子となる。	
	参考	○『元元唱和集』(元政・陳元賛両人の漢詩集)刊。 ○林羅山解・鶴飼石斎補『古文真宝後集諺解大成』刊。	
寛文4・甲辰	防長	○4月13日、独立(明僧)長崎より岩国に来て滞留、8月9日長崎に帰る。 ○5月3日、雲谷等璠、法橋となる。 ○斎藤等室、高野山に画く。等室は岩国雲谷派画家。	
	参考	○9月26日、江村惠斎歿。100才。 ○11月28日、林春斎(羅山の子)、徳川光圀の招きによりその屋敷を訪ね、『本朝通鑑』について議論をする。(春斎『国史館日録』)。 ○元政『扶桑隠逸伝』刊。 ○『陶靖節集』和刻刊。陶淵明の詩文集。菊池耕斎点。第3巻が詩。 ○鶴飼石斎点『韓文』・『柳文』刊。(岩波『日本古典文学大辞典』による)。万治3年の項参照。	

年	区分	記	事
寛文5・乙巳	防長	○宇都宮遯庵『龜頭評註古文真宝前集』刊。 ○同 「陰徳記序」成る。	
	参考	○三宅石庵生。	
寛文6・丙午	防長	○山田原欽生。～元禄6年(1693)。 ○生駒等寿(画家)長州藩に出仕。	
	参考	○2月16日、荻生徂来生。～享保13年(1728)。 ○10月3日、山鹿素行、幕府の忌諱するところとなり(保科正之の意見による)播磨国赤穂に流謫される。 ○山鹿素行『聖教要録』この年刊行か。(寛文5年の門人の序がある)。 ○林鷲峰、塾生の為のカリキュラム“五科の制” — 經学・読書・詩・文・和学 — を定める。(『鷲峰文集』第51巻)。 ○那波活所『活所遺稿』刊。6冊。 ○(宋)釈惠洪『冷斎夜話』和刻刊。10巻。 ○『古今事文類聚』和刻刊。 ○『文体明弁』和刻刊。 ○『詩林広記』和刻刊。	
寛文7・丁未	防長	○3月、阿川毛利就方、玖珂郡高森村に大梅山通化寺(旧名大梅院)建立。黄檗宗。開山道明惠極。(安藤紀一『山田原欽』)。 ○4月12日、雲谷等与、法眼となる。	

年	区分	記	事
寛文8 ・ 戊申	防 長	○1月17日、雲谷等与歿、57才。 ○8月、道明惠極、病氣静養の為に通化寺より萩に來り、妙峯庵に住す。 ○11月5日、斎藤等室歿。 ○山県良斎(雲洞、長白。山県周南の父)京都に遊学す。	
	参 考	○5月17日、雨森芳洲生。 ~宝暦5年(1755)。 ○山科長安「日本古今人物史序」。(『日本古今人物史』は宇都宮遯庵著)。 ○野間静軒『四時幽賞』刊。 ○鶴飼石斎・安井真祐点『朱子語類大全』刊。140巻60冊。江戸山形屋開板。(訓点は巻90までが石斎、巻91以下は真祐。誤読が多いといわれる。それは俗語や方言の多い所為であった)。 ○『北溪先生字義詳解』(『性理字義』)和刻刊。或は寛文10年か。 ○『南軒先生文集』和刻刊。	
寛文9 ・ 己酉	防 長	○宇都宮遯庵『日本古今人物史』刊。この書中の中川清秀伝が幕府の忌諱にふれ、延宝3年(1675)に禁固される。同年末赦免。(桂芳樹『宇都宮遯庵』)。	
	参 考	○山鹿素行「中朝事実序」。刊行は天和元年(1681)。 ○野間静軒(三竹)『本朝詩英』刊。 ○(明)顧夢麟『詩経説約』28巻和刻刊。	
寛文10 ・ 庚戌	参 考	○4月28日、伊藤東涯生。 ~元文3年(1738)。 ○林羅山・林春斎(鷲峰)『本朝通鑑』成る。310巻。 ○『唐詩訓解』(8冊本)和刻刊。(この書は以後寛文11・天和元・正徳5・宝暦4年と刊行された。元禄以前は『三体詩』・『瀛壖律髓』・『唐宋連珠詩格』がよく読まれて『唐詩訓解』はあまり読まれなかったが、元禄に入ってから次第に読まれるようになった。荻生徂來は元禄3年に『唐詩訓解』を手にして全巻筆写している。本書の板株を所有していたのは京都の書肆原田氏であった)。 ○9月、『濂洛風雅』和刻刊。 ○(宋)陳北溪『北溪先生性理字義』和刻刊。	

年	区分	記	事
寛文11・辛亥	防 長	○4月30日、雲谷等爾歿、57才。墓は萩の徳隣寺にある。	
寛文12・壬子	防 長	○12月21日、安部吉左衛門春貞、翌春正月の書初め及び11日の城内連歌会に陪席を命ぜらる。(『毛利十一代史』)	
	参 考	○5月23日、石川丈山歿、90才。 ○荻生徂来、林家に入門す。7才。 ○熊沢蕃山『集義和書』(初板本)刊。 ○徳川光圀、史局を駒込から小石川に移し、『左伝』の杜預の序の“彰往考来”から彰考館と名づける。 ○南部南山(木下順庵門)長崎に赴く。 ○11月、独立、長崎の崇福寺に歿す。77才。(書の弟子に北島雪山・深見玄岱がある)。 ○『八種画譜』和刻刊。8巻。唐代の詩画帖8種を輯めたもの。宝永年間にも和刻される。	
延宝元 寛文13 (9/21) ・癸丑	参 考	○3月、山鹿素行『孫子諺義』成る。 ○4月3日、隠元歿、82才。 ○八尾板『史記評林』(無点)刊。 ○『円機活法』和刻刊。 ○この頃(延宝年前後)大名の歌舞伎見物が流行する。(参照『松平大和守直矩日記』)	
延宝2・甲寅	参 考	○三宅観瀾生。～享保3年(1718)。三宅石庵の弟。 ○10月7日、狩野探幽歿、73才。 ○八尾板『史記評林』(付訓点)刊。	

年	区分	記 事
延宝3 ・ 乙卯	防 長	○宇都宮遯庵、幕府の罪を得て近江国坂本に流される。年末赦免。(遯庵の詩「延宝四歳元旦擬古」による)。延宝8年にも流される(桂芳樹『宇都宮遯庵』)。
	参 考	○北村季吟『源氏物語湖月抄』刊。 ○『周張全書』和刻刊。
延宝4 ・ 丙辰	防	○5月、山田原欽、京都に上がり伊藤坦庵に師事。 ○7月28日、山田原欽、後水尾院に謁す。11才。
	長	○この年、藩負債銀1万2千貫目。
延宝5 ・ 丁巳	防 長	○1月29日、波多野等有歿、54才。雲谷派画家。 ○6月、宇都宮遯庵、京から岩国へ帰る。 ○小倉尚斎生。～元文2年(1737)。(山根華陽『華陽先生文集』巻8)。 ○長州藩、初めて藩札を発行。 ○萩地方地震。
	参 考	○中国僧心越(曹洞宗)来朝。後に水戸徳川家に招かれる。 ○『江戸雀』刊。江戸最初の観光案内書。菱川師宣画。
延宝6 ・ 戊午	防 長	○宇都宮遯庵注『鼈頭近思録』刊。
	参 考	○梅室洞雲『詩律初学抄』刊。 ○林鷲峰「本朝画史序」。(『本朝画史』は狩野山楽の遺稿をもとに狩野永納が編集したもので元禄4年刊)。

年	区分	記	事
延宝7・己未	防長	○11月8日、鷹司房輔室竹子(毛利秀就女。毛利綱広姉)歿。 ○11月11日、山田原欽、世子毛利吉就の侍臣となり京都より江戸へ発足する。11月22日江戸着。年銀4貫目給付。	
	参考	○2月、榊原篁洲『詩法授幼抄』刊。漢詩手引書。 ○8月、荻生徂来、父方庵の流謫に従って上総国長柄郡二宮庄本能村に移る。 ○『分類補註李太白詩』和刻刊。(元の蕭士贇が楊斎賢の集註に補註したもの)。	
延宝8・庚申	防長	○2月3日、鉄牛(瑞聖寺住持)より毛利就信宛書状。山田原欽の人物評を行っている。(安藤紀一『山田原欽』P.48) ○2月、山田原欽「鐘秀亭記」。(鐘秀亭は松平大和守直矩の亭名。直矩は毛利綱広の従弟で、有名な『松平大和守日記』がある)。 ○2月、山田原欽、藩の給費により再度京都に遊学。年銀2貫目給与。 ○春、宇都宮遯庵、幕府の罪を得て近江国坂本に流される。天和2年赦免、京都に帰る。(『岩邑年代記』。桂芳樹『宇都宮遯庵』)。 ○11月、安部吉左衛門春貞、長州藩の連歌宗匠となる。春貞は吉川惟足の門下。貞享2年、山田原欽等と「八江八景」を詠ず。	
	参考	○5月5日、林鷲峰歿、63才。 ○8月23日、徳川綱吉、将軍となる。 ○9月14日、太宰春台生。～延享4年(1747)。 ○熊沢蕃山『集義外書』この年頃までに成るか。 ○貝原益軒『初学詩法』刊。 ○『扶桑名勝詩集』刊。	
天和元(9/29)・辛酉	防長	○5月27日、山田原欽、京都での修学を了え江戸に帰る。6月7日江戸着。 ○7月7日、山田原欽「明説」、長州藩世子毛利吉就に提出。君主の心構えを説いたもの。(安藤紀一『山田原欽』P.64に全文掲載)。 ○12月、毛利吉就襲封。	
	参考	○山鹿素行『中朝事実』刊。 ○『花壇綱目』刊。 ○山田喜兵衛編『書籍目録大全』刊。	

年	区分	記	事
天和2 ・ 壬戌	防	○7月10日、朝鮮信使赤間関着。一行485人。15日赤間関発、16日上ノ関着、1泊。	
	長	○8月21日、朝鮮信使江戸着。宿舎馬喰町本誓寺。 ○8月29日及び9月2日、山田原欽、朝鮮使節中の学士李盤石等と筆談唱酬。(毛利吉就が对馬藩主宗義真に依頼して実現したもの)。 ○10月、山田原欽「韓客酬唱録」成る。 ○11月29日、山田原欽、江戸より京都に上る。 ○この年、馳走出米14石懸り、百姓出銀石別3匁。	
天和3 ・ 癸亥	参	○4月17日、朱舜水歿、83才。 ○5月22日、池田光政歿、74才。 ○7月28日、木下順庵、幕府儒官となる。 ○9月16日、山崎闇斎歿、65才。 ○10月、西鶴『好色一代男』刊。	
	防	○3月、毛利吉就、雲谷等璠筆「西湖図」屏風を幕府に献ず。(『毛利十一代史』) ○4月、山田原欽「与貝原篤信書」。貝原篤信は益軒。(安藤紀一『山田原欽』P.87)。“有志於四方”が男児だと述べている。 ○9月、伊藤坦庵「復軒説」。復軒は山田原欽に与えた号。(安藤紀一『山田原欽』P.89に全文掲載)。 ○10月、山田原欽、京都より江戸へ帰る。 ○11月、宇都宮遯庵『蒙求詳説』刊。(延宝8年6月自序)。	
	考	○1月28日、安藤東野生。 ~享保4年(1719)。 ○閏5月、伊藤仁斎『語孟字義』成稿。 ○9月24日、服部南郭生。 ~宝暦9年(1759)。 ○安積澹泊、彰考館に入る。 ○榊原篁洲『古文真宝前集諺解大成』刊。 ○盧允武『龜頭本助語辞』刊。	

年	区分	記	事
天 貞 享 元 4 （ 2 / 21 ） ・ 甲 子	防 長	○7月1日、山田原欽、藩主吉就に従って越ヶ浜に遊び「遊腰浜記」を作る。（原欽『竜山集』収） ○8月、毛利綱元『毛利甲斐守秀元公譜略』成る。 ○9月、山田原欽、藩主の領内巡視に陪従する。	
	参 考	○10月21日、徳川吉宗生。～宝暦元年（1751）。 ○12月、幕府、天文方設置。幕府の編曆所。（大崎正次編『天文方関係資料』）。 ○山本洞雲『太極図説諺解』刊。 ○『二程全書』刊。 ○幕府、時事を取り扱った出版物の取締りを発令。 ○貞享の頃から享保にかけて「前句附」・「冠附」流行。料金16文。（曳尾庵南竹『我衣』）。	
貞 享 元 2 ・ 乙 丑	防 長	○1月15日、斎藤閑溪歿。岩国の雲谷派画家。 ○3月、山田原欽、藩主に従って出府の途次京都に留る。翌3年、藩主帰国に際し京都より陪従、萩に帰る。 ○山田原欽・安部春貞・雲谷等璠、“萩八景”を選定し、「八江八景」を詠じ、画す。（藩主吉就の下命によるもの）。	
	参 考	○水戸藩士佐々木助三郎、防長両国の寺社旧記調査に来藩。『大日本史』史料蒐集。 ○4月、伊藤仁斎『大学定本』成る。 ○6月、『杜律集解』（新板）3巻6冊刊。（この書は既に万治2年（1659）に京都寺町四条下ル丸屋庄三郎より板行されている）。 ○9月15日、石田梅岩生。～延享元年（1744）。 ○9月26日、山鹿素行歿、64才。 ○『京羽二重』刊。京都案内書。 ○『広益書籍目録』刊。 ○寂源和尚『高良山十景詩歌』正統刊。筑後国高良山に寄せた詩歌集。宇都宮遯庵・香川宣阿・山田原欽等が寄せた序・詩を収める。 ○漢訳洋書の輸入取締強化される。	

年	区分	記	事
貞 享 3 ・ 丙 寅	防	○2月、貞享検地始まる。 ~翌4年。 ○2月、山田原欽「送仁保玄珠序」。(原欽の詩論がうかがえる。安藤紀一『山田原欽』P.113)。 ○4月19日、井上玄徹歿、85才。防長出身。曲直瀬玄朔に学び、徳川家光・同家綱の侍医となる。	○6月3日、萩の端の坊に時鐘を設ける。 ○7月7日、津森等為歿。雲谷派画家。
	参 考	○越智雲夢生。 ○熊沢蕃山『大学或問』成る。 ○人見卜幽『東見記』刊。 ○西鶴『好色五人女』・『好色一代女』・『本朝二十不孝』刊。 ○『林和靖先生詩集』和刻刊。 ○(明)胡応麟『詩藪』和刻刊。詩論書。	
貞 享 4 ・ 丁 卯	防	○3月、山田原欽、藩主に従って出府。 ○4月、香川景継(梅月堂宣阿)、主君吉川氏に無断で仏門に入り、罰せられる。 ○5月3日、山県周南生。 ~宝暦2年(1752)。 ○7月12日、三谷等休歿、70才。雲谷派画家。	○秋、道明惠極、江戸瑞聖寺の住職となる。前住は鉄牛。この年、毛利吉就始めて惠極に会う。
	参 考	○8月29日、日野弘資歿。長府藩主毛利綱元の和歌の師。 ○10月、熊沢蕃山、下総国古河に禁固となる。 ○10月、芭蕉、『笈の小文』の旅に出る。 ○契沖『万葉代匠記』初稿本この年成るか。(或は貞享5年か。精撰本は元禄3年成立)。 ○村田通信『詩林良材』(6冊)刊。漢詩の語彙集。『円機活法』を材料にした手軽な類書であり、その和訳簡約版。(上野洋三「詩の流行と俳諧」『文学』1973・11)。	

年	区分	記	事
貞元 享禄 5元 (9/30)	防	○5月、山田原欽、藩主に従って萩に帰る。 ○5月、山田原欽「勉賀屋玄張書」。 ○9月、山田原欽、藩主に従って大寧寺に遊ぶ。「大寧十境」成る。 (大寧寺に原欽自筆「大寧十境詩巻」所蔵さる)。	○山田原欽「跋竜藏寺来歴記」(吉敷郡竜藏寺)・「跋仏舍利記」(「仏舍利記」は山内広直の作)。 ○吉弘元常(徳山の人)、佐々宗淳と共に水戸藩彰考館総裁となる。
	長		
・ 戊辰	参	○平野金華生。 ~享保17年(1732)。 ○11月12日、柳沢保明(吉保)将軍の側用人となる。 ○栗山潜峰『保建大記』成る。(正徳6年刊) ○西鶴『日本永代蔵』刊。	○『文筌』刊。(陳繹曾『文章欧冶』のこと)。 ○『神異経』和刻刊。1巻。(漢の東方朔の名をかたった偽書)。
元禄 2	防	○2月、山田原欽、藩主に従って出府。 ○宇都宮遯庵「肥州平戸普門寺碑銘」。 ○山田原欽「生雲亭記」(生雲亭は尾張徳川家分家松平摂津守義行の邸内にあった。義行は毛利綱広の女婿)。 ○山田原欽「嘉会亭記」(嘉会亭は内藤紀伊守弼信の邸内にあった。弼信は毛利綱広の女婿)。	
	長		
・ 己巳	参	○三浦竹溪生。 ~宝暦6年(1756)。 ○成島錦江生。 ~宝暦10年(1760)。 ○藪慎庵(震庵)生。 ~延享元年(1624)。 ○3月、芭蕉、『奥の細道』の旅に出る。 ○11月、澁川春海、江戸本所に天文台を開く。 ○雨森芳洲、惠巖(心越門下)に師事す。	○林鷲峰『鷲峰全集』105冊、刊。 ○『皇明七才詩集解』和刻刊か。(陳繼儒解・李士安補。7巻。明の古文辞派の総集)。元禄2年の跋がある。延享4年(1747)に覆刻。
	考		

年	区分	記	事
元 禄 3 ・ 庚 午	防 長	○6月、山田原欽、藩主に従って萩に帰る。 ○8月、毛利元次、徳山藩主となる。 ○宇都宮遯庵「独楽園記」。(独楽園は津和野亀井氏の家老多胡氏の園)。	
	参 考	○高野蘭亭生。～宝暦7年(1757)。 ○山井崑崙生。～享保13年(1728)。 ○8月、『和刻詩法入門』刊。 ○12月22日、湯島聖堂落成。 ○契沖『万葉代匠記』精撰本成る。(『万葉代匠記』が長州藩へもたらされたことを示すものとして、後年ではあるが山根華陽『華陽先生文集』巻九「題万葉代匠記写本卷末」がある。) ○『詞林意行集』刊。和文漢文による紀行文集。	
元 禄 4 ・ 辛 未	防 長	○山田原欽、藩主に従って出府。 ○2月、東光寺創建。黄檗宗。開山道明惠極。 ○8月、道明惠極、瑞聖寺住職を退き、北国に遊ぶ。8月25日、惠極、河内国河内郡日下村大竜寺に入る。	
	参 考	○1月13日、林鳳岡、蓄髪を命ぜられて、大学頭となる。 ○8月17日、熊沢蕃山歿、73才。 ○伊藤仁斎『童子問』第一稿本成る。 ○藤原惺窩『仮名性理』刊。 ○狩野永納『本朝画伝』刊。後に『本朝画史』と改題。 ○訓訳本『遊仙窟』刊。	

年	区分	記	事
元 禄 5 ・ 壬 申	防	○1月29日、栗栖等侷歿。雲谷派画家。 ○小倉実操（尚斎）京都に遊学し、伊藤担庵の門に入る。（山田原欽の弟子）。 ○7月6日、熊谷玄旦歿、60才。医師。詩を能くする。 ○秋、道明惠極、毛利吉就の招きにより東光寺に入山。（惠極は画も能くし『古画備考』にも載せられている。） ○10月21日、内藤以貫歿、68才。或は元禄2年7月6日歿、66才ともいう。 ○岡島冠山、藩主毛利吉就に訳士として出仕する。（萩にも来たか。岩波版『日本古典文学大辞典』参照）。	
	参 考	○3月、『通俗三国志』首巻共51巻刊。（小川環樹『中国小説史の研究』によると訳者は文山。（元）羅貫中の『李卓吾先生批評三国志』からの訳という。田中大観『大観随筆』によると、天竜寺の兄弟僧義轍・月堂による訳で、『三国志通俗演義』を基に正史の『三国志』を参考にしているという。徳田武『『通俗三国志』の作者について』は、みんな同一の人物だと見なしている。 ○6月2日、荻生徂来、父方庵の赦免により流謫地より江戸に帰る。徂徠25才。芝増上寺門前にて開塾。 ○雨森芳洲、長崎に赴いて上野玄貞に就いて華音を学ぶ。 ○『広益書籍目録大全』刊。	
元 禄 6 ・ 癸 酉	防	○7月14日、山田原欽、江戸桜田長州藩邸にて自殺。28才。 ○坂時存（当時矢鳥姓）、氷上山興隆寺真光院の住職行海に従って京都に上る。	
	参 考	○8月10日、井原西鶴歿、52才。 ○12月、新井白石、徳川綱豊（後の将軍家宣）の侍講となる。 ○『男重宝記』刊。 ○『拾遺意行集』刊。和文漢文の紀行文集。	

年	区分	記	事
元 禄 7 ・ 甲 戌	防 長	○2月7日、藩主毛利吉就歿、27才。 ○岡島冠山、藩主吉就の死により長崎に帰る。 ○春、道明恵極、長府に赴く。 ○6月晦日、彰考館総裁吉弘元常歿、53才。 ○山県良斎、この年、新藩主吉広に従って一家で萩に移住か。	
	参 考	○太宰春台(15才)、出石侯小出英利に仕う。 ○6月4日、菱川師宣歿。 ○10月12日、松尾芭蕉歿、51才。 ○12月8日、柳沢吉保、老中となる。 ○三好似山『広益助語辞集例』刊。 ○『語録字義』刊。『朱子語類』中の俗語の注釈書。 ○(明)王世貞改編『世説新語補』和刻刊か。20巻。	
元 禄 8 ・ 乙 亥	防 長	○10月、香川宣阿(梅月堂)「陰徳太平記序」。『陰徳太平記』成る(正徳2年刊)。	
	参 考	○伊藤東涯編『当世詩林』正統3巻1冊、元禄8年以降成る。宇都宮遯庵・小倉尚斎に関する記事が見える。 ○伊藤仁斎『語孟字義』の廣刻本、江戸で板行される。 ○榊原篁洲『文法授幼鈔』刊。林文会堂(林義端)等板行。 ○西川如見『華夷通商考』刊。 ○(朝鮮)柳成竜『懲愆録』和刻刊。貝原益軒序。原本17巻のうち本篇2巻のみを4巻にしての刻本。 ○『通俗漢楚軍談』(章峰・徹庵訳)刊。甄偉『西漢通俗演義』の訳。(徳田武氏は『通俗漢楚軍談』は日本における白話小説翻譯の嚆矢だという。)	

年	区分	記	事
元禄9・丙子	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○8月22日、荻生徂来、柳沢吉保に仕える。十五人扶持給与。徂来31才。 ○11月10日、荻生徂来、三宅休と結婚。媒酌人は細井広沢。 ○太宰春台(17才)、中野協謙に入門。 ○服部南郭(14才)、京都より江戸に出る。 ○『皇明通紀』刊。(『通俗元明軍談』の林義端の序によると、『皇明通紀』は岡島冠山の訓点校正になるという。) ○『梨雲館類定袁中郎全集』和刻刊。唐本のままの覆刻。 ○宮川道達『和語円機活法』11冊刊。 ○河内屋利兵衛『増益書籍目録大全』刊。全6冊。当時市場に出まわっていた書物7,800点の目録。 	
元禄10	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○閏2月8日、鳩野宗巴歿、57才。熊本藩医。萩出身。 ○5月2日、朝枝珂珂(毅斎)生。～延享2年(1745)。(伊藤蘭隅「朝枝弘毅斎碣銘」)。 ○5月、毛利綱元「伊勢のつと序」。『伊勢のつと』の源豊常の紀行文。 ○6月、長府寛苑寺創建。開山悦山。 ○宇都宮遯庵『杜律集解詳説』成る。 ○岩国領内寺社由来記まとまる。元禄8年10月より着手したもの。 	
丁丑	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○3月4日、賀茂真淵生。～明和6年(1769)。 ○五井蘭洲生。～宝暦12年(1762)。 ○三宅石庵、讃岐金比羅に赴く。(三宅観瀾の兄。懐徳堂初代学主)。 ○『酉陽雜俎』和刻刊。(今村与志雄氏の東洋文庫『酉陽雜俎』解説によると、この和刻本は中国でもっとも普及した『酉陽雜俎』刊本である明の毛晋の汲古閣刊の津逮秘書本の極めて忠実な翻刻であり、日本でもっともよく使用された刊本であるという。しかしその訓点は、点者が語学的に古典文章語や唐代の史実に暗かった為か、誤りが多いと述べている。) 	

年	区分	記 事
元禄 11 ・ 戊寅	防 長	○3月3日、安部吉左衛門春貞歿、77才。 ○赤間関住書林坂本伊兵衛、『新編四島一注集』刊。 ○東光寺、大雄宝殿建立。
	参 考	○5月20日、宇野明霞生。～延享2年(1745)。 ○12月23日、木下順庵歿、78才。 ○鞍岡元昌(蘇山)、荻生徂来に入門。徂来は元昌に唐音を学ぶ。 ○『博桑名賢文集』刊。 ○『新板増益書籍目録』刊。
元禄 12 ・ 己卯	防 長	○1月、宇都宮遯庵「根笠行紀序」。根笠は現玖珂郡美川町。 ○東光寺天主殿建立。 ○藩士、家計困難甚し。
	参 考	○『役者口三味線』刊。この書は、「評判記」の型を決定づけた。
元禄 13 ・ 庚辰	防 長	○1月、小倉尚斎「復軒先生行状」。復軒は山田原欽の号。 ○3月、京都陶工丹波屋安兵衛、岩国に招かれ多田焼始まる。 ○4月、徳山の長沼玄珍、京都に遊学し、伊藤仁斎に師事す。(『徳山市史』上)。 ○7月、山泉良斎(長白)、10石増加されて禄高30石となる。 ○8月20日、鉄牛歿、73才。晋応禪師。長門須佐出身。木庵の弟子。 ○11月、宇都宮遯庵「藤村庸軒先生伝」(久須美疎庵『茶話指月集』収)。 ○宇都宮遯庵『三体詩詳解』刊。
	参 考	○太宰春台、出石藩を勝手に致仕する。 ○12月6日、徳川光圀歿、73才。

年	区分	記	事
元禄14・辛巳	防長	○春、坂時存、嫡子雇により江戸方役人として初出仕。出府。(『遺塵抄』)。 ○5月8日、生駒等寿歿、77才。雲谷派画家。寛永3年(1626)生。	
	参考	○1月25日、契冲歿、62才。寛永17年(1640)生。 ○宇野士朗生。~享保16年(1731)。 ○三宅石庵、大坂に開塾する。 ○12月、『桃源遺事』(『西山遺事』)成る。徳川光圀伝。 ○林義端編『文林良材』刊。伊藤東涯の「作文真訳」等を取める。	
元禄15・壬午	防長	○5月16日、長富等珍歿、72才。雲谷派画家。 ○6月28日、津田東陽生。~宝暦4年(1754)。 <山根華陽「東陽君墓碣」(『華陽先生文集』巻八)> ○杉岡就房『吉田物語』この年成るか。	
	参考	○2月19日、新井白石、自著『藩翰譜』を徳川綱豊(後將軍家宣)に献ず。 ○7月25日、中村楊斎歿、74才。 ○12月、「全国絵図」成る。	
元禄16・癸未	防長	○和智東郊生。~明和2年(1765)。 ○坂大連(時連)生。 ○2月、毛利元次「花玉集千句序・跋」。(『花玉集千句』は風月窩光端著)。 ○4月、宇都宮遯庵「宮庄氏花園記」。 ○5月、小田村酈山生。~明和3年(1766)。 ○9月28日、宇都宮遯庵徳山に赴き、藩主毛利元次と会見。10月7日、岩国へ帰る。(桂芳樹『宇都宮遯庵』)。 ○10月、宇都宮遯庵「棲息堂記」。(宝永3年刊『徳山名勝』に収まる。棲息堂は毛利元次の書屋。)毛利元次「棲息堂記序」。	

年	区分	記	事
元禄 16 ・ 癸未	参 考	<p>○1月5日、荻生徂来・鞍岡蘇山（共に柳沢吉保の儒臣）將軍綱吉の前で『大学』を唐音で講ずる。</p> <p>○5月7日、近松門左衛門「曾根崎心中」初演。（その道行の叙述は荻生徂来を感嘆させた。近世演劇史上画期的な意義を有する作品）。</p> <p>○柳沢吉保、藩校文武教場を創設。荻生徂来を教授とす。</p> <p>○荻生徂来、伊藤仁斎に書を送り教えを乞う。（吉川幸次郎は宝永元年の冬とする）。仁斎より返事なし。それにより徂来は反仁斎学にむかう。</p> <p>○11月22日、江戸大地震。震源地は小田原付近。29日、“地震火災”起る。</p>	
宝永 17 (3/13)	防 長	<p>○1月、幕府より課役の江戸城修復工事着工。</p> <p>○5月、宇都宮遯庵『巖邑紀行』刊。</p> <p>○長沼玄珍（徳山藩医）京都に遊学し、医学を修めるかたわら伊藤仁斎に入門。（『徳山市史』は元禄13年とする）。</p>	
・ 甲申	参 考	<p>○2月19日、初代市川团十郎歿、45才。</p> <p>○12月21日、柳沢吉保、甲斐に封ぜられる。15万1千2百石。</p> <p>○荻生徂来が明の古文辞派李攀竜・王世貞の文集に初めて接したのはこの年頃か。宝永初年という。徂来が朱子学から脱却する契機をなす。</p>	
宝永 2 ・ 乙酉	防 長	<p>○山県周南、荻生徂来の門に入る。</p> <p>○9月、宇都宮遯庵、毛利元次の招きにより徳山に赴く。（桂芳樹『宇都宮遯庵』）。</p> <p>○10月22日、雲谷等瑠宅（堀内）から出火。類焼平安古に及ぶ。</p> <p>○12月3日、初代三輪休雪歿、76才。</p>	
	参 考	<p>○3月12日、伊藤仁斎歿、79才。寛永4年（1627）生。</p> <p>○荻生徂来、明の李攀竜・王世貞の文集に接し、独自の儒学説構築に向う。</p> <p>〈山県周南「学館功令」に“我徂徠先生年方四十、始修古文辞、蓋十年作弁道。”（『周南先生文集』巻九）とある。〉</p>	

年	区分	記	事
宝永2・乙酉	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○荻生徂来、中野搗謙宛書牘(『徂徠集』巻十)。西遊記・水滸伝・西廂記等を唐音を学ぶ為の教科書だとしている。 ○伊藤仁斎『語孟字義』刊。2巻2冊。林景范文進後記。 ○陳元寶『老子経通考』刊。2巻4冊。 ○『覚後禅』(一名『肉蒲団』)訓訳刊。白話小説。(徳田武氏は、この年刊に疑問を呈している)。 ○一鶚訳『通俗南北朝軍談』・『通俗北魏南梁軍談』刊。 ○岡島冠山訳『通俗元明軍談』刊。(『皇朝英烈伝』の翻訳)。 ○伊勢お蔭参り流行し、362万人に達したという。 	
宝永3	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、小倉尚斎、藩主吉就に従って萩に帰り、儒員に列す。 ○5月、宇都宮遯庵「極楽寺亭子記」。 ○杉岡就房歿、81才。『吉田物語』の作者。 ○伊藤梅宇、徳山藩主毛利元次の招きにより徳山に来るか。(『徳山市史』上には、4月に伊藤東涯徳山に来るとあるが疑問)。 ○11月27日、山県良斎、御伽衆となり、手廻組に加えられる。 ○この年、山県周南、『梁溪雑談』を筆写す。(吉田樟堂文庫『周南余音』による)。 ○『徳山名勝』刊。宝永3年4月、伊藤東涯序。宇都宮遯庵「棲息堂記」、同「松屋十八景詩」、桂方直「松屋十八景詩」、長沼玄珍「徳山府記」、毛利元次「遠石記」等を収める。 ○検見仕法を公布。 	
丙戌	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○3月、『韋蘇州集』(『須溪先生校本韋蘇州集』)和刻刊。(校合がよくないという)。 ○安藤東野、徂来に入門したのはこの年か。 ○9月、荻生徂来、主命により田中桐江と甲府に赴く。山県周南・安藤東野「送序」を作る。(徂来はこの旅行記「風流使者記」を著し、後に改稿して「峡中紀行」とする)。 ○荻生方庵歿、81才。徂来の父。 ○新井白石『俳優考』成る。 ○『宋書』・『梁書』・『陳書』和刻刊。(柳沢吉保による出版。荻生徂来関係する)。 	

年	区分	記	事
宝 永 4 ・ 丁 亥	防		<ul style="list-style-type: none"> ○3月16日、山県東門（周南の兄）江戸遊学中病死、29才。 ○春、毛利綱元編歌集『七石集』成る。 ○7月16日、桑原幽宅歿。岩国の狩野派画家。 ○9月、言外和尚歿、78才。萩の平安寺住職。『宝訓集』の著作がある。 ○10月10日、宇都宮遯庵歿、75才。寛永10年生。（松崎孝之「宇都宮遯庵墓誌銘」）。 ○毛利元次、伊藤東涯・同梅宇に各五人扶持を給す。（『徳山略記』。渡辺憲司『毛利元次文化圏考』参照）。 ○毛利元次「塩鉄論序」。『塩鉄論』は伊藤東涯校及び訓点で宝永5年刊。 ○11月、毛利吉元襲封。毛利綱元の長子。（右田毛利広政はこの年22才）。 ○『徂徠集』に収める荻生徂来「与左洸真」の第一書・第二書はこの年か。左洸真は佐々木縮往。第一書は岩波『日本思想大系・荻生徂徠』に収める。 ○安藤東野が佐々木縮往の画「太華図」及び詩「瑞鷓鴣」を見て「寄洸真佐先生辞並序」を作ったのはこの年か。（『東野遺稿』）。 ○毛利元次『徳山名勝』刊。（宝永3年か）
	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○2月29日、其角歿、47才。寛文元年生。 ○9月、伊藤仁斎『童子問』刊。 ○9月、荻生徂来、悦峰に唐音を習う。（悦峰は柳沢吉保の参禅の師。宝永4年5月万福寺の住職となる。黄檗8代。この年9月頃江戸に来る）。 ○伊藤東涯編著『古学先生碣銘行状』刊。 ○11月23日、富士山大噴火。
宝 永 5 ・ 戊 子	防 長		<ul style="list-style-type: none"> ○3月15日、富士山噴火被害修補金7,388両を幕府に献ず。 ○6月6日、山県周南、徂来門を卒業して萩に帰る。2月か3月頃江戸発、途中京都に寄り伊藤東涯に会う。当時京都は大火の後であった。（徂来宛和文書状による）。 ○荻生徂来「次公字敍贈行」（『徂徠集』巻十。次公とは山県周南のこと）。 ○荻生徂来「与泉雲洞」第一書（『徂徠集』巻二十七。雲洞は山県良斎のこと）。 ○荻生徂来「与都三近」（『徂徠集』巻二十七。三近は宇都宮遯庵のこと）。

年	区分	記	事
宝 永 5 ・ 戊 子	防 長	<p>○毛利元次序『塩鉄論』刊。宝永5年伊藤東涯跋。東涯の校及び訓点。 ○伊藤東涯「棲息堂坐右箴」を毛利元次の需めに応じて作る。</p>	
	参 考	<p>○3月12日、湯浅常山生。～天明元年（1781）。 ○5月、貝原益軒『大和本草』成る。 ○8月24日、伊藤坦庵歿、86才。 ○8月28日、シドチ、屋久島に到着。 ○秋、岡島冠山、大坂に赴く。 ○毛利貞斎『訓蒙助語辞諺解大成』刊。 ○12月24日、関孝和歿、67才。</p>	
宝 永 6 ・ 己 丑	防 長	<p>○3月1日、毛利綱元歿、60才。長府藩主。歌人。 ○春、小倉尚斎出府（山県周南より荻生徂来宛書状による）。林鳳岡の門に入る。 ○7月29日、悦山歿、81才。長府覚苑寺開山。 ○滝鶴台生。～安永2年（1773）。 ○雲谷等瑠隠居し、長男等鶴嗣ぐ。 ○山県良斎「復荻生先生」（『周南先生文集』巻十）。山県周南の代作。宇都宮遯庵の死を報じている。 ○荻生徂来「与県次公（第一書）」（『徂徠集』巻二十一）。周南は師徂来の肺患の養生の為に猪・鹿肉を桶につめて江戸に送った。それは在府中の坂時存によって徂来へ届けられた。それらの事はこの徂来の書牘や周南より徂来宛の書状によって知られる。） ○『徳山雑吟』刊。漢詩・和歌集。毛利元次以下の作品。宝永7年の林義端の跋がある。（この書を宝永6年刊とするのは『山口県文化史年表』による）。宝永7年刊か。</p>	

年	区分	記	事
宝永6・己丑	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月10日、將軍徳川綱吉歿、64才。 ○1月、新井白石、將軍徳川家宣の政治顧問の地位に就く。 ○6月3日、柳沢吉保隠居する。 ○8月カ、荻生徂来(44才)、江戸日本橋茅場町に私宅を構える。(護園の由来)。 ○11月、新井白石、シドチを訊問。 ○熊沢蕃山『集義外書』刊。16巻。 	
宝永7	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○1月カ、右田毛利広政、国元加判役となる。(或は前年12月か) ○山県良斎「復荻生先生(第二書)」(『周南文集』巻十)この年か。周南の代作。 ○安藤東野「与県次公(第二書)」(『東野遺稿』下)。東野が肺患養生の為に養父安藤氏宅に移ったと報じている。 ○毛利元次『徳山雑吟』刊。(岩波『国書総目録』による。宝永6年の項参照)。 ○12月17日、国重三郎兵衛政恒歿、72才。又は73才。『温故私記』の著者。 	
庚寅	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、安藤東野、柳沢家を致仕する。(平石直昭『荻生徂徠年譜考』。徂来及びその周辺者の記事年時は主として本書による)。 ○3月21日、中院通茂歿、80才。堂上歌人。毛利綱元の師(和智東郊『東郊座右記』による)。 ○服部南郭、この年荻生徂来に入門か。(平石直昭『荻生徂徠年譜考』)。 ○岡島冠山、上方より江戸に帰る。 ○伊藤東涯『経史博論』成稿。元文2年(1737)刊。 ○12月、江戸大火。 	
宝正徳8元	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○春、亀谷小兵衛『授時曆診解』刊。毛利元次序。 ○8月23日、藩主吉元、朝鮮信使饗応の為に長府に着す。 ○8月29日、朝鮮信使赤間関着。同夜阿弥陀寺にて饗応。藩の責任者は右田毛利広政。山県周南、藩命により赤間関に赴き筆談詩文唱酬を行う。周南は春以来病気となり中村玄与の薬を服用していたが、恢復しないまま赤間関に出張した(周南より徂来宛の書状による)。 	

年	区分	記	事
宝正 永徳 8元	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○9月1日、吉元長府発、3日萩帰城。 ○9月3日、朝鮮信使赤間関発。同日上の関泊。(10月18日、京都東本願寺着)。 ○小倉尚斎、江戸にて朝鮮信使一行の学士と詩文応酬。 ○荻生徂来「与県雲洞(第二書)」(『徂徠集』卷二十七)。徂来は、自己の学者としての方向を吐露している。 ○荻生徂来「与県次公(第二書)」(『徂徠集』卷二十一)。周南が、幕府新政の機運に乗じて先生も政治的に活躍されてはどうかとすすめてきたのに対し、その気のないことを伝えている。 ○荻生徂来「与県次公(第三書)」(『徂徠集』卷二十一)。周南が伊藤東涯に“納交”したいと伝えたのに対し、快く許可している。 ○10月20日、荻生徂来「与県次公(第四書)」(『徂徠集』卷二十一)。 ○12月1日、荻生徂来「与県次公(第五書)」(『徂徠集』卷二十一)。安藤東野が上洛しようとしたが、金が無いので中止したことを伝えている。 ○安藤東野「与次公(第二書)」(『東野遺稿下)。文章について周南と論争。 	
・ 辛 卯	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○2月7日、幕府、新井白石の建議により朝鮮使節の待遇を改める。 ○3月25日、室鳩巢・三宅観瀾、幕府の儒官となる。 ○9月、入江若水、朝鮮使節と詩文酬唱。 ○10月、荻生徂来、中国語学習会「訳社」を始める。講師岡島冠山。(『徂徠集』卷十八に「訳社約」を収める)。 ○太宰春台(32才)、荻生徂来に入門。(湯浅常山『文会雜記』によれば、春台入門時に徂来『学則』第一則は出来ていたという)。 ○荻生徂来『訳文筌蹄』刊。漢和辞典というべきもの。「訳文筌蹄題言十則」はこの年成るか(吉川幸次郎「徂徠学案」による)。岩波『日本文学大辞典』は『訳文筌蹄』刊を正徳4~5年とする。 ○服部南郭、この年荻生徂来に入門か(日野竜夫「文人の成立」)。 ○中井翫庵、三宅石庵の門に入る。 ○5月8日、林義端九成歿。(書肆名は林文会堂。伊藤仁斎の弟子)。

(4/25)

正徳元(1711)～同2(1712)

年	区分	記	事
宝 永 8 元	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○『鶏林唱和集』刊。木下順庵門下生を主とした朝鮮使節との唱和集。(正徳2年にも刊)。 ○『朱子文集』(『晦庵先生朱文公文集』)和刻刊。浅見綱斎校点。明の嘉靖刊本を原とする。正徳板。 ○『佩文韻府』(清康熙帝勅選)成る。(漢詩作成語彙集といったもの)。
正 徳 2 ・ 壬 辰	防 長		<ul style="list-style-type: none"> ○1月21日、掃国の朝鮮信使赤間関着。毛利広政饗応の為出張。山県周南、藩命により赤間関に赴き詩文応酬、文名を挙げる。(信使往還両度の周南の詩文を含む徂来門下の応酬詩文は『問槎畸賞』として刊行)。 ○雲谷等恕、家督を等全に譲り隠居。 ○12月、穴道玄蕃就晴、当職を退く。 ○『陰徳太平記』刊。(『通俗日本全史』に収まる)。
	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○山田麟嶼生。～享保20年(1735)。 ○9月、伊藤仁斎『論語古義』刊。 ○10月14日、將軍徳川家宣歿、51才。 ○安藤東野、増上寺門前駒込白山で開塾(白賁書屋)、繁昌す。 ○『問槎畸賞』刊。(室鳩巢『鳩巢小説』参照。この書の刊行をめぐる当時の知識人間の雰囲気わかる)。 ○荻生徂来「題問槎篇首」(『徂徠集』巻十九)。 ○荻生徂来「広陵問槎録序」(『徂徠集』巻八)。 ○荻生徂来『藪園十筆』の第七筆成る。 ○『問槎二種』(『問槎畸賞』及び『広陵問槎録』より成る)刊。 ○松室松峽、伊藤東涯に入門。 ○新井白石『読史余論』成る。白石56才。この書は享保8年頃より世に流布す。 ○王陽明『伝習録』和刻刊。三輪執斎標註。(『伝習録』は慶安3年(1650)和刻既刊)。

年	区分	記	事
正徳3・癸巳	防	○3月、藩財政困難により半知を令す。藩負債銀5万貫目。 ○和智東郊（11才）、世子毛利宗元の小姓となる。 ○荻生徂来「与県次公（第六書）」（『徂徠集』巻二十一）。	○宇都宮遜庵『遜庵詩集』刊。野々宮恕方編。宇都宮圭斎序。 ○11月、江戸浅草鳥越の長州藩邸焼失。
	参考	○1月或は2月、田中桐江、同僚を切って柳沢藩邸を逃亡する。 ○9月、荻生徂来、佐々立慶女と再婚。 ○山井崑崙、荻生徂来に入門。 ○『大明一統志』和刻刊。陰山東門点。	
正徳4・甲午	防	○6月朔日、毛利広政、江戸加判役となる。 ○小田村鄭山（12才）、三田尻より萩に出て山県周南に入門。（山根華陽「鄭山田君墓碣」『華陽先生文集』巻八）。	○荻生徂来「与県次公」（『徂徠集拾遺』）。
	長	○この年始めは半知を令したが、藩士困窮の為に1/4を免除し、高百石につき現米5石宛を返す。米価高値になったことによる。	
正徳4・甲午	参	○1月、安藤東野「護園随筆序」。 ○1月、荻生徂来『護園随筆』5巻刊。（その第五巻は「文戒」で、初稿名は「文野」）。徂来はまだこの書では朱子学に立っていて、伊藤仁斎を攻撃している。後に徂来はこの書を未熟の時の著作として否定する（『徂徠先生答問書』下）。	○5月16日、幕府、新井白石の建議により正徳金銀改鑄発令。 ○荻生徂来、牛込への転居はこの年か。 ○貝原益軒『大疑録』成る。朱子学への疑念を述べる。
	考	○8月27日、貝原益軒歿、85才。寛永7年（1630）生。 ○10月、荻生徂来「国思靖遺稿序」（『徂徠集』巻八）。 ○10月、荻生徂来、『憲廟実録』（憲廟は徳川綱吉を指す）完成の功により百石加増されて禄五百石となる。 ○11月2日、柳沢吉保歿、57才。万治元年（1658）生。 ○12月カ、雨森芳洲、子息顕允を荻生徂来に入門させる。（顕允は翌年3月、父芳洲の意志で徂来門を退き対島に帰る。当時芳洲は江戸に来	

年	区分	記	事
正徳4・甲午	参考	て往来・中野撫謙・岡島冠山等と交遊。 ○穂積以貫、伊藤東涯に入門。 ○伊藤仁斎『大学定本』・『中庸發揮』刊。この刊本には伊藤東涯の補訂が加わる。 ○松崎祐之編『唐宋名家史論奇鈔』刊。 ○『唐王右丞詩集』和刻刊。王右丞は王維のこと。	
正徳5・乙未	防長	○3月、荻生往来「与県次公(第七書)」(『徂徠集』巻二十一)。往来は『護園随筆』を周南に贈り、服部南郭・平野金華の入門を報じている。 ○山県周南「答徂徠先生」(『周南先生文集』巻十)はこの年か。 ○荻生往来「送長藩医仲邨玄与序」(『徂徠集』巻十)はこの年か。	
	参考	○1月、荻生往来『訳文筌蹄』初編6巻6冊刊。語学書。後編3巻は寛政8年(1796)刊。後編を往来著とするのは疑問とされている。(宝永8年・正徳元年の記事参考)。 ○荻生往来「送雨森顕允序」(『徂徠集』巻十)。 ○3月、往来50歳の賀宴が牛込の往来宅で開かれる。 ○水戸藩彰考館総裁大井貞広(松隣)、藩主綱條の名で「大日本史序」を作る。『大日本史』紀伝脱稿し享保5年幕府に献ず。志表の編修は困難を極め、明治39年に至って『大日本史』全402巻完成す。 ○井沢蟠竜子『広益俗説弁』成る。 ○『賈浪仙長江集』和刻刊。賈浪仙は唐の賈島。	
正徳6(6/22)・享保元 丙申	防長	○1月7日、山県周南、林鳳岡の宅において七言絶句の漢詩(賦庭樹発春輝)を賦したのはこの年か。或いは享保13年か。吉田樟堂文庫『山県家文書』(山口県文書館)には享保申年作と記す。この年1月はまだ正徳である。享保13年にしても藩主は萩に居り、周南が江戸で越年したとも考えにくい。(詩は『周南先生文集』巻四にある)。 ○1月20日、雲谷等有歿、57才。 ○4月11日、朝枝玖珂(毅齋)、上京して伊藤東涯に入門。 ○4月、二代目鳥田智庵(貫通)、上京して外科医浅井周迪に学び、また松岡玄達に師事して本草学を学ぶ。享保2年萩に帰る。	

年	区分	記	事
正享 徳保 6元	防 長	○4月、徳山藩改易。藩主毛利元次、新庄藩主戸沢氏に預けらる。（江戸における元次の評判については、室鳩巢『鳩巢小説』参照）。 ○9月28日、坂時存、当役用所役となる。享保3年8月まで永田瀬兵衛政純と同役。 ○12月、山内広通は当役、桂広保は当職となる。	
	参 考	○5月1日、徳川吉宗、宗家相続。 ○入江若水、京都に移る。 ○蕪村生。～天明3年（1783）。 ○新井白石『古史通』成る。 ○人見友竹編『重鐫文家必用』刊。 ○伊藤東涯『助辞考』廣刻本刊。書肆柏屋勘右衛門。 ○岡島冠山『唐話纂要』5巻刊。高瀬学山序。この書は唐音学習書として有名になる。享保3年に6巻本で再刊。 ○『武将感状記』刊。武士の逸話集。	
享 保 2 ・ 丁 酉	防 長	○5月11日、山県周南、唐船追払い用務として赤間関に出張、同26日萩に帰る。（吉田樟堂文庫『山県家系譜』）。 ○9月、山県周南、藩主の侍読として参勤に従って出府。 ○11月、山県周南、林家へ入門。（前出『山県家系譜』）。 ○荻生徂来「与県次公（第八書）」（『徂徠集』巻二十一）。	
	参 考	○1月、江戸大火。 ○2月、生島春卿（後の陶山南涛）、伊藤東涯に入門。 ○春、肥後藩儒藪震庵、荻生徂来を訪問。 ○荻生徂来「与藪震庵（第一書）」（『徂徠集』巻二十三）。震庵の疑問に答えたもの。朱子学を批判し、徂来の学問的立場を述べる。「答屈景山」（『徂徠集』巻二十七）とともに重要。 ○7月、荻生徂来『弁道』脱稿か。末尾に“享保丁酉秋七月望物茂卿”とある。徂来52才。『弁道』は『弁名』とともに元文2年（1737）に刊行される。 ○9月下旬、安藤東野・太宰春台・山井崑崙、武蔵国久良岐郡弘明寺村に根本武夷を訪ね、湘南に遊ぶ。	

年	区分	記	事
	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○伊藤東涯『訓幼字義』成る。宝暦 9 年 (1759) 刊。 ○松井河楽『詩法要略』刊。初学者向きの作詩作法書。 ○この年、中国持ち渡り『皇清経解』を幕府購入す。
享 保 3	防 長		<ul style="list-style-type: none"> ○2月11日、周防国山代諸村(現玖珂郡及び都濃郡)百姓一揆起る。 ○2月23日、朝枝玖珂、伊藤蘭嶼と『周官』の研究を始める。(中村幸彦「古義堂の小説家達」『中村幸彦著述集』第7巻)。 ○4月、荻生徂来「贈長大夫右田君」(『徂徠集』巻十六)。長大夫右田君とは毛利広政。当時江戸加判役として藩主吉元に従って在江戸。広政が周南を介して道とは何か、政治とは何かを問うてきたのに答えたもの。 ○烏田智庵(30才)、江戸勤番として出府。享保5年まで在江戸。 ○永田瀬兵衛政純、御什書用係(毛利家古文書整理係)となる。彼によってまとめられたものは『大日本古文書家別第8巻毛利家文書』として東大史料編纂所より刊行。 ○小倉尚斎撰『唐詩趣』成る。尚斎自序及び雨森芳洲序。享保5年刊。 ○冬、山県周南、毛利広政に従って山口の酒造家松本家に宿る。(『周南文集』巻四)。 ○12月13日、朝枝玖珂、備後国福山藩儒官として福山に赴く伊藤梅宇に“送序”を贈る。
戊 戌	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○春、服部南郭(36才)、柳沢家を致仕して上野不忍池の側に住む。芙蓉館(日野龍夫「文人の成立」)。以後数年間生活困窮す。享保8年10月に火災に遭い、家財一切を失い山王町(現中央区銀座八丁目)に仮寓するが、そこも同9年1月30日に火災に遭い、富山町(現港区西久保広町)に移る。 ○荻生徂来、この年頃『論語微』成稿。刊行は元文5年(1740)。また『大学解』・『中庸解』に着手。この刊行は宝暦3年(1753)。 ○荻生徂来、宿病の肺病で一時危険状態になる。 ○12月、伊藤梅宇(東涯の弟)、備後福山藩に聘されて福山に赴く。

年	区分	記	事
享 保 4	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月2日、藩校明倫館開館。祭酒(学頭)小倉尚斎。尚斎は当時江戸に在り、帰国して出勤するまでの間、草場兵蔵(居敬)・佐々木源左衛門が学頭役を勤める。尚斎は7月22日に明倫館構内役屋敷に入る。 ○3月5日、小田村文助(鄭山。17才)選ばれて廟司役として明倫館に入学す。 ○3月、山県周南、参勤に従って出府。 ○山県周南、江戸にて小倉尚斎編『唐詩趣』に序す。(『稿本周南先生文集』巻五)。 ○八谷忠助(後の津田東陽)、明倫館に入学す。 ○6月15日、山根七郎左衛門(華陽。17才)、越氏塾より書物方として明倫館に入学。 ○8月18日、朝鮮信使赤間関に着。小倉尚斎・山根華陽等詩文応酬。(この時の応酬詩文は後に伊藤東涯序『両国唱和集』として刊行される)。 ○9月5日、朝枝玖珂、大坂で信使一行と詩文唱和(伊藤直斎等東涯門と共に)。 ○11月19日、毛利元次歿、49才。 ○山県周南「明倫館落成祭先聖告文」。 ○ 同上 「明倫館積菜祝文」。 	
	考	<ul style="list-style-type: none"> ○3月、伊藤東涯、松室松峽同伴、和泉国堺に赴く。 ○4月13日、安藤東野、肺患により歿、37才。 <ul style="list-style-type: none"> 〈山県周南“哭東壁二首”(『周南先生文集』巻四)、服部南郭“哭勝東壁十首”(『南郭先生文集初編』巻三) ○6月、平野金華、三河国刈谷藩に聘されて木曾街道を通り三河に赴く。6月15日、金華送別の宴開催。山県周南“東都送平子和之参州”(『周南先生文集』巻四)。 ○8月15日、佐藤直方歿、70才。慶安3年(1650)生。 ○服部南郭、不忍池より本郷に移る。 ○荻生徂来、肺患恢復にむかう。 ○冬、三浦竹溪、柳沢家を致仕。 ○11月、荻生徂来、「旧事本紀解序」(『徂徠集』巻八)。徂来が、聖人の道と日本の神道とをどのように考えていたかを知ることができる。山 	

年	区分	記	事
享保4	参考		<p>山県周南の『為学初問』冒頭の神道論に影響を与えたといえる。</p> <p>○穂積以貫『助語辞俗解』成る。</p> <p>○岡島冠山編『太平記演義』刊。『太平記』の白話訳。</p>
享保5	防長		<p>○山県周南、藩主に従って萩に帰る。</p> <p>○荻生徂来「与山次公」(『徂徠集拾遺』中の第一書)この年頃か。論語微・弁道・弁名を著わした意図を述べ、徂徠学の要点を伝えている。その内容や用語は、徂来が藪震庵に於てた書牘(『徂徠集』第二十三卷中の第七書)と同じ。</p> <p>○7月、藩主吉元、家臣に毛利家が発給した文書の写しの提出を命じ、『閩閩録』の編纂に着手。享保11年成就。</p> <p>○林東溟(11才)、明倫館に入学。</p> <p>○田坂瀧山生。～宝暦8年(1758)。</p> <p>○雲谷等直、山県周南に師事、家業である画業を廃して儒家として立つことを藩に願い出で許可を得、繁沢権兵衛規直(南塘)と改名。(繁沢豊城の養父)。</p> <p>○小倉尚斎編『唐詩趣』刊。</p> <p>○『両国唱和集』刊。伊藤東涯序。</p>
庚子	参考		<p>○5月、荻生徂来、赤城へ移転。神楽坂の付近。翌6年類焼。</p> <p>○秋、服部南郭、本郷より増上寺門前三島町へ移転。</p> <p>○9月より山井崑崙・根本武夷による足利学校での『七経孟子攷文』の仕事始まる。享保8年10月完了。</p> <p>○10月、伊藤仁斎『孟子古義』刊。</p> <p>○『康熙字典』渡来するか。山県周南『唐本目錄』による。(中村幸彦「都賀庭鐘の中国趣味」参照)。同字典は1716年に完成したものの。 “享保五年辛丑秋閏七月、京尹松平伊賀守上京、東公以伊賀守為使、献字典及十三経註疏於朝廷、此時字典二部始渡。” 辛丑は享保6年になり、7月に閏月がある。享保6年渡来か。</p> <p>○荻生徂来編『唐後詩』刊。明古文辞派の総詩集。服部南郭序。原題『唐詩典刑』。徂来はこれをもって詩の典範を示そうとしたのである。</p> <p>○幕府、洋書輸入の禁を緩める。</p>

年	区分	記	事
享保6・辛丑	防	<ul style="list-style-type: none"> ○津田東陽・山根華陽、京都に遊学し伊藤東涯に入門。 ○小倉実廉(鹿門)、越子塾より明倫館に入学する。 ○仲子岐陽生。～明和2年(1765)。 <ul style="list-style-type: none"> 〈山根華陽「岐陽仲子君墓碣」〉 ○4月23日(或は8月24日)道明恵極歿、90才。寛永9年(1632)生。 ○和智東郊、世子毛利宗元の死(4月)により荻に帰り、3年間喪に服す。 ○閏7月、山県周南宛伊藤東涯書状はこの年か。(吉田樟堂文庫『山県家文書』)。半紙十帖を土産として貰ったことへの礼状。 ○10月、山県周南宛伊藤東涯書状この年か。(吉田樟堂文庫前掲書)。津田東陽・山根華陽の勉学振りを伝え、佐々木縮往の絵を所望している。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○3月4日、荻生徂来、居宅類焼し市ヶ谷大住町に移転とするも、平石直昭『荻生徂徠年譜考』は、火事にあわなかったことを考證。 ○3月4日、太宰春台、居宅類焼。 ○荻生徂来、將軍吉宗から『六論衍議』の訓点を命じられる。 ○荻生徂来『太平策』この年の8～9月頃成るか。(平石直昭『荻生徂徠年譜考』)。 ○入江若水訳『通俗両国志』刊。『大宋中興通俗演義』の訳。 	
享保7・壬寅	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月3日、安部信貞歿、66才。連歌師。 ○滝鶴台(14才)、明倫館に入学。 ○雲谷等恕歿、84才。 ○11月、熊毛郡平生の岩国屋長吉『周防国巡礼手引』刊。 ○山県周南「書吉斎漫録後」この年か。(『周南先生文集』巻九)。荻生徂来が伊藤仁斎を攻撃しているのに対し、仁斎を弁護している。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、荻生徂来、“御隠密御用”を命ぜられ、毎月三度有馬兵庫頭氏倫の邸へ出勤し、將軍の諮問にあずかる。有馬氏倫は御用取次を勤め、事実上の実力者であった。 ○4月、幕府、“流地禁止令”(田畑質流禁止)発令。質地騒動という大一揆が起こり、享保8年撤回。 	

年	区分	記	事
享保7 ・ 壬寅	参考		<ul style="list-style-type: none"> ○7月、幕府、大名に上ゲ米を課し参勤期間を半年とする。 ○12月、幕府、出版統制令発令。 ○伊藤竹里(東涯の弟)、久留米藩に仕う。 ○陶山南涛、再び伊藤東涯に入門。 ○荻生徂来「吉斎漫録跋」(『徂徠集拾遺』)。「吉斎漫録」は明の呉廷翰(蘇原)の著で、反朱子学的なその主気説は伊藤仁斎の学説形成に影響を与えたといわれる。徂来は、仁斎がこの書をひそかに持っていて、その説をあたかも自分の創見のように主張したのだとして仁斎を批難するのである。 ○鷹見爽鳩『詩筌』刊。荻生徂来跋。『唐詩品彙』中の初唐・盛唐・中唐の五言七言の律・絶の詩語を、天文・地理・時令等の項目に分類して平仄を附した語彙集。 ○『大明律』和刻刊。
享保8 ・ 癸卯	防長 参考		<ul style="list-style-type: none"> ○1月6日、奈古屋大夏の家類焼す。(『毛利十一代史』)。 ○3月、宮庄親輔『岩邑志』成る。 ○9月、山県周南、江戸の藩邸において「頌琴譜」を写し、その奥書に周南が徂来より箏を習ったことを記す。 ○10月4日(又は3日)、今井似閑歿、67才。似閑所蔵の国文学書多数を写し取り、明倫館に収める。元文4年頃までに明倫館に収まるか。いわゆる大黒屋本。 ○初代栗山孝庵、藩医となる。祿高80石。 ○虎溪歿。仙台の東昌寺住職。長門の人。 <ul style="list-style-type: none"> ○3月、黒田直邦(琴鶴丹公)、奏者番となり寺社奉行を兼ねる。 ○米価急下落。しかし諸物価高値。 ○この頃「地口附」流行する。その後幕府によって禁止。(曳尾庵南竹『我衣』)。

年	区分	記	事
享保9・甲辰	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、烏田智庵（36才）、漂着朝鮮人を護送して長崎に赴く。 ○津田東陽・山根華陽、伊藤東涯門を卒業して萩に帰り、明倫館に復す。 ○8月20日、宇都宮三的（圭斎）歿、48才。宇都宮遜庵の子。 ○9月、山根華陽、明倫館会頭役となる。 ○毛利家の系譜『江氏家譜』作成に着手。永田瀬兵衛・山県周南・徳田良方・安部和貞校訂。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○2月15日、幕府、物価引下令を発す。 ○3月、服部南郭「徂徠先生答問書序」。 ○春、板倉美仲（板倉復軒の子）、荻生徂来に入門。 ○春、平野金華、刈谷藩主に陪従して三河に赴く。（金華「遊高浜記」）。 ○5月、荻生徂来、『芥子園画伝』を將軍吉宗に献ず。 ○10月、宇野士朗（宇野明霞の弟）、京都より江戸に出て荻生徂来に入門。 ○12月、本多忠統（猗蘭侯）、奏者番となり寺社奉行を兼ねる。 ○12月、伊藤東涯「制度通序」。 ○山田麟嶼、幕府の儒官となる。13才。 ○服部南郭校『唐詩選』刊。小本1冊。（『唐詩選』は遅くとも寛永16年（1639）にもたらされていたという）。 ○大坂に懐徳堂開設。学主三宅石庵。 	
享保10・乙巳	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、山県周南、参勤に従って出府。10月帰国。 ○8月、山県周南、伊藤東涯に手紙を送り、毛利広政・山内広通の為に東涯の書を求める。（『稿本周南先生文集』）。 ○10月、山県周南、京都にて伊藤東涯に会う。 ○荻生徂来「泉先生八十序」（『徂徠集』巻九）。泉先生は山県良斎のこと。 ○小田村鄭山、江戸に出て荻生徂来に入門。 ○荻生徂来「答和君実書」（『徂徠集』巻二十五）。和君実は和智東郊。 	

年	区分	記	事
享保10・乙巳	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○5月4日、松崎観海生。 ~安永4年(1775)。 ○5月19日、新井白石歿、69才。明暦3年(1657)生。 ○5月、宇野士朗、江戸より京都へ帰る。 ○6月、本多忠統、若年寄となる。 ○10月3日、荻生徂来『徂徠先生答問書』中第三十五信。 ○10月5日、荻生徂来「南郭先生文集初編序」。 ○10月、篠崎東海、山田麟嶼・天野曾原を伊藤東涯に紹介する。両者東涯に入門。 ○服部南郭『南郭先生燈火書』成る。(日野龍夫「壺中の天」による)。 	<ul style="list-style-type: none"> 南郭の名を騙った偽書であるともいわれる。この書は享保19年の板行まで『南郭先生詩話』の書名で写本で流布していた。 ○岡島冠山「唐語使用序」。 ○岡島冠山『経学字海便覧』刊。『朱子語類』中の俗語の注釈書。
享保11・丙午	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、山県周南「送田子高奉太孺人遊上国序」(松江図書館蔵『護園詩文書纂』)。 ○4月、『閩閩録』成る。享保5年着手。 ○4月、飯田道瑠、岩国領内の菓草調査をする。 ○山県周南(40)、李攀竜の『滄溟先生文集』前後集を弟子達と共に写す。(吉田樟堂文庫『周南余音』)。 ○山県周南「谷翁八十寿序」(『護園詩文書纂』)。谷翁は津田東陽の父八谷通良。 ○山根華陽「八谷翁八十序」(『華陽先生文集』巻五)。 ○山根華陽「矢嶋翁伝」(『華陽先生文集』巻七)はこの年か。矢嶋翁は矢嶋半左衛門直之で、坂時存の父。 ○『防長両国物産絵図』成る。吉山常房画。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月15日、荻生徂来「七経孟子攷文叙」。 ○山井崑崙『七経孟子攷文』成る。 ○1月、伊藤東涯「唐訳便覧序」。 ○岡島冠山『唐訳便覧』・『唐音雅俗語類』刊。 ○石川大凡編『三家詩話』刊。(南宋の嚴羽『滄浪詩話』、明の徐禎卿 	

年	区分	記	事
享保11・丙午	参考	『談芸録』、王世懋『秋圃掃余』を収める。『滄浪詩話』は徂徠門流の詩人が特に珍重したもの。 ○原雙桂、伊藤東涯に入門。 ○大坂の懷徳堂、官許の学問所となる。中井甕庵が中心となり大島古心・三輪執斎等が援助する。	
享保12	防長	○閏1月7日、狩野安雪（佐藤永閑）歿、80才。岩国の狩野派画家。 ○7月15日（中元）、山県周南、荻生徂来・服部南郭・平野金華等十余人を招待して隅田川に舟をうかべて遊ぶ。（『周南先生文集』巻一“墨水泛舟作并序”及び巻三の七言律詩。また服部南郭“県次公泛舟宴徂徠先生同賦得秋字”『南郭先生文集二編』巻四）。周南は9月に江戸を発して萩に帰る。 ○9月27日、河野養哲歿、67才。養哲は越氏塾を創設し、山根華陽・小田村郵山・小倉鹿門等を育てる。養哲死後の越氏塾は郷校として經費を公費一郡方負担とした。 〈山県周南「河野養哲先生伝」『周南先生文集』巻八〉 ○朝枝玖珂、伊藤東涯門から岩国へ帰る。玖珂は黄檗僧大通等に華音を学んだ。	
・ 丁未	参考	○1月、荻生徂来『学則』附録共2冊刊。三浦義賢（平子彬）・伊藤元啓校訂。徂来の書牘五通が附されている。 ○4月18日、荻生徂来、始めて將軍吉宗に謁す。 ○5月、荻生徂来『徂徠先生答問書』刊。根本武夷編。 ○9月、服部南郭『南郭先生文集初編』刊。正徳初年から享保10年頃までの作品を収める。 ○荻生徂来『政談』この年成るか。（岩波『日本思想大系荻生徂徠』辻達也解説）。 ○岡白駒『水滸全伝訳解』成る。 ○『護園録稿』刊。（岩波『国書総目録』による。享保16年の項参照。）	

年	区分	記	事
享保13 ・ 戊申	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○5月21日、山県治右衛門良斎、明倫館教授を免ぜられる。 ○7月4日、山県良斎歿、81才。 <滝鶴台「良斎先生輓歌」(『鶴台遺稿』巻一)> ○小田村酈山、江戸から萩に帰り、明倫館都講となる。 ○7月、小田村酈山、明倫館会頭役となる。会頭役は山根華陽と共に2人となる。 ○10月2日、坂時存、当役桂広保と衝突して手元役を辞す。 ○伊藤好義斎歿。長門の人。伊藤仁斎門。 	
	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月2日、岡島冠山歿、55才。延宝2年(1674)生。 ○1月19日、荻生徂来歿、63才。江戸市ヶ谷大住町中の町の家にて死去。寛文6年(1666)生。 <滝鶴台「遥哭徂徠先生二首」(『鶴台遺稿』巻一)> ○1月28日、山井崑崙歿、39才。 ○谷口元淡(谷大雅)『徂徠学則附録問答』成る。 ○太宰春台『倭読要領』刊。 ○平野金華『金華稿刪』刊。守山藩主松平頼寛輯。 ○岡島冠山訳カ『忠義水滸伝』刊。李卓吾百回本による。 ○『両巴卮言』刊。吉原案内記。最初の漢文戯作。 ○石川大凡輯『唐詩礎』刊。唐詩の語として擬唐詩に常用されている用語を集めたもの。 ○三井高房『町人考見録』成る。 	
享保14 ・ 己酉	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、山県周南・坂時存等、萩で荻生徂来一周忌の祭奠を行う。 <周南「祭徂徠先生文」(『周南先生文集』巻九)> ○4月、繁沢規直、明倫館教授となる。 ○10月、清末藩再置。 	
	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○3月、太宰春台『経済録』刊。自序。 ○服部南郭「滄溟尺牘序」。刊行は享保15年。 ○伊藤東涯「秉燭譚序」。刊行は宝暦13年。 ○『唐詩正声』和刻刊。 	

年	区分	記	事
享保15・庚戌	防長	○和智東郊（九郎左衛門）、武具方検使として出仕。 ○8月21日、長沼玄珍歿。徳山藩の儒・医家。『徳山府記』の作者。 ○12月、滝鶴台、明倫館退館。（萩市郷土博物館安藤文庫「滝弥八略系及伝書」）。	
	参考	○中井竹山生。～享和4年（1804）。中井髻庵の長子。 ○5月7日、本居宣長生。～享和元年（1801）。 ○中井髻庵、懐徳堂第二代学主となる。 ○6月、老中水野和泉守忠之退役。 ○9月、『滄溟尺牘』刊。滄溟は明の古文辞派の李攀竜。この書は徂徠学派によく読まれた。 ○細井広沢編『新鐫詩牌譜』刊。享保5年岡島冠山序。 ○冬、服部南郭、赤羽（現港区東麻布附近）に居住する。 ○『唐詩品彙』和刻刊。明の高樞編。徂徠学派に重んぜられた。元文3年にも刊行さる。	
享保16・辛亥	防長	○3月、滝鶴台（23才）、山県周南の斡旋により右田毛利広政に仕え、時観園の教授となる。切銭銀300目、米3石6斗（新枿）給与。実際の赴任は享保19年。 ○3月、山県周南、参勤に従って出府。 ○3月、滝鶴台、江戸に遊学し、服部南郭に師事。 ○4月15日、江戸大火。桜田・新橋長州藩邸焼失。 ○9月13日、藩主吉元歿、55才。宗広襲封。 ○林東溟、郷国を捨てて大坂に出る。（岩波『日本古典文学大辞典』解説）。 ○栗山孝庵（2代目）生。～寛政3年（1791）。	
	参考	○五井蘭洲、津軽藩に出仕。元文4年（1739）致仕する。 ○『護園録稿』刊。徂徠一門の詩集。この編纂に太宰春台は除外された。春台はこの詩集に痛烈な批判を加え、服部南郭はそれに反論し、両者の往復書簡は当時から有名。『護園録稿』下巻に山県周南・滝鶴台等の詩が載せられている。（江村北海『授業編』は周南及び小田村郎山の詩を取上げて、その唐詩模倣の態度を批難している）。	

年	区分	記 事
享保16・辛亥	参考	<p>○6月、山井崑崙・根本武夷『七経孟子攷文補遺』刊。荻生観（北溪。祖来の弟）補。足利学校に所蔵される宋版を用いて校定を行ったもの。中国では佚亡した書であった。山井崑崙・根本武夷によって享保11年に成った『七経孟子攷文』は伊予西条藩主松平頼渡に献ぜられ、享保13年に頼渡から將軍吉宗に献上。吉宗は再度の校定を荻生北溪に命じ、享保15年12月に完成。この書は中国に伝えられて、乾隆年間に刊行された。</p> <p>○岡白駒訓『文心雕竜』和刻刊。</p>
享保17	防長	<p>○2月14日、永富独嘯庵生。～明和3年(1766)。</p> <p>○3月21日、坂時存編『本朝官位相当ノ図・中華歴代帝王僭偽ノ図』の出版許可（『毛利十一代史』）。 〈服部南郭「為坂子祺跋歴代帝王図」（『南郭文集二編』巻八）。〉</p> <p>○4月、滝鶴台、江戸より京都に遊学。芥川丹丘との交友がひらけ、林東溟と再開する。</p> <p>○井士良（窪井鶴汀）宛滝鶴台書牘（第二書）この年か（『鶴台遺稿』巻九）。鶴汀の明倫館教員入りが適わなかったことを慰撫、大坂で鶴汀の父に会ったことを報じる。</p> <p>○秋、蝗による被害により領内凶作、減損高28万5千石。（西日本全般にわたるもの。享保の大飢饉）。</p>
壬子	参考	<p>○1月、太宰春台「聖学問答序」。『聖学問答』は享保21年刊。</p> <p>○6月1日、林鳳岡歿、81才。</p> <p>○7月、黒田直邦、西丸老中となる。</p> <p>○7月23日、平野金華歿、45才。元禄元年(1688)生。</p> <p>○9月、服部南郭「絶句解序」。</p> <p>○荻生祖来『絶句解』刊。明古文辞派の詩の注釈書。『唐後詩』に選んだ李攀竜・王世貞の詩のうち絶句のみを抜き出して簡単な解説を施した。五言絶句百首解と滄溟七絶三百首解から成る。</p> <p>○室鳩巢『駿台雑話』成る。寛延3年(1750)刊。</p> <p>○太宰春台、『古文孝経孔子伝』（孔安国注）を、日本にのみ伝わる古注として刊行。</p> <p>○『郁離子』和刻刊。</p>

年	区分	記	事
享保18・癸丑	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○凶荒の為、1月5日より当職毛利広政藩内巡視。悪疫流行、餓死者多数。1月までの飢人17万7千余人。 ○3月27日、毛利広政歿、47才。(『周南文集』巻八「海北君毛利文子神道碑」)。 ○春、滝鶴台「南郭先生燈下書序」(『鶴台遺稿』巻五)。(『先哲叢談』参照)。 ○4月、滝鶴台、京都より萩へ帰る。翌19年春、佐波郡右田へ引越す。 ○滝鶴台、雲洞上人宛書牘(第三書。『鶴台遺稿』巻十)。帰国後の状況を報ず。 ○秋、坂時存、江戸より萩に帰る。 ○冬、津田東陽、侍読となり出府。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月25日、江戸最初の打毀し起る。(高間騒動)。 ○荻生徂来編『絶句解拾遺』刊。 ○『唐詩品彙』(五・七言絶句部)和刻刊。 ○『王昌齡集』和刻刊。 	
享保19・甲寅	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○3月14日、内田溪鷗子歿。岩国の雲谷派画家。 ○3月16日、雲谷等鶴、雲谷本家を雲谷等澄(後等徴)に譲って隠居し、その子より画業を廃して平士となる。禄250石。 ○春、滝鶴台(26才)、萩より佐波郡右田へ移居す。この年、世良たけと結婚。(松崎慊堂『慊堂日暦』(平凡社刊東洋文庫)に“その妻は奇醜なれども賢。薩の赤崎源助及び太室の内子と、三賢の名あり。これみな平洲の語るところと云う。”とある。文政7年10月27日の条)。 ○6月18日、佐々木縮往歿、86才。 ○6月、公卿小倉宜季、山県周南に“寄周南詞宗”と題した漢詩二首を贈ってくる。 ○8月15日、小倉尚斎を囲んで山根華陽宅で小集を催し、小田村郵山等が会した(『瀾山詩集』)。 ○9月7日、亀谷小兵衛歿、74才。徳山の和算家。『授時曆諺解』の著がある。 ○9月、平井温故歿、長府藩士。『豊府志略』の著がある。 ○山根華陽、寺社組に編入される。 	

年	区分	記	事
享保19・甲寅	参考		<ul style="list-style-type: none"> ○2月、服部南郭『文筌小言』刊。漢語の助辞について述べたもの。 ○6月25日カ、上田秋成生。～文化6年(1809)。 ○8月14日、室鳩巢歿、77才。万治元年(1658)生。 ○服部南郭『南郭先生燈下書』刊。滝鶴台序。 ○伊藤東涯『用字格』刊。(既に正徳元年に無断出版されていた)。
享保20・乙卯	防長		<ul style="list-style-type: none"> ○3月29日、田中蘆城歿、57才。(近藤清石『防長人物誌』等によれば田中蘆城は片山鳳翽に授業したとあり、また延享5年(1748)には朝鮮使節と詩文の唱酬をしており(『長門戊辰問槎』)、それならばこの歿年に疑念が生じる)。 ○5月11日、烏田智庵・仁保玄珠、防長物産改役となる。幕府から防長両国の物産の調査報告を求められたことから設けられたもので、初め岡部市郎兵衛が充てられていた。智庵と玄珠は元文5年(1740)までその職を勤め、『長防産物名寄』をまとめる。 ○8月、林東漢「徂徠先生詩文国字牘序」。徂徠名の偽書刊行にかかわったとして東漢一生の汚点となる。 ○9月22日、梅月堂(香川)宣阿歿、78才。(90または89と各説がある)。 ○多田信臣「誦扶桑見聞私記議」(毛利家文庫15文武8)。『扶桑見聞私記』は大江広元の日記という体裁で、別名『大江広元日記』ともいう。広元日記というのでその真偽が毛利家で問題となり、幕府にまで持ち出されて結局偽書と認定され、禁書処分となる。須磨不音が大江広元の名を利用して創作した偽書。 ○須佐益田氏、須佐に育英館創設。
	参考		<ul style="list-style-type: none"> ○4月、鷹見爽鳩歿、46才。 ○山田麟嶼歿、24才。 ○田中大観歿、26才。 ○12月23日、細井広沢歿、78才。万治元年(1658)生。 ○伊藤東涯『古今学变』成る。寛延3年(1750)刊。 ○入江南溟『唐詩句解』刊。 ○平野金華校『劉向新序』刊。 ○祇徳『俳諧句選』を著し、俳諧における古学を提唱。

年	区分	記	事
享元 保文 21元 (4/28) ・ 丙辰	防 長		○山根華陽・小田村鄭山、手廻組に編入される。
	参 考		○3月、『徂徠先生詩文国字牘』刊。(『少年必読日本文庫』第三編に収まる)。本書は徂來の名を騙った偽書。大坂菅生堂河内屋宇兵衛梓。菅生堂は延享元年(1744)にも太宰春台の『斥非』を林東溟の校訂で無断出版し、問題を起こしている。 ○荻生徂來『南留別志』刊。 ○太宰春台『聖学問答』刊。 ○同 「標箋孔子家語序」。 ○『晏子春秋』和刻刊。
元文 2・ 丁巳	防 長		○2月5日、草場居敬歿、59才。 ○山県周南、参勤に従って出府。 ○6月、烏田智庵『長防物産名寄』(別名『両国本草』)成る。 ○11月2日、小倉尚斎歿、61才。延宝5年(1677)生。 <滝鶴台、山根華陽宛書牘(『鶴台遺稿』巻九の第一書)> <滝鶴台、小倉彦平(鹿門)宛書牘(『鶴台遺稿』巻九)> <滝鶴台「故本府提学尚斎倉先生挽詞三首」(『鶴台遺稿』巻三)> <和智東郊「倉彦平喪父就東山廬矣賦慰」(『東郊文集』巻三)> <山根華陽「長肅小倉先生墓碣」(『華陽文集』巻八)> ○11月18日、山県周南、明倫館学頭を命ぜられ、江戸より萩に帰る。
	参 考		○荻生徂來『弁道』・『弁名』刊。(次いで元文5年・寛政元年刊。寛政元年板は元文5年板の誤りが訂正されている)。 ○荻生徂來『論語徴』刊。 ○服部南郭『南郭先生文集二編』刊。享保9年から元文2年までの作品を収める。 ○伊藤東涯『経史博論』刊。宝永7年(1710)成稿。 ○12月10日、安積澹泊歿、82才。明暦2年(1656)生。

年	区分	記	事
元 文 3 ・ 戊 午	防	○1月、山県周南宛小倉宜季書状。周南の詩文のほか滝鶴台の序のある「南郭先生燈下書」を求めており、和智東郊から律詩三首が送られてきたと述べている。また元文2年4月に周南宛書状を京都留守居役平川氏に託したと述べている。 ○1月、岩国領『享保増補村記』成る。 ○2月、山県周南「(明倫館)学館功令」(『周南文集』巻九)。“昔者我徂徠先生年方四十、始修古文辞、蓋十年、作辨道。先生之於文也、可見焉耳。”の文がある。この功令は長州藩における徂徠学の勝利宣言とも読める。 ○6月21日、和智東郊、遠近方となる。 ○8月10日、品川勿所歿、51才。須佐益田家の儒臣。伊藤東涯門。 ○11月、『新裁軍記』編纂事業始まる。山県周南、校訂を命ぜられる。『新裁軍記』は毛利元就一代記。永田瀬兵衛が編纂責任者。山根華陽・小田村郷山・小倉鹿門編纂手子。寛保元年(1741)成就。 ○滝鶴台「三之逕序」。本書は宝暦6年(1756)刊。『さめ草』と題したのもある(山口県文書館蔵)。ただ『ねさめ草』の序文は長周叢書所収の『三之逕』序文と文章に相違がある。 ○草場允文(草場居敬の養子)家督。	
	参 考	○荻生徂来『訓訳示蒙』が徂来門下には無断で出版される。 ○戸田旭山『非業選』刊。林東溟序。 ○『唐詩品彙』和刻再刊。	
元 文 4 ・ 己 未	防 長	○1月26日、小田村文助(郷山)、赤間関八幡方の用務で赤間関へ出張。 ○2月、『明詩礎』刊。林東溟序及び校。東溟門下の田雲峰・原五嶽編。(林東溟関係記事は、主として多治比郁夫「林東溟」による)。 ○山根華陽「坂翁六十寿序」(『華陽文集』巻五)。坂翁は坂時存のこと。 ○山根華陽、大組に編入される。 ○7月9日、大楽朴水歿、74才。狩野派画家。 ○山県周南「樵漁余適集序」はこの年か(『周南文集』巻五)。『樵漁余適集』は田中桐江の著、寛保元年(1741)刊。 ○大黒屋本(今井似閑所持本の写本)が明倫館へ納入し終わったのはこの年か。	

年	区分	記	事
元文4・己未	参 考		<p>○五井蘭洲、津軽藩を致仕して大坂に帰り懐徳堂の教授となる。</p> <p>○竜草廬、京都に開塾し(『先哲叢談』参照)詩社幽蘭社を結成。林東溟・芥川丹丘・木村蓬萊・武田梅竜・清田僭叟等参加。</p> <p>○太宰春台『論語古訓』刊。</p> <p>○木下蘭阜『玉壺詩稿』刊。</p> <p>○湯浅常山『常山紀談』刊。</p> <p>○石田梅岩『都鄙問答』刊。</p> <p>○服部南郭校訂『郭注莊子』和刻刊。郭之玄による『莊子』の注釈。徂徠学派は林希逸注『老子莊子庸斎口義』を排斥し、『郭注莊子』を重んじた。</p>
元文5・庚申	防 長		<p>○2月、林東溟が訓点を施した『痘疹大成』を大坂書肆柏屋清右衛門が板行願いを出したが、未刊のままとなる。理由不明。</p> <p>○山県周南「与服子遷」(『周南文集』巻十、服部南郭宛第一書)。南郭が次男惟恭を3月17日に喪ったことへの哀悼文。</p> <p>○山県周南「与富春叟」(『周南文集』巻十の富春叟宛第二書)。富春叟は田中桐江。周南は桐江からその文集への序文を求められていたが、それへの返事。文中周南は今年54才になると言い、長州藩では学問に従事する者はみな徂徠先生の学を奉じ、一人も旧学(朱子学)を主張する者はいない。自分は学問の上では何もすることはなかったが、このような状態になったことを楽しみとして老いの至るのを忘れていると述べている。</p> <p>○山県周南「周南先生演説書」(京都府図書館蔵『周南先生遺書』)はこの年か。当職山内広通へ提出した意見書。</p> <p>○小田村鄭山「永田政府七十寿序」(『鄭山小田村先生集』)はこの年か。</p> <p>○無隠道費「無孔笛序」成る。『無孔笛』は延享元年(1744)刊。</p> <p>○滝鶴台、禄高30石となる。(下地15石、浮米15石)。</p> <p>○片山鳳翺生。～文化5年(1808)。</p>
	参 考		<p>○荻生徂来『徂徠集』30巻刊。</p> <p>○『関尹子』和刻刊。</p>

年	区分	記	事
寛保2・壬戌	参考		<p>○9月、『弁州尺牘』刊。越有原(首野有原か)校。弁州は明の王世貞。</p> <p>○服部南郭、麻布森元町に居所を移す。</p> <p>○服部南郭「十八史略序」。</p> <p>○6月26日、田中桐江(富春山人)歿、75才。</p>
寛保3・癸亥	防長		<p>○3月11日、足立寿軒、上洛して山脇東洋に入門。</p> <p>○3月、幕府からの課役の利根川堤防修築工事完工。坂時存の発議により、成功の記念碑を建立して、その撰文を服部南郭に依頼する。山県周南、南郭へ依頼の書牘を書く(『周南文集』巻十「与服子遷」第二書)。なお『遺徳談林』及び坂時存『遺塵抄』参照。</p> <p>○4月15日付小倉宜季より山県周南宛書状(吉田樟堂文庫『山県家文書』)。宜季は、当世の巨儒名僧の詩華集を編みたいので周南の詩を求めたいと依頼。既に雨森芳洲や林祭酒のものは届いており、服部南郭にも申し込んでいると述べる。寛保2年9月にも周南宛の手紙を書いて白泉を通じて長州藩京都留守居役平川氏に頼んだが、平川氏が紛失したので周南まで届かなかったという。(『周南文集』巻十及び『鶴台遺稿』巻八に宜季宛の書牘、『東郊文集』巻五「与周南先生」第三書に関連内容がある)。</p> <p>○5月、伊藤蘭嶋「品川勿所墓銘」。品川勿所は須佐益田家儒臣。伊藤東涯門。</p> <p>○栗山孝庵(文仲)、京都に上り山脇東洋に入門か。山脇家「養寿院門人簿」に、この年の入門者として養庵以直の名が見え、安藤紀一はこれを孝庵とした。しかし田中助一はこれに反対し、孝庵の入門を寛延元年とする。</p> <p>○山県周南「寿一本香先生六十叙」(『周南文集』巻六)。香先生は香川修庵。</p> <p>○山県周南「渡辺浄忠府君功德碑撰文」(『周南文集』巻八)。碑は萩の常念寺にある。</p> <p>○山県周南「粟屋君画像贊并序」(『周南統稿』)この年か。粟屋君は粟屋勘兵衛元与のことで、元文3年に裏判役となる。</p> <p>○山根華陽「継孝説」(『華陽文集』巻九)。阿川毛利広漢の問いに答えたもの。</p>

年	区分	記	事
寛保3 ・ 癸亥	防長	○滝鶴台「祭小女阿雪奴文」(『鶴台遺稿』巻七)。阿雪は鶴台女。 ○滝鶴台「祭阿野翁文」(『鶴台遺稿』巻七)。阿野翁は右田毛利家の臣。	
	参考	○亀井南冥生。～文化11年(1814)。 ○5月、服部南郭「刀祢上流以南修治告成碑文」(『南郭文集三編』巻八)。 ○10月、芭蕉五十回忌。服部南郭参会か。(柳居=佐久間長水「芭蕉翁同光忌」)。 ○芥川丹丘「丹丘詩話序」。『丹丘詩話』の刊行は寛延4年(1751)。 ○岡白駒訳『小説精言』刊。 ○『古今詩刪』和刻刊。李攀竜編。宇野明霞訓点(徳田武「宇野明霞の訓法の悲劇」)。漢詩のアンソロジー。『唐詩選』の詩は殆ど入っている。 ○『大学養老篇』刊。『礼記』から『大学』にあたる部分を抄記したもので、万暦刊の北監本による。 ○6月2日、尾形乾山歿、81才。	
寛延保享4元 (2/21) ・ 甲子	防長	○4月18日、山根道之進(済洲)、山根華陽の養子となる。 ○9月、小倉宜季、山県周南宛書状。(吉田樟堂文庫『山県家文書』)。 ○永富独嘯庵(13才)、萩に来て医師井上玄静守常の門に入る。 ○林東溟、太宰春台『斥非』を『斥非編』と題して春台に無断で大坂菅生堂河内屋宇兵衛から出版する。 ○無隠道費『無孔笛』6巻3冊刊。	
	参考	○1月25日、三輪執斎歿、76才。寛文9年(1669)生。 ○春、服部南郭、常陸鹿島に遊び潮来節を漢詩に翻案して「潮来詩二十首」をつくる。(『南郭文集三編』巻一)。このような粋な試みは初めてであったので評判をとる。 ○9月24日、石田梅岩歿、60才。貞享2年(1685)生。 ○三浦衡興『徂徠先生学則解』刊。徂来『学則』の簡単な註釈書。三浦衡興は石見人。号瓶山。山県周南門。富山藩儒となる。周南に「送三浦生之京都序」(『周南文集』巻六)がある。 ○『補註李滄溟先生文選』和刻刊。李滄溟は李攀竜。	

年	区分	記	事
延 享 2	防	○5月、田坂瀟山、参勤に従って出府。 ○6月、小倉宜季、山県周南宛書状(吉田樟堂文庫『山県家文書』) ○7月14日、吉山常房歿、51才。画家。大楽朴水の弟子。『防長両国物産絵図』を描く。 ○11月10日、朝枝玖珂(毅斎)歿、49才。伊藤東涯門。裨官五大家の一人。 <伊藤蘭隅「朝枝弘毅斎碣銘」(『紹衣稿』)>	
	長	○山県周南「与和棟脚考功」(『周南統稿』)。 ○山県周南、川魚を食して下痢を患い、大病となる。 ○林東溟、淡路国洲本稲田氏の招きにより淡路に赴く。その結果、淡路から入門する者が増える。この年『東溟先生詩文』刊。	
乙 丑	参 考	○4月17日、宇野明霞歿、48才。 ○4月、林東溟校『斥非編』(延享元年大坂より無断出版)の板木をこわし摺本の販売を禁止さる。春台一門からの出訴による。(勝部青魚『剪燈隨筆』及び『大坂書林仲間記録』)。 ○6月、太宰春台『斥非』刊(岩波『日本思想大系・徂徠学派』に収める)。原尚賢の序文は、林東溟の行為を批難している。 ○太宰春台『六経略説』刊。9月、同『産語』刊。 ○服部南郭『南郭先生文集第三編』刊。元文元年から延享元年までの作品を収める。 ○万庵原資『江陵集』刊。寛保元年序。 ○『荀子全書』和刻刊。	
延 享 3 丙 寅	防 長	○5月5日、山内広俊歿、21才。毛利広漢の弟。号琴台。山内広通の養子となる。 <山根華陽「琴台山内君墓碣」(『華陽文集』巻八)。> ○5月、山県周南「万倉君遺稿題言」(『周南文集』巻九)。万倉君は国司正久のことで、寛保3年歿、21才。 ○5月、山県周南宛山脇東洋書牘(吉田樟堂文庫『山県家文書』)。 ○夏、津田東陽、江戸より萩へ帰る。 ○山県周南六十才寿賀。(『周南文集』巻十「与服子遷」第三書)。	

年	区分	記	事
延 享 3 ・ 丙 寅	防 長	<p>〈和智東郊「州学司業周南県先生六十初度序」(『東郊文集』巻四)〉</p> <p>〈山根華陽「周南県先生六十寿序」(『華陽文集』巻六)〉</p> <p>〈滝鶴台「周南県先生六十寿序」(『鶴台遺稿』巻五)〉</p> <p>○永富独嘯庵、山県周南に入門。(「独嘯庵先生行状」・「(独嘯庵自撰)行述」)。</p> <p>○山県周南、病氣快癒せず、明倫館学頭の辞職を願い出たが藩主宗広許可せず。友人や弟子が周南の詩文集刊行を企画するが周南は同意しなかった。9月20日、周南は服部南郭宛に自分の詩文稿の取扱いを委ねて後事を託す。あわせて山脇東洋の依頼による紹介状を書く。周南の病氣は、山根濟洲(華陽の養子)が三田尻まで能美由庵を迎えに行き、その診断投薬を得て奇蹟的に快復する。しかし以後病氣がちになる。(『周南文集』巻十南郭宛第三信及び『華陽文集』巻六「香川先生七十寿序」、また『芙蓉館帖』巻一所収南郭宛周南書牘)。</p> <p>○9月、山県周南「与徳夫」(『周南文集』巻十太宰春台宛第一書)。山脇東洋の要請により書いた紹介状。南郭宛のものとはほぼ同文。</p> <p>○10月、山県周南「上表」(京都府図書館『周南先生遺書』)。藩主宗広に当たつた藩政意見書。</p> <p>○山県周南「与医官山脇氏」(『周南文集』巻十の山脇東洋宛第一書)この年か。又は延享4年か。江戸で南郭・春台に会つた印象を尋ねている。また村田玄廸の東洋への入門を依頼する。</p> <p>○『林塾明月篇』刊。林東溟門下生の漢詩集。</p> <p>○滝鶴台、山県周南宛書牘(『鶴台遺稿』巻九の周南宛第三書)。道安「二教論」等を読んで儒学に疑問を持ち、それについての策問を呈するので、明倫館生に討論させてほしいと述べている。(『鶴台遺稿』巻七「策問」)。</p> <p>○滝鶴台、仲子岐陽宛書牘(『鶴台遺稿』巻九、岐陽宛第一書)。周南宛に策問を呈したことを述べ、この疑問についてはかつて岐陽とも討論したものだと言い、山根華陽等へも見せて意見を聞いてほしいと望んでいる。</p> <p>○滝鶴台、服部南郭宛書牘(『鶴台遺稿』巻八、南郭宛第五書)。儒教への疑問について教示してほしいと述べる。(天理図書館『芙蓉館帖』</p>	

年	区分	記	事
延 享 3 ・ 丙 寅	防 長	<p>卷四)。</p> <p>○滝鶴台「私擬策問」(『鶴台遺稿』卷七。『美濃館帖』卷四)。儒教への疑問を述べて教示を乞うたもの。</p> <p>○11月13日、野呂玄丈、石薬調査の為に萩に来る。唐樋町河内屋に止宿。</p>	
	参 考	<p>○太宰春台『朱子詩伝膏盲』刊。</p> <p>○王世貞『芸苑卮言』8巻8冊和刻刊。詩文論。</p>	
延 享 4 ・ 丁 卯	防 長	<p>○2月14日、大照院焼失。</p> <p>○2月、坂時存、郡奉行となる。奈古屋大原、遠近方となる。</p> <p>○3月、永富独嘯庵(16才)、江戸に出る。 〈山県周南「送永富昌安遊東都序」(『周南文集』巻六)〉</p> <p>○4月5日、山根華陽、側儒となる。(『毛利十一代史』)。</p> <p>○11月5日、山内広通歿、60才。東光寺に葬る。 〈和智東郊「山内忠靖君伝」(『東郊文集』巻四)〉</p> <p>○藩主宗広、山県周南に明倫館諸生が勉学の合間に音楽(雅楽)の習練に励むよう指示。“古き風俗に候付田舎にも捨り不申様”との趣旨による(山県周南「日記」)。</p> <p>○秋、雲谷等仲、眼病の爲隠居。以後俳諧に専念。聴松庵初代原箇枕。</p> <p>○毛利広漢『学則集帖』成る。荻生徂来『学則』中の用語の出典を探ったもので、学則一則毎に仲子岐陽が解説を附し、むしろこの方が主体となっている。 〈“右学則評語、丁卯之秋豊西君作学則集帖使他日講読。不尋河源誰睹崑崙。可謂盛举矣。乃囑余贊管見干其後。固辞不得於是平書。岐陽仲由基謹識。”〉</p> <p>○小田享叔生。永富独嘯庵の末弟。</p>	

年	区分	記	事
延享4 ・ 丁卯	参 考	<p>○5月30日、太宰春台歿、68才。延宝8年(1680)生。</p> <p>○6月、岡白駒「西溟余稿序」。『西溟余稿』は大潮の著。</p> <p>○10月2日、松室松峽歿、56才。伊藤東涯門。朝枝玖珂等と共に裨官五大家の一人。</p> <p>○10月8日、尾藤二洲生。～文化10年(1813)。</p> <p>○11月、『批点檀弓』刊。山県周南序。</p> <p>○『林塾明月篇』刊。林東溟塾の漢詩集。</p>	<p>○『皇明七才詩集注解』復刻刊。明の後七才子の詩の注解。既に元禄2年に刊行さる。</p> <p>○『鄭箋詩経』和刻刊。</p>
寛延 享元 5元 (7/12) ・ 戊辰	防 長	<p>○田坂瀨山、新年を江戸で迎える。</p> <p>○春、津田東陽、江戸より萩に帰る。(山根華陽「東陽君墓碣」)。</p> <p>○3月28日、藩主宗広、萩城内東園御茶屋において明倫館生や山県周南門弟及び侍臣たちより編成された楽団によって、越天楽や太平楽等の演奏を聴く。この年数回演奏会が行われた(山県周南「日記」)。宗広は音楽愛好家であった。徂徠学は人心和合・人格陶冶をもたらすものとして音楽を重視した。従って徂来門下に限らず周南門下も何らかの楽器を習得していた。宗広は、侍臣を音楽習練の為に京都へ派遣している。</p> <p>○3月、京都大通寺塔頭恩徳院住持竺巖、萩に来る。(周防国分寺行基千年忌法要参会のために三田尻に来たついでに萩を訪れたもの)。万行寺において周南・小倉鹿門・山県棠園・仲子岐陽・山根済洲・繁沢緑山等と詩会を催す。(山県周南「日記」)。</p> <p>○4月4日、朝鮮信使来朝、赤間関着。赤間関へは惣奉行穴戸出雲広周・手元役坂時存、上ノ関へは惣奉行毛利広漢(豊西君)が赴く。田坂瀨山も番役として赤間関に出張(『瀨山詩集』)。詩文唱酬した者は草場中山(允文)・小田村鄭山・山根華陽・繁沢緑山(繁沢規直の子)・田中蘆城・山県棠園(周南の子)・山県子祺(毛利広漢の家老)等であった。唱酬した詩文は『長門戊辰問槎』としてまとめられる。</p> <p>〈仲子岐陽「送豊西大夫行役籠関序」(『遺稿』)〉</p>	

年	区分	記	事
延 寛 享 延 5 元	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○11月11日、宇佐見瀧水、出雲藩江戸詰儒者となる。萩野復堂の推挙による。 ○太宰春台『文論』及び『詩論』刊。 ○芥川丹丘『丹丘詩話』刊。 ○宇野明霞『明霞遺稿』刊。 ○『李滄溟詩集』和刻刊。 ○『舟州先生四部稿選』和刻刊。 ○『芥子園画伝』和刻刊。 	
寛 延 2 ・ 己	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、山県周南「題子竜集後」(『周南統稿』)。子竜は柿並子竜。柿並半右衛門正治か。 ○8月、『林塾明月篇』刊。「東溟先生近作」として詩12首・尺牘2通を附す。 ○9月、山県周南「祖式左仲墓志銘」(『周南統稿』)。 ○10月、桂広保「蒙求拾遺考例」。『蒙求拾遺』は桂広保編著。服部南郭が序文を寄せ宝暦2年(1752)刊。 ○山県周南「蒙求拾遺跋」(『周南文集』巻九)。 ○山県子祺編『瀾城新著』刊。毛利広漢・山県子祺序。山県周南及びその門下生の書牘を集めたもの。 ○永田政純編纂『毛利家文書』完了。収録文書の上限は安元3年(1177)、下限は享保9年(1724)。大正9年に『大日本古文書家別第8集毛利家文書』として刊行。 ○滝鶴台「海北室老村上君壙誌銘」はこの年か。 	
己	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○大田南畝生。～文政6年(1823)。 ○服部南郭が秋山玉山と識り合ったのはこの年か。南郭、江戸竜口の細川藩邸に招かれる。 ○都賀庭鐘『英草紙』刊。 ○『賈子新書』和刻刊。 ○『鄭注周礼』・『鄭注儀礼』和刻刊。 ○(南宋)洪興祖『楚辞補注』和刻刊。 	

年	区分	記	事
寛 延 3 ・ 庚 午	防		<p>○和智東郊「辞職胎同僚奈生」(『東郊文集』巻一)。奈生は奈古屋大夏。前書によると東郊は病気によりこの年(寛延庚午)辞職したとある。この年まで遠近方を勤める。</p> <p>○7月3日、和智東郊、当職手元役となる。宝暦3年1月まで勤める。</p> <p>○8月、和智東郊「庚午八月国相益田君高亭観潮作歌三首」(『東郊文集』巻三)。国相益田君は益田越中広堯。この年6月15日に当職となる。</p> <p>○9月、和智東郊、藏元兩人役を兼ねる。寛延4年2月まで。</p> <p>○10月1日、明倫館学頭津田東陽外9人、音楽用務苦勞により銀子下附される。</p> <p>○秦(波多)兼虎(嵩山)、明倫館に入学し山根華陽に師事するのはこの年か。</p> <p>○山県周南「静叟解」(『周南統稿』)。師祖来の63才の生涯より1年を越えた年齢となり、感慨とともに病身の老後を迎える心境を語っている。</p> <p>○滝鶴台「贈東原版子令山口序」(『鶴台遺稿』巻五)。東原版子は、坂時存の子坂時連。この年8月、山口町奉行となる。</p> <p>○周防一宮玉祖神社を重建。 〈滝鶴台「新修周防州婆摩郡大崎玉祖神祠上梁文」(『鶴台遺稿』巻七。〉</p>
	考		<p>○中西淡淵(42才)、江戸に出て芝三島町に家塾叢桂社を開く。</p> <p>○服部南郭『大東世語』5巻5冊刊。</p> <p>○服部南郭「論語徴集覽序」。</p> <p>○荻生徂来『孫子国字解』刊。</p> <p>○宮瀬竜門『明李王七言律解』。宮瀬竜門は服部南郭門下。</p> <p>○伊藤東涯『古今学变』刊。後天保14年(1843)に東涯頭注のものが刊行。</p> <p>○室鳩巢『駿台雑話』刊。成立は享保17年(1732)。</p> <p>○皇侃注『論語議疏』、根本武夷によって刊行。</p> <p>○王逸注『楚辞章句』和刻刊。</p>

年	区分	記	事
寛 宝 延 暦 4 元 (10 / 27) ・ 辛 未	防	<p>○2月4日、藩主宗広歿、35才。長府藩主毛利匡敬(後重就)本家を相続し襲封。宗広時代のことは和智履実(東郊の養子)の『遺徳談林』(東郊よりの聞書を主とする)に詳しい。『遺徳談林』は『毛利十一代史』に収まる。</p> <p>○田坂瀨山、出府する。(『瀨山詩集』)。</p> <p>○6月、飯田道調歿、63才。岩国の医家で本草家。</p> <p>○閏6月、山県周南「小野允升墓陰銘」(『周南統高』)。小野允升は周南第三子小野仁右衛門のこと。</p> <p>　　〈滝鶴台「祭大亨小野君文」(『鶴台遺稿』巻七)〉</p> <p>○7月、当職益田広堯出府。留守中毛利広漢当職の職務代行。(『東郊文集』巻二)。</p> <p>○和智東郊、秋より翌2年にかけて大阪質入米切手事件等に関し大坂に出張し、処理に奔走する(『諸事少々控』)。この米切手事件は、借銀の為に長州藩が入質した米切手が債主の手から散出し、その米切手の持主よりの現米交換要求を拒否したところから、債権者による大坂町奉行への出訴に発展したものである。</p> <p>○秋、桂広保(号南野)隠居する。</p>	<p>○10月7日、河治友周歿、87才。長門鐔の名工。</p> <p>○10月、永富独嘯庵(20才)、上京して山脇東洋に入門。磯部道永取次。</p> <p>○林東溟(44才)、『明官古名考』刊。</p> <p>○山根華陽「鷹峰平賀君墓碣」(『華陽文集』巻八)。平賀鷹峰は平賀君重。</p> <p>○役藍泉生。～文化6年(1809)。</p>
	参 考	<p>○細井平洲(24才)、江戸に出て芝三島町に住居す。</p> <p>○松平不昧生。～文政元年(1818)。</p> <p>○中村蘭林『学山録』刊。</p> <p>○伊藤東涯『助字考』刊。元禄6年(1693)序。</p> <p>○『古文尚書』和刻刊。</p> <p>○『チェーンバズ百科事典』刊。</p>	

年	区分	記	事
宝 暦 2 ・ 壬 申	防 長	<p>○1月3日、和智東郊、大坂より萩へ帰る。</p> <p>○2月6日、和智東郊、米切手事件で再度大坂に赴き、この日大坂着。</p> <p>○3月、山県周南、病氣治療の為に香川修庵の診療を受くべく京都に赴く。滝鶴台、付添いとして同行。周南の京都行きは、毛利筑後広定以下藩の重臣達の取り計らいによるものであった。</p> <p>桃井桃庵(相良藩医)『傷寒論古訓口義』によると、周南の病氣が傷食に因るものであるにもかかわらず修庵はその持論である“傷食を以て霍乱となし、霍乱の治方を以て傷食を治”したので、却って周南の病を重くしてその死を早めたという。周南病氣快癒せず、7月に萩へ帰る。</p> <p>○滝鶴台、在京中林東溟と再会。東溟の為に服部南郭へ手紙を書き、東溟の過去を許して江戸の徂徠門統の人々が受け容れてほしいと懇願する。</p> <p>〈滝鶴台、服部南郭宛書牘(『鶴台遺稿』巻八の南郭宛第六書)〉</p> <p>〈滝鶴台、五言古詩「送林義卿」(『鶴台遺稿』巻一)〉</p> <p>○春、田坂瀨山、病氣のため江戸から萩へ帰る。帰途京都にて香川修庵の診察を受く。</p> <p>7月、病氣快復せず致仕する。(『瀨山詩集』)。</p> <p>〈山根濟洲「送子恭謝病還故郷二首」(『濟洲詩稿』)〉</p> <p>○4月、和智東郊、大坂米切手事件解決報告の為に江戸へ赴く。(『諸事小々控』)。</p> <p>○8月12日、山県周南歿、66才。元禄3年(1690)生。</p> <p>鶴台以下門弟達の弔詩はそれぞれの詩文集に見える。</p> <p>○栗山文仲(孝庵)、長崎に遊学す。</p> <p>○林東溟、江戸に出て、10月7日良野華陰の紹介にて林家に入門する。(林家入門者名簿『升堂記』)。</p> <p>○滝鶴台、曾子泉(曾野有原)宛書牘(『鶴台遺稿』巻九)。周南に付添って嵯峨に遊んだとある。</p> <p>○滝鶴台「寿香川先生七十序」(『鶴台遺稿』巻五)。</p> <p>○山根華陽「香川先生七十寿序」(『華陽文集』巻六)。</p> <p>○坂時存『遺塵抄』この年成るか。</p>	

年	区分	記	事
宝暦2 ・ 壬申	防	<ul style="list-style-type: none"> ○坂時存『本朝官位相当図』刊。 ○坂時存等「三老上書」。 ○繁沢縁山、この年死去か。縁山は繁沢規直の子。山県周南に学ぶ。『縁山詩集』がある。縁山の死により繁沢規直は上領伯仙の子(後の繁沢豊城)を養子とする。 	
	長	<ul style="list-style-type: none"> ○中村梁山、津田東陽の養子となっていたが、実家を嗣ぎ中村姓に復す。 ○桂広保『蒙求拾遺』刊。山県周南跋。 	
宝暦3 ・ 癸酉	参	<ul style="list-style-type: none"> ○服部南郭、中西元雄を養子とする。 ○太宰春台『春台先生紫芝園稿』刊。同書後稿巻八に「詩論」を収める。春台この「詩論」において、荻生徂来が推賞した明の古文辞派の詩を批判している。 ○山脇東洋『医則』刊。山県周南序(『周南文集』巻六)。 ○本居宣長、京都に遊学する。宝暦7年10月まで。 ○『当世下手談義』刊。当世流行の風俗を面白おかしく述べながら批判したもの。寛延4年に刊行を差止められていた。 ○宝暦から寛政にかけては戯作隆盛の時代となる。 	
	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月29日、和智東郊、当職手元役を辞し、阿武郡椿西分村面影山(現萩市)の麓に居住す。(『東郊文集』)。 ○3月、毛利広漢、江戸加判役として参勤に従って出府。4月6日江戸着。 <ul style="list-style-type: none"> 〈滝鶴台、毛利広漢宛書牘(『鶴台遺稿』巻九「豊西君」第二書)。広漢の藩政参与を祝し、活躍を期待するとともに行動に自戒を求めている。〉 ○山根華陽、参勤に従って出府(『華陽文集』巻四)。しかし人員削減の対象となり、この年萩に帰る。 ○7月、山県周南撰文「明倫館記」の石碑建立。津田東陽書。(『瀾山詩集』によると石碑建立は甲戌とあり、宝暦4年になる。) ○8月2日、草場允文(通称季英、号仲山)京都で死去、38才。 	

年	区分	記	事
宝 暦 3 ・ 癸 西	防 長	<p>〈津田東陽「仲山草場先生墓誌」〉</p> <p>○8月、5ヶ年間の藩財政緊縮令出る。</p> <p>○秋、山根済洲、猿山(栲山)温泉に遊ぶ。</p> <p>○無隠道費(66才)、藩の招きに応じて深川大寧寺住職となる。(～宝暦6年まで)。</p> <p>〈滝鶴台「無隠禅師応本藩請住太寧寺賦賀」他詩(『鶴台遺稿』)〉</p> <p>〈滝鶴台、無隠道費宛書牘(『鶴台遺稿』巻十)。鶴台は大寧寺へ無隠を訪ねている。また無隠に和智東郊を紹介し、無隠は東郊の叙事詩「宰相怨」・「祇王歌」の借覧を希望し、ここに無隠と東郊の交遊が開けることになる。〉</p> <p>〈和智東郊「復大寧無隠禅師」(『東郊文集』巻五)。無隠の需めに応じて「宰相怨」・「祇王歌」を送ると述べる。〉</p> <p>〈無隠道費『雜華集』巻二。『雜華集』は無隠の第二詩集。〉</p> <p>○和智東郊「与滝弥八」(『東郊文集』巻五の鶴台宛第一書)。自作の長篇叙事詩「宰相怨」・「祇王歌」への鶴台の批評を謝し、この詩にかけた意気込みを述べる。また「春初轍ち印授を解き、窮鳥羅網を脱するの懐いを為す。迺ち一挙千里、今日の幸いと為す」と、役務から解放され作詩に没頭できる心境を吐露している。</p> <p>○滝鶴台、和子葛(和智東郊)宛書牘(『鶴台遺稿』巻九の東郊宛第二書)。「宰相怨」・「祇王歌」への讃辞を呈し、東郊の詩才・力量に敬意を表して激励している。また『周南文集』の序文を送るので校正してほしいと述べる。</p> <p>○滝鶴台、和智東郊宛書牘(『鶴台遺稿』巻九中の第三書)。防長徂徠学の隆盛の為に尽力してほしいと要請し、東郊と無隠の間に交友が開けたことを喜び、翌年春には大寧寺へ行くのでそこで会えたら嬉しいと誘う。</p> <p>○滝鶴台、秦貞父宛書牘(『鶴台遺稿』巻十、貞父宛第一書・第二書)。秦貞父(守節)より須佐育英館で由来の「鬼神策」を講じるについて疑問を尋ねてきたのに対して答えたもの。秦貞父は秦兼虎(嵩山)の兄。周南に学び、須佐育英館教授。須佐益田氏儒臣。</p> <p>○山県子祺が播磨国室の辺りで急死したのはこの年か。子祺は阿川毛利</p>	

年	区分	記	事
宝暦3 ・ 癸酉	防長	<p>家の家老。山県周南門下。『周南文集』刊行事務を担当していた。</p> <p>○毛利広漢、給地阿川に時習館を創設。山県子祺、相談に与かる。</p> <p>○永田瀬兵衛『御系図御家譜引書』(毛利家文庫3公統)。毛利家系譜作成上の引用文献集成。</p>	
	参考	<p>○3月、荻生徂来『中庸解』刊。</p> <p>○服部南郭『物夫子著述書日記』成る。これは徂来の名を騙った偽書の出版を警戒し、徂来の著述36部191巻を分類し解説したもの。ただし『政談』・『太平策』は入っていない。</p> <p>○宇佐美瀧水『絶句解考証』成。</p> <p>○岡白駒訳『小説奇言』刊。</p>	
宝暦4 ・ 甲戌	防長	<p>○5月8日、永田瀬兵衛政純歿、83才。 〈山根華陽「永田君墓碣」(『華陽文集』巻八)〉</p> <p>○5月22日、毛利広漢、加判役を突如罷免され、後に隠居となる。 〈滝鶴台、豊西君(毛利広漢)宛書牘(『鶴台遺稿』巻九中の第二書)。広漢の事件につき田中季三から詳細の通知があったと述べ、突然の不幸を慰め、その心情を推察し、広漢の失脚にかかわらず自分の友情は変わらないことを伝えている。鶴台の危惧が適中したのであった。〉</p> <p>○滝鶴台、栗文仲(孝庵)宛書牘(『鶴台遺稿』巻九、孝庵宛第一書)。山脇東洋が行った人体解剖は医学の進歩に資する盛事であることを述べて医学に対する自分の見解を披瀝し、次いで東洋よりの山県周南墓前に献じてほしいという『医則』が文仲より送られてきていないこと、また東洋五十寿賀の文を頼まれたが承諾したことや無隠の「出師表」・「鵝群帖」・「自叙帖」に言及、最後に毛利広漢の蟄居後の状態を尋ね、山県子祺が生きていて広漢の事件を聞いたら驚死したであろうと書いている。</p> <p>○中村梁山、明倫館都講となる。</p> <p>○9月12日、津田東陽歿、53才。 〈山根華陽「東陽君墓碣」(『華陽文集』巻八)〉 〈田坂瀾山「哭東陽先生八首」(『瀾山詩集』巻六)〉</p>	

年	区分	記	事
宝 暦 4 ・ 甲 戌	防	<ul style="list-style-type: none"> ○12月、秦守節（貞父）「三之選序」。『三之選』は滝鶴台の著。 ○永富独嘯庵、越前に赴いて奥村良竹に入門し、吐方を学ぶ。（この入門は山脇東洋の命によるもので、東洋の養子玄侃と同行したものである）。 ○無隠道費『金龜尺牘集』刊。（寛延3年（1750）に既に刊行か）。 ○ 同 「四会語録序」成る。 ○滝鶴台「豊西君詩集序」（『鶴台遺稿』巻五）はこの年以後か。 ○ 同 「医官法眼東洋山君寿序」（『鶴台遺稿』巻五）。 ○山根華陽「賀医官山脇先生五十序」（『華陽文集』巻六）。 ○田坂瀾山「医官山脇先生寿歌并序」（『瀾山詩集』巻一）。栗山孝庵に代わって作る。 ○この頃、『周南先生文集』原稿は校正の為に服部南郭の方へ廻されていた。 ○岩国の横山講堂成る。樋口東里主宰。 	
	考	<ul style="list-style-type: none"> ○閏2月、山脇東洋、人体解剖を行う。（その時の記録が『臧志』として宝暦9年（1759）に刊行される）。 ○4月、山脇東洋、滝鶴台宛書牘（『臧志』）。『医則』を周南墓前に供えてほしいと述べている。これに対する鶴台の返信は『鶴台遺稿』巻八「医官法眼山脇玄飛」第一書である。 ○9月、秋山玉山『玉山詩集』6巻刊。 ○『金蘭詩集』刊。竜草廬の幽蘭社グループの詩集。 ○『千石節』刊。 ○『摹雕秋間戯鏡』和刻刊。 ○『石點頭』この年舶来か。（尾崎雅嘉写「舶来書目」）。 	
宝 暦 5 ・ 乙 亥	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○小倉鹿門、参勤に従って出府。 ○4月、山県周南『作文初問』刊。周南の文学観がうかがえる。 ○4月27日、秦守節（貞父）、京都遊学より帰り病を得て歿す。30才。 <ul style="list-style-type: none"> 〈滝鶴台「輓秦貞父」（『鶴台遺稿』巻二）〉 〈田坂瀾山「哭秦子与三首」（『瀾山詩集』巻四）〉 ○9月25日、山根濟洲（世禄）歿、30才。 	

年	区分	記	事
宝暦5・乙亥	防長	<p>〈滝鶴台「哭山世禄兼吊子濯」(『鶴台遺稿』巻二)〉</p> <p>〈田坂瀾山「哭山世禄六首」(『瀾山詩集』巻二)〉</p> <p>○12月14日、栗栖探叔歿、56才。狩野派画家。一時雲谷等叔を名乗る。</p> <p>○滝鶴台「雑華集序」(『鶴台遺稿』巻五)。『雑華集』は無隠道費の漢詩集。</p> <p>○12月、奈古屋大夏、江戸に出張。</p> <p>○雲谷等澄、名を等徴と改める。</p>	
	参考	<p>○1月6日、雨森芳洲歿、88才。寛文8年(1668)生。</p> <p>○海保青陵生。~文化14年(1817)。</p> <p>○8月、服部南郭「周南先生文集序」成る。</p> <p>○東北地方大飢饉。</p>	
宝暦6・丙子	防長	<p>○1月、繁沢豊城(当時上領姓。上領伯仙の三男)、繁沢規直の養子となる。</p> <p>○7月、繁沢規直、隠居す。</p> <p>○7月、山根華陽・小倉鹿門、隔年交替で明倫館学頭代行となる。</p> <p>○11月26日、無隠道費歿、69才。一説宝暦7年歿。山口の法泉寺にて死去。</p> <p>〈滝鶴台「悼無隠禅師」(『鶴台遺稿』巻四)〉</p> <p>○滝鶴台『三之逕』刊。(『長周叢書』に収まる。安民を果たすものであれば儒・仏・道いづれの道であってもよいと論じている。)</p> <p>○滝鶴台、豊西君宛書牘(『鶴台遺稿』巻九、毛利広漢宛第四書)。広漢より『周南文集』の刊行が遅れているので催促してきた。鶴台は遅延の理由をいくつか挙げて説明し、了解を求め、広漢の身に起こった不幸と文集編集途中で生じた数々の不幸を重ね合わせて嘆いている。文集編纂は広漢が中心となって計画されてきたものであった。先師歿後4年を経たと感慨をもらす。</p> <p>○長府藩安岡における砂糖製造事件起こる。これは永富独嘯庵の技術指導によるものであった。製品は大坂に送られて販売されたが、幕府から嫌疑を受け、調査の役人が派遣されてきて、製造は中止される。</p>	

年	区分	記	事
宝 暦 7 ・ 丁 丑	防	○2月、藩主重就、高齢者を明倫館に招き、敬老の規式を催す。 ○9月、山根華陽「為学正論序」(『華陽文集』巻六)。『為学正論』は窪井鶴汀著、宝暦九年刊。 ○10月20日、戸川咸佐歿、77才。岩国の人。宇都宮遷庵の弟子。 ○11月、滝鶴台「瀾山詩集序」(『鶴台遺稿』巻五)。 ○12月、山根華陽「瀾山詩集序」(『華陽文集』巻六)。 ○山根華陽「恭庵佐佐田生墓碣」(『華陽文集』巻八) この年か。佐佐田恭庵は津和野の人。 ○『須万盛衰記』刊。徳山藩都濃郡須万村の沿革誌。	
	参 考	○7月6日、高野蘭亭(高子式)歿。54才。68才の説もある。17才で失明。 ○夏、服部南郭、羽沢(現渋谷区東二丁目)に白責墅を営む。(服部仲英「白責亭記」)。 ○本多伊予守忠統(猗蘭侯・西台侯)歿。 ○7月17日、梁田蛻巖歿、86才。寛文12年(1672)生。 ○井上蘭台『明七子詩解』刊。 ○陶山南涛『忠義水滸伝解』刊。語釈したもの。 ○岡島冠山訳『通俗忠義水滸伝』刊。継続して寛政2年まで。 ○中村蘭林『閑窓雑録』成。 ○伊藤東涯『秉燭譚』刊。	
宝 暦 8 ・ 戊 寅	防 長	○3月26日、栗山孝庵等手水川(現萩市椿東)刑場にて男の屍体を解剖する。解剖の実態を師山脇東洋に報告。 ○4月15日、田坂瀾山歿、39才。肺患の為。 <滝鶴台「田坂君碑陰文」(『鶴台遺稿』巻六)> ○本城紫巖、萩に来て明倫館に入学、山根華陽に師事す。 ○滝鶴台、長崎に遊ぶ。(滝高渠「鶴台行状」)。出島和蘭館に入り見分。この年鶴台50才。旅行記『長崎紀行』がある。和智東郊「与滝弥八同来崎陽送弥八還郷」(『東郊文集』巻二)によると、鶴台の長崎行きは宝暦9年のようにも思われる。(宝暦9年の記事参照) ○10月、雲谷等竺(当時扶持方成)、祖母心乱につき島借り(島送り)を申し出る。(「遠近方日帳」)。	

年	区分	記	事
宝 暦 8	防	<p>○10月、栗山孝庵宛山脇東洋書牘(『臧志』)。 ○滝鶴台宛山脇東洋書牘(『臧志』)。『臧志』板行について鶴台の序文を依頼してきたもの。 ○和智東郊「坂翁八十寿序」(『東郊文集』巻四)。坂翁とは坂時存(号子祺)。 ○奈古屋大夏「寿阪子祺八十序」。</p>	<p>○12月、坂時存、諮問を受けて当職毛利広定に藩政改革意見書提出(『毛利十一代史』の内「御国政再興記」参照)。この意見書が宝暦藩政改革の青写真となる。書中時存は、朝鮮の書『懲愆録』(豊臣秀吉の侵略を受けた自国朝鮮の国内体制への反省と自戒を述べた書)を引用している。</p>
	参 考	<p>○春、服部南郭「瀟山詩集序」。 ○中井登庵歿、66才。 ○太宰春台『詩書古伝』刊。山県周南序(『周南文集』巻五)。その序で周南は、朱子学的な詩経・書経観に反対の意見を記している。 ○服部南郭『南郭先生文集四編』刊。延享2年から宝暦7年までの作品を収める。 ○高野蘭亭『蘭亭先生詩集』刊。 ○中井竹山「詩律兆序」成る。 ○『唐詩函』刊。 ○沢田一斎訳『小説粹言』刊。 ○口木山人(西田惟則)訳『通俗西遊記初編』この年より刊行。</p>	
宝 暦 9 ・ 己 卯	防 長	<p>○2月13日、和智東郊、長崎間役となる。 〈和智東郊「紀肥州崎陽事」(『東郊擒藻拾遺』)〉 『東郊文集』巻二「与滝弥八同来崎陽送弥八還郷」と題された七言律詩及び『東郊擒藻拾遺』の「贈弥八滝君序」によると、東郊は鶴台と長崎へ同行しているようである。しかし「鶴台行状」や「長崎紀行」は鶴台の長崎行きを宝暦8年とする。 ○3月5日、山根華陽、明倫館学頭となる。 ○3月、窪井鶴汀『为学正論』刊。山根華陽・滝鶴台序、小田村郵山跋。</p>	

年	区分	記	事
宝 暦 9 ・ 己 卯	防	<p>○春、滝鶴台「臧志序」(『鶴台遺稿』巻五)。 ○6月21日、栗山孝庵、女体解剖を行う。山脇東洋に解剖記録を報告。 ○7月、窪井鶴汀「古訓輯要序」。 ○10月2日、坂時存歿、81才。 〈滝鶴台「坂翁墓誌」(『鶴台遺稿』巻六)〉 ○10月、奈古屋大夏「贈高山公序」。高山益田広堯五十歳の寿文。この頃大夏は遠近方頭人であった。 ○冬、和智東郊、江戸藩邸留守居助役となる。 ○11月13日、毛利広漢歿、38才。 〈山根華陽「蘭陵君像贊」(『華陽文集』巻九)〉 ○有吉高陽、世子毛利重広付となり出府。 ○山根華陽「小川君墓碣」(『華陽文集』巻八)。小川君は小川源右衛門澄衆、号秀軒。 ○山根華陽「復田子逸」(『華陽文集』巻十)。田子逸は飯田居謙。河野養哲の記念碑建立に関し、碑の材石を狐島(現萩市椿東)の海中に獲たので、草場大蘆書による山県周南撰文を小田村郵山・河野通周と相談して彫らせたが、冬期なので春になってから送り出したいと申し送ったもの。 ○金谷天満宮(現萩市椿西)建立。</p>	
	参 考	<p>○6月21日、服部南郭歿、77才。天和3年(1683)生。 ○山脇東洋『臧志』刊。滝鶴台序(『鶴台遺稿』巻五)。 ○吉益東洞『医断』刊。滝鶴台序(『鶴台遺稿』巻五)。 ○小野蘭山・島田充房『花叢・草部』刊。 ○宋紫石、長崎より江戸に帰り塾を開く。</p>	
宝 暦 10 ・ 庚 辰	防 長	<p>○2月、和智東郊、公務により出府(「贈弥八滝君序」)。 ○3月、滝鶴台、一家を挙げて右田より江戸に出て、芝に家塾を開く。 〈山根南溟「送鶴台先生携二子遊東都」(『南溟先生詩集』巻三)〉 〈本城紫巖「奉送鶴台先生二子遊東都」他(『紫巖遺稿』)〉 〈滝鶴台「遊賀島記」(『鶴台遺稿』巻六)〉</p>	

年	区分	記 事
宝 暦 10 ・ 庚 辰	防	<p>○春、滝鶴台「大笑軒記」(『鶴台遺稿』巻六)。大笑軒は、奈古屋大夏の書斎名。</p> <p>○6月27日、和田梅翁(正清)歿、84才。書家。厚狭毛利家臣。 〈山根華陽「和田梅翁墓表」〉</p> <p>○永富独嘯庵、長崎に遊学。通訳官吉雄耕牛について和蘭医学に接する。宝暦12年夏、下関に帰る。</p> <p>○山県周南『為学初問』刊。この書は既に『護園談余』の書名で往来著として流布していた。滝鶴台の仲子岐陽宛書牘(『鶴台遺稿』巻九岐陽宛第二書)によると、『為学初問』刊行に当たって織田家島津家等から文句がつけられ、本文を鶴台の手によって削除したところがあるという。</p> <p>○8月、山県周南『周南先生文集初編』刊。滝鶴台「周南先生行状」及び服部南郭「周南墓誌銘」を附す。第二編の刊行が予告されながら未刊に終わる。</p> <p>○無隠道費『雑華集』刊。</p> <p>○この年か、滝鶴台、細井平洲の嚶鳴館にて秋山玉山と会う。七言絶句三首を贈る。(『鶴台遺稿』巻四)。</p>
	参 考	<p>○永田俊平撰『大東詩家地名考』刊。徂徠門流の詩風の一つとして日本の地名を中国風に言い替える趣向があり、その用例を集めたもの。</p>
宝 暦 11 ・ 辛 巳	防 長	<p>○6月、和智東郊、江戸より萩へ帰る(「贈弥八滝君序」)。</p> <p>○7月、豊田養慶『緒鞭余録』刊。京都東山雙林寺における産物会の記録。豊田養慶は岩国の医師。</p> <p>○10月17日、徳田幸助良方歿、67才。『江氏家譜』編纂員の一人。</p> <p>○11月21日、滝鶴台、長州本藩に招聘され、一代儒者として寺社組編入。米25俵給与。</p> <p>○この年、滝鶴台、『徂徠集』の講義を行う。</p> <p>○滝鶴台「糸竹園記」(『鶴台遺稿』巻六)。糸竹園は津和野の布施成章の園名。</p> <p>○滝鶴台、吉益東洞宛書牘(『鶴台遺稿』巻八、東洞宛第二書)。小田雲洞(済川)の入門希望を伝え、紹介している。</p>

年	区分	記	事
宝暦11・辛巳	参考	<p>○5月、宇佐美瀧水「南留可志序」。『南留可志』は荻生徂来の著。</p> <p>○9月3日、奥村良竹歿、75才。越前藩医。永富独嘯庵に吐方を伝えた。</p> <p>○11月27日、井上蘭台歿、57才。宝永2年(1705)生。</p> <p>○伊藤東涯『紹述先生文集』30巻刊。</p> <p>○荻生徂来『四家雋』刊。宇佐美瀧水序。出雲餐霞館藏版。</p>	
宝暦12 壬午	防長	<p>○山根華陽、明倫館学頭を辞す。宝暦9年以来勤める。</p> <p>○2月17日、山県棠園・小田村鄭山、明倫館学頭暫役となる。同年閏4月15日まで。</p> <p>○3月、和智東郊「贈弥八滝君序」(『東郊摘藻拾遺』)。</p> <p>○5月21日、安部和貞歿、68才。永田瀬兵衛等と『江氏家譜』を撰定。</p> <p>○5月、滝鶴台、秋山玉山が熊本に帰るを送って詩を贈る(『鶴台遺稿』巻四)。</p> <p>○7月6日、小倉鹿門、明倫館学頭となる。安永4年(1775)まで。</p> <p>○9月2日、繁沢規直(南塘)歿、79才。</p> <p>○9月19日、国富鳳山歿、56才。徳山の徂徠学者。服部南郭の弟子。</p> <p>○永富独嘯庵、亀井南冥を連れて再度長崎に赴く。途次、肥前蓮池に大潮を訪問。この年、長崎より赤間関に帰り、直ちに上京。京都にて売茶翁に師事。</p> <p>○曾野雲門(有原)、江戸に出て京橋柳原に居住す。</p> <p>○奈古屋大夏「寿大連阪君六十」。大連阪君は坂時連のことで当時当職手元役。</p> <p>○滝鶴台、仲子岐陽宛書牘(『鶴台遺稿』巻九、岐陽宛第二書)。「客冬公朝に召見せられ儒臣の列に就き世子に経を授く」とある。とすればこの書牘は宝暦12年となる。しかし追伸中に『周南文集』及び『為学初問』に触れ、「為学初問今春開板」とあるが、『為学初問』は宝暦10年の板行であれば、「客冬公朝に召見」された宝暦11年以後のこの書牘は宝暦12年のものか宝暦10年のものかの疑問が生じる。後考を俟つ。『為学初問』の板行に関しては、その内容に織田・島津両家から横槍が入り、初稿を改めたと述べている。また『周南文集』の刊本と浄写本との対校を岐陽・山根華陽・鶴台とで行っている状況が知られる。</p>	

年	区分	記	事
宝 暦 12 ・ 壬 午	防 長	<p>なお岐陽は最近結婚し、新居を卜築したとある。</p> <p>○滝鶴台が大和小泉侯片桐氏の師儒として招かれることになったのはこの年か。</p>	
	参 考	<p>○春、亀井南冥、永富独嘯庵に入門。</p> <p>○3月17日、五井蘭洲歿、66才。元禄10年(1697)生。</p> <p>○8月13日、山脇東洋歿、58才。宝永2年(1705)生。</p> <p>○萩生徂来『南留可志』刊。(元文元年(1736)にも刊)。</p> <p>○9月、萩野復堂原輯・同鳩谷増定『東藻会彙』成る。宝暦11年宇佐美瀧水序。日本固有の名詞類を徂徠門流の詩文から採択し分類整理したもの。ただし“地名”についての部を欠く。</p> <p>○『謝茂秦山人詩集』和刻刊。</p>	
宝 暦 13 ・ 癸 未	防 長	<p>○2月、永富独嘯庵『吐方考』刊。山脇東洋序。</p> <p>○3月、永富独嘯庵『寰語』刊。清田僖叟序。(文化6年再刊)。</p> <p>○春、永富独嘯庵、京より大坂へ移り、高麗橋南備後町に居住(『寰語』)。</p> <p>○滝鶴台、奈古屋大夏宛書牘(『鶴台遺稿』巻九、大夏宛第三書)。朝鮮信使来朝の情報を伝えている。</p> <p>○4月5日、滝鶴台江戸を発足し、5月11日萩に着す。</p> <p>○5月22日、奈古屋大夏、遠近方より藏元兩人役となる。明和7年6月まで。</p> <p>○6月、烏田智庵、『萩古実』に記事を追加する。(多賀社文庫蔵『萩古実』)。</p> <p>○9月29日、曾野有原(雲門)歿、46才。</p> <p> <滝鶴台「雲門曾先生墓碑」(『鶴台遺稿』巻七)></p> <p>○12月27日、朝鮮信使、赤間関に着し阿弥陀寺にて越年。(翌年5月帰国)。12月28・29・晦日の3日間、滝鶴台等藩令により詩文唱酬。その詩文は『長門癸甲問槎』として刊行される。</p> <p>○和智東郊「奉送今上皇帝登祚慶聘使阿川江君序」(『東郊文集』巻四)</p> <p>○和智東郊「送阪大連之阪陽序」(『東郊擒藻拾遺』)。阪大連は坂時連のこと。</p>	

年	区分	記	事
宝暦13 ・ 癸未	防	<p>○永富独嘯庵『漫遊雜記』成る。亀井南冥序。明和元年刊。文化6年(1806)再刊。</p> <p>○小田村藍田「寿家大人序」(『藍田小田村先生集』)。小田村酈山六十歳賀寿。</p> <p>○和智東郊「与子羽秋君」(『東郊文集』卷五)。子羽秋君は熊本藩儒秋山玉山。滝鶴台を通じて玉山の名を知り、鶴台を通じて書を呈し交友を求めている。しかし玉山はこの年死去した。</p> <p>○秦嵩山(兼虎)・本城紫巖、明倫館での就学にあきたらず、館を出て市中に居住し滝鶴台に師事する。</p>	
	長		
	参	<p>○4月、野村公台、服部南郭の扶藁館より南郭手沢本『太平策』を借りて写す。(岩波『日本思想大系・荻生徂徠』丸山真男『『太平策』考』)。</p> <p>○5月、亀井南冥「漫遊雜記序」。</p> <p>○6月、立原翠軒、大内熊耳に師事。</p> <p>○大田南畝(15才)、内山賀邸に入門。内山賀邸は明和期の江戸を代表する歌人。</p> <p>○江村北海(51才)、詩社賜杖堂の結成はこの年か。社友は金竜道人敬雄・芥川丹丘・武田梅竜・那波魯堂等。</p> <p>○荻生徂来『絶句解』再刊。五言絶句百首解と滄溟(李攀竜)七絶三百首解とから成り、いずれも明詩の解である。(享保17年の項参照)</p> <p>○中川南峰『絶句解弁書』刊。『絶句解』を分かり易く解説したもの。</p> <p>○伊藤東涯『秉燭譚』刊。古義堂藏板。(宝暦7年にも刊)</p> <p>○祇園南海『詩学逢原』刊。詩論書。</p> <p>○吉益東洞・巖恭敬甫編『建殊録』刊。滝鶴台と吉益東洞の往復書簡を附す。</p> <p>○源誠章「古訓輯要序」。『古訓輯要』は窪井鶴汀著。</p> <p>○大典『詩語解』刊。</p> <p>○『俗談唐詩選』刊。(或は宝暦12年か)</p> <p>○平賀源内『根南志具佐』・『風流志道軒伝』・『物類品隲』(附図は宋紫</p>	
	考		

年	区分	記	事
宝暦13	参考	石画)刊。 ○『甘氏印正』和刻刊。兼葭堂藏板。 ○12月12日、秋山玉山歿、62才。元禄15年(1702)生。	
宝暦14 元 (6 / 2) ・ 甲 申 長	防	○1月、赤間関で越年した朝鮮使節、江戸に向かう。 ○1月6日、滝鶴台、赤間関より萩に帰着。 ○2月、日名内周道歿。 〈奈古屋大夏「日名内周道墓碑」〉 ○4月9日、滝鶴台、萩出立。同11日上ノ関着。しかし朝鮮使節は大坂変事の為に帰路延引し、鶴台は同月25日上ノ関発、27日一旦萩に帰着。 ○5月6日、鶴台萩出足、8日上ノ関着。 ○5月19日、夜中朝鮮使節上ノ関着。20日早朝出帆し赤間関に向かう。その為上ノ関での詩文応酬なし。直ちに鶴台達も船で赤間関に赴き、21日赤間関着。即日製述官三書記と詩文唱酬。23日信使赤間関出帆。24日鶴台萩帰着。(鶴台記「略系并伝書」による)。 〈滝鶴台「朝鮮南秋月成竜淵元玄川稟問教条附」(『鶴台遺稿』卷十)。儒教を仏教・キリスト教・回教等と等価に置き、それらは各民族それぞれの特性にもとづいて樹てられた治国安民の道を説くものであるとして、儒教への相対的な価値認識を表明している。一方、備中の人西山拙斎は、この南秋月・元玄川との接触によって徂徠学から朱子学へ転向している。〉 ○9月、永富独嘯庵『漫遊雜記』刊。亀井南冥序。 ○9月21日、伊藤澹斎歿、66才。長門国出身の儒者伊藤好義斎の養子。室鳩巢門下。 ○10月、撫育方設置。 ○滝鶴台、渡り口(現萩市)に居を移したのはこの年か(『鶴台遺稿』卷九、奈古屋大夏宛書牘第五書参照)。 ○滝鶴台「錦溪小田君碑陰文」この年か。(『鶴台遺稿』卷七)。 ○林東溟、京都四条高倉の家に頼春水の訪問を受ける。	

年	区分	記	事
宝 明 曆 和 14 元 (6 / 2) ・ 甲 申	防 長		<p>○本城紫巖「次秦士熊贈韓客歌行之韻」(『紫巖遺稿』)。秦士熊は秦高山。</p> <p>○青木葵園「双鶴歌和子光次秦士熊韓客歌行之韻」(『葵園遺稿』)。</p> <p>○中村梁山「西村意真墓誌」この年か。</p> <p>○藩主毛利重就夫人立花氏、賀茂真淵より『古今和歌集』の講義を受ける。夫人の侍女野村弁子<small>よめいこ</small>も一緒に聴講し、講述を筆記する(明和元年冬)。それは後に上田秋成の補訂を経て『古今和歌集打聴』として寛政元年(1789)に刊行された(岩波『日本古典文学大辞典』)。</p>
	参 考		<p>○2月、『古今図書集成』持渡る。</p> <p>○大坂にて朝鮮信使随員訓導崔天守、小通事鈴木伝蔵に殺害される事件起こる。</p> <p>○8月、細井平洲『嚶鳴館詩集』6巻3冊刊。滝鶴台序(『鶴台遺稿』巻五)。鶴台・秋山玉山・澁井太室・木村蓬萊が批点を附す。当時この詩集は非常に好評を博す。</p> <p>○11月2日、根本武夷歿、66才。</p> <p>○11月、細井平洲、上杉鷹山の師となる。薬科松伯の推挙による。</p> <p>○荻生徂来『古文矩』刊。宇佐美瀧水序。</p> <p>○『歐陽文忠公文集』刊。皆川淇園等校。</p>
明 和 2 ・ 乙 酉	防 長		<p>○1月24日、滝鶴台、新知40石の外にその身一代60石加給計100石で長州藩譜代に取り立てられる。</p> <p>○2月3日、滝鶴台、出府の為萩発足。京都にて林東溟宅に止宿。途次、桑名の南宮大湫の家に宿る。3月1日江戸着。三十間堀藩邸に入る。藩世子の学問手蹟指南となる。</p> <p>○3月、仲子岐陽、参勤に従って出府。</p> <p>○5月、林東溟、旧門人北革汀の墓誌を撰す。</p> <p>○和智東郊『和智東郊座右記』この年成るか。記中に徳川家康150回忌に言及し“此明和二年酉ノ四月十七日云々”の文字が見える。</p> <p>○6月23日、和智東郊歿、63才。元禄16年(1703)生。 〈滝鶴台「東郊和智君墓誌」(『鶴台遺稿』巻七)〉</p> <p>○7月6日、滝鶴台、藩主重就の側儒となる。</p>

年	区分	記	事
明和2	防	<ul style="list-style-type: none"> ○本城菜巖、参勤に従って出府。青木葵園とともに滝鶴台に師事。 ○滝鶴台、細井平洲の推挙により上杉鷹山に師として招かれる。(又は明和4年か)。鶴台と平洲の交流については平洲の「嚶鳴館遺稿」参照。 ○国重竜原(16才。後に佐々木姓)、都濃郡鹿野より萩に出て明倫館に入学。 ○烏田智庵(貫通)、薬園役となり、3月、河添薬園(後に南苑に発展)へ一家で移る。 ○『長門癸甲問答』2巻2冊刊。山根華陽序(『華陽文集』巻六)。 ○田坂瀾山『瀾山詩集』6巻3冊刊。服部南郭・滝鶴台序、山根華陽跋。 ○小田村酈山「益田君墓誌名」(『酈山集』)。益田君は益田広堯。 	
	長		
乙酉	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○5月28日、入江南溟歿、88才。 ○9月、片山北海、大坂に混沌社を結成。(片山北海は宇野明霞の高弟)。 ○小野蘭山・島田充房『花叢・木部』刊。 ○多紀元孝(藍溪の父)、江戸神田佐久間町に躋寿館を開塾。寛政改革の時に幕府の医学校となる。 ○鷹司輔平(毛利重就の女婿)、東照宮百五十年祭の勅使として江戸下向。小沢蘆庵随従。輔平、長州江戸藩邸を訪問。蘆庵、江戸にて鷹司家出仕を止められる。 ○『照世盃』和刻刊。 	
明和3・丙戌	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、林東溟『明詩礎』再板。 ○3月5日、永富独嘯庵歿、35才。享保17年(1732)生。 <small>〈小田亨叔「独嘯庵先生行状」〉</small> ○7月、滝鶴台「大湫詩集序」(『鶴台遺稿』巻五)。大湫は南宮大湫。 ○8月23日、小田村酈山歿、64才。元禄16年(1703)生。 <small>〈山根華陽「酈山田君墓碣」(『華陽文集』巻八)〉</small> <small>〈山根南溟「哭酈山先生二首」(『南溟詩集』巻三)〉</small> ○11月、窪井鶴汀『古訓輯要』刊。 	
長			

年	区分	記	事
明 和 3 ・ 丙 戌	防 長	○12月3日、中村九郎兵衛(梁山)、一代儒者兼業となる。 ○本城紫巖、江戸より徳山に帰る。 ○中村玄与・玄春父子在江戸。	
	参 考	○3月、荻生徂来『徂徠先生素問評』刊。宇佐美瀧水編。天愚孔平(萩野鳩谷)跋。萩野鳩谷は松江藩士、宇佐美瀧水門下。 ○荻生徂来『絶句解拾遺』刊。宇佐美瀧水校。五絶句解拾遺・滄溟七絶句解拾遺・弁州七絶解とから成る。初刊享保18年。 ○6月、陶山南溥歿、67才。元禄17年(1704)生。 ○頼春水、片山北海の混沌社に加わる。 ○大田南畝、松崎観海(太宰春台門)に入門はこの年か。 ○多紀藍溪、隣寿館学頭となり井上金峨を学頭とする。 ○都賀庭鐘『繁野話』刊。 ○五井蘭洲『非物篇』成る。明和3年中井竹山序。蘭洲の原稿を竹山と中井履軒が整理したもの。徂来批判書。(大阪大学懐徳堂文庫復刻刊行会『懐徳堂文庫復刻叢書』) ○『明詩擢材』刊。	
明 和 4 ・ 丁 亥	防 長	○春、本城紫巖、参勤に従って出府。 ○8月、山根華陽「御家誠序」。『御家誠』(毛利家文庫3公統に所収の『御教戒』)は、藩主重就の命により元就・隆元・輝元の遺文(手紙等)から日常の誠めとなるものを選録したもの。 ○9月、奈古屋大夏「漏卮堂記」。漏卮堂は奈古屋大夏の書齋名。 ○9月8日、栗山孝庵(文仲)、藩主重就の侍医となる。 ○9月、越氏塾を藩校明倫館の分館として再興する。明倫館儒官1人が輪番で出講する。(越氏塾の再興にあたり、山根華陽が藩命によって三田尻に赴き越氏塾の学規を制定した。時に華陽は72才。奈古屋大夏は華陽の萩出足にあたって送別詩五首を餞けとした。それに応えた華陽の詩は『華陽文集』巻四に載る。 <山根華陽「復田子逸」(『華陽文集』巻十、田子逸宛第二書)。田子逸は華陽の弟子の飯田居謙。> ○10月、奈古屋大夏「受嗤堂記」受嗤堂は山田産卿の書室名。	

年	区分	記 事
明和4 ・ 丁亥	防 長	<p>○滝鶴台「徂徠先生医言序」(『鶴台遺稿』巻五)。 ○中村玄春「徂徠先生医言序」。中村玄与「徂徠先生医言跋」。 ○滝鶴台、井土良(窪井鶴汀)宛書牘(『鶴台遺稿』巻九、鶴汀宛第四書)。鶴汀の書『古訓輯要』を贈られたことへの礼を述べ、林東溟が近頃江戸にやってきたがすぐに京都へ帰ったことを報じている。窪井鶴汀は当時京都に住んでいた。</p>
	参 考	<p>○7月、田沼意次、側用人となる。 ○8月、山県大弼(43才)・藤井右門(48才)死刑となる。明和事件。 ○秋、大田南畝、始めて平賀源内に会う。 ○9月、大田南畝(19才)『寐徳先生文集初編』刊。 ○11月8日、岡白駒歿、76才。 ○12月、竹内式部、三宅島にて歿、56才。 ○荻生徂来『医言』刊。 ○宇佐美瀧水『絶句解考証』刊。 ○中井竹山『非徴』成る。天明4年(1784)刊。徂来『論語微』を批判する。 ○萩野復堂『東藻会彙纂略』刊。 ○南宮大湫(40才)、江戸に出て日本橋樽正町に居を構えて教授す。(森鷗外『伊澤蘭軒』)。</p>
明和5 ・ 戊子	防 長	<p>○5月14日、烏田智庵(2代目)歿、80才。 ○山根華陽「海北君五十寿序」(『華陽文集』巻六)。海北君は右田毛利広定(藩主重就の実兄)。 ○滝鶴台「公族海北君五十寿序」(『鶴台遺稿』巻五)。 ○秋、奈古屋大夏「香化堂記」。香化堂は徳山藩士奈古屋子信の書室名。 ○12月、奈古屋大夏「賀芙蓉師住持養学院序」。 ○奈古屋大夏「紀僧玄活事」。玄活は山口の大通院の僧。 ○「三都学士評林」刊。滝鶴台は“江戸之巻”の詩文家の部で巻頭の極上上吉、林東溟は“京都之巻”で詩文家の部に清田儋叟・那波魯堂等と上上吉にランクされている。</p>

年	区分	記 事
明和5・戊子	参考	<p>○8月22日、大潮歿、91才。延宝6年(1678)生。</p> <p>○江村北海『日本詩史』成稿。(明和7年10月、江村北海「日本詩史凡例」)。</p> <p>○戸崎淡園『唐詩聯材』刊。(唐詩の語として擬古詩に常用されたものを集める。『唐詩礎』と同じような内容)。</p> <p>○『尚書大全』刊。</p> <p>○『湘中八雄伝』刊。水滸伝の翻案物。作者は根本武夷か。</p> <p>○『笑府』訓訳本刊。</p>
明和6・己丑	防長	<p>○2月5日、桂広保歿、82才。</p> <p> <山根華陽「長藩大夫南野桂君墓碣」(『華陽文集』巻八)></p> <p>○春、滝鶴台「華陽先生文集序」(『鶴台遺稿』巻五)。</p> <p>○滝鶴台、拝崎相如宛書牘(『鶴台遺稿』巻八)。</p> <p>○滝鶴台、昨年冬より脚氣を患って歩行困難になっていたが、この年6月頃快癒す。</p> <p>○2月11日、山根華陽の文集出版に対し、及び前藩主宗広以来の精勤に対する慰労として藩より金三十両下附される(『毛利十一代史』)。</p> <p>○2月、『防長古器考』編纂に着手。小笠原長鑑・林以成編。図は雲谷等叔。安永3年(1774)6月完成。</p> <p>○3月、栗山孝庵(文仲)参勤に従って出府。</p> <p> <奈古屋大夏「送栗山文仲之東都序」></p> <p>○夏、栗山孝庵「華陽先生文集跋」。</p> <p>○8月、吉田文献「済洲山根君遺稿叙」。</p> <p>○9月、奈古屋大夏「浦子徳別号説」。</p> <p>○9月24日、穴道朝陽(広慶)歿、54才。連歌を能くする。</p> <p>○10月か、滝鶴台、上杉鷹山宛書上(米沢郷土館蔵)。鷹山初入部にあたり、藩主としての心構えを説いたもの。</p> <p>○10月14日、有馬喜三太歿。</p> <p>○窪井鶴汀歿。</p> <p>○有吉高陽(公甫)、江戸に出て滝鶴台に師事する。</p> <p>○本城紫巖、江戸より徳山に帰る。</p>

年	区分	記 事
明和6・己丑	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○清田僊叟『唐土行程記』刊。寛政年間に『通俗漂海記』と改題して再刊。 ○銅脈先生『太平楽府』刊。 ○江戸で娘評判記盛行。水茶屋娘や町芸者の評判を記す。
明和7 . 庚寅	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○滝鶴台、拝崎相恕宛書牘(『鶴台遺稿』巻八、拝崎宛第二書)。 ○滝鶴台「画藪序」(『鶴台遺稿』巻五)。『画藪』は宋紫石著『古今画藪』のこと。 ○滝鶴台、井子章(澁井太室)宛書牘(『鶴台遺稿』巻八、太室宛第一書)。鶴台の藩政担当者及び藩政への批判が吐露されている。安藤紀一は、鶴台が江戸出発前に書いたものとする。 ○6月、滝鶴台、明倫館振興に取り組む為江戸より萩に帰る。(「題徂徠先生真蹟後」『鶴台遺稿』巻七)。「学校興立仕法書」をまとめる。 ○6月21日、奈古屋大夏、藏元兩人役を免ぜられ、閏6月5日、目付役となる。 ○閏6月5日、山根華陽隠居。その身一代米25俵を給せらる。 ○中村梁山、滝鶴台に代わって世子治親の侍続となり、江戸に出る。 ○8月、山根華陽「五層城楼再修記」(『毛利十一代史』)。 ○9月12日、滝鶴台、藩主重就と面談中発病して倒れ、以後寝たきりとなる。 ○9月、有吉高陽、南苑の監吏となる。高陽はこの年萩に帰る。 ○9月、山根華陽「重建太祖神廟記」(『毛利十一代史』)。毛利元就を祭り、仰徳大明神と称した神社の記。 ○11月29日、三戸養因歿、86才。岩国の狩野派画家。 ○山根華陽『華陽先生文集』刊。滝鶴台序。 ○奈古屋大夏「寿節軒八十八敘」。節軒は栗屋姓。 ○蘭鮑亭「虚実見聞記序」。 ○南部伯民生。～文政6年(1823)。

年	区分	記	事
明和7・庚寅	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○尾藤二洲 (24才)、大坂に出て片山北海の門に入る。 ○『嚮風草』初版刊。安達清河 (服部南郭門) の市隠グループの詩集。 ○宋紫石『古今画藪』刊。翌8年にかけての刊行。滝鶴台序。 ○宇佐美瀧水校訂『王注老子道德経』和刻刊。河上公注本に対立する王弼注本。いわゆる『老子』の明和本といわれるもの。 ○『蕩子筌枉解』刊。 	
明和8	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月6日、朝枝文孟歿、69才。連歌師。 ○2月、奈古屋大夏「東郊先生文集跋」。 ○2月晦日、“儒者二人医師三人絵師二人役者三人、為稽古江戸被差越候面々月別御扶持方老人銀拾七匁充、十二月ニ老度銀貳百匁被立下候。右の外ニ儒医の儀は壹ケ年ニ金貳両宛被下候。” ○滝鶴台、細井平洲宛の手紙を栗山孝庵に託す。孝庵、3月に出府。4月に届けたが平洲は既に米沢へ出発した後であった。 ○8月、秦嵩山「波田守節墓碑銘」。 ○12月28日、山根華陽歿、75才。元禄10年 (1697) 生。 <ul style="list-style-type: none"> 〈本城紫巖「奉哭華陽先生」(『紫巖遺稿』)〉 〈秦嵩山「華陽山根先生墓誌銘」〉 ○小田享叔 (済川)、萩に来て明倫館に入学。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○春、伊勢お蔭参り盛行。 ○3月、前野良沢・杉田玄白等江戸千住小塚原にて死刑囚の死体解剖を見る。 ○4月、細井平洲 (44才)、上杉鷹山に招かれて米沢に赴き、一年間滞在。 ○南宮大湫 (44才)、樽正町より八町堀牛草橋に移る。その家塾を晴雪楼という。 ○荻生徂来『皇朝正声』刊。 ○江村北海『日本詩史』5巻刊 (岩波『日本古典文学大辞典』による)。巻五で長州藩山県周南門統に言及している。 ○(明) 宋応星『天工開物』和刻刊。中国にて康熙12年 (1673) に刊行されたもの。和刻本は送り仮名を付けて読み易くしてある。 	

明和9・安永元(1772)～安永2(1773)

年	区分	記	事
明安 和永 9元 (11 /16) ・ 壬辰	防		○1月、奈古屋大夏「贈廻神屯序」。 ○2月29日、江戸大火。桜田・新橋の長州藩邸焼失。 ○4月、滝鶴台宛細井平洲書状。上杉鷹山の藩主としての言動を伝え、これは鶴台の薫育の結果であると述べている。また秋山玉山墓碑銘の撰文を頼んできている。
	長		○小田村藍田「明倫館祭酒鹿門先生七十寿序」(『藍田小田村先生集』)
安永2・癸巳	参		○10月20日、佐藤一斎生。～安政6年(1859)。 ○10月、金竜道人「明七才子詩集掌故序」。 ○宇野明霞『文語解』刊。 ○宇野東山『古文尚書標注』刊。
	考		○『儒医評林』刊。滝鶴台は詩文家の部で巻軸に真上上吉として挙げられている。巻頭は大内熊耳。ともに最上級に置かれ、南宮大湫・安達清河・伊藤藍田・戸崎淡園・入江北海等は上上吉に置かれている。 ○田沼意次、老中となり側用人格を兼ねる。
安永2・癸巳	防		○1月24日、滝鶴台歿、65才。 〈澁井太室「滝鶴台墓誌銘」〉 〈滝高渠「鶴台行状」(『鶴台遺稿』に収まる)〉 ○3月10日、林東溟、金竜道人と共に江村北海の60歳賀寿宴に出席する。 ○閏3月1日、奈古屋大夏、目付役を免ぜられる。 ○6月、三浦瓶山(名は衛興。山県周南門。石見の人)富山藩広徳館学頭となって江戸より富山へ移住。 ○7月、奈古屋大夏「東里随筆序」。『東里随筆』は波多野東里の著。 ○7月、奈古屋大夏「寿木梨君六十序」。木梨君は木梨恒通のこと。 ○11月、奈古屋大夏「瀾陵印譜序」。『瀾陵印譜』は長井君茂著。君茂は長井俊卿の次子。
	長		○奈古屋大夏「橋松園記」。橋松園は光阿上人の庵の在るところ。 ○奈古屋大夏記「竜峰搜捕録」。大寧寺住職竜峰の逮捕記録。大寧寺と藩と東照宮所在をめぐる対立し、竜峰は無届で寺を出奔したものの。 ○小田村藍田「奉送長丘桂君之東都序」(『藍田集』)。長丘桂君は桂広訓。 ○滝高渠、世子治親の侍読となる。

年	区分	記	事
安永2・癸巳	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、『明七才子詩集掌故』刊。 ○8月11日、亀井昭陽生。～天保7年(1836)。 ○9月22日、吉益東洞歿、72才。 ○堀南湖校訂『五代史』刊。 	
安永3・甲午	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○6月、『防長古器考』成る。小笠原長鑑・林以成編、雲谷等叔画。 ○越氏塾へ明倫館よりの儒者派遣を止め、越氏塾会頭役飯田楽軒(山根華陽の弟子)を儒役に選任する。 ○林東溟、在江戸。 ○9月、上杉鷹山「鶴台先生遺稿序」。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○7月29日、冷泉為村歿。近世中期最大の堂上歌人。享保期以降、江戸に幕府高官を中心として冷泉派を構成。毛利重就の和歌の師。 ○江村北海『日本詩選』刊。(岩波文庫本西沢道寛解説による。岩波『国書総目録』は安永2年刊とする)。同書続編は安永8年(又は同7年)刊。(明和8年の記事参照)。 ○大典『唐詩集註』刊。 ○皆川淇園『問学挙要』刊。 ○杉田玄白・前野良沢等『解体新書』刊。 ○玩世道人『増訂唐詩礎』刊。 ○(清)沈炳震撰『唐詩金粉』刊。 ○『唐土真話』刊。(『石點頭』の一話を浮世草子風に訳したもの)。 	
安永4・乙未	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○2月、小倉鹿門「重修靈椿山経蔵記」。 ○2月、小倉鹿門、病気のため明倫館学頭を辞す。繁沢豊城・山根南溟の二人、明倫館学頭座勤務となる。 ○3月、片山鳳圃『鈞天余韻』成る。 ○中村梁山、江戸に出て世子の侍読として再動。 ○5月、豊後の医師泉簡、栗山文仲宛書牘。栗山文仲在江戸。泉簡は山脇東洋の診察と処方の実例を記録して本として刊行したい意志を持っており、東洋の弟子である文仲に、その見聞するところを記してほしいと依頼してきたものである。 ○8月、奈古屋大夏「賢己堂記」。 	

年	区分	記	事
安永4・乙未	参考	<p>○5月、藪孤山『崇孟』刊。反徂徠学の書。特に太宰春台「孟子論」(『斥非』附録)に対する反論。</p> <p>○藪孤山、京・大坂に遊学中井竹山・頼春水・篠崎三島と交わる。</p> <p>○古賀精里、佐賀から大坂に上る。</p> <p>○10月、細井平洲「鶴台先生遺稿跋」。</p> <p>○江村北海『明七才子詩集訳説』刊。</p> <p>○首藤水晶編『日本名家詩選』刊。</p> <p>○呉山編『物類称呼』刊。全国方言辞典。</p> <p>○12月23日、松崎観海歿、51才。享保10年(1725)生。</p>	
安永5	防長	<p>○林東溟、3月刊の『平安人物志』に、学者の部初丁三番目に載せられる。</p> <p>○7月、奈古屋大夏、正燈院より借覧の『古今事文類聚』を返却する。</p> <p>○8月、奈古屋大夏「熊毛部分合記」。</p> <p>○10月20日、小倉鹿門歿、74才。 〈林東溟「小倉鹿門墓誌」〉</p> <p>○12月、長富順軒、宝蔵付絵師となり雲谷等愷を称す。高13石7斗5升。</p> <p>○奈古屋大夏「奉寿佐世相君六十序」。佐世相君は佐世六郎左衛門広嘉。</p>	
丙申	参考	<p>○4月28日、大内熊耳歿、80才。大内熊耳は田中江南・立原翠軒を通じて徂徠学が水戸藩へ伝播する力となった。宇佐美瀧水とともに徂来門下最後の重鎮であった。</p> <p>○4月、上田秋成『雨月物語』刊。</p> <p>○8月9日、宇佐美瀧水歿、67才。宝永7年(1710)生。</p> <p>○中井竹山『詩律兆』刊。</p> <p>○『巖滄浪先生詩集』和刻刊。</p>	

年	区分	記	事
安永6 ・ 丁酉	防	<p>○7月、奈古屋大夏「摘疎齋記」。摘疎齋は粟屋子貫の別邸。</p> <p>○7月2日、青木葵園歿、32才。延享3年(1750)生。</p> <p>〈役藍泉「亡友和卿行状」(『藍泉文集』)。和卿は青木葵園の字。〉</p> <p>○9月、役藍泉「葵園遺稿序」(『藍泉文集』)。</p> <p>○秋、奈古屋大夏「贈能美由庵序」。</p> <p>○11月、奈古屋大夏「勝田生字謙卿説」。</p> <p>○12月、奈古屋大夏「紀岡本勝方繼絶世事」。</p> <p>○奈古屋大夏「連歌両吟序」。(『連歌両吟』は安永6年6月から7月にかけての大夏と能美以成との200韻付合せである。能美以成は通称吉右衛門、俳号桃李亭梨郷)。</p> <p>○滝高渠「日記」残欠。安永6年～天明3年6月。</p> <p>○「山代温故録序」(『山代温故録序』は小幡正藏著)。</p>	
	参 考	<p>○尾藤二洲『素餐録』成る。反徂徠学の書。</p> <p>○田中江南『絶句解国字解』刊。</p> <p>○川合春川『詩学選丹』刊。漢詩入門書。</p> <p>○『尚書註疏』和刻刊。(『十三経註疏』のうち。万暦15年(1587)刊の北藍本による)。</p>	
安永7 ・ 戊戌	防 長	<p>○3月、奈古屋大夏(77才)「千里亭記」。千里亭は末国次郎右衛門胤親伯民の亭。</p> <p>○5月、奈古屋大夏「贈国府県令上山生序」。上山生は上山三郎右衛門泰照。</p> <p>○5月、小田村藍田「祭嫡妻真如氏及嫡女阿難文」(『藍田集』)。</p> <p>○7月、滝鶴台「鶴台先生遺稿」刊。10巻5冊。上杉鷹山序、細井平洲・秦兼虎跋。</p> <p>○7月28日、片山鳳翮「与蘆城先生」(『鳳翮集』巻十一)。</p> <p>○8月、『鶴台遺稿』出版経費として滝高渠へ藩主より銀50枚下賜。</p> <p>○8月、奈古屋大夏「紀大忍法印重修正法寺之事」。厚狭郡松嶽山正法寺のこと。</p> <p>○8月21日、坂西山(仲礼)歿、34才。徳山の漢詩人。</p> <p>○秋、山根南溟「連歌両吟序」。</p>	

年	区分	記	事
安永7・戊戌	防長	<p>○10月1日、高洲平七就志記『御国政再興記』第一成る。藩主重就の藩政改革の事蹟を顕彰したものの。</p> <p>○10月26日、滝高渠、江戸を発し、11月24日萩帰着。</p> <p>○奈古屋大夏「紀林子遜改作旧宅事」。林子遜は林孫兵衛以成。</p> <p>○秦兼虎(嵩山)、益田就祥に従って出府。</p> <p>○6月12日、小田雲同歿。長府藩医。小田亨叔の義父。</p> <p>○森脇惟右歿、79才。岩国の神道家。</p> <p>○吉敷郡秋穂の青江浜で、始めて製塩の燃料に石炭を使用する。</p>	
	参考	<p>○3月3日、南宮大湫歿、51才。大湫の弟子泉豊洲は細井平洲に従学し、後に平洲の女婿となる。</p>	
安永8・己亥	防長	<p>○3月、滝高渠、参勤に従って出府。翌年3月萩に帰る。</p> <p>○本城紫巖、徳山藩主参勤に従って出府。翌年徳山に帰る。</p> <p>○3月、法岸、大日比西円寺の住職となる。</p> <p>○3月、藩政府、明倫館学業振興の為の訓令を出す。明倫館への出席者が減少し教育が低迷しているので、人材育成の為に藩士の向学心をたかめ就学者の増加を図って、今後は出席の多い者及び学業良好の者を毎年報告させ、将来役人任用の際その中から選抜することとする。これは役人の質が低下して勤務上支障が生じるようになったことへの対策でもあった。このように明倫館が衰微して学問や武芸を怠る者が増えたのは、永年にわたる過重な馳走米が藩士の生計を圧迫している結果であると藩政府も訓令の中で認めている。(['毛利十一代史'])</p> <p>○4月24日、藩の重役邸で役人を対象に経書の講積が月例行事として行われていた状況を伝える『御当職所日記』記事。“当御留守中(藩主が参勤で国元を留守にしている期間)も於御宅(当職益田越中就祥の屋敷を指す)例月十四日講積有之筈候処、過ル十四日三百部御祈禱内ニ付延引ニて、今夕飯後繁沢権右衛門(豊城のこと)佐々木源六罷越講積有之候。李家九市郎殿(裏判役)を始御手子中其外御藏元諸役人聴聞ニ罷出候事”。</p> <p>○9月2日、滝高渠、藩主側儒となる。</p>	

年	区分	記	事
安永8 ・ 己亥	防	<p>○9月12日、吉田以忠歿、41才。書家。</p> <p>○10月、奈古屋大夏「紀遊佐自寛終焉之事」。遊佐自寛は名は直茂、字徳卿。</p> <p>○11月7日、山県十藏(寸身軒)歿、75才。弓術家。武芸を能くする。</p> <p>○11月、奈古屋大夏「寿逆法禪師六十序」。逆法禪師は萩の海潮寺住職、諱良遂。</p> <p>○12月、役藍泉「贈片北海序」(『藍泉文集』)。片北海は片山北海。</p>	<p>○国重竜原(のち佐々木姓)、萩より鹿野へ帰る。</p> <p>○越氏塾、三田尻上ノ町へ修築移転(3月か)。4月1日より稽古初。</p> <p>○役藍泉「幽蘭社詩稿序」(『藍泉文集』)。幽蘭社は藍泉を中心とした徳山の詩社。</p>
	参考	<p>○塙保己一、『群書類従』の編纂に着手。</p> <p>○山本北山『作文志般』刊。反徂徠学の書。</p> <p>○亀田鵬斎『論語撮解』成る。</p> <p>○12月18日、平賀源内、獄中で病死、52才。享保13年(1728)生。</p>	
安永9 ・ 庚子	防	<p>○6月、田上菊舎、萩の清光寺で出家する。28才。</p> <p>○9月5日、笹山一玄斎歿。狩野派画家。</p> <p>○9月25日、林東溟歿。73才。宝永5年(1708)生。</p> <p>○10月、繁沢豊城・山根南溟、側儒格となり明倫館学頭勤務。</p> <p>○国重(佐々木)竜原、明倫館教授となる。</p> <p>○山田北海、三丘徳脩館教授となる。</p> <p>○片山鳳翮「私擬対策放鄭声一道」(『鳳翮集』巻十)。“礼楽”の“楽”を論ず。</p>	
	参考	<p>○荻生徂来『太平策』、この頃写本で世上に流布する。明和の初め頃は世上に知られていなかったという。(丸山真男『「太平策」考』)。</p> <p>○貝坂陳人『政談広義』刊。徂来『政談』の注釈書。</p> <p>○三浦瓶山、富山藩近習頭となる。禄120石。</p> <p>○『芥子園画伝』和刻刊。</p> <p>○12月27日、頼山陽生。～天保3年(1832)。</p>	

年	区分	記	事
天 明 元 10 元 (4 / 2) . 辛 丑	防	○2月、田上菊舎、美濃に赴き大野傘狂に入門、一字庵の号を受く。 ○2月23日、雲谷等仲(聴松庵箇枕)歿、62才。 <祖養「原箇枕碑銘」(山本勉弥『萩俳諧史』)>。 ○3月、奈古屋大夏「寿三浦雲伯六十」。 ○9月、奈古屋大夏「謹白嘉賁」。大夏の絶筆。中屋惣右衛門組の吉郎左衛門の事を記す。 ○10月13日、奈古屋大夏歿、80才。 <山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」>	○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」 ○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」 ○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」
	長	○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」 ○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」 ○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」	○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」 ○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」 ○山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」
天 明 2 . 壬 寅	参	○1月9日、湯浅常山歿、74才。宝永5年(1708)生。 ○伊東亀年(藍田)『学則并附録標註』刊。伊東亀年は荻生金谷の弟子。 ○『袁中郎尺牘』刊。山本北山閱。 ○江村北海「授業編序」。天明3年刊。	
	考		
天 明 2 . 壬 寅	防	○2月8日、香取太華歿、62才。長府藩医。 ○8月、『御国政再興記』第二成る。藩主重就の意向により第一に続いて書かれたもの。重就がその施政に対する批難への抗弁として書かれた。『毛利十一代史』所収。 ○8月28日、藩主重就隠居し、治親襲封。治親夫人は田安宗武女で、松平定信の姉。 ○秋、山根南溟「大原奈古屋翁墓誌銘」。 ○12月、片山鳳翽、吉敷毛利就兼の命により従来の『太平策』を写す。その後記に“猶且疑フベキコトアリトイエドモ善本の按ずべき無ければ姑く疑いを存じて以て後賢の是正を待つ”とあって、防長の地の『太平策』の流布状態が知られる。	
	長	○秦兼虎、益田就祥に従って出府。 ○小田亨叔(済川)、長崎に遊学。 ○瀬戸内、九州など大荒凶。	

年	区分	記 事
天明2・壬寅	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月8日、金竜敬雄歿、71才。 ○4月11日、広瀬淡窓生。～安政3年(1856)。 ○5月25日、会沢正志齋生。～文久3年(1863)。 ○中井竹山(53才)、懐徳堂第四代学主となる。 ○大田南畝「三春行楽記」(天明2年正月から3月までの日記)。 ○『大東詩集』刊。徂来門流の明和・安永期の詩作を収める。
天明3・癸卯	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○2月29日、山県棠園歿、65才。享保4年(1719)生。 ○3月14日、滝高渠、江戸より萩へ帰着。 ○3月20日、小野春庵歿、43才。医家。 <ul style="list-style-type: none"> 〈滝高渠「小野春庵墓誌」〉 ○9月24日、中村牛荘生。～明治2年(1869)。 ○片山鳳翽、吉敷毛利就兼に従って出府。 ○草場大麓(安世)「岡部正昭墓誌」。
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○2月4日、近松半二歿、59才。 ○2月、大坂で米価騰貴、米買占めにに対し打ちこわし起る。 ○7月、浅間山大噴火する。死者2万人。 ○江村北海『授業編』刊。天明元年自序。山県周南・林東溟等へ言及している。 ○山本北山『作詩志毅』刊。徂徠学派の詩を激烈に非難している。 ○司馬江漢、日本で最初の銅版画制作に成功する。 ○市川白猿、江戸中村座で代々団十郎では初めて大星由良之助を演じる。それを祝賀して『皆三升扮戯大星』という狂歌集を刊行。 ○冷害の為に諸国大飢饉。奥羽地方餓死者多数。天明の大飢饉始まる。
天明4・甲辰	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、能美吉右衛門以成『藏櫃録』成る。自らの役人時代の回顧録であるとともに長州藩宝暦改革 — 藩主重就の政治路線への批判の書である。 ○有吉高陽、清末藩主毛利匡邦に招かれる。

年	区分	記	事
天明4・甲辰	参考	○五井蘭洲『非物編』刊。反徂来の書。享保～元文年頃に書かれたか。 ○中井竹山『非徴』刊。反徂来の書。 ○佐久間熊水『討作詩志毅』刊。山本北山の『作詩志毅』への反撃の書。 ○戸崎淡園『箋註唐詩選』刊。 ○諸国飢饉激烈、農民流亡し農村荒廃。	
天明5・乙巳	防長	○4月17日、秦兼虎(嵩山)歿、51才。享保20年(1735)生。須田益田家の儒臣。郷校育英館教授。秦守節の弟。山根華陽・滝鶴台の弟子。 〈役藍泉「益田宰秦嵩山碑銘」(『藍泉文集』)〉 ○5月9日、徳山藩校鳴鳳館創立。本城紫巖(59才)・役藍泉教授となり学規・学則を定める。「鳴鳳館学制」。(役藍泉『藍泉文集』中の「学範」はこの時のものか)。徂徠学を貞幹とするが、学に内外はないので他学を廃せずとしている。しかし藍泉の「学範」は、より徂徠学を強く打ち出したものになっている。 ○9月24日、井上桐華歿、71才。書家。 ○9月、吉田文献(山根華陽の弟子)越氏塾督学となる。(近藤清石『防長人物誌』による。或いは天明8年か)。 ○有吉高陽、手廻組に編入される。	
	参考	○3月23日、清田僑叟歿、67才。享保4年(1719)生。 ○6月29日、芥川丹邱歿、76才。宝永7年(1710)生。	
天明6・丙午	防長	○3月16日、宮庄親輔歿、84才。岩国吉川家家老。『巖邑誌』の著者。 ○9月4日、中山又四郎(号玉山、字季有)歿、48才。山県周南第五子。 〈中村梁山「中山玉山墓碑」〉 ○本城紫巖、六十歳寿賀。	

年	区分	記	事
天明6 ・ 丙午	参	<ul style="list-style-type: none"> ○3月11日、宋紫石歿、72才。 ○7月、関東大水害。江戸、諸物価高騰。全国的に米価高直。 ○8月、田沼意次、老中を罷免される。 ○立原翠軒、水戸藩彰考館総裁となる。翠軒が彰考館に奉職したのは宝暦13年、20歳。 ○雨森芳洲『橘窓茶話』刊。 ○室鳩巢『大学章句新疏』刊。 	<ul style="list-style-type: none"> ○三浦梅園『詩轍』刊。 ○都賀庭鐘『莠句冊』刊。 ○林子平『海国兵談』成る。
	考		
天明7 ・ 丁未	防	<ul style="list-style-type: none"> ○清末藩校育英館創立。教授片山鳳翽。鳳翽、学規・学則を定める。 ○9月27日、有吉高陽歿、47才。 <ul style="list-style-type: none"> 〈片山鳳翽「高陽有吉先生遺髪冢碑」(『鳳翽集』巻九)〉 ○9月、片山鳳翽『鳳翽雜記』成る。 ○11月19日、飯田楽軒歿、52才。越氏塾督学。(近藤清石『防長人物誌』は天明4年歿とする)。 ○11月28日、栗山孝庵・同玄厚(孝庵の養孫)等、萩郊外大屋刑場にて罪人備中文助の屍体を解剖、図誌を作る。 	
	長		
天明7 ・ 丁未	参	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、米価高騰し、大坂・江戸で打こわしが起る。大坂で米1石銀250匁、江戸で金1両で米1斗6~7升となる。8月になって米価下落にむかう。 ○6月、松平定信、老中首座となる。 ○10月、市河寛斎、江湖詩社を結成。 ○六如上人『葛原詩話』刊。 ○祇園南海『詩訣』刊。 ○尾藤二洲『正学指掌』刊。二洲の著『素餐録』で説いたところを、初学者向きに和文で書いたもの。 ○本居宣長『秘本王くしげ』成る。 ○『群書治要』刊。尾張藩明倫堂による刊行。この版本は後に中国に渡り、阮元の『四書未収書目』に収められた。 	
	考		

年	区分	記	事
天明8 ・ 戊申	防 長		<ul style="list-style-type: none"> ○1月、亀井南冥「鳴鳳館記」。(『徳山市史』資料編下に収録)。 ○6月、役藍泉「南冥集序」(『藍泉文集』)。南冥は亀井南冥。 ○12月14日、聴松庵古竹歿。聴松庵第二世。 ○永富独嘯庵『黴瘡口訣』刊。 ○豊浦懐(被褐道人)『老子道德経妄言』2巻成る。豊浦懐は長門の人。字子玉。被褐道人については、西島蘭溪『弊帚詩話附録』参照。
	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○1月、柴野栗山、幕府に登用される。 ○1月23日、古賀侗庵生。～弘化4年(1847)。 ○2月2日、江村北海歿、76才。正徳3年(1713)生。 ○5月、松平定信、大坂に赴き視察。中井竹山に時務への意見を求める。竹山は『草茅危言』を著して定信に提出。(テツオ・ナジタ『懐徳堂』参照)。 ○6月14日、澁井太室(字は子章)歿、69才。享保5年(1720)生。 ○8月、司馬之叟(永富独嘯庵の次男)作「花上野誉石碑」(浄瑠璃。筒井半二と合作)が江戸の肥前座で初演される。 ○『絵本三国志』刊。 ○春、『学者角力勝負附評判』刊。山県周南は西前頭筆頭に置かれる。東前頭筆頭は秋山玉山。因に、大関は熊沢蕃山・新井白石、関脇は荻生徂来・伊藤仁斎、小結は細井広沢・服部南郭である。
寛政元 (1/25) ・ 己酉	防 長		<ul style="list-style-type: none"> ○1月4日、山科太室歿、51才。須佐育英館学頭。秦嵩山及び赤松澹洲の門下。(歿年は吉田祥朔『近世防長人名辞典』による。『阿武郡志』・『防長人物誌』は文化4年とする)。 ○3月、片山鳳翽「送清末侯述職序」(『鳳翽集』巻七)。 ○国重竜原、鹿野より萩に出て再び明倫館都講となる。 ○斎藤方策、京都に上って小石元俊(永富独嘯庵門)に入門。 ○小田村藍田「贈坂君為行相長吏之東都序」(『藍田集』)。坂君は坂九郎左衛門時保。 ○吉田文献、警固方より寺社組に編入。

年	区分	記	事
寛政元・己酉	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○3月14日、三浦梅園歿、67才。享保8年(1723)生。 ○9月11日、那波魯堂歿63才。享保12年(1727)生。 ○2月、荻生徂来『射書類聚国字解』刊。宇佐美瀧水校。 ○片山兼山『古文孝経参疎』刊。 ○荻生徂来『弁名』刊。 ○木下順庵『錦里先生文集』刊。 ○中井竹山「草茅危言序」 ○アイヌの反乱(クナシリ騒動)起る。 	
寛政2・庚戌	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○7月2日、若月太中歿、70才。滝鶴台の弟子。 ○8月10日、小倉宗爾歿、61才。(歿年は吉田祥朔『近世防長人名辞典』による。『阿武郡志』は享和3年とする)。 ○寛政年間、仲東門の私塾楽群堂盛況。“門下濟々、一時城下を傾く”といわれる。明倫館に拮抗するほどであった。仲東門は明倫館都講であった。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、寛政異学の禁令出る。老中松平定信から大学頭林錦峰宛布達。(岩波『日本思想大系・近世後期儒家集』に“寛政異学禁関係文書”が収まる)。 ○9月22日、片山北海歿、68才。享保8年(1723)生。 ○畠中観斎(銅脈先生)『唐土奇談初編』3冊刊。 ○本居宣長『古事記伝』刊行始まる。 	
寛政3・辛亥	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○4月19日、三戸典顕齋歿。岩国の狩野派画家。 ○6月、小田村藍田「送神原道与之東都序」(『藍田集』)。 ○11月15日、栗山孝庵(文仲)歿、61才。享保16年(1731)生。 <ul style="list-style-type: none"> 〈山根南溟「哭栗山文仲」(『南溟詩集』卷一)〉 ○片山鳳翽、参勤に従って出府。 ○中村梁山、藩主斉房の侍読となる。 ○山根南溟、在江戸、藩主側儒となる。 	

年	区分	記	事
寛政3 ・ 辛亥	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○5月17日、尾藤二洲、昌平黌教官となる。 ○6月、荻生徂来『徂徠集』刊。 ○7月、塚田大峯『滑川談』成る。 ○亀井昭陽(19才)、徳山に来て役藍泉に詩文を学ぶ。 ○服部南郭述『唐詩選国字解』刊。 ○尾藤二洲『素餐録』成る。天保7年(1836)刊。 ○林子平『海国兵談』刊。 ○吉田篁墩『論語集解攷異』刊。 ○秋水園主人『小説字彙』刊。白話小説中の語釈。 ○(清)袁枚『随園詩話』舶来。(大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』)。 	
寛政4 ・ 壬子	防 長 参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月26日、滝高渠歿、48才。『高渠先生文集』がある。 〈山県泰道「滝高渠先生墓誌」〉 ○2月、繁沢豊城、明倫館学頭となる。 ○5月、長府藩校敬業館創立。小田亨叔(済川)都講となる。 ○8月、呉(くれ)孟明、清末藩校育英館学頭となる。 ○9月26日、役藍泉宛亀井南冥書状。藩儒(甘棠館学頭)を罷免され閑暇を得ることとなったので『論語語由』の完成に専心できると、畢生の仕事への意欲を示しており、原稿を見せるので意見を述べてほしいと『語由』への序文を依頼している。南冥の悲運に対して、藍泉を中心にした徳山藩士は慰めの為に酒を贈っている。 ○藩、越氏塾を増修築する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、幕府、林子平を禁錮に処し『海国兵談』を絶板とする。 ○古賀精里、昌平黌教官に登用される。給米200俵。 ○11月7日、千葉芸閣歿、66才。秋山玉山の弟子。古河藩儒。 ○閏2月6日、安達清河歿、67才。享保11年(1726)生。服部南郭の弟子。 ○懐徳堂焼失。寛政7年再建。 ○藤田幽谷『正名論』成る。 ○村土玉水編『李退溪書抄』10巻10冊刊。朝鮮の朱子学者李退溪の書を日本に最初に紹介したものとされる。

年	区分	記	事
寛政5 ・ 癸丑	防	<p>○5月27日、役藍泉、詩文師より鳴鳳館教授役再任。(『徳山市史』資料編下)。</p> <p>○8月14日、山根南溟歿、52才。(吉田祥朔『近世防長人名辞典』による)。47才の説あり。</p> <p>　　<片山鳳翽「与楊子筐」(『鳳翽集』巻十二、子筐宛第四書)。></p> <p>○秋、片山鳳翽、萩に來り玉江潮音閣に遊ぶ。(『鳳翽集』巻六)。</p> <p>○11月20日、高洲平七就忠歿、70才。『御国政再興記』の筆者。</p> <p>○小田亨叔(濟川)、長府藩校敬業館教授となる。</p>	
	長	<p>○1月22日、大塩中齋(平八郎)生。天保8年(1837)歿。</p> <p>○6月21日、林子平歿。</p> <p>○7月、松平定信、老中を解任される。</p> <p>○亀井南冥『論語語由』成る。20巻。</p> <p>○12月、亀井南冥、役藍泉宛書状(吉田樟堂文庫『南冥書状』)。『論語語由』の成就を伝え、禁固中の憂憤を訴えている。二人は頻りに書状を取り交わしており、二人の関係を軸に徳山藩士と南冥の間には密接な交流があった。このことは防長における徂徠学を考える上で重要である。この書状の中で南冥は“論語語由一通り成就仕、清書も仕置候へ共誰尋くれ候者も無之候。いつれ古学不向ニ付ての事と慨嘆仕候。此所にて白河公も余程来翁の邪魔を被成候と乍慮外うらめしく御座候”と書いている。</p> <p>○『紅樓夢』9部持渡る。同書は2年前の1791年(乾隆56年)に刊行されたもの。</p>	
寛政6 ・ 甲寅	防	<p>○1月20日、江戸大火。桜田長州藩邸類焼。</p> <p>○5月25日、天倪歿、72才。山口常栄寺住持。白隠の弟子。</p> <p>○9月20日、『長門本平家物語』全20冊を筆写して松平定信に贈る。(安藤紀一『萩史料』)。</p> <p>○12月23日、吉田文献歿、57才。越氏塾督学。山根華陽の弟子。後任督学は脇山陽。</p> <p>○小田村藍田「光雲粟屋君墓碑」。光雲は粟屋舎人正憲。</p> <p>○能美洞庵生。～明治5年(1872)。</p>	長

年	区分	記	事
寛政6・甲寅	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、奥田尚斎「学問源流序」。奥田尚斎是那波魯堂の弟。 ○11月11日、江戸の洋学者、オランダ正月を祝う。 ○振鷺亭『いろは醉故伝』刊。 ○張景星編『宋詩鈔』和刻刊。 	
寛政7・乙卯	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○1月5日、国島京山歿。墓誌銘は亀井昭陽撰文。 ○2月、役藍泉「益田宰秦嵩山碑銘」(『藍泉文集』)。 ○3月、国常棟「南溟詩稿序」。(『南溟先生詩集』)。 ○5月、小川亨叔(濟川)、長府藩校敬業館「生徒訓条」を定める。 ○8月21日、三輪東皐歿、71才。赤間関の徂徠学者。 ○8月27日、林以成歿、76才。『防長古器考』編者の一人。 ○国重竜原、佐々木姓となる。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○7月、円山応挙歿、63才。 ○三浦瓶山歿、71才。山県周南の弟子。富山藩儒。享保7年(1722)生。 ○懷徳堂再建される。幕府、再建費として300両補助する。 ○大田錦城『疑問録』成る。 ○本居宣長『玉勝間』刊行始まる。 	
寛政8・丙辰	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○8月、藩主斉房、明倫館文武振興に関し訓令を発する(『毛利十一代史』)。 ○秋、臼杵太仲、細井平洲に入門。翌9年国に帰る。 ○10月27日、山県東原(少内)、側儒となる。 ○11月、役藍泉「答洛陽村孟中陳情書」(『藍泉集』巻下)。 ○小田村藍田「佐藤君七十寿序」(『藍田集』)。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、古賀精里、幕府の儒官となる。それまでは佐賀藩士籍。 ○伊藤東涯『制度通』刊。享保9年(1724)東涯自序。 ○荻生徂来『訳文室筵後篇』刊。この後篇を徂来の著とするには疑問があるという。 	

年	区分	記	事
寛政9 ・ 丁巳	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、池田瑞仙(岩国出身、医師)、江戸に出て幕府の医官となる。給米200俵。痘瘡治癒を担当。 ○2月、明倫館の居寮生の評価を五科(高足・日進・専心・遊怠・攘斥)に分ち、学業の精励と向上を図る。 ○3月、村田清風(満14才)、明倫館入学。 ○3月、山根南溟『南溟先生詩集』刊。細井平洲「題尾」。 ○6月、片山鳳翽「嘯風館記」(『鳳翽集』巻八)。嘯風館は山口町人安部氏の別邸。 <ul style="list-style-type: none"> ○7月17日、脇山陽歿、37才。山陽は越氏塾督学、飯田棗軒の弟子。後任督学吉武江陽。 ○閏7月15日、山県東原歿、52才。山県周南の孫。『放言漫録』という藩政批判の著書あり。 ○8月、小田濟川(亨叔)「漫遊雜記序」。『漫遊雜記』は永富独嘯庵著。 ○中村華嶽、嫡子雇として出府。 ○小田濟川、江戸に出て藩主毛利元義の侍講となる。江戸にて甥の司馬芝叟と遇うか。翌10年帰国。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○10月、藤田一正『修史始末』成る。水戸藩の史観論争を記す。 	
寛政10 ・ 戊午	防	<ul style="list-style-type: none"> ○11月、片山鳳翽「冬至論」(『鳳翽集』巻八)。 ○中村梁山、藩主斉房に従って萩に帰る。 ○小田濟川、江戸より長府に帰る。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○3月、宇田川裕庵生。 ○6月、本居宣長『古事記伝』完成。 ○(清)林雲銘『楚辞燈』和刻刊。 ○『紀効新書』和刻刊。 	

年	区分	記 事
寛 政 11 ・ 己 未	防 長	<p>○3月、幕府役人羽倉簡堂、俵物調査のため防長巡回。</p> <p>○5月2日、国島嶺南歿、52才。徳山の儒者。</p> <p>○11月、吉田半七（山県太華）、明倫館に入学する。</p> <p>○中村梁山、藩主に従って出府。</p> <p>○能美以成（棋斎）『覚書』成る。諸書よりの抄録及び随想集。以成76才。</p>
	参 考	<p>○那波魯堂『学問源流』刊。</p> <p>○『佚存叢書』刊行始まる。6帙60冊。文化7年、第6帙にて刊行完了。林述斎（天瀑山人と署名）編刊。木活字本。これは1882（光緒8）年、中国においても尤炳奎によって出版された。</p> <p>○大窪詩仏『詩聖堂詩話』刊。</p> <p>○司馬江漢『西洋画談』成る。</p> <p>○山東京伝『忠臣水滸伝』刊行始まる。～享和2年。</p>
寛 政 12 ・ 庚 申	防 長	<p>○中村牛荘（伊助）、明倫館に入学し繁沢豊城に師事する。</p> <p>○上田鳳陽、明倫館に入学する。</p> <p>○本城太華、熊本に赴き高本紫溟に師事する。</p> <p>○片山鳳翽、其身一代儒者として萩本藩に出仕、寺社組へ編入される。給米25俵。（「伊藤市右衛門手控」）。</p> <p>○片山鳳翽「瑞光公神道碑」（『鳳翽集』巻九）。瑞光公は毛利秀包のこと。</p> <p>○片山鳳翽「与楊子筐」（『鳳翽集』巻十二、子筐宛第二書）。子筐は楊井蘭洲。</p> <p>○片山鳳翽「寿桂子雄五十序」（『鳳翽集』巻七）。桂子雄は吉敷毛利氏の家老。桂月洲の父か。</p> <p>○中村梁山、藩主に従って萩に帰り、老齢のため隠居する。</p> <p>○9月14日、佐々木竜原歿、51才。小倉鹿門の弟子。『竜原遺稿』がある。</p> <p>〈小田村藍田「竜原遺稿序」〉</p> <p>〈繁沢豊城「佐々木俊信墓誌」〉</p>

年	区分	記	事
寛政 12・ 庚申	防	○大日比西円寺藏版『専修念仏要語』刊。 ○佐波郡右田時観園を博文堂と改称。杉山良哉、督学となる。 ○坂本天山、三田尻・山口・深川・萩に滞留する。 ○この年頃、三田尻において佐伯玄厚・高田玄仲(後に飯田姓)・杉山宗立・熊野林仙等、蘭学研究会を開く。	
	長	○撫育方の蓄積資本銀5,323貫目を本勘会計(藩一般会計)の財源に充当し、藩士手取り分は永久三ツ成を令す。	
	参 考	○宇佐美瀧水『弁道考注』刊。(瀧水には『弁名考注』もある)。 ○松平定信『集古十種』成る。 ○『論語古註疏』(『十三経註疏』のうち)和刻刊。	
寛享 政和 13元 (2 / 5) ・ 辛 酉	防	○1月15日、小田済川(享叔)歿、55才。長府藩儒。永富独嘯庵の弟。 ○1月22日、中村梁山歿、71才。享保16年(1731)生。中村華嶽家督し出府する。 <楊井蘭洲「梁山先生墓碑」> ○5月25日、近藤芳樹、周防国吉敷郡岩淵村農業田中清吉の長男として生る。～明治13年(1880)。 ○6月、川棚芝居(豊浦郡)若嶋座、規約を定める。 ○7月9日、冷泉古風生。～安政元年(1854)。(冷泉古風『石竹集』に附された小伝による)。 ○8月、片山鳳翽「与楊子筐」(『鳳翽集』巻十二、子筐宛第三書)。 ○9月15日、善教寺南嶺歿。岩国の画家。伊藤若冲に師事する。 ○10月、勝間田盛稔(鴻翁)生。 ○粟屋就応、知行所熊毛郡大河内村(現熊毛町)に郷校故学堂創設。士庶共学。 ○長沼采石(徳山藩)、江戸へ遊学し昌平塾に入る。後、熊本に赴き高本紫溟に師事。 ○本城太華(徳山藩。本城紫巖の子)、亀井南冥に入門。享和2年、徳山へ帰る。 ○繁沢豊城、70歳賀寿。 <役藍泉「長藩明倫館祭酒豊城翁七十誕辰霈」(『藍泉詩集』)> ○坂本天山、三田尻等へ滞留。	
	長		

年	区分	記	事
寛 政 13 元	参 考		<p>○2月8日、大典（顕常）歿、83才。享保4年（1719）生。</p> <p>○6月29日、細井平洲歿、74才。享保13年（1728）生。</p> <p>○8月、司馬芝叟（永富独嘯庵次男）作の浄瑠璃「箱根靈驗鬻仇討」初演。</p> <p>○9月29日、本居宣長歿、72才。享保15年（1730）生。</p> <p>○柏木如亭『聯珠詩格訳註』刊。漢詩を俗語を混えながら散文訳している。</p> <p>○『日本文鈔』刊。</p> <p>○『合類書籍目録大全』刊。</p> <p>○（清）周之麟撰『陸放翁詩鈔』8巻4冊、和刻刊。</p>
享 和 2	防 長		<p>○5月、役藍泉「南冥先生六十寿序」（『藍泉文集』）。南冥は亀井南冥。</p> <p>○7月17日、小田村藍田、明倫館学頭助役となる。</p> <p>○本城太華、筑前福岡より徳山へ帰る。</p> <p>○長沼采石、江戸より徳山へ帰り、藩校鳴鳳館訓導となる。</p> <p>○臼杵太仲、長府藩校敬業館教授となる。</p> <p>○小田村藍田「瀨城田政密寺大相国菅公廟碑」。</p> <p>○広瀬喜尚『玖珂郡志』成る。</p> <p>○12月22日、山県鶴江歿、49才。書家。</p>
・ 壬 戌	参 考		<p>○1月25日、木村兼葭堂（巽斎）歿、67才。</p> <p>○4月20日、藪孤山歿、68才。</p> <p>○杉田玄白「形影夜話序」。（『形影夜話』の中で玄白は栗山孝庵（文仲）の逸話を伝えている）。</p> <p>○司馬芝叟、歌舞伎作者として芝屋勝助の名で角の芝居の立作者となる。</p> <p>○『宋詩語』刊。</p> <p>○『楊誠齋詩話』刊。</p>

年	区分	記	事
享 和 3 ・ 癸 亥	防	<p>○1月13日、草場大麓歿、64才。</p> <p>○1月24日、片山鳳翽、藩主侍読となり手廻組へ編入。参勤に従って出府。</p> <p>○3月9日、能美由庵歿、89才。</p> <p>○春、小田村藍田、清水就周の招きによりその領邑周防国熊毛郡立野に赴く。</p> <p>　　〈小田村藍田「青楓亭記」(『藍田集』)〉。</p> <p>　　青楓亭は清水氏の立野に在った。</p> <p>○8月10日、小倉宗爾歿、60才。(『阿武郡志』による)。</p> <p>○8月、片山鳳翽「楠廷尉像賛大和伊織需」(『鳳翽集』巻八)</p> <p>○10月4日、本城紫巖歿、67才。山根華陽・滝鶴台の弟子。</p> <p>　　〈役藍泉「紫巖本教授伝」(『藍泉文集』)〉</p> <p>○役藍泉、鳴鳳館(徳山藩校)第2代学頭となる。</p> <p>○吉田半七、藩命により山県家を相続。すなわち山県半七太華。山県家の当主正左衛門孝彰は眼疾のために家業を勤めることができず、家督・家業を吉田半七が継ぐことになったのである。正左衛門は服部九郎左衛門清忠の養子となり服部家を継ぐ(吉田樟堂文庫「山県家系譜」)。</p> <p>○厚狭毛利房衆、学館朝陽館創設。</p> <p>○片山鳳翽「故長公族世卿功玄子蓋誌」、(『鳳翽集』巻九)。吉敷毛利房直の墓誌。</p> <p>○長沼采石、再度肥後に赴き高本紫溟に従学する。</p>	
	参 考	<p>○10月17日、前野良沢歿、81才。</p> <p>○大窪詩仏・山本緑陰編『宋三大家詩鈔』刊。</p> <p>○大窪詩仏編『宋詩礎』刊。</p>	

年	区分	記	事
享文 和化 4元 (2 / 11) ・ 甲 子	防 長	○南部伯民『技癢録』刊。 ○樋口世禎『節儉略』成る。(『日本経済叢書』巻24に収まる)。	
	参 考	○2月5日、中井竹山歿、75才。享保15年(1730)生。 ○田能村竹田、熊本の高本紫溟に従学する。(高本紫溟は朱子学者で、また本居宣長門下)。 ○荻生徂来『経史子要覧』刊。徂来の口述を門弟の三浦竹溪が筆記したもの。 ○大田錦城『九経談』刊。 ○市河寛斎『全唐詩逸』刊。 ○大窪詩仏・山本緑陰校定『石湖先生詩鈔』刊。山本北山序。周之麟・柴升編。 ○楊誠齋撰『江湖詩鈔』刊。山本北山序。 ○千済編『唐宋集注聯珠詩格』刊。山本北山・佐藤一斎序。 ○『随園詩話』刊。全6冊。柏木如亭・神谷東溪による袁枚『随園詩話』よりの抄録。 ○『東坡文抄』刊。蘇東坡の文の選集。	
文化 2 ・ 乙 丑	防 長	○1月、樋口世禎『理水略』成る。 ○2月、吉敷毛利房裕、服部傳蔵の家塾憲章齋を給領主経営の学館憲章館として改組、服部傳蔵を学頭とする。 ○8月、小倉遜齋生。～明治11年(1878)。内藤三郎右衛門之茂の三男。 ○12月28日、山県溥泉歿、55才。吉川家臣。皆川淇園・細井平洲に学ぶ。 ○12月、野村紫沢歿、28才。画家。谷文晁に師事。 ○岩政信比古、出雲の千家俊信に入門する。時に16才。 ○山県太華、九州遊学。(吉田樟堂文庫「山県家系譜」)。亀井南冥・昭陽に就く。	

年	区分	記	事
文化2・乙丑	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○田能村竹田、京都に上り村瀬栲亭の門に学ぶ。文化4年にかけて。 ○吉益東洞『医方古言』刊。山県周南「医方古言序」(『周南文集』巻六)。 ○宇田川玄真『医範提綱』刊。附録の「内象銅版図」は垂政堂田善画による日本最初の銅版解剖図で、文化5年に刊行。 ○大窪詩仏編『佩文韻府両韻便覧』刊。 	
文化3・丙寅	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○4月~6月、伊能忠敬、長州藩内を測量。萩では浜崎吹上の山県家に宿泊。 ○8月27日、中村華嶽、藩主斉房の侍読となる。 ○10月6日、楊井謙藏(字子筐、号蘭洲)、記録所役となる。 ○10月14日、明倫館学頭繁沢豊城危篤により金50両下附される。 ○10月24日、小田村藍田、明倫館学頭となる。 ○11月12日、繁沢豊城歿、75才。享保17年(1732)生。 <ul style="list-style-type: none"> 〈村田清風「祭豊城先生文」(『村田清風全集』)〉 ○本城太華、江戸に出、翌4年5月徳山に帰る。 ○池田瑞仙『痘診戒草』刊。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○大窪詩仏、江戸神田お玉ヶ池に詩聖堂を開く。 ○陸式王編『宋詩選』刊。山本緑陰序。 ○周之麟・柴升編『東坡先生詩鈔』刊。山本北山・朝川善庵序。 	
文化4・丁卯	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、本城太華、江戸より徳山へ帰り藩校鳴鳳館訓導となる。 ○6月10日、幕府役人羽倉簡堂、囲米調査のため萩へ来る。 ○7月、小田村藍田「北海集序」。 ○9月13日、三須鯉水歿、57才。岩国の徂徠学者。 ○9月15日、長谷川有文歿、45才。『秘府旌旗考』を著す。 ○陸(くが)士彦「安梨のまま序」。(陸士彦は長門国大津郡の人で、西依成斎に師事。大坂住吉に医を開業する。) 	

年	区分	記	事
文化4 ・ 丁卯	防 長	○山科太室歿、51才。須佐英育館学頭。秦嵩山・赤松蒼洲の弟子。(歿年は『阿武郡志』及び近藤清石『防長人物志』による。吉田祥朔『近世防長人名辞典』は歿年を天明9年1月4日とする。天明9年の記事にも出す)。	
	参 考	○5月16日、皆川淇園歿。74才。享保19年(1734)生。役藍泉は淇園と交渉があり、「贈皆淇園序」(『藍泉文集』)の一文がある。 ○市河寛斎編『三家妙絶』刊。大窪詩仏序、柏木如亭・菊池五山跋。 ○菊池五山、この年以後『五山堂詩話』を年々刊行。 ○館柳湾編『晚唐十家絶句』刊。	
文化5 ・ 戊辰	防 長	○3月12日、村田清風、明倫館退学。8月に嫡子雇で小姓役に出仕。 ○3月、古賀精里及び古賀穀堂「送山県文祥序」。山県太華が江戸より帰国するに当たっての送辞。(吉田樟堂文庫「山県家文書」)。 ○5月3日、樋口東里歿、87才。伊藤蘭嶠門下の岩国の儒者。 ○9月3日、高津允中歿、65才。儒者。美祢郡大田に零山塾を開いていた。 ○9月14日、片山鳳翽歿、69才。元文5年(1740)生。養子片山潤藏、家業を継ぐ。 <片山潤藏「片山鳳翽行状」> ○役藍泉『鳴鳳館学範』刊。『徳府学範』ともいう。徳山藩校鳴鳳館の教育方針と館則を示す。仁と忠恕とを教育理念として掲げ、徂徠学に基づきながらも道無内外、学無流派から朱子学・陽明学・仁斎学もまた必ずしも廃するものではないと述べている。 6月、役藍泉「学範序」。鳴鳳館は徳山藩校。その学規・学則は初代学頭本城紫巖によって天明5年(1785)に基礎づけられた。 ○秋、海保青陵「送山県君序」。山県太華帰国への送辞。(吉田樟堂文庫「山県家文書」)。	

年	区分	記	事
文化5・戊辰	参 考	○12月25日、小石元俊歿、66才。永富独嘯庵の弟子。 ○佐藤信淵『西洋列国史略』成るか。日本人が書いた最初の西洋通史。 ○呉孟挙・呉自牧編『楊誠齋詩鈔』刊。 ○この年より幕府天文方は蘭書の取扱い方を命ぜられ、西洋の地理歴史に関する翻訳を始め、蘭書訳方となる。	
文化6・己巳	防 長	○9月28日、役藍泉歿、57才。宝暦3年(1753)生。墓碑銘は亀井昭陽(藍泉の詩文の弟子)が撰す。 ○穴戸就年、給領地熊毛郡安田村に学館徳修館創設。教授山田北海(運平)。 <山田北海「徳修館記」> ○『風月楼記』成る。 ○12月、伊能忠敬、防長の南部を測量。	
	参 考	○8月13日、横井小楠生。 ~明治2年(1869)。 ○『資治通鑑綱目全書』この年より刊。徳島藩出版。三宅亡羊所有の板木を購入して補板し刊行。 ○『東坡先生志林』刊。	
文化7・庚午	防 長	○片山潤藏「対策」上申はこの年か。『片山対策』との題名で松陰神社藏。松下村塾旧藏。 ○12月27日、山県太華、明倫館学頭助役となる。 ○12月、長沼采石、鳴鳳館助教となる。藩の藏元兩人役兼務。	
	参 考	○林述斎編『佚存叢書』、第六帙をもって刊行終わる。 ○大窪詩仏『詩聖堂詩集初編』刊。 ○この年、全国的に豊作で米価下落。	

年	区分	記	事
文 化 8 ・ 辛 未	防 長	○1月、伊能忠敬、藩内測量。 ○春、益田房清「鳳翽集序」。益田房清は吉敷毛利家より益田家を相続。 ○小田村藍田、病気のため春以来休職を願い、湯田で湯治する。 ○7月、片山鳳翽『鳳翽集』刊。 ○8月、亀井南冥「藍泉集序」。南冥と役藍泉の交友は、『藍泉文集』(『徳山市史』資料編所収)中の南冥宛書牘や、藍泉宛の「南冥書状」(吉田樟堂文庫)参照。 ○11月20日、山根東湖歿。山根南溟の子。 ○小田村藍田「遊懸壺亭記」(『藍田集』)。 ○古萩園葦兮、古萩園二世となる。 ○池田瑞仙『新刊痘科弁要』。 ○齋藤方策、大坂より三田尻に帰り、長崎・熊本に赴いて再び大坂に上る。	
	参 考	○2月28日、佐久間象山生。～元治元年(1864)。 ○田能村竹田、京都に上り、はじめて頼山陽と相識となる。 ○菅原老山・梁川星巖編『宋三大家律詩』刊。山本北山・大窪詩仏等序。 ○梅辻春樵『春樵詩草初編』刊。 ○5月、幕府、浅草天文台暦局内に蕃書和解御用を新設。 ○ショメール百科全書の訳述開始。『厚生新編』の題名で出版される。弘化年間まで訳述の作業は続く。	
文 化 9 ・ 壬 申	防 長	○6月、厚狭毛利房衆を盟主とする藩政掌握陰謀事件への処分が行われる。毛利房衆は隠居。首謀者の一人である儒者片山潤藏(片山鳳翽の養子)は8月18日に隠居の上家禄半減となる。(『某氏意見書』は片山潤藏の著か)。 ○7月、内藤尚藏(後の小倉遜斎)、小倉実光の養子となる。 ○8月19日、楊井謙藏(蘭洲)、直目附となる。 ○8月、仲東門歿(『防長人物志』による)。明倫館都講であった。その家塾を楽群堂という。 〈中村信馨「紀先師徳碑」〉	

年	区分	記	事
文化9・壬申	防長	○9月11日、小田村藍田、明倫館学頭を辞す。後任は中村華嶽・山県太華の2人が隔年勤務となる。藍田へは1ヶ年銀800目宛下附される。 ○中村牛荘、再度明倫館へ入学する。文化5年に一旦退学していた。 ○法洲、大日比西門寺の住持となる。	
	参考	○5月18日、山本北山歿、61才。宝暦2年(1752)生。 ○菅茶山『黄葉夕陽村舍詩』正・続刊。 ○大窪詩仏・菊池五山編『広三大家絶句』刊。	
文化10・癸酉	防長	○6月27日、臼杵鹿垣(太仲)歿、42才。長府敬業館教授。亀井南冥門。 ○7月29日、杉山良哉歿、44才。杉山宗立の兄。飯田楽軒・亀井南冥・皆川淇園等に学ぶ。右田博文堂(時観園の後身)督学・長府敬業館教授となる。 ○10月14日、伊能忠敬来藩。28日まで測量に従事。 ○10月、山県太華『救弊談』成る。 ○11月2日、田村姫山(長統)歿、60才。越氏塾の書法の教師。 ○山県太華『山県半七書出雑録』この年成るか。 ○山県太華「粟屋正論墓誌」。粟屋正論は通称弾藏、登人と称す。弓術者。	
	参考	○大田錦城『梧窓漫筆』前編成る。 ○佐藤一斉、『言志録』を書き始める。 ○8月10日、篠崎三島「藍泉集跋」。 ○田能村竹田、隠居する。 ○12月14日、尾藤二洲歿、67才。延享4年(1747)生 ○『宋四名家詩』刊。 ○柏木如亭編及び序『宋詩清絶』刊。(清)曹六圃『宋百家詩存』から約300首を選ぶ。	

年	区分	記	事
文化11・甲戌	防	<p>○1月13日、蒲生鳳林（貞固）歿、73才。豊浦郡阿川の儒者。阿川毛利氏の郷校中山館の教授。繁沢豊城門下。国島善斎の師。</p> <p>○2月16日、山口常栄寺焼失。</p> <p>○吉田樟堂文庫「山県家文書」所収の4月14日付の山県太華宛亀井昭陽書状はこの年か。</p> <p>○6月10日、山県太華、藩主に従って出府。</p> <p>○10月17日、小田村藍田歿、73才。 〈口羽房良「藍田小田村先生墓誌」〉</p> <p>○10~11月、原古処、周防に來り滞留（吉敷郡天道村上田氏宅）。田中子潜（後の近藤芳樹、14才）従学する。</p> <p>○11月4日、広江九隣歿、38才。松村呉春に学んだ画家。</p> <p>○大野毛利就頼、知行地熊毛郡大野南村に学館弘道館創設。</p>	
	参考	<p>3月2日、龜井南冥歿、72才。寛保3年（1743）生。</p> <p>10月3日、脇愚山歿、51才。宝暦14年（1764）生。</p>	
文化12・乙亥	防	<p>○1月22日、古萩園里川歿、79才。俳諧師。古萩園初代。</p> <p>○4月、上田鳳陽（47才）、山口長山に学校山口講堂を設立する。後に文久3年（1863）に山口明倫館となる。</p> <p>○4月15日、上田鳳陽、長州本藩に召し出されて、その身一代儒者となる。</p> <p>○4月、岡研介、伊予国越智郡岩城島に居住。</p> <p>○10月8日、笹山良意（別名度会東明）歿。長州藩の狩野派画家。</p> <p>○11月8日、古萩園葦兮歿。古萩園第二世。</p> <p>○12月11日、山下玄良歿、61才。小野蘭山に従学。</p> <p>○12月23日、栗山孝庵（玄厚）萩郊外椿東分村水手川刑場にて男体解剖を行う。</p> <p>○原古処、夏より冬の間、防長両國に來遊。萩へも訪れる。</p> <p>○渡辺平吉『渡辺年表』を編撰する。『相府年表』ともいう。</p>	
	参考		

年	区分	記	事
文化 13 ・ 丙 子	防	○1月4日、栗山子文歿、47才。須佐の儒者。亀井南冥門下。 ○閏8月19日、菽弘法寺境内に芝居小屋を建て、10年間芝居興行を許可する。 ○9月役藍泉『藍泉集』3巻刊。 ○9月6日、池田瑞仙歿、82才。岩国通津出身の医師。(瑞仙及びその家系については森鷗外『伊澤蘭軒』参照)。 ○10月1日、市川崑崙歿、49才。阿川毛利家の儒臣。	○原古処、10月より翌14年8月まで豊浦郡西市・赤間関に来遊。 ○上田鳳陽、明倫館に再度入学する。明倫館蔵の大黒屋本(今井似閑蔵本の写本)の研究のため(『山口市史』)。
	参 考	○2月19日、頼春水歿、71才。延享3年(1746)生。 ○4月、日下南州(号伯巖。伊予松山藩儒)「送山県君文祥帰長州序」。山県太華宛のもの。(吉田樟堂文庫『山県家文書』)。 ○8月9日、岡田寒泉歿、77才。元文5年(1740)生。 ○原念斎『先哲叢談』刊。山県周南及び滝鶴台が収まる。 ○角田九華『近世叢語』刊。周南・鶴台他長州藩儒の記事が収まる。 ○津阪東陽「夜航詩話序」。 ○市河寛斎選『随園詩鈔』刊。大窪詩仏序。随園は清の袁枚。その『小倉山房詩鈔』より441首を選ぶ。須原屋より刊。 ○(晩唐)杜牧『樊川詩集』刊。	
文化 14 ・ 丁 丑	防 長	○2月21日、不易亭爾松歿、65才。俳人。大津郡紫津浦の人。寺戸氏。 ○2月26日、神器陣第一回操練を菊ヶ浜で行う。神器陣は坂本天山の ^次 野流兵学の影響下に生まれたもので、旧来の兵式と銃砲を中心とする半洋式部隊との組合せで機動性を増す。 ○4月24日、独雄歿。漢詩人。徳山大成寺住職。 ○5月、岡研介、広島の中井厚沢に入門する。 ○7月、『法岸和尚行業記』刊。 ○8月18日、呉孟明歿。清末藩校育英館学頭。 ○中村牛荘、藩儒となる。	

年	区分	記	事
文化 14・ 丁 丑	防 長	○田中子潜（近藤芳樹）、上京して猪飼敬所に入門し経学・歴史を学ぶ。 ○月性、玖珂郡遠崎村妙円寺に生る。～ 安政5年（1858）。 ○岩政信比古『本末歌の解』刊。	
	参 考	○2月15日、中井履軒歿、86才。享保17年（1732）生。 ○5月3日、古賀精里歿、68才。寛延3年（1750）生。 ○5月29日、海保青陵歿、63才。宝暦5年（1755）生。 ○原松洲編『文衡山詩鈔』刊。柏木如亭・原松洲序。	
文文 化 15 政 (4 / 22元 ・ 戊 寅	防 長	○3月9日、頼山陽、九州旅行への途次、吉敷郡台道村の上田堂山を訪う。 ○3月14日、頼山陽、赤間関に広江殿峰を訪う。（広江殿峰は文人交流の結社海鷗社を結成している。） ○10月3日、服部二見歿。女流俳人。 ○10月10日、樋口世禎歿、66才。宝暦3年（1753）生。岩国の徂徠学者。『節檢略』（『日本經濟叢書』収）の著がある。号蘭暁。 〈南方一枝「蘭暁先生伝」（文久2年成る）〉 ○冬、山県太華「入学正路序」。（年次は県立山口図書館蔵の松岡鶴鳴筆写本における太華自序文による）。朱子学が儒学の正路であることを主張する太華の『入学正路』はこの年成るか。（岩波『国書総目録』は文政5年成立としている）。 ○渡辺平吉『自楽抄』はこの年成るか。記事中“ことしの春穴戸美濃就年七十の寿”とあるによる。渡辺平吉、名は直。滝高渠の弟子。	
	参 考	○3月29日、大沼沈山生。～ 明治24年（1891）。 ○岡熊臣（津和野藩の社人）、大国隆正の紹介で平田篤胤に入門する。	
文 政 2・ 己 卯	防 長	○1月、田中子潜（近藤芳樹）、頼山陽と防府（台道村上田方か）にて面会。山陽より詩を贈られる（吉田樟堂文庫「近藤芳樹大人日譜草稿」）。 ○4月3日、性堂歿、79才。常栄寺住職。	

年	区分	記	事
文 政 2 ・ 己 卯	防	<p>○4月、岡研介（字子究）、広瀬淡窓に入門する。淡窓の塾では塩山屯・遠山一圭（一溪）とともに三長者の一人であった。入門以前、萩で医を開業しており、木戸孝允の父和田昌景と交際があった。淡窓「懐旧楼筆記」・「淡窓日記」及び亀井昭陽「空石日記」・「昭陽先生文集初編」に修業時代の研介の姿が記されている。</p> <p>○閏4月1日、吉敷郡鯖山禅昌寺焼失。</p> <p>○7月11日、樋口義所歿、59才。岩国吉川家儒臣。古義学派。</p> <p>○小倉尚藏（実敏・遜斎）明倫館に入学。</p> <p>○中村華嶽、毛利家軍記の編纂に携わる。</p> <p>○藩士で娘を三味線稽古に通わせることが流行し、禁令が出る。</p>	
	参考	<p>○柏木如亭訓訳『訳本芥子園画伝』刊。</p> <p>○7月10日、柏木如亭歿、57才。宝暦13年（1763）生。</p>	
文 政 3 ・ 庚 辰	防	<p>○1月29日、清末藩儒広井孫兵衛の子広井圭助、日田に広瀬淡窓を訪ねる（『淡窓日記』）。</p> <p>○6月1日、宝晋斎湖十、萩に来る。湖十は藩主斉熙（俳号三夕堂露朝）の俳諧の師で時に48才。宿は魚店の熊屋家。この時の旅を『胡枝紀行』にまとめている。</p> <p>○10月16日、山田北海歿、66才。熊毛郡三丘徳修館（穴戸氏の学館）の教授。山根華陽の弟子。</p> <p>○10月、村田清風「壳知壳爵論」。藩主への上書。</p> <p>○長沼采石、徳山藩校鳴鳳館教授となる。</p> <p>○本城太華、鳴鳳館助教となる。</p>	
	参 考	<p>○3月19日、原念斎歿、47才。山本北山門下。</p> <p>○宇田川玄真『和蘭葉鏡』刊。後に改訂増補して『新訂増補和蘭葉鏡』として刊行。</p> <p>○柏木如亭『如亭山人遺稿』刊。</p> <p>○柏木如亭『海内才子詩初集』刊。</p>	

年	区分	記	事
文 政 4 ・ 辛 巳	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、内藤静修（昌盈）『官暇漫吟』刊。頼山陽序。漢詩集。内藤静修は山陽に師事。 ○3月、杉山宗立、京都に上り斎藤方策を訪れ、1か月間新宮涼庭に師事する。 ○南部伯民、江戸に出、松平定信の知遇を得る。11月、三田尻に帰る。 ○8月4日、水上実巖歿、67才。足利学校第十九世校主。玖珂郡保津の人。 ○11月9日、香川景柄（黄中）歿、77才。 ○東条英庵、萩浜崎新丁上の町に生る。父は右田毛利家の医官。 ○中村牛荘、退官して家塾を開く。 	
	参考	○2月28日、山片蟠桃歿、74才。寛延元年（1748）生。	
文 政 5 ・ 壬 午	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○5月、中村華嶽、側儒より明倫館学頭となる（天保6年まで）。大組に列す。 ○6月3日、滝茂兵衛九華（滝高渠の子）、側儒となる。 ○8月7日、観海歿、71才。熊毛郡平生村真覚寺住持。 ○8月8日、南部伯民、長州藩医となる。給米年25俵。 ○8月、コレラ大流行す（蘭領ジャワより伝わったもの）。萩では8月14日から同25日までに583人が死んだという（大坂の蘭方医斎藤方策から仙台の佐々木仲沢に宛てた手紙による）。当時日本ではコレラの病因が知られていなくて、霍乱の一種と見なされた。 ○9月6日、広江殿峰歿、67才。その居宅を西江堂という。 ○9月、岡研介、亀井昭陽に入門。文政7年に退塾。 ○南部伯民「胡蘆利病説並治方」成る。コレラに関する著作。当時伯民は松平定信の侍医であった。 ○南部伯民『技癘録』及び『難病治験方』刊。 ○斎藤方策・中環中共訳『把爾翁湮（パルヘイン）解剖図譜』刊。ベルギーのヨハン・バルフィン原著。 ○斎藤方策「八刺精要序」。『八刺精要』は大槻玄沢訳の医書。 ○山県太華『入学正路』成る。（岩波『国書総目録』による。しかし文 	

年	区分	記 事
文政5・壬午	防 長	<p>政元年か。文政元年の記事参照）。</p> <p>○中川好古『招魂帖』成る。</p> <p>○桂月洲（吉敷毛利家臣）、亀井昭陽に入門。</p>
文政6・癸未	防 長	<p>○2月5日、『三代実録』の編纂に着手し、蜜用方の周布寛を用掛りとする。明治3年に完成。全49冊。</p> <p>○2月21日、近藤芳樹（当時田中姓）、村田春門に入門する。束修金百疋。9月24日、大坂に村田春門を訪ね、翌年春まで逗留。</p> <p>○8月6日、楊井謙藏歿、62才。字は子筐。滝鶴台・山根南溟に学んだが、朱子学を好んだ。</p> <p>○10月22日、南部伯民歿、54才。明和7年（1770）生。墓誌は菅茶山の撰文。</p> <p>○12月、岩国吉川家、『家中古文書纂』編纂。</p> <p>○12月、徳山藩校鳴鳳館に医学館を附設し、藩医松岡玄知、医学を講じる。当時藩主は毛利就寿（後に広鎮）。</p> <p>○12月30日、李家庸謙歿、71才。藩医。 〈山県太華「李家庸謙墓碑銘」〉</p> <p>○12月30日、斎藤方策、一代雇として長州藩医となる。給米年25俵。方策は当時大坂に住んでいた。</p> <p>○藩役人の給与を5分（5割）減とする。</p>
	参 考	<p>○4月6日、大田南畝歿、75才。寛延2年（1749）生。</p> <p>○4月9日、葛西因是歿、60才。明和元年（1764）生。</p> <p>○7月6日、シーボルト、長崎オランダ商館の医師として来日。当時27才。</p> <p>○田能村竹田、翌7年にかけて京都に遊び、京坂地方の文人との交流を深める。</p> <p>○菅茶山『黄葉夕陽村舎詩後編』刊。</p>
文政7・甲申	防 長	<p>○1月18日、山県太華、明倫館学頭座勤務を解かれ、藩主側儒に復する。</p> <p>○3月10日、大村益次郎生。～ 明治2年（1869）。</p> <p>○5月、近藤芳樹、本居大平に入門。</p>

年	区分	記	事
文 政 7 ・ 甲 申	防 長		<p>○6月、小倉遜齋、明倫館助講となる。</p> <p>○7月28日、岡研介、長崎より福岡に赴き亀井昭陽を訪ねる。(亀井昭陽「空石日記」)。</p> <p>○8月、有田作胤編『典刑』成る。</p> <p>○閏8月3日、小田海僊、その身一代寺社組に編入され、給米年25俵。隠居の前藩主毛利斉熙付きとなる。</p> <p>○10月、京都の人明石良平、萩で心学講話を行う。</p> <p>○11月12日、賀屋恭安、松崎慊堂を訪れる。恭安は自著『要術知新』の序文を大槻玄幹を介して慊堂に依頼していたのである。(『慊堂日曆』)。</p> <p>○法道、大日比西円寺住持となる。</p> <p>○5月か、岡研介、亀井昭陽の門を退塾し(亀井昭陽「送岡子究遊長崎序」(『昭陽先生文集初編』))、シーボルトに従学。(鳴滝塾初代塾長となる)。</p> <p>○山県太華「李家庸謙墓碑銘」成る。</p>
	参 考		<p>○9月、宇都宮黙霖、安芸国賀茂郡弘村に生まれる。～明治30年(1897)</p> <p>○シーボルト、長崎に鳴滝塾を開く。</p> <p>○佐藤一斎『言志録』刊。福知山城主朽木格斎序。</p>
文 政 8 ・ 乙 酉	防 長		<p>○8月3日、当職代行福原豊前、明倫館臨時視察。儒学講釈等を受講。聴衆73人出席。(『当職所日記』)。当職や国許加判役による明倫館視察は定期的に行われていた。</p> <p>○12月、大日比西円寺住持法道、遠島に処される。翌9年5月赦免。</p> <p>○12月28日、楊井子温(楊井蘭洲の子。号静斎)、松崎慊堂に入門。(『慊堂日曆』)。時に子温29才。</p> <p>○杉山宗立・井上文恭、長崎に赴きシーボルトに師事する。</p> <p>○奥田頼杖(心学者)、防長に来る。</p>
	参 考		<p>○2月、幕府、異国船打払令(無二念打払令)を発する。天文方高橋景保の対外政策上の意見上申による。</p> <p>○4月23日、太田錦城歿、61才。明和2年(1765)生。(山県太華は『芸窓筆記』等において錦城の言説に反対し批判している)。</p>

年	区分	記	事
文政8年之西	参考	○会沢正志齋『新論』成稿。 ○山本北山序『宋三大家絶句』刊。	
文政9・丙戌	防長	○1月16日、楊井静齋(孫太郎)、松崎慊堂から「雑説」三首及び『古文關鍵』を贈らる(『慊堂日曆』。同じ内容の事が4月25日の条にも見える)。 ○1月16日、シーボルト、江戸出府の途次、赤間関佐甲家に着。7日間滞在。4月、江戸着。 ○6月、楊井静齋(孫太郎)、公儀人(幕府との折衝役)となる。 ○7月、岡泰安(熊毛郡平生の人。岡研介の兄)、長崎に赴きシーボルトに師事。翌10年2月帰郷。 ○8月23日、田上菊舎歿、74才。 ○10月9日、国島筈斎歿、57才。長府藩校敬業館教授であった。 ○10月、山県太華「益田房清碑銘」。 ○山県榕所(山県東原の第三子で、山県太華の嗣子となった)、江戸に遊学する。 ○山根蕉窓(山根南溟の孫)、頼山陽の門を卒業して帰国。(蕉窓は山県太華に学び、江戸では太田錦城に就いた)。 ○全国大豊作。長州藩領は不作。	
	参考	○3月9日、亀田鵬斎歿、75才。宝暦2年(1752)生。 ○田能村竹田、長崎に遊ぶ。 ○青地林宗『輿地志略』刊。	
文政10・丁亥	防長	○1月、長府藩主毛利元義、清元「梅の香」を作る。(江戸の春景色を、吉原を中心に目出度く述べる。『狂歌人物誌』によれば、元義の狂歌の師匠鹿都部真顔の代作という。元義は梅を愛し、自分の狂歌名を梅酒戸真門といい、遊芸を好んだ)。 ○3月、小倉尚藏(遜齋)、江戸に遊学する。翌11年5月、萩に帰る。 ○5月20日、山県榕所歿、33才。 ○閏6月20日、高野長英、熊屋五郎左衛門を訪ねて萩に来る。熊屋家に止宿。(『御当職所日記』)。	

年	区分	記 事
文政 10 ・ 丁亥	防 長	<p>○11月3日、山根蕉窓歿、24才。</p> <p>○今津桐園、越氏塾督学となる。前任は吉武江陽。</p> <p>○大田稻香 (18才)、広瀬淡窓に入門。</p> <p>○菅江嶺、長州本藩に召抱えられ、その身一代寺社組に編入。</p>
	参 考	<p>○東条琴台『先哲叢談後編』成る。刊行は文政13年。林東溟・永富独嘯庵が収録されている。</p> <p>○頼山陽、改删なった『日本外史』を松平定信に献じる。</p> <p>○官板 (幕府による出版書)『宋十五家詩選』16卷16冊刊。</p> <p>○青地林宗『気海観瀾』刊。文政8年成稿。林宗は日本最初の物理学者である。</p>
文政 11 ・ 戊子	防 長	<p>○1月、狩野芳涯生。～ 明治21年 (1888)。</p> <p>○4月、山県太華の帰国に際し江戸で送別会が催される。(集った人々の送辞が吉田樟堂文庫『山県家文書』に収まる。)</p> <p>○山田東周、儒家山根家を継ぐ。(後に藩主毛利斉広の侍読となる)。</p> <p>○宇都宮遯庵『作文楷梯』刊。</p> <p>○近藤芳樹『正統論』成る。</p>
	参 考	<p>○6月25日、津田真道生。～ 明治36年 (1903)。</p> <p>○8月、シーボルト事件発生する。</p> <p>○頼山陽、山紫水明処を築く。</p> <p>○頼山陽『日本楽府』成る。文政13年刊。</p> <p>○(清)趙翼『鷓北詩話』和刻刊。</p>
文政 12 ・ 己丑	防 長	<p>○2月、岩国の医師飯田玄栄・宇都宮了安、肥前大村で種痘法を学ぶ。</p> <p>○小倉遜斎、明倫館講師となる。</p> <p>○12月2日、来原良藏生。～ 文久2年 (1862) 自殺。</p>
	参 考	<p>○2月3日、西周生。～ 明治30年 (1897)。</p> <p>○5月13日、松平定信歿、72才。宝暦8年 (1758) 生。</p>

年	区分	記 事
文政12・己丑	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○11月25日、原采蘋、松崎憐堂を訪れる。憐堂より“女子立身の道”を諭される(『憐堂日曆』)。 ○田能村竹田『屠赤瑣瑣録』成る。 ○『文政十七家絶句』刊。漢詩集。 ○『学者必読 妙々奇談』刊。現存している同時代の有名人の評判記。以後、妙々奇談もの流行する。 ○訓訳本『訳解笑林広記』刊。
文政13保(12年) / 10年・庚寅	防長	<ul style="list-style-type: none"> ○3月2日、斎藤彦右衛門貞直歿、57才。山県太華・村田清風等と文政5年から同6年にかけて大江広元・季光の故事を鎌倉に調査した。「桑山古墳考」の著がある。 ○6月4日、森重鞆負歿、58才。合武三島流砲術の開祖。森重曾門の兄。 ○7月4日、中野豊台歿、74才。豊浦郡西市の人。 ○8月4日、吉田松陰生。～安政6年(1859) 刑死。 ○9月2日、小国玉淵歿、62才。名は融。須佐益田家の儒臣。亀井南冥・皆川淇園に従学。 <ul style="list-style-type: none"> 〈亀井昭陽「小国玉淵碑銘」〉 ○9月13日、辨信歿、60才。吉敷郡大海の出身。三河岩津の信光明寺の住持。 ○中村牛莊、明倫館教授となる。 ○大田稻香、長崎遊学。 ○熊本郡麻郷村郷校成器堂設立される。在郷藩士の抛金を主として藩の補助を受けて設立されたもの。 ○毛利斉広「みさこそうし」成る。(『毛利十一代史』収)。 ○4月、近藤芳樹(当時田中芳樹廬)編『類題阿武の杣板』刊。萩今宮文庫蔵梓。萩の地を中心に各階層の人の和歌凡そ660首を収録した類題集。その中の一首、〈江芸閣といへるから人になが崎にあへりしとき“ことのはのへたてこそあれへたてなき心にみゆるやまともろこし” 布施御牆〉 ○賀屋恭安『河豚談』刊。 ○池田瑞仙『痘科鍵刪正補注』刊。 ○岡研介、大坂に出る。『生機論』(生理学の書)成る。

年	区分	記	事
文天 政13保 (12元 10年 ・ 庚寅)	参 考	○会沢正志斎『新論』、秘密に出版される。 ○東条琴台『先哲叢談後編』刊。成稿は文政10年。 ○頼山陽『日本楽府』刊。	
天 保 2 ・ 辛 卯	防 長	○2月16日、草場晋水歿、51才。書家。(『毛利十一代史』は3月16日とする)。 ○2月26日、能美友庵歿、61才。 ○4月、能美洞庵家督。 ○5月、毛利斉広「陳情」成る。平田淳序。 ○7月、天保大一揆起る。 ○毛利斉広(世子)「世子告文・附言」(『毛利十一代史』所収)この年成るか。大一揆に直面して藩政の在り方を痛切に批難し、藩政の抜本的変革を求めている。 ○9月29日、円浄歿、87才。漢詩人。柳井の誓光寺住持。 ○12月28日、儒者津田東作、江戸にて修業中逃亡し、家禄没収される。 ○吉敷郡御堀益田氏の郷校学習塾創設。 ○大田稻香、広瀬淡窓に入門(近藤清石『防長人物志』)。 ○月性(15才)、豊前の恒藤醒窓(広瀬淡窓門下)の梨花寮に入る。	
	参 考	○梁川星巖、江戸に出て玉池吟社を開く。	
天 保 3 ・ 壬 辰	防 長	○2月13日、毛利斉広、林述斎に入門。(『毛利十一代史』)。 ○9月13日、木村秋亭歿。三田尻の人。医家にて歌人。 ○12月28日、中川好古歿、65才。長府藩士。儒家。『招魂帖』の編者。 ○本城太華、徳山藩世子毛利広篤の侍読となる。 ○桂周水(治右衛門)歿。『情実集』の作者。 ○村田清風「天保辰御改正大意」及び「此度談」を書く。 ○近藤芳樹『たのむの雁』成る。 ○草刈泰彦編『草舎(くさのや)年表』成る。文禄4年(1595)より天保14年(1843)まで。ただし天保4年以後は追録。(『毛利家文庫』17)。	

年	区分	記 事
天保3・壬辰	参 考	<p>○3月21日、冢田大峯歿、88才。延享2年(1745)生。</p> <p>○5月26日、中村敬宇生。～明治24年(1891)。</p> <p>○9月23日、頼山陽歿、53才。安永9年(1779)生。死去の時、ほぼ『日本政記』を脱稿していた。</p> <p>○渡辺隼山、洋学研究を始める。田原藩の年寄役末席となり、藩の海防掛りを兼ねたことが動機であった。</p>
天保4・癸巳	防 長 参 考	<p>○6月20日、村尾春屋歿、43才。画家。</p> <p>○6月26日、木戸孝允生。～明治10年(1877)。</p> <p>○8月18日、渡辺平吉歿、71才。『渡辺年表』及び『自楽抄』の著がある。</p> <p>○8月18日、聴松庵烏強歿、68才。聴松庵四世。</p> <p>○8月、茅原虚斎『茅窓漫録』刊。(吉川弘文館『日本隨筆大成』第11巻に収まる)。</p> <p>○12月29日、広沢真臣生。～明治4年(1871)。</p> <p>○4月、大塩平八郎『洗心洞割記』(家塾版)成る。(吉田松陰は嘉永3年平戸遊学中購入している)。</p> <p>○頼山陽『山陽詩鈔』刊。8巻。山陽自身が編集したもの。</p> <p>○宇田川裕庵『植学啓原』刊。日本最初の植物学書。</p> <p>○この年より天保大飢饉始まる。</p>
天保5・甲午	防 長	<p>○2月、賀屋恭安「漫費紙録序」。『漫費紙録』は河野中庵(永富独嘯庵の子)の著。</p> <p>○7月14日、長沼采石歿、60才。</p> <p>○8月24日、内藤子謙(昌盈、静修)歿、76才。山根南溟及び頼山陽に師事。</p> <p>○8月25日、中村牛莊・山根東周(吉之丞)、藩主齐元の侍読となる。</p> <p>○9月6日、広江秋水歿、50才。頼山陽に師事。</p> <p>○10月19日、二宮錦水(元輔)、松崎慊堂に入門する(『慊堂日曆』)。吉田祥朔『近世防長人物辞典』は入門を天保8年とする。『慊堂日曆』によれば、錦水は天保7～9年の間、しばしば慊堂門に出入りしている。</p>

年	区分	記 事
天保5・甲午	防 長	<p>○10月21日、吉武江陽歿、72才。飯田楽軒に師事。</p> <p>○本城太華、鳴鳳館教授となる。天保14年12月まで。</p>
	参 考	<p>○篠崎小竹及び角田九華「山中人饒舌序」。『山中人饒舌』は田能村竹田著。</p> <p>○12月12日、福沢諭吉生。～ 明治34年（1901）。</p> <p>○この年諸国飢饉。江戸の米価高騰し、百俵が金14～15両となる。（『徳川十五代史』）</p>
天保6・乙未	防 長	<p>○1月28日、中村華嶽、明倫館学頭を辞す。山県太華、明倫館第10代学頭となる。以後明倫館、朱子学を採る。</p> <p>○4月3日、吉田大助歿、29才。吉田松陰の叔父で養父。</p> <p>○7月、藩、心学講話所日章舎を萩江向に設立。また奥田頼杖を招き、藩内各地での心学講話を依頼。頼杖は以後年々防長に来て講話して廻る。天保大一揆後の人心収攬対策であった。</p> <p>○10月16日、小田南咳歿、46才。長府藩敬業館教授を勤める。小田済川の養子。</p> <p>○11月2日、三浦源藏歿。『塩製秘録』の著者。</p> <p>○月性、肥前佐賀の精居寮に入る。精居寮は、佐賀の真宗僧不及が主宰する真宗僧侶のための学塾。在寮中月性はしばしば長崎に遊んだ。</p> <p>○近藤芳樹『古風三体考』成る。刊行は天保8年。</p>
	参 考	<p>○8月29日、田能村竹田歿、59才。安永6年（1777）生。</p> <p>○佐藤一斎『言志後録』刊。</p> <p>○『当世名家評判記』刊。</p>
天保7・丙申	防 長	<p>○6月12日、阿武川氾濫。溺死者数百人という。萩市中は青物絶無となり諸物価高騰。銀1匁につき白米6合の相場で藩より米を売り出す（『毛利十一代史』）。</p> <p>○秋、安芸の吉村秋陽、長府藩の招きにより藩校敬業館教授となる。（安政2年まで在職か）。秋陽は佐藤一斎門下の陽明学者。東沢瀉の師。（秋陽が長府藩の招きに応じた年を天保7年とするのは岩波『日本思想大系近世後期儒家集』の解説による。『山口県教育史』及び『下関</p>

年	区分	記	事
天保7・丙申	防長	市史』は天保16年とする)。 ○滝九華『滝九華雜記』起筆。九華は滝鶴台の孫。記事は天保8年までの見聞や感想を記す。 ○12月29日、藩主毛利斉広歿、23才。 ○田中(近藤)芳樹「芸州厳島図会序」。『芸州厳島図会』は天保13年刊。	
	参考	○3月、帆足万里『窮理通』成。 ○5月17日、亀井昭陽歿、64才。安永2年(1773)生。 ○11月、尾藤二洲『素餐録』刊。 ○津阪東陽『夜航詩話』及び『夜航余話』刊。 ○天保の大飢饉、ピークを迎える。	
天保8・丁酉	防長	○1月17日、山根東周歿、50才。 ○1月21日、林芳洋歿、65才。徳山鳴鳳館教授。 ○3月、小倉遜齋、侍読となり出府。明倫館教師を兼務。 ○4月、毛利敬親襲封。(翌9年4月、初入国)。 ○5月より12月にかけて傷寒病(腸チフス)流行する。 ○7月、近藤芳樹『古風三体考』刊。静間三積跋。天保6年成稿。 ○藩、領内各地へ心学講師を派遣し、民心の教化を図る。 ○佐伯攝津、山口宰判大内村志多里八幡宮に国学塾開設。 ○法洲『三法語構説大意』この年刊か。	
	参考	○2月11日、大窪詩仏歿、71才。明和4年(1767)生。 ○2月、大塩平八郎の乱起る。 ○3月、宇田川榕庵記『舍密開宗初編』刊。(同書第七編の刊行は弘化4年)。 ○広瀬淡窓『遠思樓詩鈔初編』刊。同書二編は嘉永2年刊。	
天保9・丙戌	防長	○1月、吉田松陰(9才)、家学の兵学教授見習として明倫館に出任する。 ○閏4月、山県有朋生。～大正11年(1922)。	

年	区分	記	事
天保9・丙戌	防長	<p>○閏4月29日、上田堂山歿、81才。吉敷郡台道の富家。後裔に上田敏雄・上田保兄弟が在る。</p> <p>○7月26日、滝九華歿、54才。滝高渠の子。</p> <p>○8月3日、飯田竹舎歿、66才。徳山藩士。連歌師。</p> <p>○8月、村田清風、香川作兵衛とともに地江戸仕組掛りとなり、藩政改革に着手。藩の負債総額銀92,026貫余。年々の元利年賦償還額銀12,175貫余。</p> <p> 〈村田清風「大仕組大目途」〉</p> <p>○12月7日、山下儂洲歿、78才。徳山藩儒。書家。</p> <p>○飯田竹鳩（徳山藩士）、吉村秋陽に従学する。後、佐藤一斎に学ぶ。</p> <p>○前年以来の凶作の為、藩内捨子が甚だ多しという。</p>	
	参考	<p>○緒方洪庵、滴々斎塾（滴塾）を開塾。</p> <p>○徳川斉昭『弘道館記』成る。（藤田東湖起草）。</p> <p>○頼山陽『日本政記』刊。</p> <p>○古賀侗庵『海防臆測』成る。</p> <p>○渡辺華山『駄舌或問』及び『慎機論』成る。</p> <p>○高野長英『戊戌夢物語』成る。</p> <p>○『天保三十六家絶句』刊。</p>	
天保10・己亥	防長	<p>○3月、山県太華「国史纂論序」。</p> <p>○山県太華『国史纂論』刊。弘化2年安積良斎序。弘化3年林銑序。</p> <p>○3月、青木周弼（37才。村上丹波家来）、その身一代雇として長州本藩に出仕、給米年25俵。</p> <p>○7月13日、法洲没、75才。大日比西円寺住持。</p> <p>○8月20日、高杉晋作生。～ 慶応3年（1867）。</p> <p>○10月、山田東陵歿。三田尻の画家。</p> <p>○11月3日、岡研介歿、41才。晩年には狂気となる。</p> <p>○11月25日、楊井静斎（孫太郎）、公儀人を免ぜられる。</p> <p>○12月、熊毛郡岩田村に文武稽古場（後の正業舎）が設立される。国光小源太等の請願によるものであった。</p> <p>○近藤芳樹（当時田中姓）、藩に出仕する。</p>	

年	区分	記 事
天保10・己亥	防 長	<p>○賀屋恭安『好生緒言』刊。</p> <p>○赤間関に心学講義所斎省舎が開設される。</p> <p>○4月24日、独旨真明歿、65才。黄檗山万福寺第三十世。赤間関出身。</p>
	参 考	<p>○5月、鳥居耀藏の陰謀による蛮社の獄起る。</p> <p>○5月23日、小関三英(蕃書和解御用)自殺する。53才。蛮社の獄に係するものとして自殺に追いこまれたのである。後任には其作阮甫が登用される。</p>
天保11・庚子	防 長	<p>○1月26日、茅原虚斎歿、67才。儒家。美祿郡大嶺の人。</p> <p>○5月、久坂玄瑞生。～元治元年(1864)自殺。</p> <p>○6月1日、松島健作(松島剛藏及び楢取素彦の弟)、小倉遜斎の養子となる。(後に小倉家を離縁となり、松田謙三と改名、東北地方を流浪する)。</p> <p>○6月、山県太華上書「愚案」。</p> <p>○7月13日、藩政改革発令。〈村田清風「流弊改正意見」〉</p> <p>○7月、静間美積、江戸より萩に帰着。</p> <p>○8月5日、絵図方平田弥次兵衛、精密な防長全図を作る。</p> <p>○9月、萩八丁南園内に医学所開設。熊野玄宿・李家尚謙・大中益甫・馬屋原大庵・赤川玄成・島田良岱・青木周弼・河村養信・和田昌景・竹田太純・吉松玄琢・半井玄友教授となる。能美洞庵・賀屋恭安、医学成立定掛として医学所設立に従事する。</p> <p>○青木周弼、翻訳掛となる。(毛利家文庫15「西洋学御引立一件沙汰控」)</p> <p>○11月18日、田中芳樹(40才)、馬術家近藤小二郎の家を継ぎ近藤姓となる。扶持方5人・銀205匁給付される。家業を改め和学家とされる。</p> <p>○12月17日、近藤芳樹及びその門人、藩主敬親に非公式に召出され、その前にて古典を講じ(芳樹は日本書紀天孫降臨の章を、冷泉古風は古語拾遺調賊の章)、探題作文をする。宍戸真激(左馬之介)は遣唐使を送るという題で文章を作り、従来の常識を破って安部仲麻呂よりも中国に同化しなかった藤原清河の方を顕彰した。(近藤芳樹は『寄居歌談』で、国学者でこうした評価を行ったのは真激が最初であろうと評価した)。</p>

年	区分	記	事
天保11 ・ 庚子	防	<ul style="list-style-type: none"> ○11月、玉乃九華「救時話言」上書。 ○11月、松島伊之助(後の楢取素彦)、小田村右門(吉平)の養子となる。 ○佐伯勝馬等、凝成館を萩に設立するように藩に申請。国学及び祭儀の教授を行う藩による神職の教育機関設置を求めたもの。天保14年に開館となり、河本越前・佐伯勝馬等が教授となる。後文久3年(1863)藩府の山口移鎮に伴い山口に移転し、五十鈴学館となる。 ○飯田竹塙、江戸に出て昌平黌に入り、佐藤一斎に師事。 ○先大津・上関・三田尻等の宰判に心学修甫の制が設けられる。基金運用の利銀をもって年2回心学講師を招く。 ○宇部亀浦の向田七右衛門・九十郎の兄弟、南蛮車を発明する。 	
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○8月、日本にアヘン戦争の報伝わる。 ○滝沢馬琴、失明する。 	
天保12 ・ 辛丑	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月、藩、諸郡各村の風土地誌等を書き出すように各宰判に通達し、『風土注進案』(近藤芳樹編輯)に着手する。 ○藩主敬親、公式に近藤芳樹・安部惟貞及びその門弟を召見し、国学の進講を受ける。席上近藤芳樹は賀茂真淵の“ますらをぶり”を首唱する(『寄居歌談』巻一)。 ○4月、小倉遜齋、佐藤一斎に入門する。 ○5月9日、有阪長為・大田恭平(稻香)、高島秋帆の武蔵国徳丸原での洋式軍事演習に参加する。 ○9月2日、伊藤博文生。～ 明治42年(1909)。 ○9月、毛利敬親、林培斎に入門。小倉遜齋も侍読である為に同時入門する。 ○9月、穴戸桃戎歿、80才。俳人。菖蒲庵二世。 ○11月10日、熊野玄宿歿、49才。 ○11月、山県太華「寧斯語序」。『寧斯語』は前藩主毛利斉広輯の語録。 ○11月、安積良斎「有備館記」成る。 ○12月11日、江戸桜田長州藩邸内に「有備館」開設。命名は大学頭林樾。小倉遜齋その他教務に従事し学制を定める。 ○12月13日、互理南山歿、77才。熊毛郡麻郷に開塾し子弟を教育した。 	

年	区分	記	事
天保12・辛丑	防長	<p>○岡本栖雲(成章)、萩江向に学時習齋を開塾。教授学科は漢学と書法。別名を江南塾という。最盛期は弘化元年前後。(吉田松陰『吉日録』参照)。</p> <p>○大田稲香、江戸で高島秋帆に学び、8月に帰郷。右田の脩来院(博文堂を改称)の督学となる。禄高30石。</p> <p>○郡司覚之進、藩命で長崎に赴き高島秋帆に入門。帰藩後、ヘキサンス砲採用を建言。</p> <p>○江戸葛飾砂村の長州藩邸内に鑄砲所を設置。郡司右平次、職人2人と共に出府して佐久間象山から洋式火砲の製造法を学ぶ。</p> <p>○増野徳民、玖珂郡山代本郷に生る。医家。吉田松陰門下生となる。</p>	
	参考	○10月11日、渡辺華山自刃す。49才。佐藤一斎・松崎謙堂の弟子。	
天保13・壬寅	防長	<p>○1月13日、近藤芳樹、防長国郡志編纂用掛となる。撰国郡志総裁梨羽頼母。</p> <p>○6月、坪井信道、能美洞庵の育みとして一代雇藩医となる。弘化3年、譜代となる。</p> <p>○6月、中村松洲歿、65才。赤間関の人。『長門国志』の著者。</p> <p>○7月、村田清風『淫祀談』成る。清風の宗教政策がうかがえる。</p> <p>○8月、勝間田盛稔宅にて定家卿影前会開催。近藤芳樹ら出席。</p> <p>○9月、藩内の淫祀廃除を行う。</p> <p>○10月14日、賀屋恭安歿、64才。その居宅を榭陰書屋という。</p> <p>○11月、近藤芳樹「寄居歌談初編序」。『寄居歌談初編』はこの年刊。</p> <p>○浦氏の郷校克己堂、熊毛郡阿月(現柳井市)に開設。</p> <p>○玉木文之進、自宅で私塾を開く。吉田松陰・山県半蔵(当時安田辰之助)等入門。</p> <p>○毛利斉広輯『争斯語』刊。</p> <p>○大村益次郎(当時村田藏六。19才)、宮市(現防府市)の梅田幽齋に従学。</p> <p>○心学講談所日章舎(萩江向十日市筋船廻しに所在)を補修改築する。三坂理兵衛・水津藤右衛門・古谷振岳・久芳内記等講師として登用される。日章舎の経営は庶民よりの献金によった。</p>	

年	区分	記 事
天保13・壬寅	防長	○藩役人の役料5分減(5割減)のところを3分減にする。
	参考	○6月、幕府、10万石以上の藩に対し出版事業奨励の令を発す。これ以後、各藩の出版事業盛んになる。 ○9月、広瀬旭荘、肥前大村藩に招かれる。 ○9月、箕作阮甫、『和蘭文典前編』刊。
天保14・癸卯	防長	○1月、近藤芳樹『淫祀論』。藩の諮問(村田清風の意向による)に答えたもの。 ○2月、森脇梅庵歿。歌人。 ○3月山県太華「民政要編序」。『民政要編』は『周礼』より周官の民政上の諸官職について、山県太華が註を施し解説したもの。明倫館より刊行。○4月1日、羽賀台大操練。 ○4月8日、三坂理兵衛歿、66才。心学者。また俳人として古萩園三世。 ○4月、村田藏六(大村益次郎)、広瀬淡窓の咸宜園に入門。 ○4月、寺社奉行羽善九郎元実・飯田小右衛門信篤を藩内各地に派遣して淫祠を廃止する。(淫祠廃止は前年9月、寺社奉行より発令された)。 ○4月、村田清風の政策「三十七ヶ年賦皆済仕法」発令。 ○5月24日、広井良徳歿、75才。号は柳溪。清末藩儒者。 ○7月8日、八木沙村歿、44才。明倫館都講。漢詩を能くす。 ○7月18日、八谷道良歿、87才。三隅で学塾を開く。村田清風幼時の師。 ○村田清風、大津郡三隅浅江に尊聖堂を建設。 ○8月、山県太華「尊聖堂記」。 ○9月8日、上田琴風歿、56才。吉敷郡台道の女流画家。 ○10月、近藤芳樹『寄居歌談二編』成る。刊行は弘化2年。 ○11月20日、朝倉南陵歿、88才。菅江嶺に師事した画家。 ○12月6日、徳山藩、鳴鳳館に蘭医学の講義を始める。 ○12月17日か、萩に凝成館(神職養成機関)開館。 ○12月、小川乾山、鳴鳳館教授となる。嘉永3年9月まで。前任は本城太華。

天保14 (1843) ~ 弘化元 (1844)

年	区分	記	事
天保 14・癸 卯	防	○12月、周布政之助、明倫館居寮生となる。(山県太華の推挙による。周布政之助は天保9年頃明倫館就学。天保11年10月より自贖入舎生として小倉遜斎に従学していた)。 ○郡司源之允、長崎に再遊し高島秋帆に従学。 ○竹院(吉田松陰の母方の伯父)、鎌倉瑞泉寺住持となる。 ○会沢正志斎の『新論』は、天保末年に月性によって明倫館生に紹介されたといわれる。	
	参 考	○閏9月11日、平田篤胤歿、68才。安永5年(1776)生。 ○斎藤竹堂『鴉片始末』成る。竹堂29才。 ○杉田成卿、幕命によりオランダ憲法を翻訳。(尾佐竹猛「維新前に於ける憲法草案」)。	
天弘 保15化 (12元 /2年) ・甲 辰	防	○4月、道亭歿か。萩小畑の陶工であって画家。 ○6月、村田清風退陣。坪井九右衛門(顔山)登場。 ○7月6日、椿八幡宮司青山上総長清の宅において、令義解竟宴の再現の会が行われる。集会の人々は青山長清・近藤芳樹・冷泉古風・山田昌之・引田利亮・赤川道昭・奈古屋彰(与三)・白上舎人・安藤重長・城邑政国。 ○10月9日、藩主敬親、国学・兵学の進講を受ける。 ○10月29日、本城太華歿、70才。 ○11月18日、近藤芳樹、手廻組に編入される。 ○11月、坪井九右衛門の政策「公内借捌仕法」発令。 ○馬島甫仙生。 ○近藤芳樹『防長名所抄』成る。	
	参 考	○5月、岡熊臣「読淫祠考」成る。山県太華「淫祠考」への反論である。 ○帆足万里『入学新論』刊。同『東潜夫論』成る。 ○勝海舟、佐久間象山に入門。 ○加賀藩、『欽定四書』をこの年より刊行。～嘉永4年(1851)まで。 ○高松藩、『隋書』刊。(『二十一史』のうち。明の万暦の北監本を底本とする)。 ○魏源『聖武記』、日本に始めてもたらされる。老中阿部正弘購入する。	

年	区分	記	事
弘 化 2 ・ 乙 巳	防		<ul style="list-style-type: none"> ○1月25日、山口講堂を講習堂と改称。 ○小倉遜斎、参勤に従って出府。 ○5月、小倉遜斎、山県太華の『国史纂論』及び『民政要綱』の刊行用掛となる。 ○8月、小倉遜斎「国史纂論序」。 ○10月、青木研藏、外国事情調査のため藩命で長崎に赴く。 ○11月11日、矢野筈山歿、66才。画家。 ○吉田松陰、山田亦介に入門し長沼流兵学を修める。亦介により外患にめざめる。 ○厚狭毛利元美、学館朝陽館を再興。 ○佐々木向陽「善我堂記」。善我堂は宇部福原氏の学館。 ○嚶鳴社、明倫館内に結成される。(或は弘化3年か。海原徹『明治維新と教育』は弘化2年と見ている。) 嚶鳴社結成は周布政之助・北条瀬兵衛等の首唱により、殆どのメンバーは明倫館生であった。結成には月性も関係した。明倫館教育の旧習を破り、古今の歴史・時事問題等について関心を持つとした。このグループは江南学派とも呼ばれる。嚶鳴社は安政3年に入ってからまた活発となり、安政4年には社屋を明倫館から河添に移した。(『来原良藏伝』及び『周布政之介伝』)。 ○近藤芳樹『寄居歌談二編』刊。 ○熊谷直好『浦の汐貝』刊。桂園派の代表的歌集の一つ。 ○吉田恕庵、右田の脩来院助教となる。嘉永6年まで10年間勤務。 ○秋良敦之助、浦家の家老となる。
	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○角田九華『統近世叢語』刊。 ○梁川星巖、玉池吟社を閉じて京都に移る。 ○朝岡興禎『古画備考』起稿か。嘉永3年の説もある。 ○7月、幕府、海防掛設置。外交部門担当機関の創始である。
弘 化 3 ・ 丙 午	防 長		<ul style="list-style-type: none"> ○7月16日、名嶋月礪歿、80才余。岩国の南画家。 ○9月12日、井上可就(よしなり)歿、80才。三田尻の書家。 ○11月1日、右田毛利元統、学館脩来院を迫山に移し学文堂と改称する。督学大田稻香。

年	区分	記	事
弘 化 3 ・ 丙 午	防		<p>○11月8日、吉賀恪斎歿、33才。越氏塾都講。吉武江陽に從学した。</p> <p>○12月9日、明倫館再建を発令。</p> <p>○12月10日、諸葛函溪歿。長府の画家。</p> <p>○吉田松陰、山田宇右衛門に説かれて外患への対処方法を考究。「外夷小記」を著す。</p> <p>○村田藏六(大村益次郎。22才)、緒方洪庵の適塾に入門。(福沢諭吉の適塾入門は安政2年。大村益次郎の適塾退塾は嘉永3年)。</p> <p>○桂月洲、吉敷憲章館学頭となる。</p> <p>○佐伯摂津、藩から巡回講談師に任せられる。</p> <p>○坪井信道、長州藩譜代藩医となる。</p>
	参考		<p>○6月22日、宇田川裕庵歿、49才。</p> <p>○鈴木春山訳編『兵学小識』成る。</p>
弘 化 4 ・ 丁 未	防		<p>○1月27日、安部諒(惟貞)、・近藤晋一郎(芳樹)、藩主敬親に国学進講。</p> <p>○2月、西洋書齋訳用掛を設け、青木研藏・東条英庵・松村太仲が掛りとなる。</p> <p>○春、月性、玖珂郡遠崎妙円寺内に時習館開塾か。叔父にして養父の周邦と協同経営である。草葺平家建。清狂草堂とも称す。</p> <p>○5月20日、岩国吉川氏学館養老館開設。学頭玉乃九華、教授二宮錦水。</p> <p>○6月2日、小田村石門(吉平)歿、57才。又は53才とも。(小田村藍田の長子)。</p> <p>○7月、玉乃九華『養老館記』刊。中沢雪城書。</p> <p>○10月12日、勢一尚古歿、49才。三丘徳修館学頭。</p> <p>○12月、坪井九右衛門(顔山)、禁固に処される。</p> <p>○山県太華校訂及序『六論衍義大意』(室鳩巢著)刊。明倫館蔵版。</p> <p>○桂太郎生。</p>
	参考		<p>○1月30日、古賀侗庵歿、60才。天明8年(1788)生。</p> <p>○藤田東湖『弘道館記述義』再稿成る。</p> <p>○塩谷宕陰『阿芙蓉彙聞』編輯。</p>

年	区分	記	事
弘化4・丁未	参考		<ul style="list-style-type: none"> ○鳥山新三郎、鍛冶橋外桶町河岸に私塾を開く。 ○『影宋本尚書正義』刊。熊本藩時習館による出版。 ○『南史』・『北史』刊。南藍本による松江藩の出版。
弘嘉永5元(2/28)年・戊申	防長		<ul style="list-style-type: none"> ○1月、吉田松陰(19才)、家学後見人を解かれて独立の兵学師範となる。 ○8月、李家尚謙歿、58才。医学館教授。 ○9月16日、村田清風、明倫館再興御用掛となる。 ○山県太華『民政要編』3巻刊。『周礼』による中国古代周の時代の地方官や民政に関する職官の解説。 ○11月1日、藩庁用方役人へ山県太華編著『民政要編』を一部宛配布する。 ○11月8日、坪井信道歿、54才。 ○11月、小野為八、長崎から萩に帰る。 ○久坂玄機、適塾々頭となる。翌2年正月に萩に帰る。 ○月性の時習館に、大島郡久賀村の大洲鉄然(15才。9月に入塾し2ヶ月余在塾し、学文堂へ入る)、玖珂郡柱島の松崎武人(後の赤根武人)、熊毛郡田布施村の円立寺真道等入塾する。(海原徹『近世私塾の研究』)。 ○近藤芳樹『新撰防長名所方角抄』成る。 ○村田藏六(大村益次郎)、長崎から大坂に上り再度適塾に入門。嘉永3年に帰郷。 ○藩、西洋原書頭取を置く。 ○萩の南片河町山城屋孫十郎、この年の刊記のある北尾墨香編『攝西六家詩鈔』に、江戸の須原屋茂兵衛等とともに発行者に名を列ねている。(これは販売権を持っているということか)。 ○福田正憲『思夢問答』刊。嘉永元年10月鈴木高鞞序。発行者は萩呉服町山城屋孫四郎ほか。福田正憲は徳山の人。
	参考		<ul style="list-style-type: none"> ○安積良斎『洋外紀略』成るか。

年	区分	記	事
嘉 永 2 ・ 己 西	防 長		<p>○1月20日、能美洞庵、医学所頭取となる。赤川玄悦・青木周弼、会頭となる（1月23日発令）。久坂玄機都講となる。（医学所制度改正による人事である）。</p> <p>○1月26日、明倫館重建成る。学校総奉行益田玄蕃、学校手元役村田清風。開校は3月2日。</p> <p>○1月29日、安部諒（惟貞）、和学兼学を免ぜられ、連轡歌師のみの家業となる。</p> <p>○2月18日、新明倫館、初积菜挙行。</p> <p>○2月25日、山県太華、明倫館积菜の式の席順について藩府の指図に従わなかったので逼塞となり、3月1日に許される。（『遠近方記録』・『瀾城鑑』）。</p> <p>○3月2日、重建明倫館開校、初講義行われる。藩主臨席。「文学規則」に朱子学を立教の基とすることを明示する。講義初めとして山県太華が『大学』三綱領を講じた。</p> <p>○3月2日、宮城彦助・有地九助等和歌・茶の湯等の風流に耽り文武の稽古を疎かにしたとして逼塞となる。それに関係して近藤晋一郎（芳樹）・桂隼人も逼塞となる。（『瀾城鑑』）。</p> <p>○3月、山県太華「重建明倫館記」成る。</p> <p>○3月22日、近藤芳樹、家業替えを命ぜられ、今後儒家として取扱われることとなる。しかしその身一代有職兼業を命ぜられ、遠近付支配となる。</p> <p>○閏4月20日、権代春鷗歿、58才。宮市の画家。</p> <p>○8月23日、医学館制度の改正が行われ、医学館頭取役を医学教諭役と改称し、各科の主任教授を頭取役とする。</p> <p>○8月、月性「近世名家文鈔例言九則」。『近世名家文鈔』は、篠崎小竹・斎藤拙堂・坂井虎山・野田笛浦の文集。</p> <p>○9月、青木研藏、長崎にて種痘法を学び萩に帰る。（7月に長崎に赴く。10月より医学館で種痘実施）。</p> <p>○9月、明倫館練兵場操業開始。</p> <p>○9月、心学講談を中止し、小学講談を採用。敬身堂へ陪臣や農商人の入学を認めて初等程度の教育を施そうとするもので、明倫館直轄経営の藩立庶民教育機関に改組したものである。</p>

年	区分	記 事
嘉 永 2 ・ 己 西	防 長	<p>○10月8日、斎藤方策歿、79才。</p> <p>○10月10日、吉田松陰、門人を率いて羽賀台で教練を行う。</p> <p>○10月、藩内ではじめて種痘を行う。</p> <p>○近藤芳樹、家塾抄宗寮を新堀に開いたのはこの年か。</p> <p>○山県太華「鄙言」この年か。明倫館に国学を採用することに反対した上申書。本居学はいけませんが、それ以前の和学であればよいと述べている。</p> <p>○弘正方『松崎天神鎮座考』刊。</p> <p>○大田稻香（恭平）、学文堂（旧時観園）の教授となる。</p> <p>○村田藏六（大村益次郎）、適塾塾頭となる。翌3年退塾して帰郷する。</p> <p>○田上宇平太、洋書翻譯用掛となる。</p> <p>○乃木希典生。～ 大正元年（1912）自殺。</p>
	備 考	<p>○6月27日、菊池五山歿、81才。</p> <p>○岡熊臣、津和野藩校養老館の国学教授となる。</p> <p>○『備急千金要方』和刻刊。江戸の医学館よりの刊行。北宋本を底本とする。</p> <p>○この年舶載された『紅樓夢』の直段は1部銀5匁。嘉永6年舶載の同書も同価。</p>
嘉 永 3 ・ 庚 戌	防 長	<p>○2月13日、小田村伊之助（後の楯取素彦）、明倫館講堂の諸事用掛となる。</p> <p>○2月22日、山県太華、70歳賀寿。</p> <p>○3月14日、小田村伊之助、江戸番手として萩出足。4月3日江戸着。有備館講堂掛となる。</p> <p>○4月23日、天野謙吉、明倫館都講となる。</p> <p>○6月、田原玄周・青木研藏、西洋原書頭取となる。</p> <p>○6月29日、明倫館構内にある医学館の名称済生堂を好生館に改め、南苑に移転。8月15日、新築落成。</p> <p>○8月25日、吉田松陰、平戸遊学に出発。長崎を経て9月14日平戸着。（12月29日萩に帰着）。この遊学で松陰は会沢正志齋『新論』・大塩平</p>

年	区分	記	事
嘉 永 3 ・ 庚	防 長	八郎『洗心洞割記』・高野長英『夢物語』その他『阿芙蓉彙聞』・『聖武記附録』・『海国見聞録』等に接し、熟読する。	○8月、布施御牆『救饑提要』成る。山田亦介序。
		○9月5日、中村牛莊、側儒再役。	○10月29日、平田浩溪（新右衛門）、明倫館学頭座御用取計となる。同年12月28日辞職。（一説29日）。
成	備 考	○11月23日、山県太華、中風となる。（伊藤市右衛門『日載』）。	○12月29日、山県太華、明倫館学頭を辞す。中村牛莊・小倉遜斎の両名、明倫館学頭座御用取計となる。
		○医学所の教則を増補して、陪臣医・地下医の入学を認め士庶共学とする。	○村田清風『病翁字波言』。
		○山田亦介、古賀洞庵『海防臆測』を無断出版する。これにより亦介は処罰される。	○月性の時習館へ熊本郡阿月村の秋良雄太郎入門する。
		○中村雪樹、明倫館へ入学する。	○小川乾山、徳山藩校鳴鳳館教授を罷免され、家名断絶・塾居の処分を受ける。藩政上の失政によるという。安政3年5月に許される。
		○弘平五郎『楽水鈔』。（永田瀬兵衛撰『江氏家譜』の記載事項を訂正したもの）。	○この年頃、田上宇平太、伊東玄朴の免先堂の塾監を勤める。（『柴田収藏日記』）。
		○この年頃、能美洞庵、萩平安古満行寺筋に居住。（杉山宗立手記）。	○1月6日、佐藤信淵歿、82才。明和6年（1769）生。
		○10月晦日、高野長英自殺、47才。文化元年（1804）生。	○勝海舟・高島五郎・津田真道（真一郎）、佐久間象山に入門。当時象山は江戸深川の松代藩邸にて砲術を教授していた。
		○太平天国の乱起る。（太平天国の乱を記した羅森『満清紀事』を、吉田松陰は『清国咸豊乱記』として翻訳した。増田涉『西学東漸と中国事情』参照）。	

年	区分	記	事
嘉 永 4 . 辛 亥	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○1月4日、鈴木和泉直道歿、64才。松崎神社宮司。国学者。鈴木高鞆の父。近藤芳樹はその門下。 ○2月3日、近藤芳樹、明倫館講師小学教諭役となる。(吉田祥朗「近藤芳樹大人日譜草稿」及び『瀾城鑑』による。嘉永2年の説もある)。 ○2月10日、近藤芳樹、手廻組に加えられる。 ○3月、吉田松陰、江戸遊学の為、参勤に従って出府。また中村百合藏・来原良藏・土屋矢之助(蕭海)、同じく藩主参勤に従って出府。 ○4月6日、澁谷道勝(源吾)歿、69才。山県鶴江の弟子で絵を能くす。号は長南。道勝の女は勝間田盛稔の妻。勝間田稔は孫になる。 ○5月、大洲鉄然、月性の時習館へ再入学し10月頃まで在塾する。また熊毛郡平生の松岡弁之助、大津郡三隅の和真道(西福寺の子)、萩の土屋恭平(蕭海の弟)時習館に入学。(海原徹『近世私塾の研究』参照)。 ○8月23日、服部傳藏歿、81才。吉敷憲章館学頭。片山鳳詔の弟子。 ○桂月洲、憲章館学頭となる。 ○8月、小倉健作、江戸遊学。 ○11月、山県半藏、江戸へ遊学し安積良斎に入門。後塾長となる。 ○12月6日、玉乃九華歿、55才。 ○12月14日、吉田松陰、北陸・東北遊歴の為に脱藩する。嘉永5年4月5日江戸帰着。その間、水戸学に触れる。 ○12月27日、林百非歿、56才。画家でもある。吉田松陰の兵学の師。冷泉古風の兄。 ○山県太華、藩命により四書五経の訓点を改正する。従来、明倫館は徠徠学による読み方をしていたのであったが朱子学による読み方に統一したのである。これは藩の学問思想を教科書から朱子学に統一するものであった。 	
	備 考	<ul style="list-style-type: none"> ○川本幸民『気海観瀾広義』刊。青地林宗の『気海観瀾』を読み易いように仮名混じり文にして解説したもの。 ○勝海舟、蘭学塾を開いて蘭書と西洋兵学を講ず。その門より杉亨二が出る。 	

年	区分	記	事
嘉永4・辛亥	備考		<p>○斎藤竹堂『蕃史』成る。西洋史。</p> <p>○魏源『海国図志』、はじめて日本にもたらされる。(大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』)。</p>
嘉永5壬子	防長		<p>○2月13日、市川玄伯歿、57才。厚狭朝陽館督学。山県太華門下。</p> <p>○2月、小倉遜齋、世子毛利広封(後に元徳)の侍読兼務となる。</p> <p>○2月、寺内正毅生。～大正8年(1919)。</p> <p>○4月21日、内田悟溪(耕月)歿、73才。岩国の雲谷派画家。</p> <p>○6月、小倉遜齋、服忌令の公務により出府。9月萩に帰る。</p> <p>○7月25日、山田亦介、『海防臆測』の無断出版により逼塞となる、8月25日、改めて隠居及び家禄減石となる。『海防臆測』は古賀洞庵の著。亦介による出版は嘉永3年。</p> <p>○10月12日、山県太華撰「明倫館諸生学業課目次第」布告。(『防長回天史』第壹編)。</p> <p>○11月16日、菅江嶺歿、91才。画家。岸駒及び鈴木南湖に学ぶ。</p> <p>○11月頃、吉田寅次郎、松陰の号を用い始める。</p> <p>○11月、中村牛莊・小倉遜齋、側儒兼明倫館学頭となる。</p> <p>○12月1日、徳山藩、藩校鳴鳳館を興譲館と改称する。</p> <p>○明倫館蔵版『改定音訓四書正文』刊。山県太華の訓点による。</p> <p>○毛利広篤撰『省耕集』刊。安積良斎序。徳山藩士の漢詩集。</p> <p>○小倉遜齋『服忌令正義』成る。</p> <p>○能美隆庵、始めて月性と面識となる。</p> <p>○富永有隣、見島へ流される。</p> <p>○大楽源太郎、この年に月性の時習館に入学か。それまでは佐波郡右田の学文堂で大田稻香に従学。安政2年7月に咸宜園に入学する。</p> <p>○『滑稽道中宮嶋土産初編』に、萩南片河町山城屋孫十郎が江戸の須原屋茂兵衛や大坂の秋田屋太右衛門等と刊行者に名を列ねている。</p> <p>○『長防風土記』成る。(東大史料編纂所所蔵)。</p>
	備考		○6月14日、帆足万里歿、75才。安永7年(1778)生。

年	区分	記	事
嘉 永 6 ・ 癸 丑	防 長	<p>○1月26日、吉田松陰、10ヶ年の諸国遊歴の藩許を得て萩出足。5月24日江戸着。</p> <p>○2月7日、姥倉運河着工。</p> <p>○3月11日、近藤芳樹、藩主参勤に従って萩出立。4月1日江戸着。翌安政元年5月萩に帰る。</p> <p>○5月8日、大野雲鯨歿。俳人。聴松庵五世。</p> <p>○9月10日付、玉木文之進宛吉田松陰書状。“風説かは知らざれども、近藤晋一郎(注・芳樹)を山鹿素水へやり其説を聞かしむるの論起りしよし。(中略)亦近藤も人意に不満人物なるにかかることあるは、素水を口実として西洋流を破るべき手段と被察候。”</p> <p>○9月、周布政之助、政務役となる。</p> <p>○9月29日、村田藏六(大村益次郎)、伊達宗城の招きで宇和島に赴く。</p> <p>○11月14日、長州藩、相模海岸警備を命ぜらる。安政5年6月20日まで。相模国鎌倉・三浦両郡のうち69ヶ村担当。</p> <p>○12月8日、上田鳳陽歿、85才。 〈山県太華「鳳陽先生碑銘」〉</p> <p>○香川牛谷(新左衛門)歿、46才。岩国の儒臣。</p> <p>○赤根武人、月性の紹介で浦氏の郷校克己堂(在阿月)に入学する。</p> <p>○大津郡三隅西福寺の和真道、恒藤醒窓の塾に再入学し、4年間在塾し塾頭となる。</p> <p>○山県太華『太華文鈔』この年まとまるか。</p> <p>○近藤芳樹編『類題風月集』成る。安政3年刊。</p>	
	備 考	<p>○6月3日、ペリー、浦賀に来航する。</p> <p>○7月18日、プチャーチン、長崎に来航する。</p> <p>○『明史藁』刊。越後高田藩による出版。</p>	
嘉 安 永 7 政 元 27 ・ 甲 寅	防 長	<p>○1月11日、来原良藏等忠義会結成(『来原良藏伝』)。</p> <p>○1月18日、祖式尹哉(観耕亭)歿。俳人。菖蒲庵三世。</p> <p>○2月27日、久坂玄機歿、35才。(『近世防長人名辞典』は3月27日とする)。久坂玄瑞の兄。</p>	

年	区分	記	事
嘉安 永 7 (政 11 / 27 元) ・ 甲 寅	防		<ul style="list-style-type: none"> ○2月、玉乃九華『風雅』刊。天保11年(1840)自序。 ○3月28日、吉田松陰・金子重輔、下田にて密出国に失敗し自首する。10月24日、萩に護送されて帰り、松陰は野山獄に、重輔は岩倉獄に入る。 ○4月24日、明倫館『四書』板刻。(『敬親事蹟』)。 ○5月21日、冷泉古風歿、54才。歌人。国学に親しむ。林百非の弟。(歿年を『防長人物志』は安政3年とし、『近世防長人物辞典』は安政5年とするが、冷泉古風の歌集『石竹集』に附した天野御民(古風の子)撰による「小伝」は安政元年とする)。 ○6月、周布政之助等、藩政改革に着手。(長州藩の安政改革)。 ○6月23日、吉川氏、岩国錦見椎尾前の種痘場を医学館に改修する。 ○9月12日、福岡青海歿、42才。自殺。徳山藩校興讓館教授。 ○9月18日、梅廼舎好也歿、78才。 ○12月、月性「封事草稿」成る。幕府の対外政策を激しく批判している。 ○近藤芳樹『靈祭私儀』・『職原抄校本』成る。 ○山県半蔵(後の穴戸璣)、幕府勘定吟味役村垣範正の一行に随従して北海道・沿海州を巡見。翌2年帰国。この時の体験は『北陸日記』・『哈喇佛略誌』としてまとめられる。 ○世良修蔵、月性の時習館に入学。
	参 考		<ul style="list-style-type: none"> ○3月、日米和親条約締結。日本開国。 ○4月16日付、佐渡三良宛坪井信良書状。“此十三日ニ青木周助の餞別会有之。一同集会仕、終日寛話仕申候。御人々ハ伊東玄朴、大槻俊斎、戸塚静海、林洞海、三宅良斎、竹内玄同、川本幸民、淡堂、周助、信良”。(赤木昭夫『蘭学の時代』参照)。青木周弼在江戸。 ○羅森『満清紀事』日本に伝わる。(安政2年、吉田松陰はこの書を『清国咸豊乱記』として訳した)。
安政2・乙卯	防 長		<ul style="list-style-type: none"> ○1月11日、金子重輔、岩倉獄中にて病歿、25才。 ○1月12日、明倫館経費を3,500石とする。(『敬親事蹟』)。内現米1,400石。その負担は所帯方支出420石、撫育局支出980石の割合。 ○3月、吉田松陰、始めて月性と文通する。

年	区分	記	事
安 政 2 ・ 乙 卯	防 長		<p>○3月、安積良斎「北陸日記・哈喇佛略誌序」。『北陸日記』・『哈喇佛略誌』は山県半蔵著。</p> <p>○春、世良修蔵、須佐益田家の家臣重富家の養子となる。</p> <p>○4月10日～17日（或は16日か）月性、萩郊外椿東分村明安寺で法話をを行う。この年月性3度萩に来る。</p> <p>○4月12日、吉田松陰、野山獄中にて『孟子』の講義を始める。講義は後にまとめられて『講孟割記』となる。</p> <p>○5月26日、村田清風歿、73才。</p> <p>○7月26日、大楽源太郎、広瀬淡窓の咸宜園に入学。</p> <p>○7月、山田宇右衛門・藤井百合吉（二人は海岸砲架・攻城砲架の研究）福原清助・来原良蔵（二人は蘭学習得）、湯浅祥之助・郡司熊太郎（二人は砲術研究）、小沢忠右衛門（造船術）、長崎へ研習に派遣される。</p> <p>○8月5日、中村牛荘、老齡により側儒兼明倫館学頭を辞す。時に73才。</p> <p>○8月5日、山県謙蔵（号紫溟）、側儒再役。</p> <p>○8月10日、赤川淡水（後佐久間左兵衛）、水戸遊学のため萩出足。会沢正志斎・豊田天功に師事。3年後帰国して明倫館都講となり、水戸学を鼓吹する。</p> <p>○8月、周布政之助退陣し、棕梨藤太、政務役となる。</p> <p>○8月、林道一（博多の人）、柳井遠崎の清狂草堂にて「月性剣舞の図」を描く。</p> <p>○8月、長崎派遣の山田宇右衛門・藤井百合吉・小沢忠右衛門・岡儀右衛門、佐賀藩に赴き西洋技術の攝取状況を視察する（『佐賀藩銃砲沿革史』）。この時、反射炉の操業や鉄砲技術等の伝授を求めたが拒絶され、改めて長州藩は薩摩藩（当時藩主島津斉彬）へ同目的の申入れを行った（『防長回天史』）。</p> <p>○9月1日、西洋学所を好生館に附属する一局として設置。能美隆庵・田原玄周・松島端益を西洋学師範に、田上宇平太・青木研蔵を西洋学師範掛とする。能美隆庵は兵学は教えず医学・文法を講じる。西洋学所は後に博習堂と改称され、長州藩の兵学校となる。</p> <p>○9月4日、堀文左衛門（寿松園）歿、66才。書家。</p> <p>○9月13日、宇都宮黙霖、萩に来て土屋蕭海宅に止宿。吉田松陰の『幽</p>

年	区分	記	事
安・ 政乙 2卯	参 考	○10月2日、江戸大地震。藤田東湖死、50才。 ○10月、長崎海軍伝習所開設（長崎奉行所西役所内）。	
安 政 3 ・ 丙 長 辰	防	○2月19日、布施御墻歿、58才。歌人。『救饑提要』・『他所問答』の著がある。 ○3月10日、樋口遯庵歿、56才。吉川家の儒臣。伊藤東峰の弟子。 ○3月、大日比西円寺の法道、萩の報恩寺の住職となる。 ○4月24日、萩郊外小畑の恵美須鼻に洋式造船所を開設。木造軍艦建造。 ○6月18日、吉田松陰、野山獄から引続く『孟子』の講義を終える。講義はまとめられて『講孟筭記』（後『講孟余話』と改題）となる。 ○6月、藩内の全医師を好生館の支配下に置き、統制する。 ○6月～8月～10月、松下村塾生と嚶鳴社と対立、意見の応酬を行う。これは安政3月1月の日米通商条約締結に対する政治的態度のとり方をめぐってのものであった。（『来原良蔵伝』）。 ○8月10日、月性、西本願寺の召し出しによって上京。伊勢・和歌山へ出張して説教を行う。 ○8月10日、好生館（医学館）、南苑より明倫館に移転、好生堂と改称。 ○8月16日、今津桐園歿、68才。越氏塾教授。吉武江陽の弟子。後任は今津秋庵。 ○8月18日、吉田松陰・宇都宮黙霖の勤王論争始まる。（松陰は黙霖に説伏され討幕論に転換。直接に松陰が討幕を主張しはじめるのは安政5年6月の幕府の違勅事件から）。 ○8月、赤根武人、松下村塾に入る。 ○9月4日、吉田松陰、山県大弼の『柳子新論』読了（松陰『野山獄読書記』）。 ○9月13日、阿部大蔵歿、53才。阿武郡江崎教専寺住職。 ○9月、吉田松陰「松下村塾記」成る。当時松下村塾は松陰の外叔父久保五郎左衛門の経営であった。 ○10月1日、月性（在京都）、南禅会で斎藤拙堂・頼三樹三郎・広瀬元恭等と識り合う。 ○10月23日、小泉杏陰歿、63才。熊毛郡上関の医師。漢詩人。	

年	区分	記	事
安 政 3 ・ 丙 辰	防 長	<p>○10月、吉田松陰、山県太華の「講孟節記評語」に反論する。</p> <p>○10月、月性「護法意見封事」(『仏法護国論』)執筆。</p> <p>○11月1日、村田藏六(大村益次郎)、江戸新道一番町に塾を開き、鳩居堂という。</p> <p>○11月16日、村田藏六、蕃書調所の教授手伝となる。</p> <p>○11月、前田孫右衛門が建議した反射炉建設は中止となる。</p> <p>○11月、萩南苑の地に製薬所を設け、土屋養哲を主任にして西洋薬物(火薬)の製造を始める。</p> <p>○12月1日、村井正純歿、47才。玖珂郡三丘の穴戸氏郷校徳修館教授。</p> <p>○12月17日、萩小畑の造船所において長州藩最初の洋式軍艦丙辰丸進水。艦長松島瑞益。</p> <p>(この洋式軍艦及び軍備の洋式化に対する藩内の空気を伝えてくれるものとして安政7年の玉木文之進の意見書参照。そこで文之進は西洋主張の人々に反対している。)</p> <p>○12月18日、梅田雲浜、阿月を経て萩に来る。翌年1月14日まで滞在。</p> <p>○12月27日、小倉遜齋、明倫館学頭となる。慶応3年2月まで。</p> <p>○12月27日、岩政信比古歿、67才。国学者。</p> <p>○美祢郡伊佐村に友善塾開設。代官玉木文之進の勸奨により在郷藩士の據金により設立されたものである。</p> <p>〈玉木文之進「友善塾記」。(実は吉田松陰の代作)〉</p> <p>○和真道、大津郡三隅下村に不老溪塾を開く。</p> <p>○太田報助(『毛利十一代史』の編者)、広瀬淡窓の咸宜園に入塾。</p> <p>○中村雪樹、会沢正志齋に従学する。</p> <p>○郡司覚之進、伝習生として長崎に赴く。</p> <p>○松崎武人、阿月浦家の臣赤根雅平の養子となり、赤根武人となる。</p> <p>○岩政信比古『佐久良の林』刊。</p> <p>○近藤芳樹「花の江の記」成る。</p> <p>○玉木文之進周辺の人によって大橋訥庵の『隣疝臆議』筆写されている。</p> <p>○松下村塾の寄宿料1日米5合(5合分銀4厘6毛余。米価石当り銀101匁位)。</p>	

年	区分	記	事
安 政 3 ・ 丙 辰	参 考		<p>○2月11日、幕府、洋学所を蕃書調所と改称する。4月1日付で東条英庵・手塚律藏（共に防長出身）、教授手伝となる。20人扶持に年15両の手当。外に教授手伝になった者に松木弘安（後の寺島宗則）・川本幸民等がいる。蕃書調所は翌4年1月に開所。</p> <p>○10月20日、二宮尊徳歿、70才。</p> <p>○11月1日、広瀬淡窓歿、75才。天明2年（1782年）生。</p> <p>○高野長英訳『三兵答古知機』刊。</p> <p>○蘭人ヒューゲニン著・手塚謙藏（律藏）訳『西洋鉄煩鑄造篇』成。</p> <p>○中国でアロー号事件起る。</p>
安 政 4 ・ 丁 巳	防 長		<p>○1月、赤根武人、月性の紹介により萩に来遊した梅田雲浜の弟子となる。</p> <p>○2月5日、小川乾山歿、49才。徳山藩儒。</p> <p>○4月3日、月性（在京都）、西本願寺別邸の翠紅館で藤森天山・梅田雲浜等と会合。</p> <p>○4月11日、村田藏六（大村益次郎）、幕府講武所の助教授となる。講武所は、安政2年に幕府が江戸築地越中島に設けた武術習練場。村田藏六の仕事は西洋兵書の翻譯。</p> <p>○4月、世良修藏、江戸に出て安井息軒の三計塾に入門。</p> <p>○6月、伊藤慎藏訳『颯風新話』刊。（英人ヘンリイ・ビッディングトン原著の蘭訳書よりの重訳。航海法の書）。</p> <p>○7月17日、松本彦右衛門歿。明倫館算学師範。</p> <p>○8月、藤井又右衛門（佐波郡宮市の書肆）、『佐波のあら玉』刊。三田尻地方の歌人の和歌集。</p> <p>○12月、玉木文之進「友善塾記」成る。友善塾は美祿郡伊佐村徳定にあった。</p> <p>○嚶鳴社友、萩河添に家を借り、社の寄合いの場とする。（山県氏の河添洲崎の家で、川に臨む）。嚶鳴社は北条瀬兵衛と周布政之助とが相談して結社したもので、後には入社者十数人に達した。当時の明倫館の学風 - “館内主張経説、弗理余事”（北条瀬兵衛「把山遺稿序」）に反抗してのことであった。そして“専講温史八文字、兼攻辞章。久</p>

年	区分	記 事
安 政 4 ・ 丁 巳	防 長	<p>之入社十数人、相会則討論講究、援古徴今、延及時事”状態であった。更に享保時代の儒者を除いては、柴野栗山から尾藤二洲以下近時の儒者の著作を読み、お互いに抄録を作り集まって数冊となったという。（中村百合藏「嚶鳴社記」。又『周布政之助伝』・『来原良藏伝』。海原徹『明治維新と教育』）。</p> <p>○坂上忠介（寓所）、明倫館助教となる。</p> <p>○大楽源太郎、上洛して梁川星巖・梅田雲浜・頼三樹三郎等へ出入りする。梅田雲浜には師弟の礼をとる。</p> <p>○村田藏六、『砲兵操練全書』訳述。</p>
	参 考	<p>○1月18日、蕃書調所開所す。（蘭学の教育機関であると同時に外交文書翻訳局として幕府外交機関の下部機関でもある。後には訳局としての性格が強くなる）。</p> <p>○8月、会沢正志斎『新論』刊。（文政8年成稿）。</p> <p>○10月21日、ハリス、江戸にて米大統領の国書を將軍に呈す。</p> <p>○吉村秋陽、家塾一枝樓を開く。</p>
安 政 5 ・ 戊 午	防 長	<p>○1月6日、吉田松陰「狂夫の言」成る。</p> <p>○2月29日、杉山宗立歿、83才。医家。シーボルトの弟子。</p> <p>○2月29日、浅見巢雲歿、74才。書家。</p> <p>○2月、広瀬旭荘、萩に来る。</p> <p>○2月～4月、月性、萩に来て光山寺・泉福寺・清光寺にて法話を行う。</p> <p>○3月、松下村塾生、須佐育英館生（学頭小国剛藏）と相互交流を行う。</p> <p>○3月、江戸桜田藩邸内で蘭書回読会を開く。会主竹田庸伯。坪井信友・東条英庵を講師とする。</p> <p>○3月、藤井百合吉、反射炉を建設して鉄砲・銅砲の鑄造を行うべきことを建議する。この頃、手塚謙藏（律藏）訳『西洋鉄砲鑄造篇』が長州藩にもたらされ、田上宇平太から松島瑞益に渡る。</p> <p>○3月、近藤芳樹「花洛名勝図会序」成る。</p> <p>○5月11日、月性歿、42才。文化14年（81817）生。</p> <p>○5月、藩是三大綱領決定。朝廷に忠・幕府に信・祖宗に孝。</p>

年	区分	記	事
安 政 5 ・ 戊 午	防 長		<p>○5月～6月、吉田松陰、「対策」・「愚論」・「統愚論」を梁川星巖に送る。</p> <p>○7月、吉田松陰、藩政改革意見書「急務四条」を上書。文中、山県太華を“国家の大計勤王の大義”を知らない俗儒として排斥を求める。</p> <p>○8月1日、都濃郡戸田の給領主堅田氏の家老河内紀宗（堅田氏の郷校を主宰）、戸田の壮士26名を率いて松下村塾に来て合同教練を行う。</p> <p>○8月21日、長州藩へ密勅下る。</p> <p>○8月、口羽把山（徳祐）、寺社奉行となる。</p> <p>○8月、赤川淡水（佐久間左兵衛）、水戸から帰り、明倫館都講兼助教となる。</p> <p>○8月、飯田正伯、松下村塾へ入門する。</p> <p>○8月、明倫館改革が藩政府で問題となる。学力があっても身分階級により入学できない者でも入学できることとし、館内の列座も身分によっていたのを改めて学力によることとする。ただし館外では身分を厳守させる。</p> <p>○8月30日、岡泰安歿、63才。</p> <p>○9月4日、宍道芝斎（浪江）歿、60才。楊井蘭洲の第2子。楊井静斎の弟。宍道敬所の父。</p> <p>○9月11日、岸御園歿、40才。国学に親しみ、和歌を能くす。吉田松陰と交友があり、松下村塾に出入する。</p> <p>○9月、久坂玄瑞、村田藏六（大村益次郎）の鳩居堂（江戸番町新道一番町）に入門。</p> <p>○9月、来原良藏、「寝られぬまま」を著す。藩政改革意見を述べたもの。</p> <p>○秋よりコレラ流行。</p> <p>○11月5日、石川瓊洲歿、49才。画家。</p> <p>○11月、吉田松陰、老中間部詮勝要撃策を立てる。</p> <p>○11月4日、高杉晋作、昌平黌に入学する。寮では岡鹿門（仙台藩）と同室。晋作は8月に出府して大橋訥庵に入門していた。（昌平黌『書生寮姓名簿』。岡鹿門『在臆話記』）。</p> <p>○12月27日、吉田松陰、野山獄に再入獄となる。</p>

年	区分	記	事
安 政 5 ・ 戊 午	防	○山県半蔵(穴戸磯)、明倫館都講となる。 ○中村雪樹、再度明倫館に入学。 ○松島剛蔵(瑞益)、藩命により青銅加濃铸造書を訳す。(大橋周治『幕末明治製鉄史』)。 ○手塚律蔵訳『泰西史略』刊。 ○近藤芳樹『標注職原抄校本』刊。(嘉永7年成立)。 ○佐々木向陽『箋註蒙求標疏』刊。岡白駒の『箋註蒙求』に注釈をつけたもの。	
	参 考	○6月19日、日米修好通商条約締結。(これをめぐり違勅問題が起り、吉田松陰、討幕論を主張するようになる)。 ○7月、幕府、長崎に英語伝習所開設。長崎岩原屋敷内の奉行支配組頭永持享次郎役宅を充てる。 ○9月2日、梁川星巖歿、70才。寛政元年(1789)生。 ○9月以降、安政の大獄進展する。 ○10月、福沢諭吉、江戸築地鉄砲洲に蘭学塾を開く。奥平藩中屋敷内。 ○8月頃より江戸にコロリ(コレラ)流行する。	
安 政 6 ・ 己 未	参 考	○1月、吉田松陰、獄中にて伏見要駕策を画策する。 ○1月、山口講習堂の経費を明倫館の負担とする。 ○2月15日、久坂玄瑞、江戸より萩へ帰る。同月28日、西洋学所へ入所。 ○4月、東条英庵、幕臣となる。 ○4月、北山安世(佐久間象山の甥)、萩に来る。 ○4月7日、吉田松陰、北山安世宛書状。“那波列翁を起してフレーヘードを唱ねば腹悶医し難し。(中略)、今の幕府も諸侯も最早酔人なれば扶持の術なし。草莽崛起の人を望む外頼なし。” ○4月、穴戸真徹「六郡廻村日記摘要」(玉木家文書)。美祢・小郡・山口等の宰判の行政監察及び民政視察報告書。 ○5月25日、吉田松陰、江戸へ送られる。 ○6月、西洋学所における「洋学科目」を定める。 ○7月、庄原彝卿『篁墩詩鈔』刊。	

年	区分	記	事
安政6	防		<p>○8月1日、西洋学所を南苑より明倫館へ移し、博習堂と改称する。</p> <p>○8月1日、好生館を南苑より明倫館へ移し、好生堂と改称する。文久元年(1861)に更に瓦町に新築移転する。</p> <p>○8月18日、桂月洲(瀬兵衛)歿、52才。吉敷毛利家の臣。郷校憲章館学頭。</p> <p>○8月21日、口羽把山(徳佑)歿、26才。</p> <p>○7月から8月にかけてコレラ患者多発。</p> <p>○9月3日、能美隆庵(洞庵の子)、嫡子雇にて世子の侍医となる。</p> <p>○9月18日、環中歿、70才。玖珂郡本郷村出身。天竜寺栖松軒住職。</p> <p>○10月1日、原采蘋、萩瓦町にて歿す。62才。原古処の娘である。</p> <p>○10月27日、吉田松陰、刑死。30才。</p>
	長	<p>〈吉田松陰「留魂録」〉</p> <p>○11月20日、青木周弼、『英国史』翻訳の藩命を受ける。(翌万延元年、能美隆庵・山県半蔵、『英国史』の校訂を命ぜられる。)</p> <p>○富永有隣、松下村塾を去って吉敷郡秋穂に定基塾を開く。</p> <p>○荒地清蔵保清、鉄砲金具師戸村重右衛門と共に出府し、洋式銃の製造技術を学ぶ。万延元年6月、萩に帰る。</p> <p>○原田曲斎『貞享式海印録』成る。俳諧書。</p>	
己未	参		<p>○5月、英国総領事オールコック着任する。(オールコック『大君の都』)。</p> <p>○9月14日、梅田雲浜歿、44才。</p> <p>○9月20日、佐藤一斎歿、88才。明和9年(1772)生。</p> <p>○10月7日、橋本左内(26才)・頼三樹三郎(34才)、刑死。</p> <p>○福沢諭吉、開港直後の横浜に赴き、英語の世界性に目覚め、蘭学から英学へと転向を決意する。</p>
	考		
万 安政7 (3)延 18元 ・庚 申	防		<p>○1月19日、北条源藏、幕府の遣米使節に随従して渡米の為、咸臨丸にて品川を出発。</p> <p>○2月20日、藩の兵制を、神器陣方式から全面的に洋式方式に転換する。</p> <p>○3月10日、小倉遜斎、明倫館学頭を辞す。後任は飯田履軒。</p> <p>○3月、小田村伊之助、山口講習堂の督学となる。</p>
	長		

年	区分	記	事
安万 政 7 （ 3 延 / 18 ）元 ・ 庚 申	防	○4月4日、鈴木高鞆歿、40才。鈴木直道の子。	
		○4月18日、熊谷五右衛門義比歿、66才。	
		○4月26日、村田藏六（大村益次郎）、長州藩に出仕し、年米25俵の給与を受く。	
		○4月、久坂玄瑞出府。文久元年10月、萩に帰る。	
		○4月、飯田正伯（藩医）、奥州蝦夷地視察に出発。	
		○4月、上領道仁（前好生堂舎長）・中原玄快、長崎に遊学し、オランダ人ポンペ・ファン・メールデルフォルトに師事する。	
		○5月14日、楊井静斎（蕙洲）歿、64才。字は子温。松崎慊堂門下。	
		○5月27日、飯田忠彦自殺、63才。『野史』の著者。	
		○7月25日、木村鶴巢歿、83才。書家。	
		○7月、弘正方歿、51才。歌人。国学に親しむ。『松崎神社鎮座考』等の著述がある。	
		○9月26日、高橋有胤歿。山口多賀神社宮司。	
		○9月27日、山根素全歿。俳人。古萩園四世。菖蒲庵五世。	
		○10月20日、越氏塾学舎再築成就。	
		○11月12日、日野春靄歿、53才。	
	長	○11月22日、北条源藏、米国より帰国し、この日萩に帰着。	
		○11月28日、山口講習堂・三田尻越氏塾が明倫館一手捌き（所轄）となり、助教・舎長など明倫館より派遣する。小田村伊之助（楯取素彦）、講習堂教授となる。	
		○静間三積歿。歌人にして国学者。楊井松雄及び本居大平に従学。行年を『阿武郡志』は83才とする。	
		○原田曲斎『七部婆心録』成る。俳諧書。	
		○『三代実録』に毛利秀就の事蹟を加え、編纂の規模を拡大して『毛利氏四代実録』として編纂に着手する。明治3年6月完成。	
	参 考	○3月3日、幕府大老井伊直弼殺さる。桜田門外の変。	
		○3月、大坂の銀相場、金1両=銀74.775匁、銭1貫文=銀11.225匁。（『近世大坂の物価と利子』）。	
		○11月21日、安積良斎歿、71才。	

年	区分	記	事
万文 延2 (2久 /19) 元 ・ 辛酉	防 長		○12月、松下村塾生及びその同志「一燈銭申合」。 ○井原凶書熙敬、熊毛郡美原に郷校縮往舎開設。
	参 考		○6月より江戸をはじめ麻疹流行。 ○11月、「ザ・ジャパン・ヘラルド」刊。 ○津田真道「性理論」成る。気一元論を主張し、その気を曳埜(エーテル)だとしている。
文 久 2 ・ 壬 戌	防 長		○1月3日、高杉晋作、幕府役人根立助一郎一行に随従して上海に渡航し、太平天国の乱と中国植民地化の現実を体験する。 〈高杉晋作『遊清五録』(内容「航海日録」・「上海淹留日録」・「外情探索日録」・「内情探索日録」・「崎陽雜録」)〉 ○1月14日、坂本竜馬、武市半平太の書を携えて萩に来る。23日に帰る。(『もりのしげり』)。 ○1月21日付、久坂玄瑞より武市半平太宛書状(『維新史』第3巻)。 “諸侯不足恃、公卿不足恃、草莽志士糾合義挙の外には逆も無策の事と私共同志中申合居候事ニ御座候。乍失敬尊藩も弊藩も滅亡しても大義なれば苦しからず。” これに対する武市半平太の考えは吉村寅太郎宛書状によってうかがえる。 ○春、今比洪川(岩国永興寺住職)「禅海一瀾」成る。 ○3月、久坂玄瑞、京都に上り長井雅楽排斥運動に入る。 ○3月、榑崎景海(五百輔)撰『萩城六々歌集』刊。発行所萩博古堂。萩地の歌人36人の選集。近藤芳樹序。 ○5月、長井雅楽、「航海遠略策」によって朝廷に罪を得、6月に帰国して謹慎する。 ○7月14日、高杉晋作、上海より長崎に帰る。 ○8月2日、久坂玄瑞、「廻瀾条議」を藩主に提出。 ○8月2日、長谷川禹錫歿、22才。岩国養老館教授。玉乃九華の弟子。 ○8月8日、熊谷直好歿、81才。桂園派歌人。岩国の人。香川景樹門下。(兼清正徳『熊谷直好』) ○8月8日、船越清蔵歿、58才。長府藩儒臣。帆足万里・広瀬淡窓門下。

年	区分	記	事
文 久 2 ・ 長 壬 戌	防 長		<p>○8月29日、来原良藏、江戸長州藩邸にて自殺。34才。長井雅楽の航海遠略策を支持したことへの自責による。</p> <p>○閏8月8日、中谷正亮歿、35才。</p> <p>○閏8月21日、熊谷蘿月歿、80才余。聴松庵六世。藩用達商人熊屋宗家。</p> <p>○閏8月24日、小田海僊歿、78才。画家。</p> <p>○閏8月27日、高杉晋作、江戸藩邸より亡命する。</p> <p>○秋、高杉晋作より某宛書状。“今日より二国を勤王のため抛つと御決心遊ばされ候時は二国四民残らず今日必死の時節と決心仕り候えば云々”。(この書状を堀哲三郎編『高杉晋作全集』は閏8月下旬とし桂小五郎宛とする。奈良本辰也氏は徳間書店刊『近代日本の名著・先駆者の思想』で、9月以降とする)。</p> <p>○閏8月28日、久坂玄瑞『解腕痴言』成る。</p> <p>○10月、穴戸真激(左馬之介)「松陰先生遺噺序」成る。</p> <p>○11月、高杉晋作等松下村塾生を中心とした「攘夷血盟書」成る。</p> <p>○12月12日、高杉晋作等、品川御殿場山の英国公使館を焼打ちする。</p> <p>○12月、久坂玄瑞・山県半藏、信濃松本に佐久間象山を訪ね、長州藩招聘を要請するが承諾を得られなかった。</p> <p>○飯田正伯、獄中に死す。38才。</p> <p>○坂上忠介、江戸有備館教授となる。</p> <p>○山県太華「上書」(山口県文書館蔵)。“近来世上天朝復古の談と申有之由、是ハ当時の形勢を深く不相考より” 起こったもので終には天下の大乱を招くことになるから、“公武御一和の前議へ御取返し被遊候御事” と進言している。</p> <p>○尚義場(陪臣の文武習練場)を山口に開設する。文久3年、山口明倫館附属となる。</p> <p>○福田扇雨(長府藩医の子)、長府に桜柳亭(後に集童場)を開く。一般庶民にも門戸を開放する。この塾に学んだものは、後に多くの者が報国隊に参加。乃木希典もその一人であった。</p> <p>○南方一枝「蘭峯先生伝」成る。蘭峯先生は樋口世禎のこと。</p> <p>○明倫館蔵版『明詩別裁集』12巻6冊刊。清の沈徳潜及び周準が乾隆3年(1738・元文3)に共撰したものの和刻。</p>

年	区分	記	事
文久2 ・ 壬戌	備考		<ul style="list-style-type: none"> ○1月15日、幕府老中安藤信行襲撃される。坂下門外の変。 ○6月、津田真道、オランダへ留学。 ○7月21日、大橋訥庵歿、47才。文化13年(1816)生。 ○会沢正志斎「時務策」成る。開国を止むを得ないとしている。 ○長崎英語伝習所を片淵郷組屋敷内の乃武館に移し、“英語所”と改称する。翌3年、立山奉行所内に移す。
文久3 ・ 癸亥	防長		<ul style="list-style-type: none"> ○2月6日、長井雅楽、切腹。45才。 ○2月28日、能美洞庵隠居し(70才)、隆庵家督。 ○3月15日、高杉晋作。東行と号す。 ○春、世良修蔵、浦氏の家臣木谷家の養子となる。世良と改姓したのは慶応2年のこと。 ○4月5日、安部惟貞(諒)歿、74才。連歌師の家柄。国学を習得。 ○4月16日、藩主毛利敬親、萩より山口へ移る。藩府の山口移鎮。 ○5月10日、第一次馬関攘夷戦争始まる。6月にかけて決行する。 ○5月12日、井上聞多・伊藤俊輔・山尾庸三・遠藤謹助・井上勝、英国留学に出発する。 ○5月29日、中島名左衛門、暗殺される。47才。郡司寛之進、遺骨を萩に葬る。 ○5月、赤間関に軍事病院を設置する。赤間関病院と称し、総裁赤川玄樞・副総督李家文厚。医員20余名。攘夷戦に備えたもの。元治元年11月閉鎖。 ○6月7日、高杉晋作、奇兵隊を結成する。 ○6月23日、法道(大日比西円寺住職)歿、60才。 ○7月、和真道、金剛隊を結成。防長の僧300名をもって編成。萩の清光寺に屯所を置く。別名白鞘隊という。 ○8月、萩練兵場を山口に移し、白石の普門寺を仮教場とする。村田蔵六教授。 ○8月18日、公武合体派(会津・薩摩藩)のクーデター。長州藩、京都より追放される。 ○10月4日、松島剛藏、海軍頭取となる。

年	区分	記	事
文 久 3 ・ 癸 亥	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○10月12日、生野の変起る。河上弥市、自殺する。 ○10月28日、坪井九右衛門(顔山)、処刑される。64才。 ○11月15日、佐々木向陽歿、63才。宇部福原氏の郷校菁莪堂教授。 ○11月26日、山口の講習堂を山口明倫館と改称、萩の明倫館を萩明倫館と改称。山口明倫館に文学寮・兵学寮を設け、文学寮に小学舎・編輯局、兵学寮に歩兵・騎兵・砲兵の三課を置く。 ○12月16日、青木周弼歿、61歳。能美洞庵の後任として、2月に好生堂教諭役になったばかりであった。 ○12月、明倫館稽古始めの講義に、『大学』三綱領とともに新しく『日本書記』神代巻を加えて講ずべきことと定める。 ○萩の疑成館を山口に移し、五十鈴学館と改称する。 ○服部東陽(吉敷毛利氏の臣)、長州本藩のその身一代儒者となり、明倫館助教となる。 ○渡辺平吉、博習堂都講となる。 ○浮村定直(画家)、沖原鑄造所を辞める。 ○吉田松陰『孫子評註』刊。 ○長門明倫館蔵版『陸宣公奏議』刊。陸宣公は唐の陸贄。『陸宣公奏議』(『陸宣公翰苑集』)は各藩校で『貞観政要』とともに政治上の必読書として読まれた。 ○長門明倫館蔵版『歴代名臣奏議初編』刊。『歴代名臣奏議』は、明の永楽14年(1416・応永23)に成祖の命による勅撰。明の張溥が後に刪定した。 ○加藤神陰『一騎歌盡』刊。嘉永5年(1852)自序。長門明倫館蔵版。各家兵法を今様の文調で学生が暗唱しやすくしたもの。加藤神陰は常陸笠間藩士。七歳長州下向に従い、山口明倫館で教授した。 	
	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月25日、徳富蘇峰生。～昭和32年(1957)。 ○6月10日、緒方洪庵歿、54才。文化7年(1810)生。 ○6月17日、箕策阮甫歿、65才。寛政11年(1799)生。 ○7月2日、薩英戦争起る。 ○7月14日、会沢正志斎歿、82才。天明2年(1782)生。 	

年	区分	記	事
文久3・癸亥	参考		<ul style="list-style-type: none"> ○7月、長崎の英語所、立山奉行所内の長屋に移され、英語稽古所となる。 ○7月、何(が)礼之、平井義十郎とともに長崎の英語稽古所学頭となる。 ○8月29日、幕府、洋書調所(蕃書調所の後身)を開成所として改組する。(そこに集った洋学者は、明治官学の形成者となった)。 ○アメリカ船、象を舶載。江戸両国で見世物とする。 ○江戸の諸物価は、文政期に比べると米は1.5倍、灯油は3倍、塩は4.6倍、絹は3.5倍となる。開国による外国貿易開始の結果であった。
文元久4治(2) / 20元)・甲子	防長		<ul style="list-style-type: none"> ○1月、中島治平、好生堂舎密頭取となる。 ○1月、高杉晋作書状。某宛。 “拙者は御割拠も真の御割拠が得意なり。進発も真の進発が得意なり。ウハの割拠は不得意なり。(中略)ウハの進発は聞くも腹が立つなり。” ○2月14日、越氏塾を学習堂と改称する。更に7月11日に講習堂と改む。 ○2月27日、宝州歿、64才。弘法寺住持であった。萩郊外椿東松本に住した。 ○2月、明倫館積菜の儀を神宮式により執行する(「高田信濃介勤功書上」。高田信濃介は萩郊外鶴江神明社の神官であって、明倫館において神宮式の仕講御用を勤めた)。 ○3月2日、庄原芳庵歿、71才。医師。林百非・冷泉古風の兄。 ○3月、青木研蔵(青木周弼の弟)、好生堂教諭役となる。 ○3月、長府に集童堂開設。(藩士熊野直介等によるもの)。 ○3月29日、高杉晋作、脱藩の罪で野山獄に投ぜられる。 ○6月5日、吉田稔磨死、24才。池田屋の変による。 ○6月9日、飯田履軒歿、61才。 ○6月14日、高杉晋作「獄中手記」。(林房雄『青年』参照)。 ○6月21日、臼杵横坡歿、53才。長府藩校敬業館教授。 ○7月11日、山口明倫館文学寮を本学寮と漢学寮に分け、本学寮には神典・法度・歌文、漢学寮には経学・歴史・制度・文章の各課を置く。 ○7月19日、禁門(蛤御門)の変。長州藩大敗し、久坂玄瑞以下戦死。

元治元（1864）～ 慶応元（1865）

年	区分	記	事
文元 久 4 治 (2 / 20元) ・ 甲 子	防 考	○8月2日、幕府、征長令を発す。(第一次長州征伐)。 ○8月5日、四国連合艦隊、赤間関の長州砲台を攻撃、長州大敗する。 ○8月18日、武田楊岸歿。岩国の雲谷派の画家。 ○9月10日、土屋蕭海歿、36才。 ○9月26日、周布政之助自殺、42才。 ○10月、長州藩、幕府へ恭順謝罪。藩主、山口より萩へ移り、謹慎して幕命を待つ。 ○12月12日、宍戸真激等処刑される。宍戸真激は61才。 ○12月26日、高杉晋作、赤間関で挙兵。 ○近藤芳樹、山口明倫館教授となる。 ○近藤芳樹『標注令義解校本』刊。嘉永7年4月、安積良斎序。 ○近藤芳樹『寄居歌談』全巻揃(5巻5冊)刊。	
元慶 治 2 (4 / 7)元 ・ 乙 丑	防 長		○1月6日、奇兵隊等諸隊、藩正規軍と美禰郡絵堂で交戦。以後1月10日に美禰郡大田、1月16日に同郡絵堂で戦い、諸隊の勝利となる。 ○1月13日、羽仁稼亭歿。書家。 ○1月14日、本城素堂殺さる。41才。徳山藩儒。 ○1月28日、藩政府役員交迭。俗論党派排除される。 ○1月、浅見煙溪歿、33才。徳山藩儒。 ○2月27日、藩主毛利敬親、再び山口へ移る。 ○2月、黒神直民、徳山遠石八幡宮大宮司となる。 ○3月13日、村田蔵六(大村益次郎)、兵学校用掛となる。 ○3月15日、干城隊結成され、佐世八十郎(前原一誠)、頭取となる。

年	区分	記	事
元慶 治 2 乙 (4 / 7元) 乙 丑	防 長	<p>○3月23日大田市之進・佐々木男也・山県狂輔等宛高杉晋作書状。“赤間関も我断然国体を愧じしめるざるよう開港すべし。(中略)、五大州中へ防長の腹を押し出して大細工を仕出さねば大割拠は成就致さずならむ”</p> <p>○4月26日、桂小五郎(木戸孝充)、潜伏先の但馬より赤間関に帰る。</p> <p>○5月12日、幕府、第2次長州征伐発令。(9月21日、長州再征勅許)。</p> <p>○5月17日、萩練兵場を萩兵学校と改称。歩兵・砲兵・騎兵の三科を置く。</p> <p>○5月27日、村田藏六、軍政専任の用所役となる。</p> <p>○閏5月1日、坂本竜馬、赤間関に来て桂小五郎と薩長連合について協議。</p> <p>○7月4日、藩、領内諸郡に招魂場建設を命じる。</p> <p>○8月29日、杉百合助歿、63才。吉田松陰の実父。</p> <p>○8月29日、三田尻の講習堂を大学寮とし、庶民教育機関として別に小学舎を設ける。</p> <p>○8月、江村風月歿。徳山藩士。本城素堂の弟。安積良斎の弟子。</p> <p>○9月26日、高杉晋作・桂小五郎、海軍興隆用掛となり、赤間関開港を図る。</p> <p>○11月、馬島甫仙、奇兵隊を除隊して萩に帰り、松下村塾を経営する。</p> <p>○12月22日、村田藏六、大村益次郎と改名する。</p> <p>○成器塾、開校される。一門老臣や高禄者の子弟を教育する学問所として設置したもの。</p> <p>○美祿郡大田に郷校温故堂開設。在地の藩士が中心になって創設。藩よりの下附米170石を基資とした。</p> <p>○毛利斉広『世子語文』刊。毛利元徳序。</p> <p>○明倫館蔵版『黛玉編』刊。尊王思想を鼓吹する為に編纂されたもの。「弘道館記」・「正気歌」・「二十一回猛士自賛文」等を収める。二十一回猛士とは吉田松陰のこと。</p> <p>○明倫館蔵版『築城典刑』刊。オランダ人吉母波百児著、大鳥圭介訳。</p> <p>○3月23日、武備恭順の藩是決定。</p>	

年	区分	記	事
慶 治 2 （ 4 / 7 ） 元 ・ 乙 丑	参 考		<p>○8月、長崎学術所、新町の元長州屋敷跡に移り、済美館と改称。英・仏・独・の外国語の外に西洋諸学科を教授する。（明治元年2月、維新政府による長崎奉行所接收によって広運館と改称。後、文部省所轄長崎英学校となる。）</p> <p>○12月28日、西周・津田真道、オランダ留学より帰国。</p> <p>○長崎大浦天主堂完成。</p> <p>○この年、諸国に百姓一揆多発する。</p>
慶 応 2 ・ 丙 寅	防 長		<p>○1月21日～22日、木戸貫治（孝允）、京都薩摩藩邸にて西郷隆盛・坂本竜馬等と会合し、薩長軍事同盟成立する。</p> <p>○1月25日、赤根武人、刑死す。</p> <p>○2月14日、福原冬嶺歿、53才。来原良藏・中谷正亮の師。</p> <p>○3月9日、「長防臣民合議書」版刻。</p> <p>○3月、小倉遜齋「抄宗寮叢書序」。抄宗寮は、近藤芳樹が萩で開いた家塾。</p> <p>○4月2日、大村益次郎、三兵教授兼軍政用掛となる。</p> <p>○閏5月2日、小国融藏歿、42才。須佐育英館学頭。</p> <p>○5月、中村百合藏（浩堂）、周防明倫館学頭座御用取計となる。翌年1月まで。</p> <p>○6月7日、幕府軍、大島口に進撃。第2次征長の役（四境の役）開戦。</p> <p>○7月、能美隆庵「思慕余事序」。『思慕余事』は波多野藤兵衛洞霞著。</p> <p>○8月6日、太田稻香歿、57才。右田の学文堂督学。後任は天野謙吉。</p> <p>○8月13日、徳山藩、練兵塾を献功堂と改称する。</p> <p>○8月26日、山県太華歿、86才。天明元年（1781）生。</p> <p>○9月4日、幕府、征長軍の撤兵を令す。</p> <p>○9月25日、山県紫溟歿、52才。通称恭平。第二奇兵隊書記。</p> <p>○9月、好生堂、山口に移る。</p> <p>○11月17日、東沢瀉・栗栖天山、岩国沖の柱島に流される。12月9日、栗栖天山自殺する。28才。</p> <p>○11月25日、物外和尚歿、73才。文政年間、瑠璃光寺の住持であった。</p> <p>○12月8日、内藤白露園歿、65才。通称清兵衛。狂歌を能くする。</p>

年	区分	記 事
慶 応 2 ・ 丙 寅	防 長	<p>○12月28日、中島治平歿、44才。</p> <p>○岡村箕斎、三田尻の講習堂教授となる。</p> <p>○大洲鉄然・島地黙雷、改正局を設けて真宗僧侶の子弟に文武の教習を行う。</p> <p>○徳山藩主毛利広鎮『類題玉函集』刊。歌集。近藤芳樹序。</p>
	参 考	<p>○10月、岩城こと（高野広八）、足芸人浜碓定吉以下17人の曲芸師を連れて横浜を出港し、アメリカ・欧洲の興行に出る。</p> <p>○11月15日、吉村秋陽歿、70才。寛政9年（1797）生。</p> <p>○『智環啓蒙』刊。英人レグ・ゼームス著。薩摩藩による出版。</p> <p>○この頃江戸で「チョンキナ節」流行る。</p>
慶 応 3 ・ 丁 卯	防 長	<p>○1月27日、中村百合藏（浩堂）、長門明倫館学頭座取計となる。</p> <p>○2月、長門明倫館の称を廃し萩文学寮とする。2月13日、萩明倫館学頭小倉遜斎、文学寮用掛となる（安藤紀一『萩史料』）。</p> <p>○3月27日、竹院（吉田松陰の伯父）、熱海にて歿、72才。</p> <p>○4月14日、高杉晋作、下関新地の林算九郎の離れにて歿、29才。</p> <p>○4月24日、藩内全域に郷校を設置して一般庶民に門戸を開放、就学させる（『日本教育史資料』）。</p> <p>○5月22日、上領九郎兵衛、大津郡河原村に河原学校を開設する。</p> <p>○5月22日、坪井信友歿、36才。信友の養子が坪井航三である。</p> <p>○6月、萩に医学小学校を設ける。（元好生学舎を使用、当時病院になっていた。慶応4年間4月に閉鎖される。）</p> <p>○7月、久坂玄端『江月斎稿』刊。漢詩集。</p> <p>○7月、松下村塾再興。塾頭馬島甫仙。藩の扱いは、諸郡の郷校に準ず。</p> <p>○8月23日、南部五竹、刑死す。37才。岩国藩士。</p> <p>○8月25日、狩野晴皐歿。長府藩の画家。狩野芳涯の父。</p> <p>○9月、加藤神陰（有隣）、私塾詠掃塾を山口金古曾に開く。神陰は常陸国笠間藩士。『一騎歌尽』の著者。</p> <p>○10月、沢宣嘉『香川津孝子伝』成る。</p>

年	区分	記	事
慶 応 3 ・	防	○11月6日、野村望東尼歿、62才。 ○11月11日、山田宇右衛門歿、55才。吉田松陰の師。 ○12月、米人を教師として三田尻に語学校を開く。 ○小田村伊之助、楯取素彦と改名。 ○萩浜崎に朋来舎開設。命名は沢宣嘉。 ○大津郡深川村に深川学校開設。 ○大津郡沢江村(現三隅町)の郷校を再建する。 ○大村益次郎『兵家須知戦術門』刊。長門明倫館蔵版。原書はオランダの格能被著。当時大村益次郎は明倫館兵学寮や博習堂教授であった。	
	長		
丙 寅	参 考	○9月、津田真道「日本総制度・関東領制度」成稿。津田真道の憲法私案——連邦制度案である。 ○11月、西周「議題草案」成る。徳川慶喜の諮問に依って提出した憲法私案であって、連邦制度を採っている。 ○12月、福沢諭吉『西洋事情初編』刊。	
慶 明 応 4 (治 9 / 8) ・元 戊 辰	参 考	○1月3日、鳥羽伏見の戦い起り、戊辰戦争始まる。(明治2年5月18日、箱館五稜郭陥落して戊辰の内乱は終る)。 ○1月25日、木戸孝允、太政官の徴士となり、総裁局顧問となる。 ○1月25日、三田尻海軍学校博習堂を洋学塾と改め、米人ベデルを教師として招く。 ○2月、木戸孝允、藩籍奉還を建言する。 ○4月27日、大村益次郎、維新政府の軍防事務局判事となり、東征大総督補佐を命ぜられ江戸に下る。閏4月4日、江戸着。 ○閏4月20日、世良修藏(奥羽征討軍参謀)、暗殺される。34才。 ○閏4月、青木周藏(青木研藏の養子)、医学研究の為プロシアへ留学。藩より学費として1か年700ドル支給、3ヶ年修業の予定。 ○5月18日、成器塾を山口明倫館に移す。 ○6月6日、河村公成(芭蕉堂五世)、暗殺される。61才。 ○6月、山口明倫館の館則を改正する。 ○山口明倫館兵学寮に英学科を新設。教授伊藤弥次郎。	

年	区分	記	事
慶明 応 4 へ治 9 / 8 へ元 ・ 戊 辰	防	○7月22日、山口藏版局において戦報抄を印刷する。 ○8月3日、三田尻講習堂を明倫館管轄より三田尻代官所に移す。 ○8月、船木宰判に石炭局を設ける。明治5年に廃止される。 ○10月4日、奥平謙輔「贈秋月子錫書」(明治22年12月刊「経世評論」所載)。秋月子錫は会津藩士秋月悌次郎のこと。10月6日、謙輔に答えた秋月悌次郎「答長門奥平居士書」がある。 ○10月、松下村塾版『留魂録・風簷遺草』刊。 ○11月4日、明倫館を文学・兵学の二寮に分け、文学寮に小学舎・成器塾・郷学舎を附属、兵学寮に歩・騎・砲の三兵塾を附属とする。学校主事柏村数馬・同助役小川市右衛門。 ○11月14日、福田侠平(奇兵隊軍監)歿、40才。 ○小学舎における土庶混交を廃し、足軽以下百姓町人は附近の郷校又は私塾において修学するように布達(『山口県文化史』)	○岡村實斎、山口明倫館教授となる。 ○松岡温良、鑄銭司に私塾水哉堂を開く。松岡温良は吉敷郡大道の人。
	長	○2月24日、『中外新聞』(市河春三)創刊。 ○3月14日、五ヶ条の誓文を発表。最終的に木戸孝允が手を加えたもの。後年、木戸孝允は五ヶ条の誓文のことを忘却していた。 ○4月、『内外新聞』創刊。 ○閏4月3日、『江湖新聞』(福地桜痴)創刊。 ○閏4月、福沢諭吉、英語塾を芝新銭座に移転し慶応義塾と改称。教授料制度を採用。 ○6月、中村敬宇、英国留学より帰る。 ○7月、福沢諭吉『訓蒙蒙理図解』刊。 ○10月6日、秋月悌次郎「答長門奥平居士書」(明治22年12月『経世評論』第6号所載。秋月悌次郎は奥平謙輔の遺文集『弘毅斎遺稿』に序文を寄せている。)	○10月25日、徳富蘆花生。～昭和2年(1927)。 ○11月16日、北村透谷生。～明治27年(1894)。 ○津田真道(真一郎)訳『泰西国法論』刊。日本最初の西洋法学の概説
	考		

明治元 (1868) ~ 同2 (1869)

年	区分	記 事
明治4 (9/8) 元・戊辰	参 考	<p>説書。オランダのライデン大学教授フィッセリングの講義による。西洋近代市民社会思想の導入を図ったもの。</p> <p>○西周訳『万国公法』刊。西周の諒解なしに無断出版されたもの。</p> <p>○加藤弘之『立憲政体略』脱稿。</p> <p>○幕府、公議所を開く。(議会施設の先駆である)。</p>
明治2 ・ 己巳	防 長	<p>○1月、松下村塾蔵版『三策』刊。狩野深藏(狩野亨吉の父)著。塩谷宕陰評。</p> <p>○1月、近藤芳樹編『抄宗寮叢書』刊。</p> <p>○4月1日、桜井魁園歿、56才。徳山の国学者。</p> <p>○4月18日、中村牛莊歿、87才。繁沢豊城の弟子。</p> <p>○4月20日、岡本栖雲歿、55才。</p> <p>○4月、奥平謙輔、越後府権判事となり佐渡に赴任する。</p> <p>○6月6日、安部健臣歿、40才。明倫館国学教授。</p> <p>○7月8日、大村益次郎、兵部大輔となる。</p> <p>○8月27日、富田貞次郎、洋学修業のため3ヶ年東京に遊学する。</p> <p>○9月4日、大村益次郎、襲われて重傷を負う。11月5日歿、46才。</p> <p>○9月12日、田上宇平太歿、53才。</p> <p>○9月15日、明倫館附属小学舎に、孝経・四書・五経の三科の上に歴史料を置いて、十八史略を初等に日本外史を上等として必修課目とする。</p> <p>○9月、吉田松陰『講孟割記』及び『宋元明鑑紀奉使抄』刊。共に松下村塾蔵版。</p> <p>○9月、長門蔵版局『三十六ヶ外史墨蹟暢寄帖』刊。萩にある頼山陽の真蹟を集めて臨摹して刊行したもの。</p> <p>○10月8日、田原玄周歿、55才。蘭学者。</p> <p>○10月11日、蔵版局を廃して萩学校に合併する。</p> <p>○10月12日、好生局を医院と改称して医学研究機関とする。</p> <p>○10月、天野御民「続風簷遺草序」。(『風簷遺草』は一名『防長正気集』。刊行は明治8年)。天野御民は冷泉古風の子。</p> <p>○11月25日、萩御許町に養蚕教授所を設けて、婦人10人を定員として指導者を養成する。</p>

年	区分	記	事
明治2・己巳	防	<ul style="list-style-type: none"> ○11月27日、政府常備軍編成をきっかけに諸隊反乱にむかう。12月2日、諸隊脱隊者は三田尻に集合し、脱隊騒動起る。 ○穴戸璣 (山県半蔵)、山口藩権大参事となる。 ○高杉小忠太 (高杉晋作の父)、山口藩大監察兼毛利家家扶となる。 ○井上勝、造幣頭兼鉱山正となる。 ○阿武郡徳佐村に学校修斎塾開設。 	<ul style="list-style-type: none"> ○岡村箕斎 (山口明倫館教授)、『忠節事蹟考』を著わす。 ○久坂玄端『俟采択録』刊。志士の小伝。菊池 (大橋) 慎子「夢路ノ日記」を附す。
	参考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月5日、横井小楠、暗殺される。61才。文化6年 (1809) 生。 ○津田真道「郡県議」。 ○6月17日、藩籍奉還。 	
明治3・庚午	防	<ul style="list-style-type: none"> ○1月下旬~2月上旬、脱隊騒動最高潮に達し、木戸孝允直接指揮に当り弾圧する。 ○1月、岡村凌化歿、63才。俳人。 ○3月10日、二階玄東歿、57才。書家。 ○5月27日、瀬能正路歿、64才。歌人。 ○6月1日、浦鞆負歿、76才。 ○7月、福原芳山、英国に遊学する。 ○8月2日、山県有朋、欧洲より帰国。 ○8月、山口明倫館に仏人クロゼーを招聘する。 ○9月8日、青木研藏歿、56才。 ○10月、前原一誠、萩へ帰る。 ○閏10月10日、萩の抄宗寮、廃止される。 ○11月23日、山口・萩両明倫館を各々中学と改称。また三田尻講習堂 (越氏塾の後身) 及び諸郡の郷校を小学と改称する。 ○東沢潟、保津村に沢瀉塾を開く。(明治17年閉塾)。 ○穴戸璣 (山県半蔵)、刑部少輔となる。 ○城村五百樹、玉祖神社の祢宜となる。城村五百樹は足代弘訓・近藤芳樹に学ぶ。 	

年	区分	記 事
明治3 ・ 庚午	参 考	<ul style="list-style-type: none"> ○1月3日、大教宣布により廃仏毀釈行われる。 ○5月19日、西田幾多郎生。～昭和20年(1945) ○7月10日、明治2年8月以来統合されていた民部(内務・産業)と大藏両省を分離する。維新政府内の木戸派と大久保派の対立を示す。 ○7月、加藤弘之『真政大意』刊。 ○10月、政府、平民に苗氏使用を認める。 ○10月、スマイル著・中村正直(敬字)訳『西国立志編』、静岡で刊行される。(刊行年次については明治3年または同4年の説があって一定しない)。 ○閏10月、福沢諭吉『西洋事情二編』刊。 ○11月4日、西周、家塾育英舎を開く。そこで「百学連選」を講術する。 ○11月25日、堺利彦生。～昭和8年(1933)。 ○12月8日、『横浜毎日新聞』創刊さる。最初の日刊紙である。
明治4 ・ 辛未	防 長	<ul style="list-style-type: none"> ○1月9日、広沢真臣、暗殺される。39才。 ○1月11日、河内紀令歿。 ○2月10日、山口中学に独逸学伝習所を設け、洋学寮と命名、ドイツ人ベルリンを招く。 ○3月8日、天野謙吉歿、56才。右田学文堂最後の督学。 ○3月16日、大楽源太郎、暗殺される。40才。 ○5月31日、御堀耕助歿、31才。 ○5月、山県篤藏、東京で『新聞雑誌』を木戸孝允の後援で創刊する。『東京曙新聞』の前身である。 ○6月14日、岩国中学校に英人スチーブンスを招き、外国語学所を設ける。 ○6月21日、中山みや歿、32才。歌人。 ○6月21日、萩洋学寮を山口に合併し、萩中学校内に洋学舎を設ける。 ○6月、久坂玄端『廻瀾条議』刊。 ○7月2日、萩兵学寮を山口兵学寮に統合する。 ○9月12日、徳山藩校であった興譲館を徳山部小学と改称。 ○10月7日、岩国錦見岩倉寺に女子小学校を開設する。

年	区分	記 事
明治4 ・ 辛未	防 長	<p>○10月、赤川みち、萩江向に嫩貞松舎を開設する。</p> <p>○11月12日、木戸孝允・伊藤博文・山田顕義・野村靖・内海忠勝等、遣欧米使節団(岩倉使節団) 団員としてアメリカに出発する。</p> <p>○11月15日、山口・岩国・豊浦・清末の4県が廃止されて山口県となる。</p> <p>○11月、山口中学校に、英人ダルネーを招く。</p>
	参 考	<p>○7月14日、廃藩置県の詔書発布。</p> <p>○7月15日、国木田独歩生。～明治41年(1908)。</p> <p>○8月28日、政府、穢多・非人の称を廃止する。</p> <p>○9月1日、熊本洋学校開校される。米人ジェーンズ、教授として招かれる。</p> <p>○11月4日、(旧暦9月23日)、幸徳秋水生。～明治44年(1911)。</p> <p>○11月12日、中江兆民、遣欧米使節団と同船し、フランスへ留学のため出発。明治7年5月帰国。</p>
明治5 ・ 壬申	防 長	<p>○2月、長府敬業館・清末育英館・岩国養老館を小学に改め、山口中学校の所管とする。</p> <p>○3月、萩中学にドイツ人ヒレル夫妻を招く。</p> <p>○5月29日、能美洞庵歿、78才。</p> <p>○8月16日、八谷梅頼歿、67才。漢詩を能くす。</p> <p>○10月、山口・萩・豊浦・岩国に変則中学を設置。8月の政府による学制頒布に対する措置である。県内を四中学区に分けた。中学は小学(8年)の課程終了者が14才～19才の6年間に在学するものであるが、小学卒業生が少ないので旧藩校の生徒がそのまま移行し、その故に変則といった。</p> <p>○11月9日、太陰暦を廃し太陽暦を用いることとなる。12月3日を明治6年1月1日とする。</p> <p>○県庁萩支庁内に掲示所を設け、3・8の日に日誌・雑誌等を公開する。山口県における図書館の始めとされる。</p> <p>○穴戸璣、教部大輔兼文部大輔となる。</p>

年	区分	記 事
明治 5 ・ 壬 申	参 考	<p>○2月、福沢諭吉『学問のすすめ初編』刊。</p> <p>○2月21日、日本人最初のプロテスタント教会「日本基督公会」横浜に設立される。</p> <p>○2月21日、『東京日日新聞』創刊。</p> <p>○6月、『郵便報知新聞』創刊。</p> <p>○8月3日、学制発布。義務教育制実施。</p> <p>○11月28日、徴兵令発布。</p>

索 引

長州藩徃徠学關係探索備考

索引

(暦年は該当記事記載年)

—— (あ) ——

- 安倍和貞 宝暦12
安倍春貞 寛文12, 延宝8, 貞享2
元禄11
安倍健臣 明治2
安倍惟貞 弘化4, 嘉永2, 文久3
安倍信貞 享保7
安積良斎 嘉永元・5, 安政2
万延元
安積澹泊 天和3, 元文2
安達清河 明和7, 寛政4
安梨のまゝ 文化4
安藤重長 天保15
安藤東野 天和3, 宝永3・4・7
正徳元・2, 享保2・4
安部大蔵 安政3
阿芙蓉彙聞 弘化4
足立寿軒 寛保3
青木葵園 宝暦14, 明和2, 安永6
青木研蔵 弘化2・4, 嘉永2・3
安政2, 元治元, 明治3
青木周弼 天保10・11, 嘉永2
安政6, 文久3
青木周蔵 慶応4
青地林宗 文政9・10
青山長清 天保15
赤川玄成 天保11
赤川玄悦 嘉永2
赤川玄樸 文久3
赤川淡水 →佐久間佐兵衛
- 赤川みち 明治4
赤川道昭 天保15
赤根武人 嘉永元・6, 安政3・4
慶応2
明石良平 文政7
秋月悌次郎 明治元
秋山玉山 寛延2, 宝暦4・10・13
天明8
秋良敦之助 弘化2
秋良雄太郎 嘉永3
芥川丹丘 享保17, 寛延元
朝枝玖珂(穀斎) 享保元・4, 延享2
朝枝文孟 明和8
朝倉南陵 天保14
浅見煙溪 元治2
浅見巢雲 安政5
天野華 万延2
天野御民 安政元, 明治2
天野謙吉 慶応2, 明治4
天野曾原 享保10
雨森芳洲 寛文8, 元禄2・5
正徳4, 享保3, 宝暦5
天明6
新井白石 元禄6・15
宝永3・6・8
正徳2・4, 享保元・10
天明8
有坂長為 天保12
有馬喜三太 明和4・6
有馬氏倫 享保7
有田作胤 文政7

有吉高陽 宝曆9, 明和6・7
天明4・7
荒地清蔵 安政6, 文久元
栗屋勘兵衛元与 寛保3
栗屋就応 享和元
会沢正志斎 天明2, 文政8, 天保14
安政2・3・4
文久2・3
鴉片始末 天保14
晏子春秋 元文元

—— (い) ——

飯田玄栄 文政9
飯田竹舎 天保9
飯田居謙(楽軒) 宝曆9, 明和4
安永3, 天明7
飯田竹塙 天保9・11
飯田道瑠 享保11, 寛延4
飯田忠彦 万延元
飯田正伯 安政5, 万延元, 文久2
飯田履軒 安政6・7, 元治元
五十鈴学館 文久3
いろは醉故伝 寛政6
生駒等寿 寛文6, 元禄14
為学初問 宝曆10・12
為学正論 宝曆7・9
伊藤澹斎 明和元
伊藤弥次郎 慶応4
伊藤博文 天保12, 文久3, 明治4
伊藤慎蔵 安政2・4
伊藤元啓 享保12
伊藤仁斎 天和3, 貞享2
元禄4・8・16
宝永2・4, 正徳2・4
享保7, 天明8

伊藤東涯 寛文10
宝永3・4・5・7
正徳4・6
享保2・4・5・6・7・
9・10・11・19・20
寛延3, 宝曆元・11
寛政8
伊藤竹里 享保7
伊藤梅里 宝永3・4, 享保3
伊勢のつと 元禄10
伊藤亀年 天明元
伊能忠敬 文化8・10
医学所 天保11, 嘉永2・3
医言 明和4
医則 宝曆2
医断 宝曆9
医範提綱 文化2
医方古言 文化2
猗蘭侯 →本多忠統
遺塵抄 寛保3, 寛延元, 宝曆2
遺徳談林 寛保3, 寛延4
一騎歌盡 文久3
彙玉編 慶応元
井原図書熙敬 文久元
井上玄徹 貞享3
井上玄静 延享元
井上金蛾 明和3
井上可就 弘化3
井上勝 文久3, 明治2
井上桐華 天明5
井上蘭台 宝曆7・11
井上聞多(馨) 文久3
韋蘇州集 宝永3
生田良佐 文久元
池田光政 天和2

池田瑞仙 寛政9, 文化3・8・13

文政13

郁離子 享保17

育英館(清末) 天明7, 明治5

育英館(須佐) 享保20, 天明9

文化4, 安政5

育英舎 明治3

石川大凡 享保11

石川丈山 寛文12

石田梅岩 貞享2, 延享元

板倉美仲 享保9

市川玄伯 嘉永5

市川崑崙 文化13

市川团十郎(初代) 元禄17

市川白猿(团十郎) 天明3

市河寛斎 天明7, 文化元

佚存叢書 寛政11, 文化7

今井似閑 享保8

今北洪川 文久2

今津秋庵 安政3

今津桐園 文政10, 安政3

岩国屋長吉 享保7

岩国領内寺社由来記 元禄10

岩国変則中学 明治5

岩政信比古 文化2・14, 安政3

入江若水 正徳元・6, 享保6

入江南溟 享保20, 明和2

隱元 延宝元

淫祀談 天保13

淫祀論 天保14

陰徳太平記 元禄8, 正徳2

——(5)——

宇都宮三の 享保9

宇都宮遯庵 寛文9, 延宝3・6

天和3

元禄2・3・8・10・12・
13・16

宝永元・2・3・4・5

正徳3, 文政11

宇都宮了安 文政12

宇都宮黙霖 文政7, 安政2・3

宇佐美瀧水 寛延元, 宝暦11

明和3・4・7, 安永5

寛政元・12

宇田川榕庵 寛政10, 天保4・8

宇田川玄真 文化2・文政3

宇野東山 明和9

宇野士朗 元禄14, 享保9・10

宇野明霞 元禄11, 延享2, 寛延元

明和9

鶴飼石斎 寛文3

雨月物語 安永5

上杉鷹山 安永3

上田道山(堂山) 文化15, 天保9

上田琴風 天保14

上田鳳陽 寛政12, 文化12・13

嘉永6, 安政2

上田秋成 享保19, 安永5

上野玄貞 元禄5

浮村定直 文久3

白杵鹿垣(太仲) 寛政8, 享和2

文化10

白杵横坡 元治元

内田溪鷗 享保19

内田浯溪 嘉永5

内山賀邸 宝暦13

内海忠勝 明治4

梅田幽斎 天保13

梅田雲浜 安政3・4・6

梅辻春樵 文化8 天明5・8
 梅酒舎好也 安政元 寛政4・7
 浦の汐貝 弘化2 享和元・2・3
 浦 鞠 負 明治3 文化5・6・8・13
 雲谷等愷 安永5 円 機 活 法 延宝元
 雲谷等鶴 宝永6 弁州先生四部稿選 寛延元
 雲谷等爾 寛文11 弁州尺牘 寛保2
 雲谷等恕 正徳2, 享保7 円 浄 天保2
 雲谷等叔 明和6, 安永3 円立寺真道 嘉永元
 雲谷等仲 安永10 袁中郎尺牘 安永10
 雲谷等直 →繁沢規直(南塘) 遠藤謹助 文久3
 雲谷等徴 享保19, 宝暦5 遠思楼詩鈔(初編) 天保8
 雲谷等有 享保元
 雲谷等璠 天和3, 貞享2
 宝永2・6
 雲谷等与 寛文7・8

—— (元) ——

江戸雀 延宝5
 懋極(道明) 寛文7・8, 貞享4
 元禄4・5・7, 享保6
 江村風月 慶応元
 江村北海 宝暦13, 安永2・3・4
 天明元・3・8
 絵本三国志 天明8
 英語伝習所 安政5
 英国誌 安政6, 文久元
 影宋本尚書正義 弘化4
 悦 山 宝永6
 悦 峰 宝永4
 越氏塾 享保4・6・12, 明和4
 安永3・8, 天明5
 寛政4・6, 文政10
 万延元, 文久4
 役 藍泉 寛延4, 安永6・8

—— (お) ——
 小笠原長鑑 明和6, 安永3
 小川市右衛門 明治元
 小川乾山 天保14, 安政4
 小川秀軒 宝暦9
 小国 融(玉淵) 文政13
 小国融蔵 安政5, 慶応2
 小倉宜季 享保19, 元文3
 寛保3・4, 延享2
 小倉尚斎 延宝5, 元禄5・13
 宝永3・6・8
 享保3・4・5・19
 元文2
 小倉宗爾 寛政2, 享和3
 小倉遜斎 文化2・9, 文政2・10
 天保8・11・12, 弘化2
 嘉永3・5, 安政3・7
 慶応2・3
 小倉鹿門 享保6, 元文2
 寛延元, 宝暦5・6・12
 明和9, 安永4・5
 小沢忠右衛門 安政2

岡本栖雲 天保12, 明治2
荻生徂来(徂徠) 寛文6・12
元禄5・9・16
宝永元・2・3・4・5・
6・7・8
正徳元・2・3・4・5
享保2・3・4・5・6・
7・9・10・11・12・13・
14・17・18
元文元・2・3・5
延享元, 寛延3
宝暦3・11・12・13
明和元・3・4・8
天明8
寛政元・3・8

桜柳亭(のち集童場) 文久2
奥平謙輔 明治元・2
奥の細道 元禄2
奥村良竹 宝暦11

—— (か) ——

何(が)礼之 文久3, 元治元
香川宣阿(梅月堂) 貞享4, 元禄8
正徳2, 享保20

香川景柄(黄中) 文政4
香川牛谷 嘉永6
香川修庵 寛保3, 宝暦2
香川津孝子伝 慶応3
加藤弘之 明治元・3
加藤有隣 文久3, 慶応3
賀茂真淵 元禄10, 明和元
賀屋恭安 文政7・13
天保5・10・11・13
花彙 木部 明和2
花玉集千句 元禄16

仮名性理 元禄4
香取太華 天明2
華夷通商考 元禄8
華陽先生文集 正徳4, 享保11
元文2・4, 寛保元・3
延享3, 寛延4
宝暦2・3・4・7・9
明和2・3・4・5・6・7

楫取素彦(小田村伊之助) 天保11
嘉永3, 安政7・万延元・2
慶応3

哈喇佛略誌 安政2
海国凶志 嘉永4
海国兵談 天明6, 寛政3・4
海内才子詩初集 文政3
海保青陵 宝暦5, 文化14
海防臆測 天保9, 嘉永3・5
芥子園画伝 享保9, 寛延元, 安永9
解体新書 安永3
解腕痴言 文久2
廻瀾条議 文久2, 明治4
懷徳堂 享保9・11・15, 天明2
寛政4・7

貝坂陳人 安永9
貝原益軒 宝永5, 正徳4
改定音訓四書正文 嘉永5
楽群堂 文化9
学館功令 宝永2, 元文3
学則 享保12, 延享4
学則集話 延享4
学則并附録標註 天明元
学时習斎 天保12
学习塾 天保2
学习堂 文久4
学山録 宝暦元

学者角力勝負附評判 天明8
 学者必読妙々奇談 文政12
 学文堂 弘化3, 慶応2
 学問源流 寛政6・11
 学問のすすめ 明治5
 郭注莊子 元文4
 柿並子竜 寛延2
 柏木如亭 享和元, 文化10・14
 文政2・3
 柏原数馬 明治元
 片山潤蔵 文化5・7・9
 片山鳳翮 元文5, 安永4・9
 天明2・3・7
 寛政元・3・5・9・10・12
 享和元・3
 文化5・8
 桂 広保 正徳6, 享保13, 寛延2
 宝暦2, 明和6
 活所遺稿 寛文6
 勝間田盛稔 享和元, 天保13
 亀井昭陽 寛政3, 文化11
 亀井南冥 天明8, 寛政4・5
 享和元・2
 文化8・11・13
 亀田鵬斎 安永8, 文政9
 蒲生鳳林 文化11

—— (き) ——

木下順庵 天和2, 元禄11, 寛政元
 木下蘭皐 元文4
 木戸孝允 天保4, 慶応元・2・4
 明治4
 木梨恒充 安政2
 木村鶴巢 万延元
 木村兼葭堂 宝暦13, 享和2

木村秋亭 天保3
 奇 兵 隊 文久3
 気海観瀾 文政10
 気海観瀾広義 嘉永4
 其 角 宝永4
 紀効新書 寛政10
 葵園遺稿 安永6
 祇 王 歌 宝暦3
 祇 徳 享保20
 祇園南海 宝暦13, 天明7
 技 養 録 文化元
 議題草案 慶応3
 菊地五山 文化4, 嘉永2
 岸 御 園 安政5
 北川汶陽 寛保元
 北村透谷 明治元
 北山安世 安政6
 吉斎漫録 享保7
 橘窓茶話 天明6
 九州紀行 宝暦8
 鳩 居 堂 安政3・5
 鳩巢小説 正徳2
 窮 理 通 天保7
 救 饑 提 要 嘉永3
 救時話言 天保11
 虚実見聞記 明和7
 行 海 元禄6
 峡中紀行 宝永3
 凝 成 館 天保11・14, 文久3
 京羽二重 貞享2
 狂夫之言 安政5
 嚮 風 草 明和7
 享保増補村記 元文3
 玉壺詩稿 元文4
 玉山詩集 宝暦4

琴鶴丹公 →黒田直邦
金華稿刪 享保13
金蘭詩集 宝暦4
金竜敬雄 明和9, 安永2, 天明2
金竜尺牘集 宝暦4
近世叢談 文化13
近世名家文鈔 嘉永2
欽定四書 天保15
錦里先生文集 寛政元

—— (く) ——

久坂玄機 嘉永元・7
久坂玄瑞 天保11, 安政5・6
万延元, 文久元・2
元治元, 慶応3
明治2・4
久芳内記 天保13
久保五郎左衛門 安政3, 万延2
玖珂郡志 享和2
公内借捌仕法 天保15
颯風新話 安政4
愚論 安政5
旧事本紀解序 享保4
陸士彦 文化4
草場居敬 元文2
草場允文(仲山) 元文3, 延享5
宝暦3
草場大麓(安世) 宝暦9, 天明3
享和3
草場晋水 天保2
草舎(くさのや)年表 天保3
口羽徳祐(把山) 安政5・6
口羽房良 文化11
国木田独歩 明治4
国重政恒 宝永7

国司正久 延享3
国島京山 寛政7
国島嶺南 寛政11
国島筭斎 文政9
国富鳳山 宝暦12
国光小源太 天保10
熊屋五郎左衛門 文政10
熊谷五右衛門義比 万延元
熊谷直好 弘化2, 文久2
熊谷蘿月 文久2
熊沢蕃山 明暦3, 寛文12, 延宝8
貞享3・4, 元禄4
宝永6, 天明8
熊野玄宿 天保11・12
熊野林仙 寛政12
熊本洋学校 明治4
窪井鶴汀 享保17, 宝暦7・9
明和3・4・6
栗栖等侗 元禄5
栗栖探叔 宝暦5
栗栖天山 慶応2
栗山子文 文化13
栗山孝庵(初代) 享保8, 寛保元
栗山孝庵(文仲) 享保16, 寛保3
寛延元
宝暦2・4・8・9
明和4・6, 安永4
天明7, 寛政3
栗山玄厚 天明7, 文化12
来原良蔵 弘化2, 嘉永4
安政2・5, 文久2
呉猛明 寛政4, 文化14
黒神直民 元治2
黒田直邦 享保8・17
鞍岡蘇山(元昌) 元禄11・16

桑原幽宅 宝永4
郡司源太夫信之 寛保2
郡司源之允光孚 天保14
郡司熊太郎 安政2
郡司右平太 天保12
郡司覺之進 天保12, 安政3, 文久3
郡書類從 安永8
郡書治要 天明7
訓蒙助語辭諺解大成 宝永5
訓蒙究理図解 慶応4
訓訳示蒙 元文3
訓幼字義 享保2

—— (け) ——

敬身堂 嘉永2
敬業館 寛政4・7, 文化10
天保7, 明治5
經学字海便覧 享保10
經濟録 享保14
經史子要覽 文化元
經史博論 宝永7, 元文元
形影夜話 享和2
鷄林唱和集 正徳元
契 冲 貞享4, 元禄14
慶応義塾 慶応4
芸苑卮言 延享3
枕圃挿余 享保11
月 性 文化14, 天保2・6・14
弘化2・4
嘉永元・2・3・5・6
安政元・2・3・4・5
駛舌或問 天保9
護園十筆 正徳2
護園隨筆 正徳4
護園録稿 享保12・16

献功堂 慶応2
建殊録 宝暦3
憲章館 文化2, 弘化3, 嘉永4
言外和尚 宝永4
言志録 文化10, 文政7, 天保6
源氏物語湖月抄 延宝3
嚴滄浪先生詩集 安永5

—— (こ) ——

小泉杏陰 安政3
小石元俊 文化5
五井蘭洲 元禄10, 享保16, 元文4
宝暦12, 明和3, 天明4
五山堂詩話 文化4
古賀精理 安永4, 寛政4・8
古賀侗庵 天明8, 天保9, 弘化4
古学先生碣銘行状 宝永4
古訓輯要 宝暦9, 明和3・4
古今学变 享保20, 寛延3
古今詩刪 寛保3
古今凶書集成 明和元
古今事文類聚 寛文6, 安永5
古事記伝 寛政2・10
古萩園葦兮 文化8・12
古萩園里川 文化12
古風三体考 天保6・8
古文矩 明和元
古文孝經參疏 寛政元
古文孝經孔子伝 享保17
古文尚書 宝暦元
古文尚書標注 明和9
古文真宝 寛文3, 天和3
故学堂 享和元
虎 溪 享保8
湖月抄 →源氏物語湖月抄

御系圖御家譜引書 宝曆3
語孟子義 天和3, 元祿8, 宝永2
語錄字義 元祿7
胡蘆利病說並治方 文政5
護法意見封事 → 弘法護國論
江月齋稿 慶応3
江湖詩鈔 文化元
江湖新聞 慶応4
江氏家譜 享保9, 寛保2
江風山月書樓記 安政2
江陵集 寛保元, 延享2
光阿上人 安永2
弘道館(大野) 文化11
弘道館記 天保9, 慶応元
弘道館記述義 弘化4
好生堂(好生館) 嘉永3
安政2・3・6
文久元・4, 慶応2
好生緒言 天保10
好色一代男 天和2
好色一代女 貞享3
好色五代女 貞享3
広益助語辞集例 元祿7
広益書籍目録 貞享2
広益書籍目録大全 元祿5
広益俗說辨 正徳5
広陵問槎録 正徳2
皇清経解 享保2
皇朝正声 明和8
皇朝七才子詩集注解 延享4
皇明七才子詩集解 元祿2
皇明通紀 元祿9
河内紀令 安政5, 明治4
河内屋利兵衛 元祿9
幸徳秋水 明治4

紅樓夢 寛政5, 嘉永2
講習堂 弘化2, 安政6・7
文久元・3, 慶応元・2
明治3
講孟節記 安政2・3, 明治2
講孟節記評語 安政3
航海遠略策 文久元・2
康熙字典 享保5
興讓館 嘉永5, 明治4
篁墩詩鈔 安政6
緑山詩集 宝曆2
黄葉夕陽村舍詩 文化9, 文政6
合類書籍目録大全 享和元
龜頭本助語辞 天和3
克己堂 天保13, 嘉永6
寄居歌談 天保13・14, 弘化2
元治元
国史纂論 天保10, 弘化2
国学塾 天保8
獄中手記(高杉晋作) 元治元
此度談 天保3
近藤芳樹 享和元, 文化11・14
文政2・6・7・11・13
天保3・6・7・8・10・
11・12・13・14・15
弘化2・4
嘉永元・2・4・6・7
安政3・5, 文久2
元治元, 慶応2, 明治2
権代春鷗 嘉永2
混沌社 明和2・3
——(さ)——
佐伯勝馬 天保11, 安政2
佐伯玄厚 寛政12

佐久良の林 安政3
佐久間象山 文化8, 嘉永3, 元治元
佐久間佐兵衛 安政2・5
佐々木縮往 宝永4, 享保6・19
佐々木向陽 弘化2, 安政5, 文久3
佐々木源左衛門 享保4
佐々木竜原 明和2, 安永8・9
寛政元・7・12
佐世広嘉 安永5
佐藤一斎 明和9, 文化元・10
文政7, 天保6, 安政6
佐藤信淵 嘉永3
佐藤直方 享保4
佐波のあら玉 安政4
西 鶴 元和2, 貞享3・5
元禄6
西郷隆盛 慶応2
西国立志編 明治3
斎藤閑溪 貞享2
斎藤等室 寛文8
斎藤彦右衛門貞宣 文政13
斎藤方策 寛政元, 文化8, 文政5
嘉永2
斎藤竹堂 天保14, 嘉永4
濟生堂 嘉永3
宰相怨 宝暦3
坂上忠介(寓所) 安政4, 文久2
坂本天山 寛政12, 享和元
坂本竜馬 文久2, 慶応元・2
坂時存 元禄6・14, 宝永6
正徳元
享保元・11・13・14・17・
18
元文4, 寛保2・3
延享4・5

宝暦2・8・9

坂西山(仲礼) 安永7
堺利彦 明治3
榊原篁洲 延宝7, 天和3, 元禄8
作文初問 宝暦5
作文楷梯 文政11
作文志穀 安永8
作詩志穀 天明3
桜井魁園 明治2
笹山一玄斎 安永9
笹山良意(度会東明) 文化12
雑華集 宝暦3・5・10
ザ・ジャパン・ヘラルド 文久元
沢宣嘉 慶応3
三家詩話 享保11
三家妙絶 文化4
三十七ヶ年賦皆済仕法 天保14
三代実録 文政6
三体詩詳解 元禄13
三都学士評林 明和5
三之選 元文3, 宝暦4・6
三法語講説大意 天保8
三兵答古知幾 安政3
三老上書 宝暦2
産語 延享2
山中人饒舌 天保5
山東京伝 寛政11
山陽詩鈔 天保4
—— (し) ——
四家雋 宝暦11
四時幽賞 寛文8
司馬芝叟 天明8, 享和元・2
司馬江漢 寛政11
史記評林 延宝元・2

- 思慕余事 慶応2
 思夢問答 嘉永元
 清水就周 享和3
 私擬策問(滝鶴台) 延享3
 俟采扱録 明治2
 詩学還丹 安永6
 詩学逢原 宝暦13
 詩経約説 寛文9
 詩林良材 貞享4
 詩書古伝 宝暦8
 詩聖堂詩話 寛政11
 詩 筌 享保7
 詩 藪 貞享3
 詩 訣 天明7
 詩 轍 天明6
 詩文国字牘 →徂徠先生詩文国字牘
 詩法授幼抄 延宝7
 詩法要略 享保2
 詩律幼学抄 延宝6
 詩律兆 宝暦8, 安永5
 詩林広記 寛文6
 詩 論 寛延元, 宝暦2
 資治通鑑綱目全書 文化6
 時習館 弘化4
 嘉永元・3・4・5
 安政元
 事 斯 語 天保12・13
 事文類聚 寛文6, 安永5
 紫巖遺稿 宝暦10・14, 明和8
 紫芝園稿 宝暦2
 自 楽 抄 文政元
 賜 杖 堂 宝暦13
 七 石 集 宝永4
 七経孟子攷文 享保5・11・16
 七経孟子攷文補遺 享保16
 七部婆心録 万延元
 穴戸広周 延享5
 穴戸就年 文化6
 穴戸桃戎 天保12
 穴戸 璣(山県半蔵) 天保13, 嘉永4
 安政元・2・5・6
 文久2, 明治2・3・5
 穴戸真激(左馬之介) 天保11, 文久2
 元治元
 静間三積 天保8・11, 万延元
 繁^{しげしげ}野 話 明和3
 篠崎東海 享保10
 篠崎三島 安永4
 篠崎小竹 天保5
 柴野栗山 天明8
 澁井太室(井子章) 明和元, 安永2
 天明8
 澁川春海 元禄2
 澁谷道勝 嘉永4
 シーボルト 文政6・7・8・9・11
 島田充房 明和2
 島地黙雷 慶応2
 品川勿所 元文3
 舍密開宗初編 天保8
 謝茂秦山人詩集 宝暦12
 射書類聚国字解 寛政元
 周張全書 延宝3
 周南先生文集 宝永2・6・7, 正徳5
 享保3・4・7・12・14
 元文4, 寛保元
 延享3・4, 寛延元
 宝暦3・5・6・8・10・12
 周南余音 享保11
 秋水園主人 寛政3
 拾遺意行集 元禄6

- 修史始末 寬政9
 修齋塾 明治2
 脩來院 天保12, 弘化2・3
 集義和書 寬文12
 集義外書 宝永6
 集古十種 寬政12
 集童堂 文久2, 元治元
 朱子語類大全 寬文8
 朱子文集 正徳元
 朱子詩伝青盲 延享3
 朱舜水 天和2
 儒医評林 明和9
 縮往舍 文久元
 諸体詩則 元文6
 授業編 天明元・3
 重建明倫館記 嘉永2
 重修靈椿山経藏記 安永4
 句子全書 延享2
 春樵詩草初編 文化8
 小説精言 寬保3
 小説奇言 宝曆3
 小説粹言 宝曆8
 小説字彙 寬政3
 松下村塾 安政3・5・6, 文久2
 慶応元・3, 明治元・2
 松下村塾記 安政3
 招魂帖 文政5
 庄原篁墩 安政6, 文久元
 庄原芳庵 元治元
 尚義場 文久2
 尚書大伝 明和5
 尚書註疏 安永6
 抄宗寮 嘉永2, 明治3
 抄宗寮叢書 慶応2, 明治2
 笑府 明和5
 笑林広記 文政12
 常山紀談 元文4
 情実集 天保3
 初学詩法 延宝8
 書籍目錄大全 天和元
 彰考館 寬文12, 天和3
 樵漁余適集 元文4
 傷寒論古訓古義 宝曆2
 照世盃 明和2
 湘中八雄伝 明和5
 嘯風館 寬政9
 紹述先生文集 宝曆11
 貞享式海印録 安政6
 城村五百樹 明治3
 城邑政国 天保15
 攘夷血盟書 文久2
 助語辞俗解 享保4
 助字考 宝曆元
 植学啓原 天保4
 職原抄校本 安政元・5
 白上舍人 天保15
 心越 延宝5
 心学典論 寬延元
 穴道芝齋 安政5
 穴道朝陽(広慶) 明和6
 神異経 貞享5
 慎機論 天保9
 新宮涼庭 文政4
 新裁軍記 元文3, 寬保元
 新鐫詩牌譜 享保15
 新聞雜誌 明治4
 新撰防長名所方角抄 嘉永元
 新版增補書籍目錄 元禄11
 新論 天保元・14, 嘉永3
 安政4

清朝咸豐亂記 安政 2

真政大意 明治 3

—— (す) ——

須万盛衰記 宝曆 7

周布政之助 天保14, 弘化 2, 嘉永 6

安政元・2, 元治元

周防明倫館 慶応 2

陶山南涛 享保 7, 明和 3

水滸全伝訳解 享保12

水津藤右衛門 天保13

水哉堂 慶応 4

崇孟 安永 4

隨園詩抄 文化13

隨園詩話 文化元

隋書 天保15

杉孫七郎 文久元

杉百合之助 慶応元

杉岡就房 宝永 3

杉田玄白 享和 2

杉山宗立 寛政12, 文政 4・8

安政 5

杉山良哉 寛政12, 文化10

鈴木和泉直道 嘉永 4

鈴木春山 弘化 3

鈴木高鞆 嘉永 4, 万延元

末国常棣(国常棣) 寛政 7

駿台雜話 享和17, 寛延 3

—— (せ) ——

世良修蔵 安政元・2・4, 文久 3

慶応 4

世子語文 慶応元

世子語文附言 天保 2

世説新語補 元禄 7

瀬能正路 明治 3

正学指掌 天明 7

正名論 寛政 4

正業舎 天保10

正統論 文政11

生機論 文政13

西洋画談 寛政11

西洋学所 安政 2・6

西洋事情 慶応 3, 明治 3

西洋鉄煩鑄造篇 安政 3・5

西溟余稿 延享 4

成器塾 慶応元・4

成器堂 文政13

性堂 文政 2

性理字義 寛文 8・10

政談 享保12

政談広義 安永 9

制度通 享保 9, 寛政 8

聖学問答 享保17, 元文元

聖武記 弘化元

棲息堂記 元禄16

棲息堂坐右蔵 宝永 5

清田僑叟 宝曆13, 明和 6, 天明 5

菁莪堂記 弘化 2

濟美館 慶応元

躋寿館 明和 2

勢一尚古 弘化 4

製塩秘録 天保 6

省耕集 嘉永 5

惺窩先生文集 慶安 4

石點頭 宝曆 4

斥非 延享元・2

関孝和 宝永 5

節儉略 文化元

絶句解 享保17, 宝曆13

絶句解考証 宝曆3, 明和4
絶句解拾遺 享保18, 明和3
絶句解弁書 宝曆13
絶句解国字解 安永6
石湖先生詩鈔 文化元
千石篩 宝曆4
全唐詩逸 文化元
先哲叢談 文化13
先哲叢談後篇 文政10・13
洗心洞筭記 天保4, 嘉永3
箋註唐詩選 天明4
箋註蒙求標疏 安政5
善教寺南嶺 享和元

—— (そ) ——

祖式左中 寛延2
祖式尹哉(觀耕亭) 嘉永7
徂徠集 宝永2・4・5・6・8
 正徳元・2・3・5
 享保2・3・4・10
 元文5, 寛政3
徂徠集拾遺 正徳4, 享保5・7
徂徠先生答問書 享保9・10・12
徂徠学則附録問答 享保13
徂徠先生学則解 延享元
徂徠先生詩文国字解 享保20・21
徂徠先生素問評 明和3
素餐録 安永6, 寛政3, 天保7
曾野有原 寛保2, 宝曆2・12・13
曾根崎心中 元禄16
楚辞章句(王逸注) 寛延3
楚辞集注 慶安4
楚辞補注 寛延2
楚辞燈 寛政10
宋元明鑑紀奉使抄 明治2

宋三大家詩鈔 享和3
宋三大家絶句 文政8
宋三代家律詩 文化8
宋詩語 享和2
宋詩清絶 文化10
宋紫石(楠本石溪) 明和7
宋詩選 文化3
宋詩鈔 寛政6
宋詩礎 享和3
宋書 宝永3
宋四名家詩 文化10
草舎年表(草舎^{くさ}年表) 天保3
草茅危言 天明8・9
臧志 宝曆4・8・9
滄溟尺牘 享保14・15
滄溟先生文纂 享保11
滄浪詩話 享保11
增益書籍目錄大全 元禄9
增訂唐詩礎 安永3
続近世叢語 弘化2
続愚論 安政5
俗談唐詩選 宝曆13
孫子国字解 寛延3
孫子評註 文久3
尊聖堂 天保14

—— (た) ——

田上宇平太 嘉永2・3, 安政2・5
 明治2
田上菊舎 安永9・10, 文政9
田坂瀾山 享保5, 延享2・5, 寛延4
 宝曆2・4・5・7・8
 明和2
田中大観 享保20
田中桐江 宝永3, 正徳3, 寛保2

- 田中江南 安永6
- 田中蘆城 享保20, 延享5
- 田沼意次 明和4・9, 天明6
- 田能村竹田 文化元・2・8
文政6・9・12
天保5・6
- 田原玄周 嘉永3, 安政2, 文久元
明治2
- 田村姫山 文化10
- 多紀元孝 明和2
- 多紀藍溪 明和3
- 他所問答 安政3
- 大学解 享保3
- 大学章句新疏 天明6
- 大学定本 貞享2, 正徳4
- 大学或問 貞享3
- 大学養老篇 寛保3
- 大疑録 正徳4
- 大訓衍義 安政2
- 大笑軒記 宝暦10
- 大潮(元皓) 延享4, 明和5
- 大東詩集 天明2
- 大東詩家地名考 宝暦10
- 大東世語 寛延3
- 大典 宝暦13, 安永3, 享和元
- 大日本史 正徳5
- 大明一統志 正徳3
- 大楽源太郎 嘉永5, 安政2・4
明治4
- 大楽朴水 元文4
- 太華文鈔 嘉永6
- 太極図説諺解 貞享元
- 太平記演義 享保4
- 太平策 享保6, 宝暦13, 安永9
天明2
- 太平楽府 明和6
- 対策 安政5
- 泰西国法論 明治元
- 泰西史略 安政5
- 高島秋帆 天保12・14
- 高杉小忠太 明治2
- 高杉晋作 天保10
文久元・2・3・4
元治元・2, 慶応3
- 高洲平七就忠 安永7, 寛政5
- 高瀬学山 享保元
- 高田玄仲 寛政12
- 高田信濃介 元治元
- 高津允中 文化5
- 高野長英 文政10, 天保9, 嘉永3
安政3
- 高野蘭亭 元禄3, 宝暦7
- 高橋有胤 万延元
- 高本紫溟 文化元
- 鷹見爽鳩 享保7・20
- 滝鶴台 宝永6
享保7・13・15・16・17・
18・19
元文2・3・5, 寛保3
延享3
寛延元・2・3・4
宝暦2・3・4・5・6・
7・8・9・10・11・12・
13・14
明和元・2・3・4・5・
7・8・9
安永2・7
- 滝九華 文政5, 天保7・9
- 滝高渠 安永2・6・7・8
天明3, 寛政4

竹内式部 明和4
竹田庸伯 安政5
武田楊岸 元治元
武市半平太 文久2
太宰春台 延宝8, 元禄7・9・13
享保2・6・13・16・17
元文元・4
延享2・3・4・5
宝曆2・8
立原翠軒 宝曆13, 天明6
谷口元淡(谷大雅) 享保13
玉勝間 寛政7
玉本文之進 天保13, 安政3
玉乃九華 天保11, 弘化4
嘉永4・7
丹波屋安兵衛 元禄13
丹丘詩話 寛延元
談芸録 享保11

—— (ち) ——

千葉芸閣 寛政4
智環啓蒙 慶応2
チェーンバズ百科事典 宝暦元
竹院 天保14, 慶応3
築城典刑 慶応元
近松半二 天明3
近松門左衛門 元禄16
中外新聞 慶応4
中山館 文化11
中庸解 享保3, 宝暦3
中庸發揮 正徳4
中朝事实 寛文9, 天和元
忠義会 嘉永7
忠義水滸伝 享保13
忠義水滸伝解 宝暦7

忠節事蹟考 明治2
朝陽館 享和3, 弘化2
長防産物名寄 享保20, 元文2
長防臣民合議書 慶応2
聴松庵箇枕 →雲谷等仲
聴松庵古竹 天明8
聴松庵烏強 天保4
暢寄帖 明治2
懲悖録 元禄8, 宝暦8
陳書 宝永3
茅原虚斎 天保4・11

—— (つ) ——

津阪東陽 文化13, 天保7
津田真道 文久元・2, 慶応元・3
明治元・2
津田東作 天保2
津田東陽 享保4・6・9・11・18
寛保元, 延享3・5
寛延3, 宝暦3・4
津森等為 貞享3
都賀庭鐘 寛延2, 明和3, 天明6
通化寺 寛文7
通俗漢楚軍談 元禄8
通俗元明軍談 宝永2
通俗西遊記 宝暦8
通俗三国史 元禄5
通俗南北朝軍談 宝永2
通俗漂海記 明和6
通俗北魏南梁軍談 宝永2
通俗両国史 享保6
塚田大峯 寛政3, 天保3
土屋蕭海 嘉永4, 安政2, 元治元
土屋恭平 嘉永4
土屋養哲 安政3

恒藤醒窓 天保2, 嘉永6
角田九華 文化13, 天保5, 弘化2
坪井九右衛門 天保15, 弘化4, 文久3
坪井信道 天保13, 弘化3
嘉永元
坪井信友 慶応3

—— (て) ——

手塚律蔵(謙蔵) 安政3・5
定基塾 安政6
鄭注儀礼 寛延2
鄭注周礼 寛延2
鄭箋詩經 延享4
適塾(適々斎塾) 天保9, 弘化3
嘉永2
鉄牛 延宝8, 元禄13
寺内正毅 嘉永5
天倪 寛政6
天工開物 明和8
天愚孔平 →萩野鳩谷
天保三十六家絶句 天保9
伝習録 正徳2
典刑 文政7

—— (と) ——

戸崎淡淵 天明4
戸田旭山 元文3
戸田龜之助 文久元
戸村重右衛門 安政6, 文久元
吐方考 宝曆13
杜律集解 貞享2
屠赤瓊瑣録 文政12
東京日日新聞 明治5
東見記 貞享3
東光寺 元禄4・12

東郊先生文集 元文2, 延享3・4
寛延3・4
宝曆3・8・9・13, 明和8
東郊座右記 →和智東郊座右記
東条琴台 文政10
東条英庵 文政4, 弘化4
安政3・5・6
東潜夫論 天保15
東藻会彙 宝曆12
東藻会彙纂略 明和4
東坡文抄 文化元
東坡先生詩鈔 文化3
東坡先生志林 文化6
東溟先生詩文 延享2
東野遺稿 宝永4・7, 正徳元
童子問 元禄4, 宝永4
唐王右丞詩集 正徳4
唐音雅俗語類 享保11
唐後詩 享保5
唐詩訓解 寛文10
唐詩句解 享保20
唐詩函 宝曆8
唐詩金粉 安永3
唐詩趣 享保4・5
唐詩選 享保9
唐詩選国字解 寛政3
唐詩集註 安永3
唐詩正声 享保14
唐詩礎 享保13
増訂唐詩礎 安永3
唐詩品彙 享保18, 元文3
唐詩聯材 明和5
唐土奇談初編 寛政2
唐土行程記 明和6
唐土真話 安永3

唐本目錄(山県周南) 享保5
唐 訊 便 覧 享保11
唐 話 纂 要 正徳6
唐宋名家史論奇鈔 正徳4
当世下手談義 宝暦2
陶 靖 節 集 寛文4
桃 源 遺 事 元禄14
痘 疹 大 成 元文5
道 亭 天保15
銅 脈 先 生 →畠中観斎
徳川光圀 寛文12, 元禄13
徳 修 館 文化6
独 旨 真 明 天保10
独 雄 文化14
独 立 寛文12
徳田幸助良方 宝暦11
徳 富 蘇 峰 文久3
徳 富 蘆 花 明治元
徳 山 雜 吟 宝永6・7
徳 山 府 記 宝永3
徳 山 名 勝 宝永3
読 淫 祀 考 天保15
読 史 余 論 正徳2
富田貞次郎 明治2
富 永 有 隣 嘉永5, 安政6
豊 浦 懐 天明8
豊浦変則中学 明治5
豊 田 天 功 安政2
豊 田 養 慶 宝暦11
鳥 山 新 三 郎 弘化4
遯 庵 詩 集 正徳3

—— (な) ——

名 嶋 月 礪 弘化3
内 外 新 聞 慶応4

内 藤 以 貫 元禄5
内藤静修(子謙) 文政4, 天保5
内藤白露園 慶応2
中 井 竹 山 享保15, 明和4
安永4・5
天明2・4・8
寛政元, 享和4
中 井 履 軒 文化14
中 井 鬢 庵 宝永8, 享保11・15
宝暦8
中 江 兆 民 明治4
中 川 南 峰 宝暦13
中 川 好 古 文政5, 天保3
中 島 治 平 文久4, 慶応2
中 島 名 左 衛 門 文久3
中 西 淡 淵 寛延3
中 院 通 茂 宝永7
中 野 搦 謙 元禄9, 宝永2, 正徳4
中 野 豊 台 文政13
中 原 玄 快 万延元
中 村 蘭 林 宝暦元・7
中 村 華 岳 寛政9, 享和元,
文化3・9, 文政2・5
天保6
中 村 牛 莊 天明3, 寛政12
文化9・14
天保5, 嘉永3・5
安政2, 明治2
中 村 清 旭 安政2
中 村 玄 春 明和3・4
中 村 玄 与 正徳5, 明和3・4
中 村 松 洲 天保13
中 村 雪 樹 嘉永3, 安政3・5
中 村 楊 斎 元禄15
中 村 正 直 (敬 字) 天保3, 慶応4

- 明治 3
- 中村百合藏 (浩堂) 安政 4
慶応 2・3
- 中村梁山 宝暦 2・4, 明和 7
安永 4, 天明元・6
寛政 3, 享和元
- 中谷正亮 文久 2
- 中山又八郎 (季有) 天明 6
- 中山みや 明治 4
- 仲 東門 寛政 2, 文化 9
- 仲子岐陽 享保 6, 寛保 2
延享 3・4, 寛延元
宝暦 10・12, 明和 2
- 永田瀬兵衛 (政純) 享保元・3
元文 3, 寛延 2
宝暦 3・4
- 永田俊平 宝暦 10
- 永富独嘯庵 享保 17, 延享元・3・4
寛延元・4
宝暦 4・6・10・12・13
明和元・3, 天明 8
寛政 9
- 長井雅楽 文久元・2・3
- 長井君茂 安永 2
- 長崎英語伝習所 安政 5, 文久 2
- 長崎語学所 元治元・2
- 長門癸甲問槎 宝暦 13, 明和 2
- 長門国志 天保 13
- 長門国明倫館記 → 明倫館記
- 長門戊辰問槎 延享 5
- 長門本平家物語 寛政 6
- 長門明倫館 文久 3, 慶応 3
- 長富等珍 元禄 15
- 長富順軒 安永 5
- 長沼玄珍 元禄 13, 宝永元・3
- 享保 15
- 長沼采石 享和元・2・3, 文化 7
文政 3, 天保 5
- 奈古屋彰 天保 15
- 奈古屋大夏 (以忠) 享保 8, 寛延 3
宝暦 5・8・9・10・12・
13・14
明和 4・5・6・7・8・9
安永 2・4・5・6・7・
8・10, 天明元
- 那波活所 寛文 6
- 那波魯堂 宝暦 13, 寛政元・11
- 檜崎五百輔景海 文久 2
- 成島錦江 元禄 2
- 南留別志 元文元, 宝暦 11・12
- 南郭先生詩話 享保 10
- 南郭先生文集 享保 10・12・17, 元文 2
寛保 3, 延享元・2
宝暦 8
- 南郭先生燈下書 享保 10・18・19
- 南軒先生文集 寛文 8
- 南宮大湫 明和 3, 安永 7
- 南史 (南監本) 弘化 4
- 南部五竹 慶応 3
- 南部南山 寛文 12
- 南部伯民 明和 7, 文化元
文政 4・5・6
- 南溟先生詩集 宝暦 10, 明和 3
寛政 3・7・9
- 難病治驗方 文政 5
- (に) ——
- 二階玄東 明治 3
- 二程全書 貞享元
- 二宮錦水 天保 5, 弘化 4

仁保玄珠 享保20, 寛延元
日本外史 文政10
日本楽府 文政11・13
日本政記 天保3・9
日本永代蔵 貞享5
日本古今人物史 寛文8・9
日本詩史 明和5・8
日本詩選 安永3
日本基督公会 明治5
日章舎 天保6・13
日本総制度・関東領制度 慶応3
日本文鈔 享和元
日本名家詩選 安永4
肉布団 宝永2
西 周 文政12, 慶応元・3
明治元・3
西川如見 元禄8
西田幾多郎 明治3
入学新論 天保15
入学正路 文政元

—— (ね) ——

根南志具佐 宝暦13
根本武夷 享保2・5・12・16・
寛延3, 明和元
寐惚先生文集^{初編} 明和4
寝られぬまゝ 安政5

—— (の) ——

乃木希典 嘉永2・文久2
野間三竹(静軒) 寛文9
野間静軒 寛文8
野村公台 宝暦13
野村紫沢 文化2

野村望東尼 慶応3
野村 靖 明治4
野山獄読書記 安政3
野呂玄丈 延享3
能美由庵 延享3, 享和3
能美友庵 天保2
能美洞庵 寛政6, 天保2・11・13
嘉永2・3, 文久3, 明治5
能美隆庵 嘉永5, 安政2・6
文久3, 慶応2
能美吉右衛門以成 安永6, 天明4
囊 語 宝暦13

—— (は) ——

波多野等有 延宝5
波多野東里 安永2
波多野藤兵衛洞霞 慶応2
羽仁稼亭 元治2
長谷川有文 文化4
長谷川禹錫 文久2
八江八景(萩) 貞享2
八種画譜 寛文12
瀾城印譜 安永2
瀾城新著 寛延元・2
瀾城円政密寺大相国菅公廟碑 享和2
瀾山詩集 享保19, 延享5, 寛延4
宝暦2・3・4・5・7・8
明和2
芭 蕉 貞享4, 元禄2・7
寛保3
把爾翁湮解剖図譜 文政5
俳諧句選 享保20
俳優考 宝永3
佩文韻府 正徳元
佩文韻府両韻便覧 文化2

梅月堂宣阿 →香川宣阿
 壳知壳爵之論 文政3
 萩 古 実 宝曆13
 萩城六々歌集 文久2
 萩中学校 明治3・4・5
 萩文学寮 慶応3
 萩兵学校 慶応元, 明治4
 萩変則中学 明治5
 萩明倫館 文久3
 萩野鳩谷 明和3
 萩野復堂 明和4
 白氏長慶集 明暦3
 白賁書屋 正徳2
 白賁墅 宝暦7
 博習堂 安政2・6, 万延2
 慶応4
 博桑名賢文集 元禄11
 博文堂 文化10, 天保12
 箱根靈驗鬻仇討 享和元
 秦守節(貞父) 宝暦3・4・5 明和8
 秦兼虎(嵩山) 寛延3, 宝暦13・14
 明和8, 安永7
 天明2・5, 寛政7
 畠中観斎 寛政2
 服部南郭 天和3, 元禄9, 宝永7,
 正徳2
 享保3・4・5・9・10・
 12・16・17・19
 元文4, 寛保2・3
 延享元・2・3
 寛延2・3
 宝暦2・3・5・7・8・9
 天明8, 寛政3
 服部東陽 文久3
 服部傳巖 文化2, 嘉永4
 服部二見 文政元
 関 関 録 享保5・11
 鳩野宗巴 元禄10
 花の江の記 安政3
 塙保己一 安永8
 英 草 紙 寛延2
 林 芳 洋 天保8
 林孫兵衛以成 明和6, 安永3・7
 寛政7
 林 鷲 峯 寛文6, 延宝8
 林 東 溟 享保5・16・17・20
 元文3・4・5・6
 寛保元・2
 延享元・2・3
 寛延2・4, 宝暦2
 明和元・2・3・4
 安永2・5・9
 林 百 非 嘉永4
 林 道 一 安政2
 林 義 端 宝永6, 正徳元
 林 子 平 天明6, 寛政3・4・5
 林 述 斎 寛政11, 文化7
 林 鳳 岡 元禄4, 享保17
 原 古 処 文化11・12・13
 原 采 蘋 安政6
 原 雙 桂 享保11
 原 念 斎 文化13
 原 松 洲 文化14
 原田曲斎 安政2・6, 万延元
 万国公法 明治元
 藩 翰 譜 元禄15
 蕃 史 嘉永4
 万庵(原資) 寛保元, 延享2
 晚唐十家絶句 文化4
 樊川詩集 文化13

繁沢規直（南塘） 享保5・14
 宝曆2・6
繁沢縁山 延享5，宝曆2
繁沢豊城 宝曆2・6，安永4・9
 寛政4・12，享和元
 文化3

——（ひ）——

日名内周道 宝曆14
日野春靄 万延元
日野弘資 貞享4
非 徴 明和4，天明4
非 物 篇 明和3，天明4
非 葉 選 元文3
批点檀弓 延享4
秘府旌旗考 文化4
秘本玉くしげ 天明7
被掲道人 →豊浦懐
尾藤二洲 安永6，天明7，寛政3
 文化10
備急千金要方 嘉永2
鄙 言 嘉永2
東 沢 瀉 慶応2，明治3
引田利亮 天保15
百学連環 明治3
百非先生行状 万延2
病翁宇波言 嘉永3
標注令義解校本 元治元
平井温故 享保19
平田弥次兵衛 天保11
平田涪溪 嘉永3
平田篤胤 天保14
平野金華 元禄元
 享保4・9・12・13・17・20
平賀源内 宝曆13，明和4

弘 正 方 嘉永2，万延元
広江九隣 文化11
広江秋水 天保5
広江殿峰 文化15，文政5
広井良徳 天保14
広沢真臣 天保4，明治4
広瀬喜尚 享和2
広瀬淡窓 天明2，文政2，天保8
 安政2・3
広瀬旭荘 天保13，安政5
樋口選庵 安政3
樋口義所 文政2
樋口世禎 文化元・2，文政元
 文久2
樋口東里 宝曆4，文化5

——（ふ）——

不易亭爾松 文化14
武將感状記 享保元
布施御牆 文政13，嘉永3，安政3
扶桑名勝詩集 延宝8
蕪 村 享保元
鄙山小田村先生集 元文5，明和2
風簷遺草 明治元・2
風 雅 嘉永7
風流志道軒伝 宝曆13
風月楼記 文化6
封事草稿 安政元
復 軒 説 天和3
復軒先生行状 元禄13
福沢諭吉 天保5，弘化3
 安政5・6，慶応3・4
 明治3・5
福田侠平 明治元
福田扇馬 文久2

福田正憲 嘉永元
福原清助 安政2
福原冬嶺 慶応2
福原芳山 明治3
福間清海 安政元
藤井又右衛門 安政4
藤井右門 明和4
藤井百合吉 安政2・5
藤田東湖 天保9, 弘化4, 安政2
藤田幽谷 寛政4
藤村庸軒先生伝 元禄13
服忌令正義 嘉永5
仏法護国論 安政3
物外和尚 慶応2
物夫子著述書日記 宝曆3
物類称呼 安永4
物類品隋 宝曆13
船越清蔵 文久2
古谷振岳 天保13
文 戒 正徳4
文会雜記 正徳元
文衡山詩鈔 文化14
文林良材 元禄14
文筌(「文章政治」) 元禄元
文章欧冶 元禄元
文心雕龍 享保16
文政十七家絶句 文政12
文筌小言 享保19
文体明弁 寛文6
文 論 延享5
分類補註李太白詩 延宝7

—— (ハ) ——

兵学小識 弘化3
兵家須知戰術門 慶応3

秉 燭 譚 享保14, 宝曆13
弁 道 享保2・5, 元文2
弁道考注 寛政12
弁 名 享保5, 元文2
弁名考注 寛政12
弁 信 文政13

—— (ホ) ——

戊戌夢物語 天保9
保健大記 貞享5
帆船万里 天保7・15, 嘉永5
穂積以貫 正徳4, 享保4
法 岸 安永8
法岸和尚行業記 文化14
法 洲 文化9, 天保8・10
法 道 文政7・8, 安政3
文久3
某氏意見書 文化9
茅窓漫録 天保4
宝 洲 元治2
放言漫録 寛政9
防長正気集 →風簷遺草
防長古器考 明和6, 安永3
防長風土注進案 天保12
防長名所抄 天保15
防長両国物産絵図 享保11
報 国 隊 文久2
朋 来 舎 慶応3
北条源蔵 安政7, 万延元
北条瀬兵衛 弘化2
鳳 翻 雜 記 天明7
鳳 翻 集 安永9, 天明7・9
寛政5・9・10・12
享和元・3, 文化8
礮兵操練全書 安政4

北陸日記 安政2
北史(南監本) 弘化4
細井広沢 元禄9, 享保15・20
細井平洲 宝暦10, 明和元・9
 安永4, 享和元
堀 南湖 安永2
堀文左衛門(寿松園) 安政2
本城紫巖 宝暦8・10・13・14
 明和2・4・6・8
 安永8, 天明5, 享和3
 文化5
本城素堂 元治2
本城太華 寛政12・享和元・2
 文化3・4, 文政3
 天保3・5・15
本多忠統 享保9・10, 宝暦7
本朝画史 元禄4
本朝官位相当図 享保17
本朝詩英 寛文9
本朝通鑑 寛文10

—— (ま) ——

馬屋原大庵 天保11
馬島甫仙 天保15, 慶応元・3
前野良沢 享和3
前原一誠 元治2, 明治3
前田孫右衛門 安政3
増野徳民 天保12
増田房清 文化8, 文政9
松岡玄知 文政6
松岡温良 慶応4
松岡弁之助 嘉永4
松崎観海 享保10, 明和3, 安永4
松崎慊堂 文政7・8・9, 天保5
松崎神社鎮座考 嘉永2

松崎祐之 宝永4, 正徳4
松島健作 天保11
松島瑞益(剛蔵) 安政2・3・5
 文久3
松平定信 天明7・8
 寛政2・5・6・12
 文政10・12
松平不昧 宝暦元
松室松峽 享保4, 延享4
松村太仲 弘化4
松本伊兵衛 寛延元
松本彦右衛門 安政4
円山応挙 寛政7
満清紀事 嘉永3・7
万葉代匠記 貞享4, 元禄3
漫遊雜記 宝暦13, 明和元

—— (み) ——

みさこそうし 文政13
三浦源蔵 天保6
三浦義賢 享保12
三浦衛興(瓶山) 延享元
 安永2・9, 寛政7
三浦竹溪 元禄2, 享保4, 文化元
三浦梅園 天明6, 寛政元
三須棘水 文化4
三坂理兵衛 天保13・14
三谷等休 貞享4
三戸典顕斎 寛政3
三戸養因 明和7
三宅観瀾 延宝2, 宝永8
三宅石庵 元禄10・14, 宝永8
三宅尚斎 寛保元
三輪休雪(初代) 宝永2
三輪執斎 正徳2, 享保11

御堀耕助 明治4
水上実巖 文政4
南方一枝 文久2
箕作阮甫 天保13
皆川淇園 安永3, 文化4
宮城彦助 嘉永2
宮庄親輔 享保8, 天明6
宮瀬竜門 寛延3
明官古名考 宝曆元
明詩別裁集 文久2
明詩礎 元文4, 明和3
明詩擢材 明和3
明史藁 嘉永6
明七子詩解 宝曆7
明七才子詩集掌故 明和9, 安永2
明七才子詩集訳説 安永4
明李王七言律解 寛延3
民政要編 天保14, 嘉永元

—— (む) ——

無隠道費 元文5, 延享元, 寛延元
宝曆3・4・5・6・10
無孔笛 元文5, 延享元
棕梨藤太 安政2
向田九十郎 天保11
向田七右衛門 天保11
村井正純 安政3
村尾春屋 天保4
村士玉水 寛政4
村田玄迪 延享3
村田清風 寛政9, 文化5, 文政3
天保3・9・14・15
嘉永元・3, 安政2
村田蔵六 →大村益次郎
室鳩巢 宝永8, 享保17・19

寛延3, 天明6

—— (め) ——

明説 延宝9
鳴鳳館 天明5, 享和3, 文化5
文政3, 天保5・14
嘉永5
鳴鳳館学範 文化5
鳴鳳館記 天明8
明倫館 享保4・8・9・13・14
元文2, 延享3・4・5
寛延元・3
宝曆3・4・6・7・8・
9・12
明和2・4
安永3・4・8・9
寛政8・9・12, 享和2
文化3・7・9
文政5・7, 天保6・9
弘化2・3
嘉永元・2・3・4・5
安政2・4・5・7
文久3・4
慶応元・2・3・4, 明治3
明倫館記 寛保元, 嘉永2

—— (も) ——

毛利就寿^{たかひさ}(広鎮) 文政6
毛利綱元 貞享元, 元禄10
宝永4・6
毛利貞斎 宝永5
毛利就兼 天明2・3
毛利斎^{なり}広^{ひろ} 文政13, 天保13, 慶応元
毛利就頼 文化11
毛利房衆 享和3, 文化9

毛利広篤 嘉永5
毛利広漢ひろくに（豊西君）寛保元・3
延享4・5，寛延2・4
宝暦3・4・6・9
毛利広鎮 慶応2
毛利広政 宝永7・8，正徳2・4
享保3・10・16・18
毛利宗広 享保16，延享4・5
寛延4
毛利元統 弘化3
毛利元次 元禄3・16
宝永2・3・4・5・7・8
享保元・4
毛利元美 弘化2
毛利元義 文政10
毛利三代実録 文政6
孟子古義 享保5
蒙求拾遺 寛延2，宝暦2
蒙求詳説 天和3
本末歌の解 文化14
本居宣長 享保15，宝暦2，天明7
寛政2・7・10，享和元
森重鞞負 文政13
森脇惟右 安永7
諸葛函溪 弘化3
唐土真話 安永3
問槎崎賞 正徳2

——（や）——

八江萩名所図会 安政2
八木沙村 天保14
八谷通良 享保11
矢島半左衛門直之 享保11
矢野善山 弘化2
夜航詩話 文化13，天保7

夜航余話 天保7
役者口三味線 元禄12
訳社 正徳元
訳解笑林広記 文政12
訳文筌諦 正徳元・5，寛政8
訳文筌諦題言十則 正徳元
訳本芥子園画伝 文政2
梁川星巖 文化8，天保2，弘化2
安政5
梁田蛻巖 宝暦7
楊井裕二 安政2
楊井子温（静斎） 文政8・9，天保10
万延元
楊井子匡（蘭洲）（謙蔵） 寛政12・13
享和元，文化3・9
文政6
柳沢吉保 元禄元・7・9・16
宝永元・3・6，正徳4
藪孤山 安永4，享和2
藪慎庵 元禄2，享保2
和やまと真道 嘉永4・6，安政3
文久3
大和本草 宝永5
山井崑崙 元禄3，正徳3
享保2・5・13・16
山内広俊 延享3
山内広通 享保元・10，延享4
山尾庸造 文久元・3
山鹿素行 明暦2，寛文6・9・13
延宝9，天和元，貞享2
山県有朋 天保9，明治3
山県篤蔵 明治4
山県鶴江 享和2
山県恭平（紫溟） 万延2，慶応2
山県謙蔵 安政2

- 山 子 祺 延享5, 寛延2
 宝曆3・4
- 山 十 蔵 (寸身軒) 安永8
- 山 東 原 寛政8・9
- 山 東 門 宝永4
- 山 棠 園 延享5, 天明3
- 山 太 華 天明元, 享和3
 文化5・7・9・10・11・13
 文政元・7・9・11
 天保6・10・11・12・14
 弘化4, 嘉永元・3・4・6
 安政2・3, 文久2
 慶応2
- 山 半 蔵 →穴戸磯
- 山 溥 泉 文化2
- 山 榕 所 文政9・10
- 山 良 斎 (長白・雲洞) 寛文8
 元禄7・13
 宝永3・5・6・7・8
 享保10・13
- 山 周 南 貞享4,
 宝永2・3・5・6・7・8
 正徳元・2・3・4・5
 享保元・2・3・4・5・
 7・8・9・10・11・12・
 14・16・19
 元文2・3・4・5
 寛保元・2・3
 延享元・2・3・4・5
 寛延元・2・3・4
 宝曆2・3・5・6・8・
 10
 天明8, 文化2・13
- 山 大 式 明和4
- 山 蟠 桃 文政4
- 山 口 講 堂 文化12, 弘化2
- 山 口 中 学 明治3・4・5
- 山 口 変 則 中 学 明治5
- 山 口 明 倫 館 文久3, 元治元, 慶応4
 明治3
- 山 崎 闇 斎 天和2
- 山 下 玄 良 文化12
- 山 下 儼 洲 天保9
- 山 科 太 室 天明9, 文化4
- 山 科 長 安 寛文8
- 山 代 温 故 録 安永6
- 山 城 屋 孫 四 郎 嘉永元
- 山 城 屋 孫 十 郎 嘉永元・5
- 山 田 宇 右 衛 門 安政2, 慶応3
- 山 田 原 欽 寛文6
 延宝4・7・8・9
 天和2・3
 貞享元・2・3・4
 元禄元・2・3・4・6
- 山 田 顯 義 明治4
- 山 田 東 陵 天保10
- 山 田 北 海 安永9, 文化6, 文政3
- 山 田 昌 之 天保15
- 山 田 亦 助 弘化2, 嘉永3・5
- 山 田 麟 嶼 正徳2, 享保10・20
- 山 根 華 陽 享保4・6・9・11・13・19
 元文元・2・3・4
 寛保元・3
 延享元・3・5, 寛延3・4
 宝曆2・3・4・6・7・
 8・9・10・12
 明和2・3・4・5・6・
 7・8
- 山 根 濟 洲 延享元・3・5
 宝曆2・3・5

山根蕉窓 文政9・10
山根素全 万延元
山根東湖 文化8
山根東周 文政11, 天保5・8
山根南溟 宝曆10, 明和3
安永4・7・9
寛政3・5・7・9
山本洞雲 貞享元
山本北山 安永8・10, 天明3
文化元・2・3・9
山本緑陰 享和3, 文化元
山脇東洋 延享3
宝曆2・4・8・9・12・
13

—— (ゆ) ——

湯浅祥之助 安政2
湯浅常山 宝永5, 元文4, 安永10
夢物語 天保9
遊清五録 文久2
友善塾 安政3
友善塾記 安政3・4
遊仙窟 元禄4
有備館 天保12, 文久2
郵便報知新聞 明治5

—— (よ) ——

輿地志略 文政9
用字格 享保19
養老館(岩国) 弘化4, 明治5
養老館記 弘化4
楊誠斎詩鈔 文化5
楊誠斎詩話 享和2
横井小楠 文化6, 明治2
横浜毎日新聞 明治3

吉賀格斎 弘化3
吉田以忠 安永8
吉田篁墩 寛政3
吉田松陰 文政13, 天保9・12・13
弘化5, 嘉永3・4・6
安政元・2・3・5・6
文久3, 明治2

吉田恕庵 弘化2
吉田大助 天保6
吉田稔麿 元治元
吉田文献 明和6, 天明5
寛政元・6
吉武江陽 寛政9, 天保5
吉弘元常 元禄元・7
吉益東洞 宝曆9・13, 安永2
文化2
吉山常房 享保11, 延享2
吉村秋陽 天保7・9, 安政2・4
慶応2
吉村寅太郎 文久2
要術知新 文政7

—— (ら) ——

羅 森 嘉永3
頼 山陽 安永9, 文化15
文政10・11, 天保3・4・9
明治2
頼 春水 明和3, 安永4, 文化13
頼三樹三郎 安政6
楽水抄 嘉永3
蘭畹先生伝 文久2
藍泉集 安永6, 文化8・10・13
藍泉詩集 享和元
藍泉文集 安永6・8, 天明5・8
寛政7, 享和2・3

文化 8

藍田小田村先生集 (藍田集) 宝曆13

明和 9, 安永 2・7

天明 9, 寛政 3・8

享和 3, 文化 8

蘭亭先生詩集 宝曆 8

—— (リ) ——

立憲政体略 明治元

理 水 路 文化 2

梨雲館類定袁中郎全集 元禄 9

李滄溟先生文選 延享元

李滄溟詩集 寛延元

李退溪書抄 寛政 4

李太白詩 延宝 7

李家尚謙 天保11

李家文厚 文久 3

李家庸謙 文政 6

陸宣公奏議 文久 3

陸放翁詩鈔 享和元

六如上人 天明 7

竜峰搜捕録 安永 2

柳子新論 安政 3

留 魂 録 安政 6, 明治元

流弊改正意見 天保11

劉向新序 享保20

両国本草 →長防物産名寄

両国唱和集 享保 4・5

梁 書 宝永 3

林塾名月篇 寛保 2, 延享 4, 寛延 2

両巴扈言 享保13

—— (る) ——

類題阿武の杣板 文政13年

類題玉函集 慶応 2

類題風月集 嘉永 6

—— (れ) ——

冷 斎 夜 話 寛文 6

冷 泉 為 村 安永 3

冷 泉 古 風 ヒサカキ 享和元, 天保15, 安政元

靈 祭 私 議 安政元

歴代名臣奏議初編 文久 3

連 歌 両 吟 安永 6・7

聯珠詩格訳注 享和元

—— (ろ) ——

老子經通考 宝永 2

論 語 古 義 正徳 2

論 語 古 訓 元文 4

論語古註疏 寛政12

論 語 語 由 寛政 4・5

論語集解放異 寛政 3

論 語 徴 享保 3・5, 元文 2

—— (わ) ——

和 田 昌 景 シヨウケイ 天保11

和田梅翁 (正清) 宝曆10

和 智 東 郊 元禄16, 正徳 3

享保 6・10・15

元文 2・3, 延享 2・3・4

宝曆 3・8・9・13, 明和 2

和智東郊座右記 明和 2

和語円機活法 元禄 9

和刻詩学入門 元禄 3

倭 読 要 領 享保13

若 月 太 中 寛政 2

巨 理 南 山 天保12

脇 愚 山 文化11

渡 辺 華 山 天保 3・9・12

脇 山陽 寛政6・9

渡辺年表（相府年表）文化12

渡辺平吉 文化12, 文政元, 天保4

渡会東門 →笹山良意

（了）

長州藩徂徠学関係人名等探索備考

長州藩徂徠学徒たちの詩文集に出てくる人名・固有名詞等で今日からは不明なものが多いなかで、判明するものを挙げた。私見による判断もあり、充分でないが、参考になればと提出するものである。よく知られたものは省いた。

(い)

猗園君 福原就清(宇部邑主)
 岩瀬子言 岩瀬華沼
 一本香先生 香川修庵(一本堂という)
 井上希聴 井上太郎左衛門光美
 郁雲 生雲(阿武郡)

(う)

于士茹 宇野士朗(宇野明霞の弟)

(え)

延年園 益田氏の堀内邸内の庭園名
 益州上人 真州の僧
 越君端 越智雲夢

(お)

小倉瀨陵 小倉鹿門の子
 嚶鳴館 細井平洲の塾

(か)

観瀾楼 赤間関の佐甲氏の邸宅にあった。
 関子徳 二本松の人
 芥彦章 芥川丹丘
 河士参 右田毛利氏の臣
 懐仙閣 越智雲夢の居宅

(き)

琴岡君 井原孫左衛門元俊
 琴岡荆君 同上
 琴岡荆大夫 同上
 琴台君 山内広俊(阿川毛利広漢の弟。山内広通の養子となり、若くして死去)

吉文徴 吉田文献
 吉公言 吉益東洞
 北圃仲温 四代須原屋茂兵衛
 虚舟軒 礼法師範小笠原氏の軒名
 紀世馨 細井平洲
 紀卓菴 大坂の医師。香川修庵門下
 崎陽 長崎

(く)

栗山玄伯 栗山孝庵(文仲)の甥。医師。
 君実 和智東郊

(け)

荆君 寄組井原氏をいう
 県次公 山県周南
 県雲洞 山県良斎(長白)
 県子粲 山県鶴江
 瓊江君 清水親周
 瓊玉君 清水就周
 源京国 津久見華丘(刈谷藩儒)

景 福 楼 阿川毛利氏の別荘（河添にあつたか）

賢 己 堂 仁保子豊（号華岳・奈古屋大夏の次男）の堂名

(こ)

高 子 式 高野蘭亭

高 翼 之 高木文次郎。服部南郭門。

壺 天 園 児玉氏の別荘

谷 君 ^(むたがわい) 八谷を修して「谷」とした。「谷君」という時、津田東陽を指す場合もある（「東郊先生文集」）。

谷 大 雅 谷口元淡

谷 永 脚 八谷通要（八谷五兵衛の孫）

孝 則 楼 阿川毛利氏の別荘（萩の河添にあつた）。

孝 孺 山県周南

鴻 嶺 君 益田就祥

嵩 山 公 益田広堯。（和歌を好んだ）

香 化 堂 徳山藩士奈古屋子信の堂名

国 伯 華 末国伯華

江 南 中川与一右衛門清一の号

河 野 玄 悦 滝高渠の河野家養子時代の名。

(さ)

左 洩 真 佐々木縮往

佐 曲 江 佐々木曲江

佐 貞 斎 松江の人

佐 有 裕 石見の人

在 川 天野隆政の号

坂 子 祺 坂時存

坂 東 原 坂時連（坂時在の子）

濟 江 長井俊脚の号

濟南佐世君 佐世仁蔵就量

山 子 英 山内広俊（琴台君）

山 世 録 山根濟洲（山根華陽の子）

山 玄 琳 江戸の人

山 有 隣 山根南溟（山根華陽の養子）

餐 霞 堂 小倉宗爾の塾

(し)

子 英 山内広俊（山内広通の養子。毛利広漢の弟）。

子 羽 秋山玉山

子 温 楊井孫太郎静斎。蕙洲とも号す。楊井蘭洲の長子。

子 貫 粟屋清通

子 萼 和智東郊

子 祺 坂時存

子 祺 山県子祺又は坂時存

子 匡 楊井蘭洲

子 恭 田坂瀾山

子 濯 山根華陽

子 潤 松居員友（彦根藩士）

子 泉 曾野有原

子 遷 服部南郭

子 路 仲子岐陽

子 与 秦（波田）守節

子 和 平野金華（平子和）

次 公 山県周南

芝 園 君 桂広保

竺 巖 京都大通寺の塔頭 恩徳院の住持。

寂 道 大内氷上山の住持

秋 子 羽 秋山玉山

嘯 風 館 阿川毛利氏の別荘。萩郊外椿東上野にあつた。

嘯 風 斎 山口町人安部の書斎名。

重 子 泉 重見子泉。すなわち曾野有原。

受 喧 堂 山田産郷(名は之恒)の堂名

場 季 英 草場允文

穠 矣 館 阿川毛利氏の別荘か。

津 太 雅 津田東陽か

秦 子 熊 秦(波田)兼虎

秦 嵩 山 秦(波田)兼虎

秦 子 与 秦(波田)守節

秦 貞 父 秦(波田)守節

(す)

隨 鷗 閣 児玉氏の別荘

隨 樵 館 内藤氏の別荘。現萩市三見中山にあった。

隨 月 亭 井原房道屋敷の亭名。現萩市桜江にあったか。

寸 身 軒 山県十蔵

(せ)

井 子 章 澁井太室

井 子 叔 井上蘭台

井 士 良 窪井鶴汀

世 録 山根济洲

青 松 館 裁芝園にあった建物。(裁芝園は未詳)

青 陶 侯 清末藩主

濟 江 長井俊卿の号

濟南佐世君 佐世仁蔵就量

赤 津 播磨国明石のこと

蹟 子 胤 小泉侯片桐氏の臣か。

折 肱 齋 医師神原道与の室号。

節 軒 粟屋六郎左衛門勝之

川 子 因 中川与一右衛門清一。号江南

筌 蹄 録 北川汶陽著の剣術の書

(そ)

草 仁 甫 草場仁甫

倉 実 操 小倉尚斎

倉 子 卓 小倉子卓

藪 子 厚 藪孤山(熊本藩儒)

叢 露 園 山内広通邸の園名

竈 門 関 熊毛郡の上ノ関

(た)

大 笑 軒 奈古屋大夏の書齋

大 隠 齋 栗山孝庵(文仲)の書齋

大 麟 上人 大寧寺の僧

沢 子 南 繁沢縁山

奈 大 夏 奈古屋大夏。(大原とも)

(ち)

長 丘 桂 君 桂広訓(桂広保の次子)

長 俊 卿 長井武兵衛実賢

聴 松 庵 原箇枕(雲谷等仲)の庵名

(て)

棣 卿 和智東郊

鵜 士 寧 鵜殿士寧

摘 蔬 齋 粟屋清通の別荘。現萩市小畑にあった。

田 子 逸 飯田居謙

田 子 高 門田子高。(山県周南門で、吉田の人らしい)

田 子 恭 田坂瀨山

田 季 参 田中季三

田 享 叔 小田享叔(济川)

田 公 望 小田村郷山

田 真 甫 永田瀬兵衛政純

田 長 温 田坂瀾山
田 偃 門田子高
田 省 吾 田中桐江。(柳沢吉保の家
臣)

(と)

冬 嶺 君 井原房道
冬 嶺 荆 君 井原房道
東 嶽 桂元冬の号
東 里 波多野伯敬(名は直方、号
東里。「東里隨筆」の著が
ある)
東 廬 山 大寧寺
湯 之 祥 湯浅常山
藤 隆 政 天野隆政
滕 子 鶴 和智東郊
滕 善 卿 石見の人
徳 夫 太宰春台

(な)

南 塘 先生 繁沢規直(雲谷等直)
南 野 桂広保の号
南 宮 弥 六 南宮大湫
中 川 子 貫 中川与一右衛門清一
永 富 昌 安 永富独嘯庵
奈 大 夏 奈古屋九郎右衛門以忠。大
原とも

(に)

仁 保 子 豊 仁保守智。(号華嶽。奈古
屋大夏の次男)

(ね)

ね ざ め 草 滝鶴台著「三之逕」の別名。

(は)

伯 民 末国次郎右衛門胤親
伯 礼 若月太中
伯 遷 領 翁 上領伯仙。(繁沢豊城の実
父)
柏 溪 正徳・享保頃の清光寺の僧
坂 子 祺 坂時存
坂 東 原 坂時連
坂 美 仲 板倉鯨溪。(荻生徂来門下)
林 子 遜 林孫兵衛以成
繁 子 雲 繁沢緜山か
鄙 岐 萩
秦 子 与 秦守節
秦 貞 父 秦守節
秦 士 熊 秦兼虎
秦 子 熊 秦士熊(兼虎)
鰻 鱺 窟 国島京山の室名

(ふ)

風 月 斎 長府藩主の別業
富 春 叟 田中桐江(省吾)
文 甫 松岡文甫

(へ)

平 子 和 平野金華
平 景 端 沢田東江
薛 荔 館 山内広通の別荘。現萩市上
野にあった。

(ほ)

法 幢 山 禅昌寺(山口吉敷にある)
望 之 小田村郷山
豊 西 君 毛利(阿川)広漢
葯 菲 園 山根華陽の居家

本城子孟 本城紫巖

(め)

明霞園 大和小泉藩主片桐氏邸の園名

(も)

木君恕 木村蓬萊(初号は嶺南)

(や)

弥八 滝鶴台の通称
山脇玄飛 山脇東洋

(ゆ)

有隣 山根南溟

(よ)

楊子匡 楊井蘭洲

(ら)

来章閣 米沢上杉氏の屋敷
蘭陵君 毛利広漢

(り)

梁溪君 山内縫殿広通。梁蹊君とも。
梁松和尚 日蓮宗の僧
流水園 佐波郡右田(現防府市)にあった滝鶴台の居宅。山県周南の命名。
緑猗亭 田坂瀨山の居宅。
栗文仲 栗山孝庵(2代目)
林子遊 林孫兵衛以成。
臨川楼 沢田東江の居宅。

(れ)

霊椿山 大照院(現萩市桜江)

(ろ)

漏卮堂 奈古屋大夏の茶室
漏卮堂主人 奈古屋大夏
朗月亭 湯浅氏の亭名
祿隠亭 国島京山の亭名。又、奈古屋大夏の亭名。

(わ)

和卿 青木葵園
和君実 和智東郊
若月伯礼 若月太中

(了)

近世防長儒学史関係年表

平成 8 年 5 月 31 日

編 著 河 村 一 郎
萩市浜崎町74-2

企 画 桜プリント（企）萩支店

印 刷 桜プリント企業組合
山口市旭通り1-1-6

